IS 蒼穹の大天使と平和の歌姫

アヌビス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　蒼穹の大天使と平和の歌姫

【Ｎコード】
Ｎ１５２３Ｖ

【作者名】
アヌビス

【あらすじ】
Ｃ．Ｅ７４　メサイア攻防戦終了後、新しく開発された粒子の影響で、キラとラクスと一人の男がＩＳの世界へ。三人がその世界で出会う新たな仲間と敵。激動するＩＳの世界で三人が見たものとは・・・。

プロローグ（前書き）

小説書くの初めてっす？どうか、暖かい目で見てください。

プロローグ

C．E　74　月面で行われたメサイア攻防戦、その終了後、エネルギーを専門とする企業IF社が今までのエネルギーに替わるエネルギー、ネクスト粒子を発表した。

　このネクスト粒子はエネルギーだけではなく、軍事関係、医療、宇宙開発、ITなど幅広い利用性がありC．E　の世界に革命をもたらす。

　だが、コレを境に世界各地に謎の正体不明機が出没し始める。正体不明機は主に様々な軍事基地を襲撃しその破壊は徹底を極めていた。

　C．Eは高度成長期を迎えた。だが、それと同時に新たな混沌とした時代の幕開けである。

プロローグ（後書き）

書くのって、大変なんだなぁ～

正体不明機（前書き）

かなり長くなりました？

正体不明機

ここは、地球とプラントの間にある小惑星帯、そこに一機のシャトルが航行していた。
その中で二人の男女が話しをしていた
この、二人の名前はキラ・ヤマト、ラクス・クライン。二人とも先の大戦で伝説的な活躍をした英雄だ。話の内容は最近出没している正体不明機のことのようだ。

「ラクス、地球での会談はどうだった?」

「まずまずですわね。あの国は正体不明機に襲われて、ガタガタですから。」

「正体不明機、一体どういうつもりなんだろう。」

「わかりませんわね。」

正体不明機に襲われて、軍が整わない内に内戦がおきて滅びた国もある。

後ろから一人の男が入ってきた。男の名前はユウイチ・S・レイブン。キラの部隊の仲間の一人で部隊の中では一番仲がいい。

「そんな事は今、考えたってしかたないだろ?そんなことより、プラントに戻ったらしっかりと休めよ?ここんとこ、ろくに休暇とってないんだろ?」

「でも・・・」

「確かにいいでわね！キラ、今度お出かけしません？二人で。」

そんなことを話していたらシャトルの中をアラートがなり響いた。

「どうした！？」

「正体不明機です！かなりの数です。」

窓から外を見ると確かにかなりの数の正体不明機がこちらを攻撃してきている。

「くっ！キラ！あいつらを追っ払うぞ。」

「うん！ラクス・・・行ってくるね。」

ラクスはキラの手を取って、

「必ず帰ってきて下さいね。私の元へ。」

「うん、約束する。」

そう言って、二人は機体に向かっていった。

正体不明機（後書き）

う～ん、最近なんか、ガンプラが欲しい。

戦士達と歌姫の消失（前書き）

上手くかけないですねぇ～

戦士達と歌姫の消失

シャトルから躍り出たキラとユウイチは敵の大群を目にした。

「おいおい！なんて数だよ！こりぁ。」

「これだけの戦力を一体どうやって？」

敵の数はかなり多い、４０機ぐらいはいそうである。いや、もっとかも。

「先手をかける！」

そう言って、ユウイチはストレイドのマルチロックオンシステムを起動させる。両手のビームライフル、両翼の光の翼、そして腰にあるドラグーン、さらにはネクスト粒子によって複製したドラグーンが一斉に火を吹いた。

キラからも同様にハイマットフルバーストを仕掛ける。

「今ので結構減ったな。」

「ユウイチ！増援だ！」

確かに増援が来ている。

「くそ！まじかよ！」

キラがビームサーベルを抜刀して、敵陣に突っ込む。

ユウイチも対艦刀エクスカリバーを抜いて、敵に踊りかかった。

「でいや～！」

一振りで正体不明機は両断される。キラは先のほうでビームサーベルを乱舞させ敵を蹴散らしていた。

フリーダムとストレイド、ネクスト粒子のおかげで驚異的な性能を発揮している二機には正体不明機と言えど、なんら驚異にはならないらしい。

「くっ！！」

「キラ！？」

突然、複数の光の筋がキラを襲う。

「あれは、デストロイ？しかも、五機。」

「キラ、まずいぞ！いったんシャトルに行ってラクスを連れて来い。あんなシャトルじゃ危険だ！」

「キミは？」

「あいつらを足止めする。」

「分かった。気をつけて！」

キラがシャトルに向かったの確認したユウイチはデストロイに突進をかける。

「懐に入り込めばこっちのもん！」

デストロイは接近戦に持ち込めば勝機はある。

だが、正体不明機、３０機ぐらいがそれを邪魔する。

「く！こんなもん！」

だが、デストロイからツォーンＭＫ？が放たれる。

「ええい！」

ユウイチはごり押しでデストロイに近づくが今度は別方向が４本のビームが飛んでくる。

「数が多いよ！」

ユウイチはビームが飛んできた方角を見る。そこには赤い機体が浮かんでいた。頭に二本のブレードアンテナ、二個の目のようなカメラ。明らかにガンダムタイプだ。

「ユウイチ！」

「ユウイチさん！」

どうやらキラがラクスを連れて戻って来たらしい。ユウイチはシャトルの安否が気になり聞いてみた。

「キラ、シャトルは？」

「駄目だった。」

やはりシャトルではあの数は無理だったか。ユウイチはそうかと言いながらガンダムタイプの機体に向きなおった。

「あの機体は？」

「どうやらあいつがリーダー格らしい。」

あの機体が現れてからこの宙域にいる機体は攻撃を仕掛けてこない。

「あなたはどうしてこんな事を？」

ラクスが通信で赤い機体に話しかけても無反応だ。

「シカト決め込むつもりか？アイツ？」

だが、赤い機体は赤い粒子を撒き散らしながらいきなりこっちへ突進してきた。

「！！」

ユウイチは直ぐさま対艦刀を構えて防御の体制をとった。

だが、この戦場である異変が起きたのだ。キラ達と赤い機体の間に穴が空き始めたのだ。

「あれは！？」

「ブラックホール？」

かなりのスピードで突進していた赤い機体はもちろんデストロイ、

正体不明機、ストレイド、フリーダムを飲み込み始めた。「マズイ、飲み込まれる」

「キラ！！！」

その宙域にいた者、全てを飲み込んだ穴は飲み込むものがなくなると急速にとじてしまった。後に残ったのは静けさだけだった。

戦士達と歌姫の消失（後書き）

次回は機体のスペックデータで

設定（前書き）

今回はオリジナルキャラとその機体の設定です

設定

ユウイチ・Ｓ・レイブン
年齢　２０
性別　男
所属　エターナル
身長１７９ｃｍ
髪　金髪　オールバック
搭乗機　ストレイド
備考
性格はフレンドリーで親しみやすい、日本人とアメリカ人のハーフで、元々は傭兵だったらしい。何故か、いつもコーラを持っている。
ＮＥＸＴ－０００１　ストレイド
搭乗者　ユウイチ・Ｓ・レイブン
全高１９．４２ｍ　重量８０．０ｔ
エンジン　エンジェルドライブ
備考
この機体の動力はヴォワチュールリュミエールとネクスト粒子のハイブリッドエンジンである。
因みに、フリーダムやデスティニー、ジャスティスも同タイプのエンジンを搭載している。機体の形はフリーダム、ジャスティス、デスティニーを混ぜ合わせたもの。
武装
高エネルギービームライフル×２
対艦刀エクスカリバー×２
掌底ビーム砲パルマフィオキーナ×２
フラッシュ２ビームブーメラン×２
グリフォン２ビームブレイド×２
シュペールラケルタビームサーベル×２

ウィスプドラグーン×２
備考
このドラグーンはネクスト粒子による量子化複製を使えば最大２４基まで動かすことができる。ムーンライトビームシールド×２
ムーンライトビームブレイド×２
デバイスドライバ
衝撃砲　ガントレット
超高エネルギープラズマ砲　バルバドス
量子化コピー　デコイ
備考
このデバイスドライバは標準装備を助けるサブウェポン
可変式ネクストウイング×２
このウイングは形はデスティニーと同型だがネクスト粒子を圧縮開放することで光の翼から無数のビームを射つことができる。

設定（後書き）

姿はインパルスデスティニーに似てます

異世界（前書き）

やっと、ＩＳが入ってきた。

異世界

キラはつくづく思う、今日は、厄日だと。何故なら宇宙で穴に吸い込まれたと思ったら、今度は知らない日本庭園で網にかかってるんだから。

「やほ～、お目覚めかなぁ～」

声のしたところを見るとウサミミの巨乳の女性が立っていた。

「貴女は一体、誰ですか？」

とキラは巨乳の女性に聞いた。

「それはこっちのセリフだよ～束さん家にいきなりあらわれてさ～！ていうか、キミ、この束さんを知らないの？」

どうやら、この人の名前は束と言うらしい。だが、キラはそんな名前知らない。

「　ん・・・！何で、網にかかってんの俺達？」

「そうですわね～」

どうやらユウイチとラクスが起きたらしい。

「んっ？キラ！このウサミミちゃんは誰？」

どうやらユウイチも知らないらしい。

「この人は、束さん、一応助けてくれたらしいんだ。」

「まぁ、そうでしたの！ありがとうございます。」

「ああ、いいよ、いいよ、本当は起きたらすぐ出てって貰おうと思ってたけど、コレをみちぁねぇ～！」

と、束が出したのは2つのブレスレットだった。

「なんだそりゃ？」

とユウイチが聞いた。

「君達が持ってたＩＳじゃん！いや～すごいね～この二機、オーバーテクノロジーの塊だよ～」

「ＩＳって、なんですの？」

「そういえば、僕達のＭＳは何処に？」

確かに、キラとユウイチのＭＳ無くなっている。それに、ＩＳと言うのも初めて聞いた。

「束さんが見つけたときはコレを握りしめてたよ。それにＭＳって、なに？」

どうやら束はＭＳを知らないらしい。

「えっ！じゃあ、ザフトは？」

ユウイチが聞いてみた。

「知らないよ、そんなの～」

キラとラクスは顔を合わせ同時にため息をつく。

「どうやら、僕達」

「違う世界に来てしまったようですね。」

「えーーーーーーー！！！」

ユウイチの叫びが青空に吸い込まれていった。

その日の夜、キラ達は束の家でお世話になることにした。

「まじか～、まさか、違う世界に来ちまうとはな～」ユウイチは軽く落ち込んでいた。

「たぶん、その内、帰れると思いますわ、ですから落ち込まないでくださいな。」

と、ラクスが励ましてくれた。「ありがと、それにしてもキラと束ちゃん、遅いなぁ～」

昼間にＩＳの適正検査をして、キラとユウイチはＳと出た。ラクスはＡだった。その後、キラが興味津々にあるＯＳを見てたからたぶん、その事であろう。数分後、キラ達が戻ってきて、束が満面の笑みで、ある事を言ったのだが、それを聞いたユウイチはため息をつき、ラクスは苦笑したのだった。

異世界（後書き）

次回はどうしようかな？

束の頼み事（前書き）

徹夜で書いたから眠いです。

束の頼み事

今から、ちょうど1ヶ月前の事、束がこんな事を言い出した。

「家においといてあげるけどその変わり三人にはあることをやってほしいいんだなぁ～」

と束が言ってきたので、

「やって欲しい事って何ですの？」

当然、疑問に思ったラクスが質問をした。

「それはねぇ～、三人にはＩＳ学園に入って欲しいんだよぉ～」

コーラを飲んでいたユウイチがそれを聞いて吹き出した。

「まじ！何で？」

「うわっ！！きたなっ」

束はユウイチが吹き出したコーラをとっさに避ける！

「でも、何でいきなり？」

キラが聞くと、

「最近になって、男がＩＳを動かしたって事は教えたよね？」

そう、ＩＳは女性にしか動かせず、この世界はあっという間に女尊

男卑になってしまったのだが、つい、最近ある一人の男がＩＳを動かしたという事で大ニュースになったのだ。

「名前は確かに織斑一夏でしたわよね。」

「そう、いっくんはこの天才、束さんの親友の弟なの！」

「つまり、俺達にＩＳ学園に入学して、その織斑一夏の護衛をしろと、そういう事か？」

珍しく、ユウイチが核心をついてきた。

「そうだね！」

「別に良いんじゃないかな！こっちはお世話になるんだし。」

「働からざる者、食うべからず、ですわね！」

相変わらず、このカップルは仲がよろしいことで。

「まぁ、俺はラクスとキラに従うよ！」

ユウイチが苦笑しながら承諾した。

「やったぁ！早速、チーちゃんに連絡するね！」

「ん？その人が束さんの幼なじみですか？」

と、キラが聞くと、

「うん！織斑千冬、ＩＳ学園の教師もしてるんだぁ！」

なるほど、こっちの事情を知っている人が一人でもいたほうがいいし、なかなか頼りになりそうだ。

「それとキラくん！さっき見てた、あの二機のＯＳ完成手伝ってくれない？」

「いいですよ。」

キラは爽やかな笑顔で速攻でＯＫした。

「やったぁ！どうしても、いっくんの入学式には間に合わせたかったんだけどこれで、間に合うよ！見たところ、キラくんも、この天才束さんと同じくらい天才っぽいし」

ぽいしっ、じゃなくて本当に天才なのだ。

「じゃあ、入学式まで後、１ヶ月だし、入学の手続きをしながらＩＳをうごかしていこうかぁ～！！」

とまぁ、こんな感じに三人はＩＳ学園に入学することになったのだ。

束の頼み事（後書き）

次回は学園入学です

学園に入学（前書き）

何とか書けました

学園に入学

遂に入学式当日、かったるい入学式を終え、キラ達は話をしながら、クラスに向かっていた。

「運よくおんなじクラスですわね！」

「運がいいのか？」

ユウイチはどうも人為的な感じがして、釈然としないものがあった。

「まぁ、良いんじゃない。三人いたほうがいいし、ねぇ！」

キラが必殺笑顔で言ってきた。

「まぁいいか。」

ユウイチは慣れてるから動じないが、周りにいた女子は悩殺されたらしい。

クラスに入るとかなり目立っている生徒がいた。

当然の如く、織斑一夏だった。

「ありゃりゃ？かなりかしこまってんな？」

と、ユウイチが一夏を見て、最初の感想を述べた。

「まぁ、しょうがないよ、回り女子しかいないんだもん」

「他人から見たら天国だけどなｗｗｗ」

そうこうしている内にＨＲが始まり、副担任の山田真耶が入ってきた。

「皆さん、入学おめでとうございます。私は副担の山田真耶です。」

かわいそうだが、みんな、キラ、ユウイチ、一夏に視線がいっていて誰も聞いちゃいない。

「ええと、今日から皆さんはＩＳ学園の生徒です。この学園は全寮制で、朝から晩まで協力しあって、楽しい学園生活を送ってくださいね。」

皆、ガン無視。ここまでくると気の毒だ、一夏にいたっては顔面蒼白を通り越して真っ白だ。

「ええっと、まずっ皆さんから自己紹介をーー」

あーから始まって今はおーだ。一夏は確り立って、後ろを振り向く。

「ええっと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

「ちゃんと自己紹介できたなアイツ」

ユウイチは感心していたが他の女子はもっと喋って的な雰囲気だった！

「・・・」

一夏が深呼吸し出した。何か言うのか、みんなが期待する。

「以上です。」

すて～～ん、みんな、面白い様にこけた。そりゃそうだろ。

パァン！と一夏の頭を爽快に叩いた人物がいた。

「げぇ！関羽！」

パァン！また、叩かれた。

「誰が三國志の英雄か、馬鹿者」

声のトーンが低めの女性、この人が天才束さんの幼なじみ織斑千冬だ。

「あ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと」

副担任の山田真耶先生は熱っぽい声と視線で応えている。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事は良く聴き、良く理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠１５才を１６才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな？」

クラスからは黄色い声援が響いた。

「キャーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れて、この学園に来たんです！北九州から！」

そんな事言う意味あるのか？

「あの千冬様にご指導頂けるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます」

最後のは無視しとこう、だが当の千冬はかなりうっとうしそうな顔でみる。

「毎年よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ、感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているのか？」

もっと優しく出来ないものか？無理だな。

「きゃあああっ！お姉様！もっと叱って！罵しって！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躾をして～！」

元気がいいクラスだ！

それから色々あって、名字がクの人、つまり、ラクスだ。

「ラクス・クラインですわ！星座は水瓶座で、趣味は歌を歌うことですわ！一年間よろしくお願いしますわ。」

なんとも完璧な自己紹介だ。

そして、や行、つまりキラだ！

「キラ・ヤマトです。誕生日は５月１８日です。歳は１９と年上ですが、敬語とかは無しで気軽に話かけてくれると嬉しいです。」

当然の如く女子達は、

「キャーーーー！」

「美形男子第２段」

「紳士的！！」

「背が高くて笑顔が素敵ーー！」

「この学園にきてよかったーー！！」

「キラ様ーー！！私を連れてって！」

「静かにしろ！！」

千冬の一喝で静かになった。

次はら行、つまりユウイチだ。

「どもっ、ユウイチ・Ｓ・レイブンだ、俺は２０だけど、敬語と

か一切無しね！これから一年間仲良くしとこうな！因みに好きな飲みものはコーラね！」

「きゃーーー！！」

「美形第3段よ～！！」

「クールかと思いきやフレンドリー！」

なんだかんだでＳＨＲは終了した。

学園に入学（後書き）

次回はセシリアが出ます？

イギリスのお嬢様（前書き）

小説書くの難しいっすねぇ？

「よぉ！」

案の定、キラ達に一夏が話かけてきた。

「やぁ」

「ういっす」

「こんにちは」

三人ともそれなりに挨拶をした。

「織斑一夏だ、一夏って呼んでくれ！これから、よろしくな」

「じゃあ、僕もキラでいいよ」

「ユウイチだ！よろしく」

「私もラクスで良いですわ」

４人ともあっという間に親睦を深めてしまった。

「三人とも、年上だけど敬語はいいよな？それに敬語は苦手でさ」

「別にいいよ、そっちの方が親しみやすいし。」

「そうだ、そうだ！俺達もうダチなんだから、かたっくるしいのは無しだぜ。」

そういいながら、ユウイチはコーラの瓶を差し出す。

「いや、いらねぇよ。てか、三人って最初から仲良さそうだけど知り合いだったのか？」

「うん！僕とラクスは恋人だし、ユウイチは前からの友達だしね！」

「恋人ぉぉ！二人共付き合ってるのか？」

一夏が顔を赤くしながら動揺するのをユウイチが見て、

「まさか、一夏ちゃんって、チェリーちゃんかぁ？初々しいねぇ」

「って、そんなこと関係ないだろ！！そんなことより二人共いつからＩＳ動かせたんだ？」

「一夏さんと同じくらいの時からですわよね？」

と、ラクスがキラに言ってきた。

「うん、束さんの所にいたから、その影響かも。」

それを聞いた一夏が。

「何、束さんと一緒にいたのか？」

「うん、1ヶ月ちょいだったけどね、今は引越しちゃって何処にいるかわからないけど」

「そうか！年は離れてるけど幼なじみみたいなもんだからな心配だ。」

色々、話している内に一時間目が始まり一夏が苦労していたのは、言うまでもないだろう。そして、今は、二時間目の休み時間。

「ちょっと、よろしくて？」

四人で話しをしていたら、いきなり声をかけられ、一夏が素っ頓狂な声を上げた。

声のした方に顔を向けるとそこには金髪でロールのかかった髪をした女子がいた。見たところ、ヨーロッパ系だろう。

「聞いてます？お返事は？」

「ああ、聞いてるよ！」「まぁ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

ヤバい、このタイプは現代に毒された系の人だ！いかにも女尊男卑って感じだ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし。」

彼女にとってそれが、気に入らなかったのか、さらに突っかかってきた。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

どうやらこの子の名前はセシリアと言うらしい。

「あ！質問してもいいか？」

「ふん。しもじものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って何？」

がたたっ、キラ達を含め聞き耳を立てていた女子数人がずっこけた。

「貴方っ！本気で言ってますの？」

一人だけ、こけず苦笑していた、ラクスが説明してくれた。

「国家代表ＩＳ操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。まぁ、そのままの意味ですわ」

「なるほど！」

「そう、エリートなのですわ！」

おお、復活した。さすがは代表候補生。

「大体、あなたＩＳを操縦できると聞いていましたから少しくらい知的さを感じさせるかとおもっていましたけど期待外れですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「ふん、まぁでも、わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

「ＩＳのことでわからないことがあれば、教えて差し上げてもよろしくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから。」

「あれ？おれも倒したぞ！教官」

「俺も」

「僕も」

「わたくしも」

まぁ、全員、相手が突っ込んできて、避けたら、壁にぶつかって動かなくなっただけだが。

「わたくしだけと聞いていましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「ラクスも女の子だよ、一夏」

「あっそうか！じゃあ、間違いだったんじゃないか？」

今、セシリアのこめかみからピシッという音が聞こえた気がした。

「貴方達も教官を倒したってゆうの？」

マズイ、完璧に怒らせてしまった。

「落ちつけって！」

「これが、落ち着いていられますかーー！」

キーコーカーンーコーン

いいタイミングに鐘がなり、千冬達がはいってきた。みんな、席について、授業が始まったのだった。

イギリスのお嬢様（後書き）

次回は戦闘まで行ければいいんだけど

決闘（前書き）

誤字脱字があったらすいません？

決闘

今回の三時間目は何故か千冬が担当するようだ。よっぽど大事なことなのか、真弥までノートを持っている。

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

対抗戦に出る代表者は簡単に言えば、クラス委員長みたいなものだから、生徒会の開く会議や委員会に出なきゃいけないらしい。

クラスがざわついてきて、ある一人の女子が手を上げた。

「はい、織斑君がいいと思いまーす」

それを聞いた一夏が叫びながら立ち上がった。

「なに～！何で、オレー？」

千冬はそれを無視して。

「他にはいないか？」

「レイブン君がいいと思いまーす。」

「ヤマト君が良いと思いま～す。」

それを聞いていたユウイチとキラが手を上げて二人同時に

「一夏がいいと思います。」

それを聞いた一夏が裏切ったな！的な視線を二人に送った。　千冬はまたしても無視して、

「他にいないのなら、織斑に決めて・・・」

いい終える前に遮った者がいた。

「このような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか？」

当然の如くセシリアだった。

「大体、文化としても後進的な島国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

カチン、一夏から確かにそう聞こえた。
「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一マズイ料理で何年覇者だよ？」
珍しく、キラまで乗ってきた。友達の一夏を馬鹿にされ、腹が立ったのだろう。
「それに、イギリスって日本より、あんまり目立つ観光スポットがないんじゃない？」
「わたくしも、日本の文化の方が奥が深くて好きですわ！」
ラクスまで乱入してきた。
「あっアナタ達！わたくしの祖国を侮辱しますの？」
「そっちが最初に始めたんだよ」
そうキラに言われたセシリアは顔を真っ赤にしながら、
「決闘ですわ！キラ・ヤマト！それにアナタもです。織斑一夏」
それを聞いた一夏が。
「ええっ！俺も？」
「ええ！キラ・ヤマトを倒した後に、アナタを倒して、クラス代表になってみせますわ！」
それを聞いていたユウイチがセシリアに提案した。
「オルコット！キラと戦うんなら、ハンデをつけて貰え！」
さらに、千冬が付けたす。
「そうだ！お前がヤマトと戦ったら、瞬殺されるのがオチだ。」
それを聞いたセシリアが更に逆上する。
「わたくしがこんな男に瞬殺？そんなことあり得ませんわ。逆に返り討ちですわ。」
千冬はやれやれと言った感じだ。
「結果はその内でる、いいか！決闘は一週間後の第３アリーナだ。異議がある者は？」そんなこんなでＩＳ学園の初日は過ぎていった！
その日の放課後、キラ達は寮で部屋割りをしていた。寮長の千冬が初めにキラにキーを渡していた。
「ヤマトとクラインは同じ相部屋だ。いいか？ヤマト、同じ部屋

だからと言って、クラインに手を出すなよ？」
「先生！」
キラはラクスは真っ赤になりながら叫ぶ。
「冗談だ。さて、レイブンと織斑はジャンケンをして、勝った方が個室、負けた方が女子との相部屋だ。」
「ええ！ラクスとキラはともかく、女子と相部屋は不味いんじゃあ？」
「決定事項だ。諦めろ」
一夏は素直に諦めてユウイチとジャンケンをした。
ジャーンケーンポン！一夏はチョキ、
ユウイチはグーだった「やったぁ！一人部屋ＧＥＴ！」
ユウイチははしゃぎ一夏は真っ白になっている。千冬の隣にいた真弥が大浴場について説明してくれた。
「学年ごとに使える時間が違いますけど・・・えっと、その織斑くん達は今のところ使えません」
「え、なんでですか？」
「変態か」
「なんで？」
「アホか！お前は、まさか同年代の女子と入りたいのか？」「おっ織斑くん、女子とお風呂に入りたいんですか？」
「いっ、いや入りたくないです。」
「ええっ！女のコに興味ないんですか？そ、それはそれで問題なような。」
なんなんだ？この人は？しかも後ろで女子が色々騒いでいる。
この後、四人は部屋割りされた部屋に入っていった。因みにラクスとキラは１０２４号室、一夏は１０２５室、ユウイチは１０２６室である。
キラは部屋に入ると、まず、備えつけのＰＣを機動した、まずは敵の下調べという事でセシリアを調べることにした。
「セシリア・オルコット、１５才、貴族出身、ＩＳはブルーティ

アーズ、狙撃特化型で、後ろにあるＢＴ兵器のブルーティアーズによるオールレンジ攻撃も可能か。」

持ち前のハッキングでセシリアの情報を次々と引き出していく。

「ＢＴ兵器を使うときは、本体は一切の行動ができなくなるのか。」

これは、たぶんＢＴ兵器の操作に集中しなければならないからだろう。

「ふんふん。ブルーティアーズを使ってる時に一気に攻めれば大丈夫だね。」

まぁ、キラならセシリア相手なら苦労はしないだろう。

そういえば一夏に鍛えてくれと頼まれていたのを思い出した。

なにやら隣が騒がしいが無視して、シャワーを浴びているラクスが出てくるのをコーヒーを飲みながら待つことにした。

「これから、色々楽しくなりそうだね。」

本人は気付いているのか分からないが、その顔からは笑顔がこぼれていた。

決闘（後書き）

一夏の訓練は省きます。

セシリアVSキラ（前書き）

キラとセシリアのフラグを立てみました。

セシリアＶＳキラ

決闘当日、一夏は幼なじみの篠ノ之箒と一緒に第三アリーナに向かっていた。
「なぁ、箒。」
「なんだ？」
「キラって、セシリアに勝てるのか？」
「わからん、トレーニングでは一緒にやったが、それだけでは実力ははかれん。」
それにトレーニングの内容は一夏の反射神経を鍛えるだけだった。
「まぁ、射撃は妙に正確だったがな。」
そう言いながら一夏はブルブルと震えだした。
「そう言えば、今日に一夏の専用機が来るのであろう？。」
「ああ、一体どんなのかな？」
そう、一夏の専用機が来るのは今日だと千冬が言っていたのだ。
一夏達が第三アリーナ、Ａピットについた時、
真弥が全力疾走しながら近づいてきた。
「織斑君！織斑君！織斑君！きましたよ！織斑君の専用ＩＳが！」
ごごんっと鈍い音がして、ピット搬入口が開いた。
奥に、千冬とキラ、そして白がいた。
「これが、織斑君の専用ＩＳ白式です。」
「これが！！」
一夏の視線は白式に釘付けだ。
「どうした？一夏」
どうやら、箒の声も聞こえないらしい。だが、直ぐに千冬に覚醒させられる。
「早く乗れ！ヤマトの試合の間にフィッティングとフォーマットを済ませろ！」

一夏は急いで白式のコクピットに乗りこんだ。
「そう言いば、キラのＩＳってやっぱり、束さんが造ったものなのか？」
「うん、そうだね。ユウイチのＩＳもそうだよ。」
「何？ヤマト達は姉さんの知り合いなのか？」
「うん！１ヶ月ぐらい一緒に住んでただけだけどね。」
「そうか。」
箒はちょっと嫌そうな顔をした。
「フリーダム、機動！」
右腕の蒼いブレスレットが光り瞬く間に小さいフリーダムになった。
「頑張れよ！キラ！」

「うむ。勝ってこい。」

キラは一夏の応援を尻目にカタパルトにフリーダムに進めていく。
ふいに管制室から通信が入ってきた、ユウイチからだった。「キラ、頑張れよ！」
ただそれだけだった。

「うん、ありがとう。」

「Ｘ２０Ａ　ストライクフリーダム発進どうぞ！」ラクスのアナウンスが聞こえてきた。どうやらラクスが管制をしてくれるらしい。

「ストライクフリーダム、キラ・ヤマト行きます。」
キラは、勢いよくカタパルトを飛び出た。そして、ＶＰＳ装甲がＯＮになり機体の色が灰鉄色から鮮やかな青、白、黒にかわり更には関節部分は黄金に変わった。
「なっなんですの？このＩＳは？」
セシリアはいきなり前に躍りでた、謎のＩＳに驚きの声を上げた。

「待たせたね。」
「まさか、キラ・ヤマト？」
見たことの無い全身装甲のＩＳがキラだという事に声で気付いた。
「遅かったですわね。逃げだしたと思い、心配しましたわ。」キラはガンダムフェイス越しに睨みつけながら言う。
「一夏の用で遅れたんだよ。」
「これも、汗臭い男の友情ということですか？」
「友達を大切にするのは良いことだと思うけど？」
「なら、あの男と一緒にいればよかったのですわ！」
スターライトＭＫ？を構えて、キラに最終通告を告げる。
「これが、最後ですわ。ここで謝るというのなら、許してさしあげても良いですわよ。」
「それは、断るよ。」
「そう。残念ですわ。」
セシリアは試合開始と同時にレーザーを撃ってきたが、本物の戦場を駆けまわってきたキラにとっては子供騙し、華麗によけ、後ろに下がる。「なっ！速すぎですわ！それに何ですの？あの粒子は？」
現在のフリーダムはネクスト粒子を搭載してる為、メサイア攻防戦の時より更に速くなっている。
「速くても、それだけですわ！さぁ、躍りなさい！わたしくし、

セシリア・オルコットとブルーティアーズが奏でる円舞曲で！」

セシリアはスターライトでは、擦りもしないので、後ろのブルーティアーズを展開させ、キラに一斉射撃を仕掛けた。だが、キラはこの時を待っていたのだ。

「きた！」

キラは両手のビームライフルをフルオートで連射して、瞬く間にブルーティアーズを落として、背中のドラグーンを全基展開させ、高速機動しながら自身もビームを撃ち始める。

「なっ！高速機動をしながらビームを撃って、尚且つ八基の誘導兵器を同時操作ですって！どんな処理能力をしてますの？」

セシリアは飛んでくるビームの嵐にさらされ、棒立ち状態になってしまった。

ボロボロ状態のブルーティアーズを見て、ハイパードラグーンを全基、翼に戻しビームサーベルを抜いて二刀流で構えた。

「これで、終わりにしよう。」

そう言いながら、セシリアに高速機動で近づいた時、セシリアは笑みを浮かべていた。

「かかりましたわね。ブルーティアーズは六基ありましてよ！」

後ろから、今度はミサイル型のブルーティアーズが発射され、キラに迫っていく。

「ふっ！」

だが、キラはバレルロールをしながらミサイルを斬り落とし、さらにイグニッションブーストで一気に間合いを詰める。

「なっ！」

セシリアが気ずいた時は既に遅く、キラに斬り刻まれてしまった。

「きゃあああああああ！！」

「ブルーティアーズ、シールドエネルギーエンプティ、勝者、キラ・ヤマト」

セシリアは泣きそうな顔になりながら、自分の敗北に驚愕していた。

「まさか、このわたくしが一撃も与えられず負けるなんて。」

空からキラが降りてきた。

「今回はその慢心がいけなかったね。でも、君は強くなれる。そう信じてる。だから一緒に戦おう。そしていつか、強くなったキミを見せてよ。」

そう言いながら手を差しのべた。

「当たり前ですわ！今度は必ず貴方に勝ってみせますわ。」

そう言いながらキラの手を掴んで立ち上がったセシリアの顔は何故か桃色に染まっていた。

セシリアＶＳキラ（後書き）

次回から書き方を変えて見ようかな。

白き騎士と青き大天使（前書き）

これから先、できたら〇〇もクロスさせてみたいです。

白式のフォーマットとフィッティング、更にはファーストシフトを終わらせ、管制室に来ていた一夏だったが、先程に終わったキラとセシリアの戦闘の記録映像に釘付けになっていた。

「ふげ～！これ勝てんのか？俺」

「うむ、射撃戦だけではなく、近接戦も驚異的だな。ヤマトは。」

箒までもが釘付けになっていた。それを見たユウイチと千冬が一夏にアドバイスをした。

「確かにキラの射撃戦はヤバいキラに近づくには、あの鬼のような弾幕を抜けなきゃいけない。」

「そして、例え抜けたとしてもヤマトの二刀流が待っている。」

今の一夏では到底、敵う相手ではない。

「ヤマト君て、あんなに凄いんだ。」

真弥が感心して言う。そりゃそうだろう。今、シャワーを浴びてるキラはC．Eの世界では最強の一人なのだ。後はアスランとシンだった。

「一夏！男なら、一撃ぐらいでも入れるという位の気迫で挑め！」

箒が叫んできた。

「ああ！たとえ、勝てなくても、一撃ぐらい入れてやるさ。」

それを見ていたラクスがいきなり一夏の手を握ってこう言ってきた。

「そうですわ！一夏さん。その思いを忘れないでくださいな。その思いがあればきっとキラも全力で応えてくれますわ。」

「ラクス・・・。」

思わず赤くなってしまった。

「そうだぞ！一夏、前にキラがいってたんだか戦局を変えるのは思いだそうだ。」

「分かった！この思い、全力でキラにぶつけてみるよ。」

そう言って一夏は白式の所へと歩みを進めていった。

「一夏、待ってたよ！」

白式に到着するとシャワーを浴び終えたキラがフリーダムを装着して待っていた。

「キラ！今の俺じゃあ勝てないけど一撃だけでも入れてやるからな。」

一夏の瞳を見たキラが、

「うん、僕も全力で行くからね。」

と笑いながら言ってきたが、一夏は確かに見たのだ。キラの戦士の顔を、それはつまりキラは一夏を一人の戦士として認めたのだ。

キラはフリーダムをカタパルトに進めていく。

「Ｘ２０Ａ　ストライクフリーダム発進どうぞ！」

「フリーダム、キラ・ヤマト行きます！」

カタパルトから吐き出されたキラはまたも鮮やかなバレルロールを決めて離れていく。

「キラの掛け声、やってみようかな？」

「白式、発進どうぞ！」

「白式、織斑一夏行くぜ！」

カタパルトから出た一夏は中央に浮かんでいる大天使と対峙した。

「試合開始」

先手を決めたのは一夏だった右手に雪片弐型を呼び出し一気に突っ込んでいく。だが、キラがそれを許すはずもなく、ドラグーンを展開して瞬く間に弾幕の壁を築いていく。

「ぐぅ！」

「どうしたの一夏？これぐらいで苦労してたら一撃を入れるなんて無理だよ！」

キラは更に弾幕の密度をあげる。

「そんなこと言ったって！」

一夏には避けるだけで精一杯だ。しかもキラにしては珍しくビーム

サーベルを抜いて前に出てきた。しかも弾幕を張りながら。

「なに！くそ！」ビームサーベルの刃と雪片弐型の刃がぶつかりスパークする。

「このぉ！」

「ふふ。」

一夏は一杯一杯だが、キラは余裕そうだ。つばぜり合いに勝ったのはキラだった。後ろに突飛ばされた一夏はキラ相手に隙を作ってしまった。そのせいでドラグーンの一斉射撃を受けてしまい、シールドエネルギーが４００だったのが今は１５０だ。

「そろそろ、決着をつける一夏？」

「ああ！いいぜ！」

今、一夏の心は澄みきっていた。ただ、キラに一撃を加えるただ、それだけだった。その時、白式に変化が起きたのだ。白式が黄金に輝いてる。

「これは！？」

「どうやら白式のワンオフアビリティが発動したらしいね。」

「零落白夜！」

一夏はなぞるように言う。

「これが最後だ！キラ！」

「うん！」

管制室では真弥達が手に汗握る展開に興奮していた。

「はぁぁぁぁ！！」

またしても先手をうったのは一夏だった。

「はぁ！」

「くぅ！」

一夏はトップスピードで袈裟斬りに斬りかかったのだが、キラは左に移動して、回避した。更に一夏の左腕を掴んで投げ飛ばした。

「うぁ！」

一夏が体制を立て直した時には遅くマルチロックされていてハイマットフルバーストの餌食になってしまった。

「白式、シールドエネルギー、エンプティ、勝者、キラ・ヤマト」

「やっぱり駄目だったか！」

「一夏は頑張ったよ！」

一夏はキラに向きなおった。

「キラ頼む！これから色々と教えてくれ！」

「うん！いいよ！」

そういいながらキラは手を差し伸べた。一夏しっかりと握りしめ
この試合は終了した。

白き騎士と青き大天使（後書き）

一夏とラクスのフラグは立ちません

キラとラクスの関係（前書き）

トランスフォーマー、超楽しみ？

キラとラクスの関係

あり得ない事が起きた。

「クラス代表は織斑一夏君に決定しました。」

パチパチパチって、おい！

「はぁ！ちょっと、待て！何で、俺が？」

クラス代表はキラに決まったとばかり思ってた一夏は驚きの声をあげた。

「それはですね・・・」

「僕が辞退したからだよ一夏」

「じゃあ、セシリアは？」

「わたくしも辞退させてもらいましたわ。一夏さんには強くなってもらいたいというキラさんの頼みで。」

「ユウイチは？」

「なに言ってる？俺はお前等が戦う前にとっくに辞退してるわ。」

一連のやりとりをみてた千冬が。

「諦めろ。お前に選択肢はない。」

「そぉんなぁー！！」

ユウイチがドンマイ的な感じで、一夏の肩を叩きコーラを差し出してきた。

「くそぅ！」

一夏は差し出されたコーラを一気飲みしたが、今は授業中だ。千冬が許すはずもなく一夏の後頭部を叩いた。

「今は授業中だ！馬鹿者！」

「ぶーーー！！」

「キャァァァ」

一夏は口に含んでいたコーラを盛大に真弥に吹き掛けてしまった。

「すっ、すいませ～ん！」

クラス代表が一夏に決まったその翌日、授業は遂に実習に入ることになった。

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、ヤマト、レイブン！試しに飛んで見せろ！」

４月の下旬、ＩＳ学園のグラウンドに千冬の声が響き渡っていた。

「まずは、ヤマトとレイブン、ＩＳを展開してみせろ！」

そう言われたユウイチとキラは目を閉じて瞬く間にフリーダムとストレイドを呼び出した。

「ふむ。二人は問題ないな。次！織斑とオルコット！」

セシリアも目をとじてブルーティアーズを瞬く間に展開していく。だが、一夏はセシリアより遅く展開した。これは、ちょっと時間がかかり過ぎだ。

「織斑！もう少し早く展開できないのか？」

「だけど千冬・・・」

「織斑先生と呼べと何回言ったら気が済むんだ？馬鹿者が！」

「はい・・・」

まったく学習しない男、汝の名は織斑一夏。

「まぁいい、よし！次は飛行だ！ヤマト、レイブン！飛べ」

そう言われたキラとユウイチはＶＰＳ装甲を展開してあっという間に天高く飛び上がった。実に無駄の無い飛行だ！

「レイブン君とヤマト君のＩＳ、色が変わったわよね？」

「関節の色きれーい。」

「それに、飛行もウマイわね。」

女子達、皆様々な感想を述べている。

「膝を曲げて、即時飛行できるようにしてますわね。そのおかけで飛行時のタイムラグを無くしているという事ですわね」

セシリアはユウイチとキラの自己分析に入っていた。

だが、ラクスはいつも見慣れてるので当然という感じだ。

「次、オルコット」

セシリアも一旦、浮いたかと思ったら一気に飛び上がる。

「うむ。セシリアもなかなかだね。」

と、キラが上がってきたセシリアを褒めた。

「ん?どうした?セシリア、顔赤いぞ。」

初恋の人に褒められたセシリアは顔が赤くなってしまい、更にユウイチに指摘されてしまった。よりによってもユウイチに。

「あー!にゃるほどね、いいねぇ、青春だねぇ〜!」

「ちっ違いますわ！」
否定するセシリアだがユウイチには見抜かれてしまった。
「いいって、いいって、気にすんなって。」
完全なオヤジモードである。
そんな事を話している内に一夏が上がってきた。
「うぁぁぁぁぁ！！」
一夏は飛行経験がない為か、かなり危なっかしい飛行だった。
「おっかしいな？イメージとしては、「自分の前方に角錐を展開させる」らしいんだけど上手くいかないなぁ？」
するとセシリアが、
「一夏さんイメージは所詮イメージ。自分がやり易い方法を模索する方が建設的でしてよ。」
さらにキラが付けたす。
「一夏には一夏のあったスタイルでやった方がやり易いかもね。」
一夏はそれでも分からないという感じだ。
「そう言われてもなぁ、まだ、空飛ぶ感覚があやふやなんだよ。なんで浮いてるんだ？これ」

「説明してもいいが長いぞ？」

「そうですわね。反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」

「分かった、説明してくれなくていい。」

一夏はガクリと項垂れた。

「それにしてもＩＳのハイパーセンサーってすげぇな！この、距離で箒がくっきりみえる。」

そう言いだした、一夏はハイパーセンサーをつかって箒の顔を見てるらしい。

「まぁ、元々は宇宙開発の為に作らるれたんだから。宇宙という広い空間の中で、星の位置を測って現在位置を割りださなきゃいけないから、この距離ぐらい普通だよ。」

そう言いながらキラはラクスを見てみた。手を降ってるみたいだ。キラも手を振り返した。

「なっ！なんですの？この二人のやり取りは？一体、二人のご関係は？」

気になったセシリアは一番二人を知ってそうなユウイチに聞いてみた。

「ユウイチさん！キラさんとクラインさんのご関係を知っていて

？」

それを聞いたユウイチは、

「聞かない方が良いと思うけど？」

セシリアの恋心を知っていたユウイチはセシリアに警告したがセシリアは喰い下がらない。

「いいえ、知りたいんですの！あの二人のご関係を！」　ユウイチはため息をついて真実を言った。

「二人は付き合ってるんだ。確か、長かったはずだ。」

ガーーーン！！！！セシリアから確かに聞こえた。ガーンの効果音が。

「そっ、そんな！二人は恋人同士・・・・」

「だから言ったのに・・・」

セシリアが真っ白になっていく。

「四人とも、次は急降下と完全停止だ。目標は十センチだ」

「じゃ！お先に！」

まずは、ユウイチから先に急降下をしてった。

もの凄い速度で地表にせまり2．　5センチの辺りで止まった。

「さすがだな。」

「それほどでも～～」

次はどうやらキラのようだ。ユウイチと同様に一気に急降下をして、地表スレスレで止まる。

「さすがヤマトだ。まさか、１．　５センチとはな。」

「おの望みなら、更に縮められますが。」

「今度、やって貰おう。次！オルコット。」

セシリアは真っ白になりながらも急降下を開始した。そして、ちょうど十センチで止まる。

「ほう、まずまずだな。」

だが、セシリアからの反応はない、かなりショックだったのろう。

「次、織斑！」

白式も一気に速度を上げ急降下してくる。だが、完全停止せずに地面に激突してしまった。みるとクレーターが出来てる。

「誰が地面に激突しろといった。」

ようやく一夏は地面から頭をひっこ抜くことができた。

「ゴメン、キラ！上手くやろうと思ったんだけど、激突しちまった。」

どうやら、ユウイチが急降下してる間にキラに色々とおそわってたようだ。

「自分で開けた穴は自分で埋めろよ。次は武装展開だ！」

何故か後ろ向きで指示をする千冬。たぶん、一夏に怪我がないと分かって安心したのだろう。それを隠してるという事だ。まぁ、キラとラクスには見抜かれたらしいが。

その後は武装展開をして授業は終わった。

「お疲れさまでしたわ。」

ラクスがキラにタオルを渡しにきてくれた。

「ありがとう。ラクス」

キラはラクスをまじまじと見た。束オリジナルのＩＳスーツを来ている。色はピンク。

書き忘れたが、キラとユウイチとラクスは束オリジナルのＩＳスーツを着ている。因みに色はキラが青、ユウイチが黒だ。

兎に角、ＩＳスーツを着たラクスの体はいつもより、ラインが目立って、もの凄いナイスバディにみえる。まぁ、ＩＳスーツが無くてもかなりのナイスバディだからあんまり変わらないけど、

「どうしましたの、キラ?」

見入ってしまっていた。

「いや、何でもないよ。」

顔が赤くなってしまう。

「ちょっと、宜しくて?」

二人は誰かに呼び止められ振り返る。白いままのセシリアだった。

「どうしましたの?オルコットさん?」

「わたくしの事はセシリアとお呼びくださいな。ですからわたくしもラクスさんと呼んでも?」

「分かりましたわ。それで、何のご用ですか?セシリアさん?」

「二人は恋人同士だと聞きましたが本当なのですか?」

「うん!本当だよ。」

「結構、長いですわよね。」

二人とも手を取り合いながら赤くなる。

「そんなぁぁぁぁぁ」

回りにいた、女子達が悲鳴に似た声をあげる。そりぁそうだろう。絶世の美少年のキラにはお似合いすぎる絶世の美少女のラクスという恋人がいたのだ。キラを狙っていた女子生徒はかなりショックだったろうに。

「なに！二人は付き合っているのか？」

箒がもの凄いスピードでラクスに詰め寄る。

「クライン！頼み事があるんだが？いいか」

「いいですけど。篠ノ之さん、わたくしの事はラクスとお呼びくださいな。」

「なら、私も箒でいい。」

その後、箒とラクスはなにやら色々話しながらクラスに向かっていった。

セシリアはというと立ったまま気絶していて、一夏とキラに保健室に連れていってもらったそうな。

キラとラクスの関係（後書き）

もしかしたら、ＯＯのリボンズを出すかもです。

セシリアの決断（前書き）

セシリア決断の時

セシリアの決断

キラとラクスが付き合っていると発覚したその日の放課後、セシリアは一人で学園の備え付けのベンチに座っていた。

「はぁ・・・」

セシリアはかなり深いため息を吐く。そしたら、いきなり頬に冷たいものが当たった。

「きゃう!?」

「なに?落ち込んでんだ?」

ユウイチだった。右手にコーラを持ってるから、それを頬に当てたのだろう。

「キラさんとラクスさんの事で。」

「ああ、なるほど。でっ!セシリアはどうしたいんだ?」

「分かりませんわ。でも、正直あの二人の間に入っていけるかどうか。」

そりゃそうだろ。二人はC．Eの最強カップルだ。ユウイチは密かに思った。

「それでいいのか?」

「・・・・」

セシリアは黙り込む

「本当はお前自身、諦めたくないんだろ？」

そう、キラはセシリアにとって初恋だ！自分の心を揺らした言葉を投げ掛けた男を逃がすわけにわいかない。なにより、セシリアのプライドがそれを許さない。

「自分の気持ちに嘘はつくなよ。確かにキラにはラクスがいる。でも、セシリア！女なら気になる人を振り向かせて見ろ。」

「私が？キラさんを？できるでしょうか？」

「できるさ、何たってお前はエリートの中のエリートなんだろ？」

「！！」

「恋に必然なんかねぇんだ。いつも気まぐれにやって来る。例え、それが、誰であろうとな。」

「キラとラクスには幸せになってもらいたいと、俺自身はおもってる。だけど、お前の事は応援するから頑張れよ～」

そう言いながらユウイチは夕日の中を去っていった。

「自分の気持ち。」

そう、この気持ちはもう止められない。

「キラ・ヤマト、例え、貴方にラクスさんがいようと、セシリア・オルコットの名に掛けて貴方を振り向かせてみせますわー」

セシリアは夕日の中、右手を天高く挙げて高らかに宣言をした。

セシリアの決断（後書き）

後で、全て丸く収めます。

パーティーと告白（前書き）

ハーレムフラグ！

パーティーと告白

ここは寮の食堂、時間は夕食後の自由時間。そこで一組のメンバーが揃ってなにやら騒いでいた。壁には「織斑一夏クラス代表就任パーティー」と書いた紙がかけてある。

「というわけでっ！織斑くんクラス代表おめでとう！」

「おめでとー！」

クラッカーが乱射される。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねぇ！」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じ、クラスで！」

「うんうん」

どうでもいいが、ここにいるのは明らかに三十名以上いる気がする。クラスの集まりでクラスの人数以上いるのはおかしい。だが、あえて追求しないことにしよう。

「はいはいー！新聞部でーす話題の新入生の織斑君、ヤマト君、レイブン君に特別インタビューしに来ました。」

クラスが更に盛り上がっていく、だがインタビューを受ける三人はえ～という感じだ。

「あ！私は黛薫子。新聞部部長やってまーす。はい、これ名刺。」

そう言いながら名刺を三人に渡す。

「ではではズバリ織斑君、クラス代表になった感想をどうぞ！」

ボイスレコーダーをずずずいっと一夏に向ける。

「えーと・・・」

「まぁ、なんというか、頑張ります」

「もっといいコメント頂戴よー！俺に触ったら火傷するぜ・・・みたいな？」

一夏はため息をしながらこう答えた。

「自分、不器用ですから」

「うわ！前時代的」

一夏はムッとするが薫子は気にせず今度はキラにボイスレコーダーを向ける。

「はい！次はヤマト君。副代表として一言。」

「頑張ります。」

「え～！他にないの？彼女募集中とか？」

すると、ラクスが近寄って来て、キラに腕組みをした。

「僕には、ラクスがいるので別に彼女とかは・・・」

「えっ！何？もう彼女いるの？キミを狙ってた子達結構いるのに残念ね。」

まぁ、こればっかりはしょうがないだろう。実際周りには目頭にハンカチを当てている女子が何人かいる。だが！この後、キラとラクスに思わぬ事態が発生する。セシリアによって。

「キラさん！わたくしは貴方の事が好きですわ！でっ、ですからラクスさんと共にわたくしの事も愛してくださいなー！」

セシリアが突然現れて、いきなりの大告白を皆の前でしだしたのだ。

「えーーーーー！！！！」

当然、騒がしくなる。ラクスは真っ赤になりながらキラに問いかける。

「これは一体どういう事ですのキラ？」

キラも真っ赤になりながら答える。

「いや、僕にも何がなんだか？セシリア！これは一体どういう事

？」

「どうも何も！貴方はわたくしを打ち負かした人で素敵な言葉を投げ掛けた男性です。だからわたくしは貴方に惹かれたんですのよ。」

「いや、そういう事じゃなくて！」

「何！ヤマト君、まさかの二股？」

薫子は目をキラキラさせながらキラに詰め寄る。これぞ、正しく3キラだ。なんちって

「キラ、後で、ご説明させてくださいますわよね？」

ラクスが満面の笑顔でキラに詰め寄る。目が笑ってない。キラがピンチだ。

「いや、ラクス、これは・・・」

キラが弁解しようとするがセシリアがキラの腕に抱きついたままだ、弁解のしようがない。なんか、浮気が発覚した夫婦みたいだ。よく見ると奥で一夏が合掌している。セシリアが幸せにそうにしているがキラは白くなっていき、ラクスは更にキラに詰め寄っていく。

「あのな、ラクス！これには・・・」

今までケタケタと笑っていたユウイチがラクスの耳元で何かを言う。すると、ラクスは今までの本当の素敵な笑顔に戻った。

「まぁ！そういう事でしたの！なら、わたくしはいいですわよ。」

そう言いながらラクスはキラの右腕に抱きついて来た。

「セシリアさん！これからは三人で仲良くしていきましょうね。」

箒と一夏はユウイチに近寄って聞いてみた。

「ユウイチ、一体何をいったんだ。」

するとユウイチは口笛をしながら答えた。

「ん～～、秘密～！」

「なんだよ～教えろよ～」

一夏がしつこく聞いて来た。

「まだ、二人には早い話だよ！」

「なんだよそれ？まぁ、いっか！それにしてもキラもすげーモテるのな。俺とは大違いだ。」

すると、ユウイチと箒はじと～っとした視線を送った。

「なんだよ？その視線は？」

「別に・・・」

「別になんでもない。」

まさか、このタコスは自分がモテるという事がわからんのか？こ

れじゃあ、箒を含めた彼に恋心を持ってる女子があまりにも救われない。そう、ユウイチは思った。

「いやー、今日は大量ね！！」

そう言いながら薫子はユウイチに近づいてきた。

「さて、最後に代表じゃあ無いけどレイブン君！コメントどうぞ！」

ボイスレコーダーをユウイチに向ける。

「ゴメン！インタビューは苦手なんで（嘘）」

「嘘はいけないな～」

見抜かれた？とユウイチは思った。

「まぁいいわ！いろいろと捏造しとくわ」

まじか！という感じでジェスチャーをするが他から見ればオーマイゴットだ。

「ついでに代表候補生であるセシリア・オルコットさんにもインタビューを！」

今度はセシリアにボイスレコーダーを向ける。

「今回、ヤマト君に大告白をしましたが、今の心境は？」

「ええと、今の心境はーー」

「長くなりそうだから、捏造しとくわ！」

「な！」

セシリアは真っ赤になる。怒り心頭って感じだ。

「はいはい！取りあえず四人並んでー！写真とるから。」

「えっ？」

意外な声を上げるセシリア。だが、どこか弾んでいる。

「注目の専用機持ちだからねー！ツーショット、いや、フォーショット貰うよー。あ。握手とかしてるといいかもね。」

何故かセシリアはモジモジとし始めた。

「あの、撮った写真は当然頂けますわよね？」

「そりゃ勿論」

「でしたら今すぐ着替えてーー」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

そう言いながら手を引いて、握手まで持って行く。

「それじゃあ撮るよー。３５×５１÷２４は～？」

「え？えっと・・・２？」

「ぶー、７４・３７５でしたー」

パシャッとデジカメのシャッターが切られる。

すると一夏が・・・

「なんで皆いるんだ？」

よく見ると、全員がキラ達の周りに集結している。ラクスなんてキラの胸に寄りかかっている。箒までも一夏の横にいる。

「あ、あなたたちねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけいいおもいなんてズルいよ。」

「クラスの思い出になっていいじゃん。」

「ねー」セシリアを丸め込む言い方だ。

ともあれ、このパーティーは夜、十時過ぎまで続いた。

その後、キラとラクスとセシリアとユウイチはキラとラクスの部屋に集まった。

「キラさんとラクスさんは同じ部屋ですってー！！」

この驚きは置いといて、ユウイチは本題にはいった。

「さて、今回のセシリアの告白だが、あれを提案したのは俺なんだ。」

実はセシリアが天高く宣言をした直後にユウイチが戻って来て提案したのだと言う。

「なんで?告白を?」

「いや、なに。セシリアがお前に気があるって言うから。」

「でも、僕にはラクスが・・・」

「ちゃんとした理由があるんだよ。」

その理由とは。

「これから先、色んな国から俺達男三人は色んな事をされるだろう。そして、それは俺達三人に留まらない筈だ。」

周りの人間が被害を受けないなんて事はまずあり得ない。だが、キラも承知の上だ。

「でも、今回の告白とどういった関係が?」

「お前の事だ!ラクスだけではなく、他の生徒も守ろうとするだろ?」

「それは・・・」

すると、ラクスがキラの手を握る。

「キラはお一人で頑張りすぎるのですわ。」

「そう。何かあった時、お前はなんでも一人で溜め込み過ぎるんだ。」

この事はアスランも同様だった。

「だから、ラクスとセシリアにはお前のメンタルケアをしてもらいたいんだ。」

今度はセシリアがキラの手を握って。

「わたくし達、二人がキラさんの心を癒して差し上げますわ。」

「いや、でも三人ていうのはさすがに」

「わたくしでは不満なのですか？」

とセシリアが悲しそうな顔をして来た。

「いや、そういう訳では・・・」

すると、ラクスが。

「キラ、皆で一ヵ所にいたほうが危険が少なくなりますわ。」

「う～ん」

まぁ、今までキラはラクス一筋だったのだ難しいのは分かる。

「諦めろ、キラ！ラクスはいいといってるんだ。」

キラは観念したのか、ため息をついた。

「しょうがない・・これから、二人ともよろしくね。」

「「はいですわ」」

二人ともいい笑顔になった。

「じゃあ、俺は部屋に戻るからな、三人共仲良くな。」

そう言って、ユウイチは部屋を出ていった。後に残された三人は幸せな時間を過ごしたという。

パーティーと告白（後書き）

セシリア大胆にしすぎたかな？　次回、セカンド幼馴染み

現れて、セカンド幼馴染み（前書き）

トランスフォーマー面白かった。

現れて、セカンド幼馴染み

朝、キラと一夏とラクスと箒がクラスに行くと、何やら騒がしかった。

「皆、朝から騒いでどうしたの？」

キラが入り口の手前にいる女子にきいてみた。

「おはよー。なんかね、隣のクラスに転校生がきたらしいのよ。」

「転校生？今の時期に？」

不思議に思った一夏が質問する。確かに今は４月だ。しかもＩＳ学園は転校はかなり難しいらしい。国の推薦がないとできなくなっているのだ。

「もしかして、代表候補生？」

「そう、中国の代表候補生らしいのよ。」

そういえばこっちにも一人、代表候補生がいたな。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

そう、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットだ。というか、いつの間にか現れていた。

「このクラスに転入してくる訳ではないのだろう?騒ぐほどのことでもあるまい。」

そう言って現れたのは、先程自分の席に向かっていた筈だった。

「どんな方なんでしょう?」

代表候補生なら実力はあるだろう。だが、姿や性格までの情報はない、だから更に想像をかき立てるのだ。

「ちーっす!ん?どした、みんな入口で集まって?」

ユウイチがヤンキーみたい挨拶で入ってきた。

「おはよう、ユウイチ!実はね・・・・」

キラがユウイチに事情を話す。

「ふ~ん、隣に転校生ね~。ていうか、一夏!今度のクラス対抗戦大丈夫なのか?」

どうやらユウイチは隣の転校生の事は興味無いらしい。話題を今度、行われるクラス対抗戦に変えてしまった。

「そうだぞ一夏!今のお前に女子を気にしている余裕はない!」

確かに今の一夏の実力では気にしている余裕は無い。

「そうなんだよ。ちょっと心配なんだよ」

そう言って一夏はげっそりとした顔になった。

「その点は大丈夫だよ！一夏！僕達が特訓で鍛えるから。」
と、キラが悩殺スマイルを振り撒く。
「ふふ、頼もしいですわね。」
ラクスもつられて笑う。
「ああ！ありがとうな。キラ、ユウイチ」
すると、クラスの女子が集まって来た。
「織斑君が勝つとクラスみんな幸せだよー。」
「織斑君、がんばってね！」
「フリーパスの為にも。」
「今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだからね、余裕だよ！」
一夏は女子にいろいろと期待されていた。すると。
「その情報、古いよ！」
大声がしたので、皆入口に顔を向けるとツインテールで小柄な女子がいた。たぶん顔からして、アジア系だろう。
「二組も専用機持ちがクラス代表になったのそう簡単には優勝できないから」

かなり男勝りな性格なのだろう。だが、一夏はその女子をしっているらしい。

「鈴・・・お前、鈴か？」

「そうよ！中国代表候補生。凰・鈴音　今日は宣戦布告にきたってわけ！ていうか、あんた邪魔よ！」

そう言って、凰・鈴音と名乗った女子は目の前にいたユウイチを蹴り飛ばしてしまった。

「ひでぶっ！！」

蹴り飛ばされたユウイチはどこかで聞いた事のある悲鳴を上げながら黒板に激突して動かなくなってしまった。

「ユウイチ！！」

「ユウイチさん！！」

「大丈夫ですの！？」

キラとラクスとセシリアが駆け寄るがユウイチはピクリともしない。

「何格好付けてるんだ。すげえ似合わないぞ」

「んなっ・・・なんて事言うのをあんたは！

二人は動かないユウイチを無視して会話を始めた。

「おい」

「なによ！」

次の瞬間、鈴は頭を出席簿で頭を叩かれる。千冬の登場だ。

「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません」

やはり、一夏の知り合いという事は千冬とも知り合いなのだろう。

「後で、調べておこう」

キラは誰にも聞こえないように小さくいった。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「さっさと戻れ」

「は、はい」

そう言って、鈴はクラスに猛ダッシュで戻っていった。

「ん？どうしたレイブン？さっさと席につけ！」

千冬は虫の息であるユウイチにトドメをさした。出席簿で

「ぐぎゃぁぁぁぁぁ！！」

今日はユウイチにとって厄日らしい。クラスみんな、そんなユウイチに合掌した。

案の定、鈴は昼休みに来た。

「一夏！食堂いこ！」

「おう！いいぜ。」

そう言って、一夏は鈴を連れて食堂に向かっていった。

「ラクス、セシリア！僕達も食堂に行こうか？」

「「はい！」」

「待ってくれ！俺も」

「私も！」

キラ達にユウイチと箒が同行する。

そして、箒が食堂で一夏にたまりかねて鈴の事を聞いてしまった。

「一夏、そろそろどうゆう関係か説明してほしいんだが、一夏はこの女と付き合っているのか？」

よく見ると、キラ達や他のクラスメイトが聞き耳を立てていた。

「違うよ、ただの幼馴染みだよ」

「・・・・」

「？なに睨んでるんだ？」

「なんでも無いわよ！」

一夏は分からず頭に？が浮かんでいる。

「幼馴染み？」

箒が怪訝そうな声で聞き返してきた。

「あー、えっとだな。箒が引っ越していったのが小四の終わりだったろ？鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちょっとぶりだな」

「で、こっちが箒。ほら、前に話したろ？小学校からの幼馴染みで、俺の通ってた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ。」

鈴はじろじろと箒を見る。箒は箒で負けじと鈴を見返していた。

「始めまして。これから宜しくね」

「ああ。こちらこそ」

そう言って、二人は挨拶を交わす。だが、鈴は直ぐに一夏に向きなおった。

「あのさぁ！あんたのＩＳの操縦、あたしが見てやってもいいん

だけど？たぶん、ていうか絶対、一組の奴らより強いから良いと思うんだけど。」

「なっ！！」

箒が反論しようとするが先に一夏が断ってしまった。

「ああ、いいよいいよ！俺の事はキラとユウイチが見てくれるって言うし！その方が俺自身いいと思うんだ！」

「その二人って、あんたの他にＩＳを動かせる男よね？」

鈴は視線を動かすとそこにはなにやら二人でジャンケンをしているユウイチとキラが映った。

「あんな二人より絶対に私の方が強いわよ！」

と一夏に視線を戻す。すると一夏は

「そりぁあり得ないな、たぶん、あの二人は学園最強だ！千冬姉も今は勝てるか分からないってさ！」

「あの千冬さんが？」

鈴がぷるぷると震えだす。

「まぁ、ユウイチはまだ、戦った事はないから未知数だけどな」

すると、鈴がふふんという顔になり席を立ってキラ達の座る席にむかった。

「何かご用ですの？」

セシリアが警戒体制ＭＡＸで鈴に声をかける。

だが、鈴はセシリアの事は無視してユウイチに声をかける

「ユウイチ！放課後、私と模擬戦しなさいよ。」

ユウイチはため息をついた。

「おいおい、まさかの呼び捨てかよ！まぁ、いいわ。分かったよ。受けてやるよ！だが、条件がある。」

「なによ？」

「お前の事は鈴と呼ばせて貰うぜ。」

「それくらい、良いわよ。」

「交渉成立だな。」

鈴は不敵な笑みをうかべて、

「場所は第２アリーナ！時間は５時から遅れないでよ！」

そう言って、鈴は一夏の所へと戻っていった。

「ちょっと、ユウイチさん！今の勝負受けて良かったんですの？」

すると、ラクスが

「大丈夫ですわ、セシリアさん。ユウイチもキラと同じくらいお強いですから。」

「おいおい、キラ程じゃねぇよ。」

「まぁ、ユウイチなら大丈夫でしょ？」

そうして、放課後まで時間があっという間に過ぎていった。

現れて、セカンド幼馴染み（後書き）

次回、鈴ＶＳユウイチ

鈴ＶＳユウイチ　（前書き）

風邪ひいてしまいました。

鈴ＶＳユウイチ

今、ユウイチは第２アリーナのど真ん中にいた。しかもＩＳを展開して。原因は同じくＩＳを展開している鈴だ。昼休みに決闘を申し込まれたのだ。

「なぁ、鈴よぉ、一ついいか？」

「何よ？」

「なんで、模擬戦をしようなんて言い出したんだ？」

鈴は不敵な笑みをしてこう言った。

「一夏からあんたとキラは学園最強だって聞いたのよ！でも、朝蹴り飛ばした時はそんなこと思わなかったわ。だから確かめるのよ。貴方と私のどちらが上かね！」

今度はキラの事を呼び捨てにしている。どうやら性格上、名字を呼ぶのはあんまり無いみたいだ。因みにこの第２アリーナにはかなりの観客が見にきている。その中には当然一夏達がいた。

「お！千冬姉も来たのか？珍しいな！」

バシィン！一夏の頭に出席簿がクリンヒットする。

「織斑先生と呼べ！なに、気になってな。」

「レイブン君が戦う所、興味ありますから。」

真弥が千冬の後ろからひょこっと出てきた。

話している内に試合開始の笛がなる。

「はぁぁぁぁ！」

鈴が先手をとって近接戦闘兵器、「双天牙月」を振るってきた。

だが、ユウイチはひらりとかわし、そのまま後ろにさがる。

「くっ！！待ちなさい！」

鈴は追いすがろうとするが、逆に引き離される。

「あのスピードは何なのよ？あの粒子の影響なの？」

今度は浮いている非固定浮遊部位がスライドしそこから「龍砲」を発射する。

「砲弾が見えない。だけど、今空間が揺れたな。・・・っ！なるほど、衝撃砲か。」

ユウイチは見えない砲弾をかわし、逃げの一手を貫く。

「なんで、ユウイチさんは逃げてばかりなんでしょう？」

セシリアが逃げてばかりのユウイチに疑問を抱いていた。

その疑問に千冬が答える。

「逃げてるんじゃない。間合いを計ってるんだ。」

そう言いながら千冬の中ではあるものが疼いていた。そう、かつてモンド・グロッソで戦っていた時の血が。

「ああ、もう！何で、逃げてばかりなのよ！ちゃんと戦いなさいよ！」

鈴はわめきながら今度は双天牙月で斬りかかる。だが、ストレイドの超スピードで引きはなされるだけだった。

「ユウイチ・・・そろそろ仕掛けるよ。」

「そうですわね。」

ラクスとキラの会話を聞いた千冬以外の全員がえっ！と声を上げた。

「今度はこちらから行かせてもらう！」

そう言って、ユウイチはいきなりの１８０度ターンを行い、両手のビームライフルを連射しそのままライフルを捨てて、その手に収束プラズマ砲バルバドスを召喚し掃射したのだ。

追い回す事に夢中になっていた鈴は全弾命中してしまう。

「くぅ～～！まさか、１８０度ターンをしてくるなんて！思いもしなかったわ。」「まだまだぁ！」

両翼からビームを連射したまま両肩のビームブーメランを投擲し、

エクスカリバーを抜いて全速力で突っ込んでいく。

「くっ！！」

ビームを避ける鈴は向かってくるブーメランは避けるが、戻ってきたブーメランは対応仕切れず直撃を受けてしまう。その為、行動が止まる。

「でいやぁぁぁ！」

ユウイチはイグニッションブーストで懐に潜り込むとエクスカリバーで突きを繰り出し、最後に左手のパルマフィオキーナでトドメをさす。

「きゃぁぁぁぁ！！」

鈴の悲鳴と共に甲龍のシールドエネルギーが９０から０になる。

「「甲龍、シールドエネルギーエンプティ、勝者、ユウイチ・Ｓ・レイブン」」

「すげぇ！ユウイチもキラと同じくらいすげぇよ」

「そうですね！レイブン君の最後の追い上げはその一言です。」

みんな、ユウイチの大逆転劇に歓談の息をもらす。

「なんで、二人共あんなに強いんだ？確か、ＩＳに乗り始めた時期って、俺と同じくらいのはずだったよなぁ？キラ？」

「え！そうだけど、気のせいじゃない？皆と同じくらいだよ！」

キラがたじろぐ。

「何を言う！キラとユウイチの強さは尋常じゃないぞ！」

「そうですわね・・・尋常どころではなく、もはや次元のレベルですわね。」

と、セシリアと箒

「その辺にしておけ！織斑、今回の模擬戦を学習して今度のクラス対抗戦に備えておけ。」

そう言って、千冬は真弥を連れて学園に戻って言ってしまった。

「セシリア！ラクス！僕達も寮に戻ろう！」

キラも二人を連れて寮にもどる。

「一夏！私たちも戻るぞ！」

「ああ！」

そう言って一夏は闘技場に目を向けるとそこには鈴が一人で立ち尽くしていた。

鈴ＶＳユウイチ　（後書き）

収束プラズマ砲バルバドス・・・イメージとしてはアグニを銀色にした感じです。

キラの特訓（前書き）

今回は短めで・・というか熱が下がりました。これでまた書ける。
？

キラの特訓

鈴とユウイチの戦いから数週間が過ぎて来週にはクラス対抗戦がはじまる。一夏はというと、キラにアリーナが使える最後の日に最後の特訓をうけていた。

「さて、一夏。アリーナはクラス対抗戦に備えて調整されるから今日が最後の特訓だよ。」

「おっおう！」

この第3アリーナにはキラと一夏の他にユウイチ、セシリア、ラクス、箒がいた。因みにラクスはイギリスのデュノア社製　ラファール・リヴァイブ　に乗り、箒は純国産ＩＳ　打鉄　に乗っている。さらに因みに言うとキラはラクスがＩＳに乗る事は最初は嫌がったがラクスと束に言いくるめられてしまっている。

「今回の特訓は僕とユウイチが弾幕を張るからそれを避け続けてね。」

「なにー！キラだけでもかなりキツイのに、その上、ユウイチも入るなんて死ぬって！」

「避けてね。」

「はい・・・・」

何故かキラは笑っているのにキラの回りだけ暗くなった気がした。

「じゃあ、始め！」

「ぐぎゃァァァァ」

一夏は悲鳴を上げながらキラとユウイチのハイマットフルバーストから逃げ回った。

数十分後

「ハァ、ハァ、ハァ、もう無理っ！」

一夏はボロボロになりながらアリーナの地面に倒れた。

「うん！なかなかだったぞ！なぁ？キラ」

「うん、最初の頃に比べたら被弾も少なくなったかな、」

そう二人は話してるが、今の一夏には息をするのが精一杯で何も聞いちゃいなかった。

「セシリアさん、これからターゲットを出しますのでそれを・・・」

セシリアはどうやらラクスに指導してもらっているようだ。

「では、準備はよろしいですか？」

「もちろんですわ。」

そう言った瞬間ターゲットが次々と現れる。しかもかなり速く動いている。

「くっ！なかなか早いですわね！」

最初のうちはターゲットの真ん中に当てていたが集中力が切れてきたのかだんだん外してきた。

「セシリアさん、集中力が下がって来てますわよ。」

さて、箒はと言うとユウイチと近接戦闘の模擬戦をしていた。

「なるほど、剣道をやってるから筋はいいな。」

「このっ！」

ユウイチは対艦刀を逆手にもって箒の斬撃を受け止めるとそのまま左手でビームライフルを至近距離で連射する。

「箒！攻撃を止められたら、後ろに下がれ！それじゃただの的だ。」

「うっ・・分かった。」

そんなこんなで特訓の時間は過ぎていった。

「みんな、お疲れさま！一夏、できるだけの事はした、後は一夏しだいだよ。」

「おう！分かった」

一夏は息を切らしながら答える。

「じゃあ、皆寮に戻っていいよ。」
キラがそう言うと箒と一夏はピットに戻って行った。

「ところで、お二人が乗っているＩＳって篠ノ之博士がお作りになられたんですわよね？」
ピットに戻る途中、唐突にセシリアが質問してきた。

「うん、そうだよ！」

「お二人のＩＳって第３世代なのですか？なんか、もっと高性能ですわよね。」

「それは・・・」

キラが答えようとした時、一夏達のいるピットから凄まじい音が聞こえてきた。

「なんだ？なんだ？」

「どうしたんですの？」

キラ達が駆けつけるとそこには一夏と箒と怒って去ろうとしてる鈴とへこんだ壁があった。
「一夏、これから大変だね。」

「そうですわねぇ」
四人共、同時にうなずくのであった。

キラの特訓（後書き）

次回はクラス対抗戦とアイツがでます。

クラス対抗戦と侵入者（前書き）

書き忘れましたがストレイドのカラーは白、黒、青です。因みに翼の色は白

クラス対抗戦と侵入者

クラス対抗戦当日、第一試合目は鈴と一夏である。噂の新入生の戦いだからかアリーナは全席満員だった。

「それでは両者、規定の位置まで移動してください」

アリーナにアナウンスが響いて二人は空中で向かい合う。

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ」

鈴がふふんと笑う。

「雀の涙ぐらいだろ！そんなのいらねぇよ！それに、この間のユウイチとの模擬戦見てたしな！大丈夫だ！全力でこい！」

鈴の左目がわずかに動いた、どうやら鈴はユウイチとの勝負に負けた事を引きずっているらしい。

「後で、泣いて謝ったって知らないんだから！」

一方その頃、キラ達は管制室にいた。

「織斑君は凰さんに勝てるんでしょうか？」

真弥の質問にキラが答える。

「一夏なら大丈夫だと思いますよ。あの見えない衝撃砲の対策として反射神経を鍛える特訓と一夏の接近戦主体の戦闘スタイルを助ける為にイグニッション・ブーストの習得訓練をしましたから。」

「この短期間の内にそんなことを?」

真弥が驚いて口をパクパクさせている。

「一夏さんはとてもお強い方ですわ、ですから大丈夫ですわ!山田先生。」

「そうでしょうか?」

「まぁ、色々と半人前の所はあるがな!」

千冬が笑いながらキラの煎れたコーヒーをすする。

「ん!このコーヒー、なかなかだな。」

「どうも!」

そんなことをしている内にアリーナでは試合開始の笛がなる。

二人は同時に突っ込んで自分の獲物を相手に叩きこむ。二人の武器の刃がぶつかり火花が散る。

「はぁ!」

「くぅ!」

一夏は苦労しながらも鈴を正面に捉える。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けどー」

一夏は一度距離を取ろうとして後ろに下がろうとする。

「甘い！！」

バカッと肩のアーマーが開き、一夏に衝撃が走る。

「くっ！龍砲だな！」

「今のはジャブだからね」

「ぐあ！」

一夏はアリーナの地面に叩きつけられる。

「くぅ！知ってはいたけど、やっぱり避けるのは難しいな。」

直ぐに二射目が飛んでくる。一夏はそれをなんとかかわしつつ考える。

「やっぱり、使うしかないか！あれを」

一夏は鈴の猛攻が止んだのを見計らい宣言する。

「鈴」

「何よ？」

「本気で行くからな」

「な、なによ！そんなこと当たり前じゃない」

鈴の甲龍はパワータイプ、正面からのガチンコ勝負では勝ち目は無い。だが、一夏もそんな事は分かっている。なら、あとはスピードで決めるしかない。

「はぁぁぁぁ」

一夏はトップスピードで甲龍の背後に回り込みそこからイグニッションブーストで一気に間合いを詰める。

「はっ！！」

鈴は不意を突かれ接近を許してしまう。

「いっけぇぇぇぇ！！！」

ズドォォォォン、一夏の雪片が甲龍に直撃する瞬間、何かの衝撃がアリーナに響く。

「なんだ？何が起こって？」

状況がわからず混乱する一夏の耳に鈴の声が響く。

「一夏！試合は中止よ！直ぐにピットに戻って！」

よく見ると観客席の防護シャッターが降りている。それだけ事態は深刻なのだ。

「なっなんだ？」

一夏のハイパーセンサーに侵入して来たのは正体不明のＩＳであり、しかもそのＩＳにロックされていると表示が出た。

「何？俺がアイツにロックされているのか？」

「一夏！早く！」

「お前はどうするんだよ！？」

「私が時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！」

「逃げるって女を置いてそんなこと出来るか！」

「馬鹿！あんたの方が弱いんだからしょうがないでしょうが！」

二人が言い争っている隙を突いて謎のＩＳがビームを放ってきた。

「おわ！あぶねぇ！」

「きゃあ！」

一夏は思わず鈴を抱き抱えてビームを避ける。

「はっ離しなさいよ！」

「イタタ、こらっ殴るな！」

一夏は鈴に殴られながらも正体不明のＩＳを見つめた。

「お前、一体何者だ?」

正体不明のＩＳは答えない。

「くそっ、やるしかないか!」

一方キラ達、管制室の方でも正体不明のＩＳの姿を確認した。

「おい、キラ!あれって・・」

「うん、そのようだね」

どうやらキラ達には見覚えがあるらしい。

「ヤマト!行ってくれるか?」

千冬がキラに尋ねる。

「はい!」

「ちょっと待ってくださいですわ!キラさんをお一人で行かせるのですか?」

キラの身を案じたセシリアが千冬に噛みつくがラクスに止められる。

「セシリアさん、キラを愛しているなら、キラを信じて待つべきですわ。」

「わかりましたわ・・・」

「大丈夫だよセシリア、僕を信じて待ってて、直ぐに帰ってくるから。」

「約束ですわよ。」

「うん、約束。」

セシリアはふとラクスをチラリと見る、するとそこには心配で一杯の顔をしているラクスだった。

「ラクスさん、わかりましたわ、一緒に待ちましょう。」

千冬がキラを見て、一言だけ言う。

「ヤマト、頼んだぞ」

「わかりました。」

そう言ってキラは管制室を出ていく。

「・・・・一夏」

見ると箒の顔も心配で彩られていた。

「山田先生、ちょっといいか?」

「あっ!はい。」

今まで黙っていたユウイチが真弥からマイクをとって交戦してい

る一夏に通信をする。

「一夏！聞こえてるか？」

「ああ！」

一夏はビームを避けながら応える。

「今、キラが向かった。それまで持ちこたえられるな？」

「ああ勿論だ！」

そう言って、一夏は通信を切る。

「鈴、いけるな？」

「誰に聞いてんのよ？」

鈴は双天牙月を構える。だが、先に敵ＩＳがビームを放ちながら向かって来た。

「くっ！」

「はぁ！」

鈴と一夏は敵ＩＳの攻撃をかわした後、雪片と龍砲で攻撃をする。だが、どれもかわされてしまった。

「くそ！」

鈴が龍砲で牽制をし、一夏が雪片で斬りかかる。だが、敵はフルスキンタイプにも関わらず意外にも素早く、攻撃を避けられてしまう。

「意外に速いわね！」

「くっ！」

敵ＩＳのビームの出力は高く、当たったら、絶対防御があるとしてもどうなるかわからない。

「なぁ、鈴。アイツなんか変じゃねぇか？」

突然一夏が聞いてきた。

「変ってなにが？」

「なんか、本当に人が乗ってんのかなって？」

「はぁ？あんた！あいつが無人機だとでも・・・」

鈴が途中でハッとする。

「そう言えばアイツ、私達が会話してる時ってあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いてるような。」

鈴は真剣な顔で考える。

「ううん、でも無人機なんてあり得ない。ＩＳは人が乗らないと絶対に動かない。そういうものだもの」

その事は一夏も知っている。

「もし仮に・・・」

次の瞬間、誰かの声が響き渡る。

「一夏ぁ！男なら・・・そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

箒だった。たぶん、スピーカーを使ったのだろう。かなりの大声だった。

「なぁ？あいつ、いつの間に？」

管制室にいるユウイチ達にも箒の大声は聞こえた。

「マズイです！敵ＩＳが篠ノ之さんの方に！」

確かにカメラで見ると敵ＩＳが箒の方に顔を向けた。一夏達も動く。だが、次の瞬間、空から無数のビームが敵ＩＳに降り注ぐ。当然、一夏達にもこの異変は直ぐにわかった。

「キラ！」

一夏が空を見るとストライクフリーダムを纏ってゆっくり降りてくるキラだった。その姿はまさしく大天使が降臨してきたような感じだ。

「やっと来たな。全く、出てくるタイミングでも見計らってたの

か？」

一夏が喜び混じりの愚痴をこぼすとキラは笑って答える。

「ゴメン！アリーナのシールドを破るのに時間が掛かっちゃって。」

「それが、キラのＩＳなの？」

見ると鈴が驚愕の顔をしながらキラを見つめていた。

「キラ、まかせられるか？」

「うん、大丈夫。一人で十分だよ」

すると、驚愕の顔をしていた鈴がキラにくってかかる。

「一人って、無理よ！私達二人でも手こずる相手よ！」

キラではなく一夏が答えた。

「大丈夫だ！前に言ったろ？キラは学園最強だ。」

「そうだけど・・・」

「ほら、俺達はピットに戻るぞ！ここにいたら邪魔になる。」

「分かったわよ」

鈴はしぶしぶ戻る事にした。

「全く、ユウイチもキラもどうなってるのよ？」

戻る途中に鈴がそんなことを言ったらしい。

「さて、ここからは僕が相手だよ。」

キラは敵ＩＳに向き直り、次の瞬間、腰のレールガンを発射する。

「はっ！」

敵ＩＳは避けようとはせず防御の構えをとるがレールガンの威力が高く、両手が弾かれて胸をさらす格好になってしまった。

「まだまだ！」

キラはイグニッションブーストを発動させる。そのスピードは並ではなく、敵ＩＳには瞬間移動したようにも見えた。そして、敵ＩＳの両腕を一瞬にして切り落としてしまう。

「まだだよ。」

キラはまたイグニッションブーストを使い、両足を斬りさき敵ＩＳを達磨状態にしてしまう。

「はぁぁ！」

敵ＩＳの頭を掴むと空中に放り投げ、落ちてきたところを腹部にあるカリドゥス複相ビーム砲で狙い撃つ。放たれた赤いビームは敵ＩＳの胸に吸い込まれるように直撃した。

「これでさすがに動かないよね？」

案の定、敵ＩＳは機能停止をしたようだ。

「ふう、一件落着かな」

その日の夜、キラとラクスとユウイチは千冬に学園の地下室に呼び出されていた。

「お前達、三人はこいつをしっているのか？」

キラが答える。

「はい、以前、設計図を見たことがあります。」

「わたくしも」

「俺も」

千冬は頭を抱えながら、こう質問する。

「という事は、コイツを送り込んだのは束か？」

「そういう事になりますね」

千冬は更に頭を抱えこんだ。

「あいつは一体何を考えてるんだ？まったく！でっ、コイツの名前は？」

「たしか、ゴーレム？の筈です。」

「ということは、？と？がいる訳か！」

「そういう事になりますね。」

千冬はうんざりという顔になる。

「もういい、三人は寮に戻って休め！ご苦労だった。それとこの事は他言無用にな。」

「わかりました。」

三人はエレベーターに乗り地上に戻る。千冬は一人、ゴーレムを見つめる。

「何を考えている？束。」

その独り言は暗闇に吸い込まれていった。

キラ達三人は寮にもどるとそれぞれの部屋に戻っていった。

「キラ、本当にわたくしが先にシャワーに入ってよろしいんですの？」

「うん！僕は大丈夫だよ！それに束さんに連絡しなきゃいけないしね。」

「では、お先に失礼します。」

ラクスがシャワー室に入ったのを確認するとキラはこの世界に来てから買ったケータイを取り出す。

ぷるる、ぷるるる

「もすもす、ひねもす～」

訳のわからない返しが返ってきた。

「やぁやぁ！キッ君、どうしたんだい？」

「今日、ゴーレム？を送り込みましたね？」

「うん、そうだよ！」

あまりにも素っ気ない返事が返ってきた。

「どうして、そんな事を？」

「どうしてって、いっくんの為なんだよぉ」

「一夏の？」

「うん、確かにいっくんはキッ君に今は守られてるけど、完全じゃないよね？」

確かにそうだ、いくらキラでも四六時中一緒にいる訳ではない。

「だから、いっくん自体に強くなってほしかったんだよ！」

「そういう事でしたか。今度からは何か連絡してくださいね。それに、一夏の事は僕も手を尽くしますから。」

「わかったよ。今回の事はあやまるよぉ！だから、誰かが手を出してきたら・・・」

「わかってます。」

「ほいじゃ！そろそろ切るよ！紅椿の調整しなきゃ！」

ぶつっと切れた。

「ふぅ。」

キラはベッドに身を投げると自分でも驚く程に早く、眠りが訪れ、キラは瞼を閉じる。ラクスのシャワーの音をしっかりと聞きながら。

クラス対抗戦と侵入者（後書き）

次回、シャルロット登場！

現れたのはブロンド貴公子と銀髪の兎（前書き）

シャルルとラウラ登場！更に今回はユウイチ目線でお送りします。

現れたのはブロンド貴公子と銀髪の兎

「今日は、転校生を紹介します。」

副担の山田先生がいきなりの爆弾を投下した。

「え・・・・・」

「えええええええ」

当然クラスは騒がしくなる

「失礼します。」

そう言って入って来たのはなんと男だった。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします。」

なんとも決まった挨拶だ。どうもこのシャルルという男はユウイチやキラ、一夏とは違うタイプのようだ。当然クラスの女子が騒ぐに決まっている。

「・・・・男？」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方々がいると聞いて本国より転入をー」　印象は、誇張じゃなく「貴公子」といった感じで、特に嫌味のない笑顔が眩しい。

「きゃ・・・・」

「はい？」

「きぁあああああーー！」

おお！教室が揺れた。

「男子！四人目の男子！」

「しかもうちのクラス」

「三人とは違う、守ってあげたくなる系！」

「地球に生まれて良かった～」

ユウイチは黄色の声援の中、ある事を思い出していた。

「はは～ん！箒と一夏が部屋を変えられたのって、コイツが来たからか！」

そう、この前、ユウイチは一夏と同室だった箒が部屋を出ていくところを目撃したのである。

「あー、騒ぐな。静かにしろ！」

千冬がめんどくさそうに一喝する。

「み、みなさんお静かに自己紹介はまだ終わってませんから。」

どうやらもう一人、いるようである。

見ると今度は女性、綺麗な銀髪が目立つ。そして、ユウイチは一瞬にして感じ取る。いや、たぶん、ラクスやキラも分かった筈である。この娘は軍人であると。

「・・・・」

だんまり

「…挨拶をしろ！ラウラ」

「はい、教官！」

ユウイチは以前、束から千冬は一年ほどドイツで教官をしていたと聞いていた。

「ああ、なるほど！それでか！てことはあの子はドイツの軍人か。」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました。」

するとラウラはぴっと背筋を伸ばして、

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「・・・・」

クラスメイトの沈黙、みんなそれだけ？っていう感じだ。

「あっ、あの以上ですか？」

「以上だ。」

自己紹介が終わったと思っていたら一夏の方へ向かっていった。

「なんだ？」

ユウイチが思った瞬間、なんとラウラが一夏をひっぱたいたのだ。

「なっ！」

一夏を含め、クラス全員がフリーズしてしまった。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

一夏もどうして、叩かれたのか分からないようすである。

「なにしやがる！」

「ふん・・・・」

一夏の事は無視して空いてる席に向かって歩きだした。

「一夏、あいつ今日は運勢悪いのかな」

「あー…ゴホンゴホン！ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替え

て第2グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散」

「あーヤマト、レイブン、織斑、デュノア！前に来い。」

お呼びがかかった四人が前にでる。

「三人でデュノアの面倒をみてやれ。同じ男子だろう」

「「「はい」」」

千冬はさっさと教室を出ていってしまった。

「君達が織斑くんにヤマト君とレイブン君？僕は」

「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

一夏がシャルルの手を引いて教室をでる。キラとユウイチも後に続く。

「取りあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

さすが一夏、面倒見がいい。

「う、うん・・・・」

なんか落ち着かない様子である。

「どうした？トイレか？」

気になったユウイチが聞いてみた。

「トイ・・違うよ」

違うらしい。

「そろそろ来るよ。」

キラが真剣な顔つきになる

「ああっ転校生発見！」

「しかも、ヤマト君と織斑君とレイブン君と一緒だ！」

案の定、女子生徒が波のように押し寄せてきたのだ。

「こっち！」

キラが横の通路に入る。

「逃がすな！」

「者共！であえ！であえ！」

女子が増援を要求する。だか、シャルルと一夏はともかく、ユウイチとキラはコーディネイターである。普通の女子が追いつける訳もない。

「はひ、はひ、ユウイチとキラって、本当に足速いよなぁ」

無事に更衣室についたが一夏とシャルルは息を切らしている。当

然、キラとユウイチは平然としている。

「わぁ、時間がやべぇ！早く着替えちまおう！」

「おう！」

「うん！」

三人はいきなり上を脱ぎ始めた。

「わぁ！」

シャルルが変な声を上げる。

「どした？」

「いや、なんでもないよ。ちょっとあっち向いてて。」

「？」

なんか怪しい。限り無く怪しい。

「これ、着るときに裸っていうのがなんか着づらいんだよなぁ。引っかかって」

「そうそう、引っかかって！」

一夏が自分のＩＳスーツに愚痴るので、ユウイチも合わせてみた。

「ひ、引っかかって？」

「どうしたの？シャルル？」
何故か赤くなっているシャルルをキラが不思議そうに見た
「いや、別に・・・・・」
「ていうか、お前、もう着替えたのか？早いな！」
よく見るとさっきまで学生服だったのにもうＩＳスーツに着替えている。
「それに、着やすそうだな！それ。」
「デュノア社のオリジナルだからね」
ん！シャルルの名字も確か。
「うん。僕の家だよ。父がね、社長をしてるんだ。」
「誰に向かって喋ってるの？シャルル？」
誰もいない方に喋っているシャルルにキラが質問した。
「え？なんでもないよ」
「やべっそろそろ行かないとマズイ！」
時計をみた一夏が焦りだす。
グラウンドにつくと千冬が仁王立ちでたっていた。
「ギリギリで到着とはな、次回からはもっと早くしろ。」

今回は出席簿のラッシュは大丈夫だった。ふと回りを見ると二組との合同の為か、人数が多い。

「では、本日から格闘及び射撃訓練実戦を開始する。」

「はい！」

返事に気合いが入っている。

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。ー一凰！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで！？」

二人がブツブツと言いながら前にでる。

「お前等、少しはやる気を出せ！あの二人に良いところを見せられるぞ！」

千冬が二人の耳元でなにかをささやく、次の瞬間二人の目がキラリンと輝く。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まぁ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

二人ともやる気が出たようだ。

「二人の相手をするのはー」

千冬がそこまで言うと何やら空からキーンという音が聞こえてきた。

「ん？げっ！」

上を見ると真弥がＩＳに乗りながら回転して落ちてくる。

「ユウイチ！」

「あいよ！！」

ユウイチとキラはアイコンタクトをするとフリーダムとストレイドを展開しＶＰＳをオンにして一気に飛び立つ。

「よっと！」

「キャア！」

二人は空中で真弥の腕を掴み空中で静止させて止めた。

「大丈夫ですか？」

「はい！」

じゃあ、授業再開だ。

「さて、お前達二人の相手は山田先生だ。」

「えっ？」

「2対1で？」

「さすがにそれはちょっと」
千冬は不敵な笑みをこぼす。

「大丈夫だ！今のお前等ならすぐ負ける。」

言われた瞬間二人はムッとした顔になる。

「ではっ始め！」

千冬が号令をかけると三人は空中に踊り出る。

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

「い、行きます！」

「ねぇ、キラ！確か、山田先生は元代表候補生ではなくて？」

「うん、確かそうだって聞いたことが。」

あの二人は大丈夫なんだろうか？

「さて、今の間に・・・そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているＩＳの解説をしてみせろ」

そう言われてシャルルは上を見ながら解説をはじめた。

「山田先生の使用されているＩＳはデュノア社製「ラファール・リヴァイヴ」です。第2世代開発最後期の機体ですが、そのスペックは初期第3世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ＩＳの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七ヶ国でライセンス生産、十二ヶ国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替えを両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で参加サードパーティーが多いことでも知られています」

「ああ、いったんそこまででいい。・・・終わるぞ」

千冬がそう言うとクラス全員が空を見る。見るとちょうど爆発がおき、中からセシリアと鈴が絡まって落ちて地面に激突した。

「くっ、うう・・・まさかこのわたくしが・・・」

「あ、あんたねぇ・・・何、面白いように回避先読まれてんのよ」

「鈴さんこそ！無駄にバカスカと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！なんですぐにビットを出すのよ！しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐっ・・・・！」

「ぎぎぎぎっ・・・・！」

絡みあって文句を言い合う二人、なんか、かわいいな。

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

千冬が手をパンパンと手を叩く

「専用機持ちは織斑、オルコット、ヤマト、レイブン、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな！では八人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちをやること。いいな？では、分かれろ」

こうしてこの後は何事も無く授業は終了する。そして、そのクラスへの帰り道。

「織斑君、ヤマト君、レイブン君ちょっと待って！」

三人はシャルルに呼び止められる。

「デュノア～俺達の事は名前でいいぜ！なぁ？」

「うん。」

「ああ！」

「じゃあ、僕もシャルルでいいよ！ところで一夏達は放課後に特訓してるんだって？」

特訓の事を聞いてきたので答える。

「まぁ、俺がキラ達に特訓してもらってるんだけどな！」

「一夏は弱いからなぁ」

「ユウイチ、はっきり言っちゃダメだよ！」

「二人が強すぎるんだよ！！」

一夏が涙目になりながら反論する。

「でっ！その特訓がどうしたって？」

「いや、実は僕も入れて欲しいんだけど駄目かな？」

「そんなわけないだろ！なぁ、二人共？」

「うん、賑やかな方が楽しいしね！」

「そうだな！」

すると一夏が二人に聞こえないようにシャルルに言う。

「でも、この二人の特訓てかなりキツイから覚悟しといた方がいいぜ！」

だが、キラ達二人にはバッチリ聞こえていた。

「一夏！特訓、倍ね！」

「そっ、そんなぁ～」

どっと笑いがおきる。だけど、この時ユウイチは笑っていたが実はシャルルに違和感を感じていた。

現れたのはブロンド貴公子と銀髪の兎（後書き）

そろそろ、ラクスの専用機の名前を決めたいんですが、何か提案があるという方は感想の方にメールをしてください。お願いします。

貴公子の正体（前書き）

そろそろ〇〇を入れようかな。

貴公子の正体

シャルルとラウラが転校して来たその日の放課後の事、夕焼けに染まる学園の敷地を珍しくユウイチとラクスが二人で歩いていた。

「なぁ、ラクス。あのシャルルっていう男、なんか違和感を感じるんだよなぁ」

ユウイチがコーラを飲みながらラクスに聞く。

「というと？」

「なんか、本当に男なのかなって？」

ラクスがビックリしたように言う。

「あらあら、気づかなかったのですか？あの方は女性でしてよ！」

ユウイチは一瞬だけ驚くが、直ぐに納得した顔になる。

「なるほど、違和感の正体はそれか！」

ラクスは真剣な顔つきになり考え込む。

「なぜ、そのような事をしてＩＳ学園にきたのでしょうか？」

するとユウイチはニカッと笑う。

「それはキラに聞くしかないな。」

「キラに？」

ラクスは分からず頭に？を浮かべる。

そして、キラとラクスの部屋の前に辿り着く。すると、中からセシリアが出てきた。

「あら、ユウイチさんとラクスさん、一夏さんの特訓にご参加してませんでしたけど、どうかしましたの？」

「いや、ちょっと用事があってな！」

「用事ですか？まぁ、いいですわ！わたくしはこれで、失礼しますわね。」

セシリアはお辞儀をしたあと去っていく。さすがは英国淑女だ。

「ユウイチにラクス！おそかったね！」

中からキラの声がする。

「いえ、ちょっと用事がありまして、」

ラクスがベットに座る。

「実はお前に頼み事があるんだ。」

ユウイチは床に座りながらキラに話しかける。

「頼み事？」

すると、ラクスが妙な顔つきになってキラに真実を告げる。
「実は、シャルルさんは女性の方のようなのですわ！」
キラはビックリしてすっとんきょうな声を上げてしまった。
「ええっーーーー！シャルルは女？えっ！ちょっと待って！？でも、なんで男と偽るの？」
ユウイチが口を開く。
「だから、お前の十八番のハッキングでフランスのデュノア社のメインコンピューターに入りこんで欲しいんだよ！」
キラは信じられないという顔でパソコンを起動する。
「ていうか、シャルルが女だって、よく気づいたね！二人共！」
「わたくしは最初から気づいておりましたけど、ユウイチは違和感を感じておられたようですの！」
余談だが、ラクスはコズミックイラの時はユウイチの事はさん付けで呼んでいたがこの世界に来てからは、さんを付けないで呼んでいる。
「さすが、ラクスだな！」
ユウイチがラクスを賞賛している内にキラはデュノア社のメインコンピューターに入り込んでいた。
「あれ？シャルル・デュノアって検索したけど出ないな。」
キラが不思議そうにしているとラクスが提案してきた。

「名前が間違っているのですわ、シャルルさんが女性なら名前はたぶん、シャルロットですわね。」

「あ～、出た出た！え～と、何々？名前はシャルロット・デュノア。年齢は１５才。専用ＩＳはラファール・リヴァイヴ・カスタム？か！」

次々とシャルルの個人情報が出てくる。

「へぇ～、シャルルは社長の本妻の子じゃないんだ。」

まぁ、不思議でも無い。デュノア社ほどの会社の社長だ。愛人の一人や二人ぐらい、いるであろう。

「母親が死んで、引き取られたらしいね」

その後、いろいろ調べたが理由までは行きつかなかった。

「う～ん、理由まではわからなかったね」

「しょうがないですわねぇ～」

すると、ユウイチが立ち上がる。

「しょうがない、本人に聞くしかないな。」

そう言って、ユウイチは一夏とシャルルの部屋に向かった。

「なぁ！シャルルはいるか？」

一夏達の部屋に入ると、ちょうど、一夏とシャルルがいた。どうやら、お茶を飲んでいたようだ。

「おう！ユウイチ！シャルルになんか用か？」

「いや、ちょっとな、一緒にキラの部屋まで来てくれないか？」

「うん、いいよ！」

そう言って、こっちに来るシャルル。

「じゃあ、少し借りるぜぇ～！」

そう言って、一夏を残して部屋を出る二人。

「一体、なんの用かな？」

キラの部屋に入るとキラとラクスが椅子に座っていた。

「なんで、キラとクラインさんが同じ部屋なの？」

「それは、同じ部屋だからねぇ」

「そうですわねぇ」

シャルルがえええっと驚くが無視。ユウイチはというと、何故か部屋の鍵を閉めてしまった。

「えっ！なんで、鍵を閉めるの？」

シャルルが震えだす。

「さて、理由を聞かせて貰おうか。」

ユウイチの瞳には明確な敵意があった。

「り、理由って？」

シャルルは訳が分からないようすで答える。

「なぜ、貴女が男装しているのかっていう事ですわ。」

それを聞いたシャルルは飛び上がる様に反応する。

「気付いてたの？」

「見れば分かりますわ。その物腰、雰囲気、足の内股加減、声の高さ、そうそうに隠せるものではありませんわ。」

さすがラクス。伊達に議長をやっていた訳ではない。

「なんで、男を偽ってＩＳ学園に来たの？」

キラが質問する。

「それは・・・言えない。」

「言わない気か？」

ユウイチは壁に寄りかかりながら言う。

「なら、学園上層部に報告するけどいいのか？」

「分かったよ言うよ。」

シャルル、いや、シャルロットは重い口を開いた。

「父にね・・そうしろって言われたんだ。」

「デュノア社の社長に？」

キラが聞く。

「うん、もう知ってると思うけど僕は本妻の子じゃないんだ。」

シャルロットは何か嫌な物を思い出す様に言葉を続ける。

「引き取られたのは二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやって来たの。それで、色々と検査をする過程でＩＳ適応が高い事がわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

全員が黙って聞いていた。

「父にはあったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活をしているんだけど、一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時はひどかったなぁ。本妻の人に殴られたよ。「泥棒猫の娘が！」ってね。参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれたら、あん

なに戸惑わなかったのにね」

シャルロットは悲しそうな声で言う。

「それから少し経って、デュノア社は経済危機に陥ったんだ。」

「ああ、もういい！後は、わかるよ」

ユウイチは苦虫を百匹ぐらい噛み潰した様な顔になる。

「シャルロットの話しを続けると、ＩＳ開発は第３世代が主流で、デュノア社にはデータも予算も不足していて、それが原因で予算を大幅にカットされたんだろ？」

「そう！しかも、次のトライアルで選ばれなかったらＩＳ開発許可を剥奪されるっていう流れになったんだ。」

今度はキラが口を開く。

「シャルロットが男装をして、このＩＳ学園に来たのは宣伝を浴びる広告塔と男なら僕達三人に接触しやすく可能なら使用機体と本人のデータをとるっていう事か。」

「うん、そういう事、今まで騙しててごめんなさい。」

ラクスが柔らかい笑顔でシャルロットを見る。

「それは別にいいですわ。それで、アナタはどうなさるおつもりですか？」

「バレちゃったんだし、国に強制送還かな。」

「そうでは無くてアナタ自身はどうしたいんですの？」

「僕、僕は出来れば残りたいけど、残ったら皆に迷惑がかかるしね。」

すると、キラがシャルロットの肩を掴む

「大丈夫、キミはここにいて大丈夫だよ。」

「でも・・・皆に迷惑がかかるよ」

「一夏達なら分かってくれるよ。それに、もし、デュノア社の人達がキミに手を出そうとしたら僕達が守るよ。」

更にキラはシャルロットを抱きしめながら優しく語りかける。

「キミは僕が守る。」

次の瞬間、シャルロットの顔は真っ赤になる。

「だから、考えておいてね。」

「うん、ありがとう。キラって優しいね。」

今度はユウイチがシャルロットの耳元で何かを言う。

「ええ～～！それは・・・・」

シャルロットはゆでダコになってしまった。

「まぁ、考えて置いてくれ。」

ラクスは検討がついたのか苦笑する。

「あらあら。大変そうですわね。」

「そんじゃまぁ、シャルロット、改めてよろしく！」

ユウイチが手を差しのべた。

「うん、よろしくユウイチ！」

「改めてよろしく！シャルロット」

「よろしく！キラ！」

「よろしくですわ！シャルロットさん！」

「よろしく！クラインさん。」

「わたくしの事はラクスとお呼びください。」

「うん、よろしく。ラクス！」

四人はしっかりと握手を交わす。この瞬間、キラ達にまた一人、シャルロットという仲間が加わった。

貴公子の正体（後書き）

次回、ラウラの宣戦布告

ドイツの銀髪の兎（前書き）

キラもすごいですねぇ！

シャルロット達が転校してきて5日目の午後、キラ達はアリーナで特訓をしていた。

「つまり、一夏が勝てないのは射撃武器の特性を理解してないからなんだ。」

「わかっちゃいるつもりなんだが。」

キラに戦闘レクチャーをうける一夏。

「それは知識としてでしょ？」

「それに、一夏は射撃武器を持ってないからいつも、一直線に突っ込んで行くから迎撃されるんだよ。」

「う～ん、直線的か～！」

「まぁ、説明を聞くより自分の目で確かめた方がいいかもね。」

キラは自分の高エネルギービームライフルの片割れを一夏に差し出す。

「あれ？他人の武器って、使えるのか？」

「使用者がアンロックすれば登録者全員が使えるんだよ。」

「へぇ～」

一夏が感心したようにうなずく。

「あと、ビームライフルを撃った後は、ラクスからアサルトライフルを借りて撃ってみてね。」

「わかった。」

キラが遠くにいるラクスを呼び寄せる。

「なんでしょうか？」

「一夏にラファールリヴァイヴのアサルトライフルを貸してあげて。」

「分かりましたわ。」

一方、ユウイチはセシリア、鈴、箒、シャルロットの四人を一人で相手をしていた。

「こら！セシリア！射撃に牽制を入れろ！そんな真っ直ぐな射撃なんてすぐにかわされるぞ！」

「わっ・・分かりましたわ・・・」

四人の猛攻を防ぎながら的確に指示を出すユウイチ。

「鈴も！あまりドカドカ撃ちすぎるな！箒が接近できないだろ！」

「わっ・・分かったわよ。」

「箒！もっと肩の力を抜け！力みすぎて隙が出来てる！」

「なっ・・なんだと！」

シャルロットはユウイチの強さに驚愕していた。

「ユウイチの強さ半端じゃないよ。織斑先生と同じくらいのレベルだ！いや、もっとかも。キラなんてユウイチ以上に強いって聞いたけどとんでもないよ！」

「うん！シャルロットは問題ないな。だが、考え事をしてると危ないぞ！」

シャルロットが気づいた時には既に遅くユウイチは左手から衝撃砲、ガントレットを発射し、
その砲弾が直撃。アリーナの端まで弾き飛ばされてしまった。

「ユウイチ、すげぇな～」

それを見ていた一夏が思わず声をあげる。

「はいはい、一夏は自分の事に集中！」

「おっおう！」

一夏はビームライフルを構え、空中に現れる的に狙いを定める。

バシュン

独特な銃声がして緑色のビームが的に当たりスコアを出していく。

「次は実弾の試し撃ちですわね！」

そう言って、ラクスはアサルトライフルを一夏に差し出す。

一夏はビームライフルをキラに返しアサルトライフルを受け取る。

「おっしゃっ、行くぜ。」

ビームライフルと同じ様にアサルトライフルを構え、狙いを定める。

ドゴォォン

実弾系の銃声と薬莢が落ちる音を響かせながら次々と的に当ててスコアをだす。

「うん、初めてにしてはなかなかじゃない。」

一夏はアサルトライフルを見つめる。

「う～ん、なんか速いっていうのが感想かな。」

「そうだね。銃というのは遠くのターゲットを一瞬にして撃ち抜くというのがコンセプトだから当たり前だね。実弾は弾の質、気温、風向き、湿度、地形に左右されやすいんだ。それに比べてビームは弾の質は関係ないし風向きにも左右されないんだ。」

「へぇ～！」

一夏は感心したように聞く

「でも、撃たれるほうは実弾よりもビームの方が脅威なんだ。ビームは光と同じで、一瞬で届く。だから、常に銃口を見てないと、避けるのは難しいかもね。」

「なるほど、」

レクチャーを聞いている、一夏の後ろで爆音が響く。ちょうどユウイチ達も終わったようだ。

「くぅ～、まさか四人がかりでも勝てないとは！」

「あり得ないですわ！」

「強すぎるよ！」

「専用機があればっ」

四人ともブツブツいいながら一夏達の所へと歩いていく。

「まぁ、四人共これからも頑張るんだね。」

空からユウイチが降りてきた。

「ねぇ、あれ！」

観客席で見学していた女子達が騒がしくなる。

キラ達が上をみるとちょうどカタパルトの出口の上に一機の黒いＩＳが乗っていた。

「あれ、ドイツの第3世代じゃない？」

それを聞いたキラがそのＩＳの名前を口に出す。

「シュヴァルツェア・レーゲン」

次いで、セシリアがその操縦者の名前を言う。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ。」

「何？あいつなの？一夏をひっぱたいたっていうドイツの代表候補生って。」

鈴がわめくように言う。

「おい」

ＩＳのオープン・チャネルでラウラの声が響く。

「なんだよ？」

一夏はぶっきらぼうに答える。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねぇよ」

「貴様になくても私にはある」

するとラウラは憎々しげに言葉を続ける。

「貴様がいなければ教官が大会２連覇の偉業をなしえただろうこ

とは容易に想像できる。だから、私は貴様を、貴様の存在を認めない」

だが、一夏はプイッとそっぽを向く。

「また今度な」

「ふん。ならば一戦わざるを得ないようにしてやる！」

なんとラウラはＩＳを戦闘状態にして右肩のレールカノンを発射したのだ。

「くっ！！」

ＩＳを展開していたキラは右手のビームライフルで音速で飛来いする弾を撃ち落とす。

「まさか、いきなり撃ってくるなんてドイツの人は意外に熱いだね。」

ビームライフルの銃口をラウラに向けるキラ。

「キラ・ヤマト！教官に最強と言われている男、貴様も私と戦っ・・・！」

言い終わる前にラウラの回りにゲイツのアンカーに似た白いドラグーンが八基配置される。

「おいおい、俺の事を忘れてないか？」

ユウイチがウィスプ・ドラグーンを配置したのだ。

「おい！そこの生徒！何をしている。」

騒ぎに気づいた教師がスピーカーで怒鳴る。

「ふん、今日は引いてやる。」

ラウラはそう言うとＩＳを解除して、さっさと姿を消す。

「僕達も戻ろうか。」

キラ達もＩＳを解除して寮に戻ろうとする。

「ねぇ！キラさん」

その帰り道、みんなで帰っている時にセシリアが聞いてきた。

「なに？セシリア？」

「前にもお聞きしたのですがユウイチさんとキラさんのＩＳって本当に第３世代なのですか？」

鈴も食いついてきた。

「そうよね？なんか、かなり高性能じゃない？」

すると、ラクスが笑いがら答える。

「皆さん、ストライクフリーダムとストレイドは第６世代なのですわよ」

「第６世代！！」

みんな一様に驚く、そりゃそうだ。今、世界は第3世代の開発に躍起になっているのに3つ上の第6世代が現れたのだ。

「第6世代の特徴はビーム兵器、ＶＰＳ装甲にヴォアチュールリュミエールとあとはネクスト粒子にストレイドのデバイスドライバかな。」

「そのＶＰＳってあの色が変わるヤツか？」

一夏が聞いてきた。

「そうそう。ＶＰＳを展開すると実弾、実剣類が効かなくなるんだ。」

みんな、エッ！という顔になる。そりゃそうだ。ＶＰＳを展開すると鈴の装備は殆ど効かなくなるということだ。

「それって、第2世代の武装は殆ど効かなくなるじゃない。」

「まぁ、そうだね。でも一番の第6世代の決め手としてはネクスト粒子だね。あれが無かったら第5世代だね。」

「前から気になってたけど、ネクスト粒子って何なのよ。」

鈴が質問をする。

「簡単に言うと束さんが作った新しい粒子でＩＳに使うと凄い事になるんだ。軽く説明すると、まずスピード。まぁフリーダムとストレイドを見れば分かるよね。次は量子化コピーかな。ネクスト粒子は複製する機能があってコピーを作る事が出来るんだ。他にも色々あるけど今は説明できない。」

まったく、ＩＦ社も凄いのを作る。

「なんかすげぇ機体だな。」

驚いている一夏にユウイチが更に驚かせる。

「あと、フリーダムとストレイドにはもう一つビックリする事があるんだぜ。」

「まだあるのかよ！」

「実はあの二機には核融合炉・・・つまり核エンジンが搭載されてるんだ。」

「えええええええー」

みんなの叫びが木霊する。

「かっ・・核！じゃあ、あの二機は核で動いてるのか？」

「まぁそうだな。核のエネルギー、ネクスト粒子のエネルギー、ヴォワチュールの光の膜に受ける太陽光によるエネルギーで動いてるって事だ。」

「すっ、凄すぎる。」

皆が青ざめる中、ラクスが一夏にあることを告げる。

「一夏さんの白式、あれは第４世代ですわよ。」

「えっ？」

「正確には第４世代の武器を第３世代に搭載したという感じですけど。」

そう言われて自分の腕に待機状態で付いている白式を見る。

「白式って、そうだったのか！」

気がつくともう寮の目の前だった。

「じゃあ、みんな今日はこれで」

全員、それぞれの部屋に向かう。

「今日は色々と大変だったな。」

ユウイチは部屋につくなりイスに座って、パソコンを起動する。調べる事は一つ、ラウラだ。ドイツのメインサーバに瞬時に入り込む。

「ラウラさんの事ですか？」

ラクスがちょうど紅茶を持ってきた。

「うん！何々？ラウラ・ヴォーデヴィッヒ、年齢１５才、使用ＩＳはシュヴァルツェア・レーゲン。特集武装ＡＩＣ　これは対象者の動きを止める事ができるんだね。」

「ですが、これは意識を集中させないと使えないみたいですわ。」

この機体にとってフリーダム、ストレイド、ブルーティアーズは脅威になる。

「遺伝子強化試験体Ｃ－００３７？」

調べていく内にこの単語を見つける。

「疑似ハイパーセンサーの肉眼へのナノマシン移植手術。」

調べていく内に人体実験とおぼしき単語が出てくる。さらに進めていく内にキラに衝撃が走る。

「人工合成の遺伝子より誕生、人工子宮での発育。」

「キラ・・」

そう・・キラもスーパーコーディネーターの為、人工子宮から生み出された存在なのだ。

「どの世界も同じだね！人にこんなことをするなんて、」

ラクスはキラをそっと抱きしめる。

二人だけの世界が数分続いた時、ドアが何者かにノックされた。

「どなたですの？」

ラクスがドアを開けるとそこにはユウイチがいた。

「今、束から電話があってな！」

「束さんから？」

「どんな用でしたの？」

するとユウイチは深刻そうな顔になる。

「イギリスの第３世代、つまり、ブルーティアーズの妹機　「サイレント・ゼフィルス」が何者かによって強奪されたらしい。」

「犯人はわかったの？」

ユウイチは更に深刻そうな顔になる。

「それが、監視カメラの映像を束が入手したんだけど、これがそうだ。」

ユウイチが監視カメラの映像を見せてきた。強奪直前の映像だろう。サイレント・ゼフィルスの前に一人の人影が見える。その人影の顔が見えた時、二人は絶句する。

「こっこれは・・・」

「織斑先生？」

そこにはキラ達の知る織斑千冬よりは若いが確かに織斑千冬の顔が写っていた。

ドイツの銀髪の兎（後書き）

次回はキラ達じゃなく敵側のお話です。

動き始める力（前書き）

今日も暑いですね。

動き始める力

ここは、ロシアのある軍事基地。今はまだ朝日が昇ってない時刻。今、この基地の所々から黒煙をあげている。つまり、襲撃を受けているのだ。

「迎撃～！」

隊長らしき男が指示をだすが、次の瞬間にはその男も吹き飛ばされる。

「くそ！あのＩＳは一体なんだ？」

今から２０分前、正体不明のＩＳがこの基地を襲撃したのだ。

「なんとしてもあのＩＳを止めろ！」

ＩＳ部隊のＩＳが次々と正体不明機に突っ込んでいくが辿り着く前にその圧倒的な火力の前に撃ち落とされていく。ＩＳは絶対防御がありパイロットの安全は保証されるが今回襲撃しているＩＳは脱出したパイロットも消し炭に変えていった。

「くそ！脱出したパイロットにも容赦しないとはなんて奴だ！」

「隊長！！」

生き残っているＩＳの女性パイロット達が隊長の元へと集結する。

「生き残った者を連れて脱出しろ！あのＩＳの気は私が引き付け

る。」

「できません！」

「これは命令だ！」

否定した隊員も女性隊長の一言で押し黙る。

「大丈夫だ！私は死なん！」

「隊長！約束してください。生きて、また私達と戦ってくれると」

「早く行け！」

隊員達は敬礼をして森の方向へ撤退した。

「さて、私が相手だ！」

彼女は日本のファンという事もあり、機体は打鉄だ。

「はぁぁぁぁ！！」

近接ブレードを振りかざし正体不明機に斬りかかっていく。

正体不明機は素早く反応し、後ろから肩の前にマウントされたビーム砲を連射する。

「ぐっ！！」

女性隊長はイグニッションブーストで一気に近づき袈裟斬りで斬りかかった。

「はぁーーーー！！！」

上から下にブレードを振るがその刃は虚しく空を斬る。

「そっ！そんな！」

ガチャっと音がして横を見ると、こちらにビームバズーカを向ける正体不明機が写った。

「ここまでか！」

次の瞬間、彼女の視界は真っ暗になった。

襲撃を受けた基地から数キロ離れた森の中、そこには緑色の髪をした少年が立っていた。その少年の前に正体不明機が降り立つ。

「流石だね。」

少年が言うとフルスキンタイプの正体不明機の頭がパカッと開く。
因みにこの正体不明機はガンダムタイプだ

「たくっ！どいつもこいつも雑魚ばかりだぜ！！」

中から現れたのは金髪のオールバックの青年だった。

「キミの活躍には感謝してるよ！」

青年は端整な顔を下品に歪める。

「うっせーよ！次はどこだ？」

「そんな慌てないでおくれよ。次の標敵はこれだよ！」

少年は青年に画像を見せる。

「ＩＳ学園・・なんか弱そうな連中がいそうだな？」

青年はＩＳ学園の専用機の一覧を見ていくとあるものを見つけたようだ。

「こいつは、フリーダム？ははははっ！楽しくなってきたぜぇぇぇ！」

「じゃあ、他の二人と合流したら僕の手配した部隊と共に日本に向かってくれ。」

「しょうがねぇなっ！！」

「キミには期待してるよ！オルガ・サブナック」

青年の名前はオルガ・サブナック。かつて、キラの前に敗れ死んだ筈の男だった。

オルガはかつての機体、カラミティの発展型　エンド・カラミティを立ち上げてネクスト粒子を撒き散らしながら暗黒の空へと消えた。

動き始める力（後書き）

昔、オルガ・サブナックをザブナックと呼んでいた自分がいました。

ＶＴシステム（前書き）

今回はキラとラクスの出番はあまりありません。

VTシステム

月曜の朝、キラ達は教室に向かっていたが廊下にまで聞こえる声に目をしばたかせていた。
「何だろう？」
「さあ？」
四人はクラスに入る。
「本当だってば！この噂、学園中で持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と交際でき・・・」
「俺がどうしたって？」
一夏が声をかける。
「「「きゃあああああ！？」」」
なんと返ってきたのは悲鳴だった。
「なっ・・なんだよ！何の話だったんだ？俺の名前が出てみたいだけど」
「う、うん？そうだっけ？」
鈴やクラスメイトが目を逸らし始める。
「じゃあ、私自分のクラスに戻るから。」

そういって鈴は自分のクラスに戻っていった。

「なんなんだ？」

「さぁ・・・？」

さて、それから時間が経過し、今は放課後。

「鈴さんまさか、わたくしを相手に模擬戦をなさるおつもりで？」

「しょうがないじゃない！キラは用事があって、今日は特訓ができないだから！」

「まぁ、それはそうですけど」

場所は第3アリーナ、そこには鈴とセシリアが向かいあっていた。今日はキラに用事があり特訓は休みという事なのだが、彼女達は自主特訓という名目でアリーナを使っている。

「ちょうどいい機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはっきりさせとくってのも悪くないわね。」

「あら、珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場ではっきりとさせましょうではありませんか」

ふたりともメインウェポンを呼び出すと、それを構えて対峙した。

「では・・・」

だが、いきなり超音速の砲弾が飛来する。

「「!?」」

二人は避け、砲弾が飛んできた方向を見ると、そこには漆黒のＩＳがたたずんでいた。

「ラウラ・ボーデヴィッヒ。」

そう、ラウラの駆るシュヴァルツェア・レーゲンだ。

「どういうつもり?いきなりぶっぱなすなんていい度胸じゃない?」

鈴は警戒心ＭＡＸで尋ねる。

「中国の甲龍にイギリスのブルー・ティアーズか。・・・ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

挑発してくるラウラ。

「何?やるの?わざわざドイツくんだりからやって来てボコられたいなんて大したマゾっぷりね。それともジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの?」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのは可哀想ですわよ?犬だってまだワンと言いますのに」

今度はラウラが言い返してくる。

「はっ・・・。ふたりがかりで量産機に負ける程度の力量しか持たぬものが専用機持ちとはな。よほど人材不足と見える。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国とはな」

ブチっ・・・。あっ！またなんか切れた。

「ああ、ああ、わかった。分かったわよ。スクラップがお望みなわけね。・・セシリア、どっちが先やるかジャンケンしよ」

「ええ、そうですわね。わたくしとしはどちらでもいいのですが・・・」

「はっ！二人がかりできたらどうだ？私は負けん。」

「上等！」

ところ変わって、シャルロットと一夏は自主特訓の為、第３アリーナに向かっていた。

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、キラ達はいないけどな。今日使えるのは、ええと・・・」

「第３アリーナだ。」

「「わぁ！？」」

いきなり現れた箒にビックリする二人。

「・・・そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ！」

「お、おう。すまん」

「ごめんなさい。いきなりの事でビックリしちゃって」

「あ、いや、別に責めてるわけではないが」

折り目正しくペコリと頭を下げるシャルロットにさすがの箒も気勢を削がれてしまう。

「ともかく、だ。第3アリーナへと向かうぞ。今日は使用人数が少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬戦も出来るだろう。」

「ところで周りが騒がしいな。」

確かにいろんな生徒が第3アリーナに走っている。第3アリーナで何か騒ぎがあったらしい。

「なんだ？」

「なにかあったのかな？こっちで先に様子を見ていく？」

そう言って、シャルロットは観客席へのゲートを指す。

「誰かが模擬戦をしてるみたいだね。それにしても様子が」

ドゴォォォン

「「「！？」」」

突然の爆発に驚いて視線を向けると、煙を切り裂くように影が飛び出す。

「鈴！セシリア！」

二人は苦い表情のまま、爆発の中心部へと視線を向ける。そこには、シュヴァルツェア・レーゲンを纏ったラウラがいた。

「くらえっ！」

甲龍の両肩が開き、龍砲を最大出力で発射する。

「無駄だ！このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

龍砲の攻撃はいくら待っても届く事は無い。

「くっ！まさかこうまで相性が悪いなんて！」

今度はレーゲンの肩からワイヤーブレードが射出され、鈴に飛翔する。

「そうそう何度もさせるものですか！」

鈴の援護射撃を行う為、ビットをラウラに向かわせた。

「ふん・・・理論値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第3世代型兵器とは笑わせる。」

セシリアの精密な狙撃とビットによる視覚外攻撃。その両方を交

わしながら、ラウラはまたさっきと同様に腕を突き出す。今度は左右同時、交差させた腕の先では目に見えない何かに捕まえられたかのように停止している。

「動きが止まりましたわね！」

「貴様もな」

セシリアのレーザーはラウラのレールカノンで相殺される。ラウラはさっき捕まえた鈴をセシリアにぶつけ、セシリアの攻撃を阻害する。

「きゃあああ！」

するとラウラは弾丸のごとき速さで間合いを詰めた。

「イグニッションブースト！？」

そう、一夏の十八番の技だ

「ふん！」

ラウラの袖のようなパーツからプラズマ刃が展開、鈴に襲いかかる。

「このっ・・・・」

ラウラの猛攻を凌いでいるとワイヤーブレードまでもが襲いかかってきた。

「くっ！」

再度、衝撃砲を展開し、その砲弾エネルギーを集中させる。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとは」

その言葉通り、衝撃砲はその弾丸を射出する寸前にラウラの実弾砲撃によって爆散した。

「もらった！！」

「！」

肩のアーマーを吹き飛ばされて大きく体勢を崩した鈴に、ラウラがプラズマ手刀を懐へと突き刺す。

「鈴！！」

ガキィィィン

ラウラのプラズマ手刀が鈴を傷つける事は無かった。何故なら、ユウイチの対艦刀エクスカリバーがそれを防いだからだ。

「ユウイチ！！」

「ユウイチさん！？」

一夏を含めセシリアや鈴、そのアリーナにいた全員が驚く。

「やれやれ、見てらんないじゃないの！」

ラウラは憎々しげにユウイチを見る。

「ユウイチ・S・レイブン・・・邪魔をする気か？」

「この二人は俺のダチ達の恋人と幼なじみだ。その二人が傷つけられるところを黙って見ている訳にはいかないんでね。」

「ふん！貴様・・・私に勝つつもりか？」

ラウラはユウイチを見下すように言う。

「おっと、動くなよ！ドラグーンが君を捉えてる。ＡＩＣは使えないぜ！大人しく引き下がるんだな。」

確かによく見ると、五基のドラグーンがラウラの周りに浮いている。

「貴様を倒すのにＡＩＣは使わない。」

「やれやれ、甘く見られたものだな。俺も、ストレイドも」

ユウイチは鈴とセシリアに下がるように言う。

「二人ともそこにいたら邪魔だ。下がれ！」

「分かったわよ。」

「分かりましたわ」

二人は端まで移動した。

「さて、やるか！ドイツの兎ちゃん。」

ユウイチはドラグーンを戻すと構えをとる。

「行くぞ！！」

ラウラはユウイチに向けてワイヤーブレードを四本放った。

「くっ！！」

三本は避けるが一本が右腕に絡み着く。

「捕らえた！もう逃がさん。」

自分の方へ引き寄せようとしたラウラだったが次の瞬間信じられないものを見る。

「ふんっ！！」

ユウイチが右腕を引っ張るとなんと、レーゲンが浮いてユウイチの方に引き寄せられてしまった。

「ばかな！逆に引き寄せられただと！？」

ラウラは素早くレーゲンを立ち上がらせ、今度はプラズマ手刀を突きでくり出す。

「見切った！」

ユウイチはしゃがんで回避するとラウラの右腕を掴んで背負い投げをしてレーゲンを地面に叩きつける。

「ぐぅ！！」

ラウラは立ち上がり、ユウイチにレールカノンを撃とうとして照準を合わせようとするがユウイチはいなかった。

「いないだと！どこだ？」

「こっち、こっち！」

ユウイチは素早くラウラの横に移動していたのだ。

「いつの間に！？」

ユウイチはレールカノンをつかむとそのまま引きちぎってしまった。

「貴様っ！よくも！」

「ふん！まだまだぁ！」

引きちぎったレールカノンでラウラを叩き始める。

「ぐっ！貴様っ」

９連打あたりでラウラは地面に倒れてしまう。

「休んでる暇はねぇぞ！」

ユウイチはレーゲンを纏っているラウラの足を掴むと体を回転させ始める。

「きっ・・貴様！何を？」

「そらぁぁぁぁ！！」

五回転ぐらいの所でユウイチはラウラを投げ飛ばした。

「ぐっ！！」

ラウラはアリーナの防御シールドに叩きつけられ、レーゲンのシールドエネルギーがゴッソリ無くなる。

「くっ！強い！」

ラウラが顔を上げるとそこにはもうユウイチがいた。

「！！」

ユウイチはラウラを掴み、持ちあげる。

「頼むよ。降参って言ってくれ！」

「死んでも言わん。」

するとユウイチはラウラの腹部にパンチのラッシュを浴びせる。

その光景を見ていた一夏達はセシリアと鈴の元に駆け寄る。。

「セシリア、鈴、大丈夫か？」

「私達は大丈夫よ。」

「ユウイチ、容赦ないね。」
シャルロットはうわ言の様に言った。

「ああ。そうだな。」

だが、次の瞬間、異変が起きる。ラウラがいや、レーゲンが放電しだしたのだ！

「なんだ！？」

あまりの衝撃にユウイチが吹っ飛ばされる。

「あああああああっ」

ラウラの凄まじい悲鳴。

「ＶＴシステムか！」

レーゲンの装甲がグニャグニャになってラウラを飲み込んでいく。

「なんだよ、あれ？」

一夏は無意味にレーゲンに近づいていく。

「下がれ！一夏！」

ユウイチの声もその耳に届かないようだ。その間にもグニャグニャだったレーゲンは人の形になり地面に降りてきた。

ボディラインは少女に似ており、最小限のアーマーが取り付けられている。頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所には装甲の下にあるラインセンサーが赤い光を漏らしていた。そしてその手にはかつて千冬がつかっていた雪片と同じものが握られている。

「雪片・・」

一夏はうわ言のように言い、白式を展開して黒いＩＳに突っ込んでいく。だがそれを遮った者がいた。ユウイチだ。

「なにやってる？死にたいのか！？」

「あいつ、ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！」

「一夏！」

バシィン

一夏はユウイチの平手打ちをくらう。

「なんだ？わかる様に説明しろ！」

「あいつ・・あれは、千冬姉のデータだ。それは千冬姉のものだ。千冬姉だけのものなんだよ。それを・・くそっ」

「なるほどな・・・」

「それだけじゃねぇよ。あんな、わけのわかんねぇ力に振り回されてるラウラも気に入らねぇ。ＩＳとラウラ、どっちも一発ぶっ叩い

てやらないと気がすまねぇ」

ユウイチは目をとじながら優しく一夏に言う。

「そっか、お前は本当に姉貴が大好きなんだな。だがな一夏、あいつは俺がやる。」

「何でだよ？」

するとユウイチはゆっくりとまぶたを開く。

「まだ、あいつと俺の戦いは終わってない！」

「！！」

箒達が駆け寄って来た。

「ユウイチ！！」

「一夏！大丈夫？」

「ユウイチさん！」

「一夏！」

ユウイチは一歩一歩、歩き出す。

「行くぜ、ラウラ！」

ユウイチはイグニッションブーストで一気に間合いを詰める。だがＩＳも反応し鋭い袈裟斬りを繰り出すがユウイチの侵入を許してし

まう。

「はぁぁぁぁぁ！！」

ユウイチは右手のパルマフィオキーナを敵ＩＳの腹部に直撃させる。青白い閃光が黒い装甲を焼きつくす。その装甲の中からラウラが出てきた。どうやら気を失っているようだ。ユウイチはしっかりとラウラを抱く。

「まったく、世話かけさせやがって。」

その日の夕方、ラウラは保健室で目を覚ました。

「ここは？」

「保健室だよ。」

ラウラが横を見るとユウイチがいた。

「ユウイチ・Ｓ・レイブン。」

ラウラはユウイチの顔をまじまじと見る。

「なっ・・・なんだよ？照れるじゃねぇか。」

「なぜ、お前はそこまで強い？」

すると、ユウイチは立ち上がって口を開く。

「俺は強くない。たぶん俺はこの学園最弱だ。」

「？」

ラウラは分からないようすでユウイチを見る。

「俺が持っている力は本当の力じゃない。ただの暴力だ。そんなの強さでも、力でもない。」

「だが、私はお前に負けた。」

「ＶＴシステムが暴走したからだろ？」

「ＶＴシステムが？」

ユウイチは肩をすくめた。

「とにかく、俺はお前が思ってるほど強くはない。」

ラウラは天井に視線をもどす。

「ラウラ、本当の強さを知りたいか？」

「ああ、知りたい。本当の強さを。」

ユウイチは笑いながら言う。

「なら、一夏の側にいろ！あいつなら本当の強さを教えてくれる。」

「織斑一夏が？」

「ああ、あいつは俺より本当の強さを持ってるからな。」

そう言って、ユウイチは保健室を出ていった。

「本当の強さか。」

ラウラはその後、入ってきた一夏と言葉を交わしその意味を知る事になる。

「お疲れさま。」

保健室を出たユウイチはキラとラクスと千冬に出くわした。

「大した活躍だったそうじゃないか。」

千冬が微笑みながら言うとユウイチは渋い顔をする。

「まったく全然、ガラじゃないのに。」

するとラクスが。

「アナタがラウラさんを助けたのはアナタが優しいからでしょ？」

ユウイチはふっと笑う。

「ラクスには敵わねぇな。ところでキラ、今回の件の裏にはやはり、ドイツが？」

「そうだろうね。だぶん、イギリスの件にも関わってるだろうな。」

そう言って、あの画像を出す。　すると千冬が険しい顔つきになる。

「私のクローンか？」

「そうなりますね。織斑先生がドイツにいたころにＤＮＡか何かを採取したのでしょう。」

ユウイチは窓の外の夕焼けを見ながら言う。

「これから、何かが起こるかもな。」

「そうだね。その為にも一夏達には強くなって貰わないと。」

千冬がキラの顔を見つめる。

「ヤマト、一夏の事、頼んだぞ」

「はい、分かってます。」

それを聞いていた、ユウイチが突然あくびをする。

「まぁいいや。俺は寝かせてもらうぜ。」

「ユウイチ、今日は本当にお疲れさまでした。」

ラクスの言葉を聞いたユウイチは笑いながら自分の部屋に向かっていった。

ＶＴシステム（後書き）

日焼けで皮膚が痛い？

悪の3兵器（前書き）

タイトル通り彼らが・・・

悪の3兵器

6月も最終週に入り、遂に学年別トーナメントの開幕である。一夏はというと、不幸にも一回戦目でキラと当たってしまった。

「はぁ、無理だって。」

「一夏、ドンマイ。」

皆からドンマイの雨を浴びせられる一夏。因みに皆のペア表はというと。キラとシャルロット、一夏とラウラ、鈴と箒、ラクスとセシリア、ユウイチとのほほんさんこと本音だ。

「今の俺で勝てんのか？」

「まぁ、無理だろうな。」

ラウラの容赦無い返答が返ってきた。

「はぁ～」

「一夏！いつまでそうしている気だ？男ならビシッとしろ！」

箒が一夏に喝を入れる。

「でもよぉ～！」

そんなことをしている内にそろそろ試合開始時間が迫ってきた。

「じゃあ、一夏。私達は観客席に行ってるから。」

そう言って、鈴達四人は観客席に向かっていった。

「うじうじしててもしょうがない。行こうぜ！ラウラ。」

「うむ！」

一夏は『白式』を呼び出すとカタパルトに向かって歩いていく。

「カタパルトスタンバイＯＫ　織斑君、発進どうぞ！」

真耶のアナウンスが響く。

「『白式』、行くぜ！」

一夏は勢い良くカタパルトから飛び出す。一夏が飛び出すともうそこには『フリーダム』と『ラファール・リヴァイヴカスタム？』を身に纏ったキラとシャルロットがいた。

「待ってたよ。一夏」

「悪い。」

続けて、ラウラもカタパルトから飛び出して来る。

「両者、定位置に移動してください。」

四人は空中で向かいあう。すると妙に重々しい空気が四人を包み込んだ。

「よぉ！お前等。」

観客席に向かったラクス達は観客席で席を取っていたユウイチと合流する。

「一夏どうだった？」

ユウイチが一夏の様子を聞いてきたので鈴がピットでの様子を伝えた。

「正直、マズイらしいわ。」

「そりぁ、一回戦目じゃなぁ。」

話している内に試合開始の笛が鳴った。

「うおぉぉぉぉぉ！！」

一夏は咆哮を上げながらキラにイグニッションブーストで近づいた。だが、キラがそれを許す筈もなく。

「甘いよ。」

キラは一夏の縦斬りをかわすと体を反転させ一夏を蹴り飛ばす。

「おわ！？」

更にキラは翼のドラグーンを展開しラウラと戦闘中のシャルロットの援護に向かわせた。

「なっ!?自身は戦闘しながら誘導兵器を八基も操るだと?」

シャルロットと戦闘をしていたラウラがあまりにも高すぎるキラの処理能力に驚愕の声を上げる。

「どこ見てるの?」

ドラグーンの応戦をしていたラウラはシャルロットの接近を許してしまい至近距離でショットガンの連射を受けてしまう。

「ぐっ!!」

「ラウラ!」

「よそ見している暇があるの?」

キラはトップスピードで一夏に近づき、ビームサーベルの二刀流の連撃を浴びせる。

「うおぁぁぁぁ!!」

今ので『白式』のシールドエネルギーが半分になった。

「これで、終わりじゃないよ」

攻撃を繋げる為にキラは物凄いスピードで一夏に迫る。

「っ！！」

一夏に接近していたキラは何か嫌な気を感じ、急停止して後ろに下がった。次の瞬間、キラと一夏の間を強烈なビームが通り過ぎる。

ドゴォォォォン

「なんだぁ！？」

「「なに！？」」

あまりにも熱量が高かったのかアリーナの地面がガラス状に溶けて固まっていた。

「なっ、何なの？」

「何がおきましたの？」

「一夏！！」

「ユウイチ！これは一体？」

四人、いや、生徒達が騒ぐなかユウイチは冷静に空を見ると何かが浮いているのを確認した。

「あれは・・・」

次の瞬間、警報がなり、観客席と来賓席の防護シャフトが降りる。

「高熱エネルギーが遮断シールドを突破してきたみたいです。」

管制室では真耶や千冬以外の教師があわふためいていた。

「原因はあの三機ということか？」

「えっ？」

真耶が上空にカメラを向けると確かに三機のＩＳが浮かんでいるのが確認できる。

「あれはＩＳ！でも、あんな機体みたことが無いです。」

一機目は毒々しい青緑色で後ろから四つの砲がマウントされており、その両手にはバズーカらしき武器を所持している。二機目は後ろに四つの翼らしきものがあり、両手にはシールドと一体になった二門の砲をつけていて、左手には万力型のハンマーらしきものを装備している。更に頭部にもエネルギー砲らしき砲口が見える。そして三機目はカーキ色を基調としていて、その大きな特徴としては巨大な鎌が所持されている。肩からは長い砲身が装備され、胸にもエネルギー砲らしきものを確認できた。

一方キラは、その三機を見て驚愕に包まれた。

「あれは・・・『カラミティ』、『レイダー』、『フォビドゥン』！？」

その三機はかつてキラと戦い、キラとかつての仲間が確かに倒した機体だった。だが、かつての三機とは細部が違う。

「発展型？」

そう、あの三機はかつての機体の発展型の機体で、名称がＧＡＴ－Ｘ２３１『エンド・カラミティ』、『ＧＡＴ－Ｘ４７０』、『グリフォン・レイダー』、ＧＡＴ－３５２『デス・フォビドゥン』である。

「「「キラ！！」」」

三人が駆け寄ってきた。

「三人共、駄目だ！来るなっ。」

かつての三機の強さを知っているキラは驚愕し叫んだが一夏達は逆に微笑み、キラに叫んだ。

「なに言ってんだよ！キラだけ戦わせるなんてできるわけないだろ！」

「そうだよ、３対１なんてフェアじゃないしね。」

「私達は仲間なんだろ？だから、一緒に戦う。」

キラは諦めた様に言う。

「分かった。でも、三人共、気をつけて。」

すると、『カラミティ』からの通信が入る。

「キラ・ヤマト！今度こそ、てめえの首をもらうぜ！」

すると、三機が突っ込んで来た。

「三人共、行くよ！」

「「「了解！！」」」

こうして、七機のＩＳが戦闘を開始した。

「あの子達、何を？」

「あの三機はあいつ等にまかせるとしよう。」

「織斑先生・・・そんな。」

海方面を警戒していた教師が声を上げる。

「織斑先生！海の方角から何か来ます！」

「何？」

真耶が海の方角にあるカメラの映像をスクリーンに出す。

「なんだ、あれは？」

「なんて、大きさでしょう。」

映し出されたのは六機の赤いＩＳ、そしてその後ろにそびえ立つＩＳにしては巨大な影。千冬は直ぐにユウイチに回線を繋いだ。

「レイブン！聞こえるか？」

「聞こえるっすよ！一体、何すか？」

千冬は現状を伝える。

「たった今、海から謎のＩＳ部隊が侵攻してきている。お前はその部隊の迎撃に出てくれるか？」

「了解！ああ、それとセシリア達をキラ達の援護に回したいんだけど、いいっすか？」

「分かった！頼んだぞ！」

そう言って、千冬は通信を切る。

「ユウイチさん！一体どうなってるんですの？」

泡ふためいているセシリアがユウイチに現状を尋ねる。

「今、アリーナではキラ、一夏、シャルル、そしてラウラが正体不明のＩＳ、三機と戦闘状態だ。お前等四人はこれの支援に向かってくれ。」

「正体不明ですって！？」

「正体が分からない敵なんて、一体どうなってるのよ！」

「こんなことになってしまうとは。」

「ユウイチはどうするのだ？」

ユウイチは深刻な表情になる。

「おれは現在、海から侵攻してきているＩＳ部隊の迎撃にでる。」

更に四人は驚愕した。

「侵攻ですって！」

「一体、どこの国の部隊よ。」

「とにかく、お前等はキラ達の支援に向かえ！いいか、これは実戦だ！気を抜くなよ。」

ユウイチは走っていってしまった。

「皆さん、わたしく達も行きましょう。」

一方、アリーナでは凄まじい戦闘が繰り広げられていた。

「はぁーーーー！！抹殺！！」

クロト・ブエルが操る『グリフォン・レイダー』の武器、ミョルニル？が白式に襲いかかる。

「ぐあっ！！」

直撃した一夏は凄まじい衝撃に呻いた。

「くそっ！！こいつ等強い！」

いくらキラとの戦闘で消耗したシールドエネルギーを回復したといっても三機の猛攻に一夏達は苦戦を強いられていた。

「そぉら、行くぜ！！」

オルガの『カラミティ』が7つの砲を一斉射撃をしながらシャルルに突撃する。

「くっ！！」

『エンド・カラミティ』はシールドを廃止し、両手にビームバズーカを装備する事で以前の機体より攻撃力が上がっている。

「シャル！」

キラが援護に向かうがシャニ・アンドラスの『デス・フォビドゥン』が誘導プラズマ砲を掃射する。

「くそっ！」

キラは回避するが軌道を変えたビームが向かった先にはラウラがいた。

「ラウラ！！」

「なに！」

キラが叫ぶがラウラは回避する事ができず直撃してしまう

やはり、この三機もネクスト粒子を発生させる装置、ネクストドライブを装備している為、脅威的なスピードを有している。

「必殺！！」

立ち上がったラウラの前に『レイダー』が舞い降り、顔の砲口が白く臨界しはじめる。

「「「ラウラ！！」」」

三人が駆けつけようとするが『カラミティ』と『フォビドゥン』が妨害する。

「これまでか！」

だが、クロトがツォーン？を放つ瞬間何かがぶち当たってレイダーが吹き飛ばされる。

「ぐあっ！！」

「何が？」

ラウラは何かが飛んできた方向をみるとそこにはＩＳを身に纏った鈴達がいる。どうやら、さっきのは鈴の衝撃砲だったようだ。

「お前等！！」

「あんた達、大丈夫？」

「キラ！」

「ラクス！？」

ラクスの姿を認めたキラが驚く。

「どうして、キミが？」

「わたくしも共に戦いますわ！キラ。」

「くっ！でも、無理はしないでね。」

『レイダ―』が体勢を立て直したようだ。

「なんだ！てめえ等は？」

すると、セシリアが胸を張って言い張る。

「仲間ですわ！」

「仲間だぁ？なんだか知らねぇがてめえ等も瞬殺！」

そういってクロトは『レイダ―』を飛行形態にし、セシリアに突撃をかける。

「変形した！？」

キラとラクス以外の全員が驚く。ＩＳは普通、変形出来ないからだ。

「うらぁぁぁぁぁ！！」

シャニが援護射撃とばかりにプラズマ砲を連射する。

「ビームが曲がる！！」

シャニが放ったビームは生き物のように軌道を変えてキラ達に迫る。

クロトの攻撃を避けたセシリアは『フォビドゥン』にスターライトＭｋ－？とビットで一斉射撃を行う。だが、その全てのレーザーが軌道を変えてしまった。

「こちらの攻撃をも曲げてしまうとは。」

一方、一夏は『カラミティ』に取り付こうと頑張っていた。

「こいつ、しつこい！」

「逃がさねぇ！」

一夏は一気に間合いを詰める。

「はぁぁぁぁ！！」

だが、一夏の放った斬撃は回避されてしまう。しかし、『カラミティ』の避けた先にはキラがビームライフルを繋げたロングライフルを構えて待っていた。

「くそっ！！」

ロングライフルの放ったビームを受けてダメージを受ける『カラミティ』

「参る。」

箒が『レイダー』に接近戦を仕掛けた。しかし、箒の攻撃をシールドで防ぐクロト。

「これで！！」

頭部のツォーンが放たれようとするがラクスとシャルロットとラウラが阻止する。

「ぐっ！こいつ等いい加減！」

ラクス達のアサルトライフルとレールカノンを受けたクロトはその場から離れるように下がる。

「鈴！！」

鈴は『カラミティ』の放ったビームを避けきれず直撃を受けてしまっていた。

「こいつ等なかなかやるわね！」

体勢を崩した鈴に『レイダー』が襲いかかった。

「きゃあ！」

ミョルニルの一撃をまともにくらう鈴。

「鈴！」

助けようと駆け付けるシャルロットだが上から大鎌ニーズヘグを降り下ろすシャニに気づかずダメージを受けてしまう。

その時、オルガ達に通信が入ってきた

「あいつ等一体なにを？」

動きが止まったと思ったら、機体を反転させ撤退しはじめたのだ。

「逃げていく？」

「勝ったの？」

「ラクス大丈夫？」

「わたくしは大丈夫ですわ。」

一夏がユウイチがいないのに気づき箒に尋ねる。

「ユウイチは？」

「それが・・・」

一方、ユウイチは海から侵攻してきた部隊と戦闘に入っていた。

「くそ！こいつ等あの時の！」

そう、C．Eで出没していた正体不明機であり、キラ達と一緒に穴に吸い込まれた機体だった。

正体不明機はランスからビームを放ちユウイチを狙う。

「くそ！こいつ！」

足のビームブレイドで一機を切り裂く。量産機だからか、一撃でシールドエネルギーが尽き、海に落下する。

「それに、『デストロイ』とはな。」

ＩＳに変化したためかサイズは３８ｍから１６ｍぐらいまでダウンしている。それでもＩＳにとってはデカすぎる。

「しつこい！！」

ランスを持った二機が突進してくるが逆にビームライフルで撃ち落とす。

「あと四機！」

デストロイがビームを撃ち続けてくるが無視。

「はぁぁぁ！」

エクスカリバーを二刀流で持ち、接近してきた二機を斬る。

「あと一機！」

ビームを連射し、ビームブーメランを放つ。ビームを避ける事に夢中になっていた敵ＩＳはブーメランの直撃を受けて落下する。

「後は『デストロイ』だけだ。」

『デストロイ』は弾幕を張るがユウイチは全て避けて接近する。

「はぁぁぁぁ！！」

懐に入り込むと至近距離でハイマットフルバーストを決める。『デストロイ』は黒煙を上げながら海に消えた。

戦いの後の静寂、それは戦いが終わった証拠だ。

そして、夜、キラ達は千冬に当然、呼びだされていた。

「で？今回のはなんだ？」

千冬が頭を抱えながら質問する。

「まず、僕達が戦ったのは『カラミティ』、『レイダー』、『フォビドゥン』です。今回の三機は前の世界での機体の発展型のようですね。ですが、パイロットは同じです。」

「レイブンの方は？」

「俺の方はデカイ奴は『デストロイ』、赤い機体の方は『ジンクス』と『アヘッド』と言うらしいな。」

「らしい？」

「赤い機体のほうは前の世界でも未確認機だったんだ。だから情報が少ない。わかっている事は俺達のコズミックイラの技術で作られてはいないという事、動力にネクスト粒子ではなくＧＮ粒子という粒子をつかっている事、それだけだ。」

「パイロットも機体を引き上げた時にはいなくなってたしね。」

千冬は考え込む。

「今回の件で新しい謎が出来たわけだな。」

キラが口を開く。

「僕達をこの世界に呼んだのは誰か、死んだ筈のパイロットの復活、『ジンクス』に『アヘッド』という正体不明機、ＧＮ粒子という未知の粒子と技術。」

ユウイチが嫌そうに言う。

「これから一体なにが起こるんだよ？」

「それは、まだわかりません。ですが・・・」

ラクスが言葉を続ける。

「何が起ころうとわたくし達は前に進まなければなりません。」

「うん、そうだね。」

キラがラクスの手を握る。

「とにかく、お前達は寮に戻れ、疲れてるだろう。」

「ヤマト、レイブン！大浴場が使えるようになったから入ってこい。」

「分かりました。」

「了解。」

そう言って、三人は出ていった。

寮に戻るとキラはさっそく大浴場に向かった。

「これが大浴場か。」

キラは裸になりドアをあけるとそこはかなり広い大浴場だった。

「なかなかだね。」

キラはアークエンジェルで天使湯を使っていたがここの大浴場もなかなかのものだった。

キラが湯船に浸かっていると誰かが入ってきた。

「ユウイチか一夏かな？」
後ろを見るとそこにはなんとシャルロットがいた。
「えっ！シャルロット？えっ！？なんで？」
「いや、大浴場が使えるっていうから。」
「いやっそうじゃなく。」
さすがのキラもこれには焦る。相手がラクスだったらまだここまで焦らない。だが相手はシャルロットだ。初めてみる相手の裸にキラは赤くなる。
「キラ、ちょっと向こう向いてて。」
「うっ・・・うん。」
なんとシャルロットが湯船に入ってきた。
「・・・」
「・・・」
しばらくの沈黙が続いた後、シャルロットが口を開く。
「前に言ってた事、覚えてる？」
「学園に残るか残らないかの話？」
「うん、残ってみる事にしたんだ。」

するとキラはシャルロットに微笑みかけた。

「本当に？それは良かった。」

何故かシャルロットは赤くなり始めた。

「それでね、キラ。聞いたんだけどキラとラクスとセシリアって付き合ってるんでしょ？」

シャルロットが詰め寄る。

「う、うん。そうだけど。」

シャルロットは赤くなりながら上目遣いで喋る。

「そのっ・・・僕も入れてほしいな。」

その意味は。

「えっ・・・？それはつまり？」

「いや、だから・・・つまり僕も守ってほしんだ。キラに、駄目？」

するとキラはシャルロットを抱きしめる。

「駄目じゃないよ。シャルロットは僕が守る。」

この時、シャルロットはキラの体が腕が全てが大きく見えた。
「ありがとう、キラ。」
「ええ、話やぁ」
二人はバッと体を離す。辺りを見回すが誰もいない。
「誰も・・・」
「いない・・・」
ブクブクブクブク。
シャルロットの足下で泡が大量に発生する。
「？」
「？」
ザッパァァァァン
「うわぁ！？」
「きゃあ！？」
「やぁやぁ！お二人さん」
「「ユウイチ！？」」
」

「いつからそこに？」

キラが聞くと、

「お前等が来る前から！」

「気づかなかった。」

ユウイチはシャルロットを見るとニヤニヤしながら喋り始めた。

「いやぁ～、シャルロットも思いきった・・・」

ユウイチが言い終わる瞬間、シャルロットは槽を拾いそれで、ユウイチの頭を殴る。

「ぐえっ！？」

ユウイチは昏倒して湯船に倒れた。

「あらあら、大変ですわね。」

声がして脱衣場を見るとなんと一糸纏わぬ姿のラクスが立っていた。

「ラクス！？」

ラクスはシャルロットの側に来て、手を握る。

「シャルロットさん、これからもよろしくお願いしますわ。ね」

「うん、ありがとう。」
ラクスの一言で泣き出すシャルロット。
「あらあら、大丈夫ですか？」
シャルロットを抱きしめるラクス、巨乳と巨乳がムニュッとなる。
気絶したユウイチを脱衣場に捨てて、湯船に浸かり直す三人。これからの事を話し合った。
「まず、クラスの皆に打ち明けてみるよ。」
「皆なら必ず分かってくれるよ。」
「セシリアさんにもお話をしなければなりませんわね」
このあとも、楽しそうな声が大浴場に響いていた。

悪の3兵器（後書き）

ここから〇〇を混ぜて行きます。

デートと革新者（前書き）

キラ・・・羨ましいな。

デートと革新者

大浴場で色々あった翌日、凄い事が起きた。

「み、みなさん、おはようございます・・・」

副担の山田先生がギクシャクしながら、教室に入ってくる。

「今日は、ですね…みなさんに転校生を紹介します。。転校生といいますか、既に紹介は済んでいると言いますか、ええと・・・」

よく分からない説明・・・とにかく転校生が来るようだ。

ユウイチは何故かニヤニヤしている。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します。」

この声はまさか・・・

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします。」

スカート姿のシャルロットが現れた。

「ええと、デュノア君はデュノアさんということでした。」

クラスが騒がしくなってきた。

「なに！シャルルは女？キラ！知ってたのか？」

キラの肩を掴みキラを揺さぶる一夏

「うん、知ってたよ。」

「なんで、教えてくれないんだよぉ」

クラスメイト達も驚きの声を上げる。

「え？デュノア君って女？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね！」

「って、織斑君、同室なのに知らなかったの？」

「昨日、ヤマト君の後にデュノア君が大浴場に入ってくとこ、見たわよ！あたし。」

ザワザワ、一層騒がしくなるクラス。

ドゴォォン・・・教室のドアが激しく吹っ飛ぶ。

「一夏ぁ！！」

鈴だった。甲龍を身に纏った鈴が怒涛の勢いで入ってきのだ。ところで、吹っ飛ばされたドアは誰が直すんだろう？

「死ねぇぇ！！」

衝撃砲をフルパワーで充填し始める鈴、ターゲットは勿論、一夏。

「待てっ！これ、確実に死ぬ！死ぬーーー！！！」

ドゴォォォォォン。

「あれ？死んでない？」

一夏が目を開けるとそこには、シュヴァルツェア・レーゲンをを纏ったラウラがいた。ＡＩＣ　で防御したのだろう。

「助かったぜ、サンキュ。・・・むぐっ？」

なんと、ラウラはいきなり一夏の唇を奪う。しかも、チュッではない、ムチューだ。もう一回、チュッではない、ムチューだ。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「・・・嫁？婿じゃなくて？」

これにはさすがのキラやラクス、ユウイチ、クラスメイト達も驚く。

「えええええええーーーー！！！！。」

「一夏、やるね。」

「凄いですわぁ。」

「おい！一夏！羨ましいぞ！俺にも一口くれ！」

その後、教室はしばらく波乱が満ちていた。

そして7月、遂に夏が始まろうとしていた。

「三人共、買い物に付き合ってもらっちゃってゴメンね。」

週末の日曜日、キラはラクス、シャルロット、セシリアを連れて買い物に出かけていた。

「別にいいですけど、一体なんのお買い物で？」

セシリアがキラに尋ねる。

「来週から始まる臨海学校に持っていく水着を買いたいんだ。それでどんなのがいいか見て欲しくて。」

「そうですわねぇ、わたくしとキラは水着を持ってませんものね。」

キラとラクスはこの世界に来てから服は買っていたが、水着は買っていなかったらしい。

「僕も女子用の水着を持ってないから僕も買わなきゃ。」

シャルロットは先月まで男子としてＩＳ学園にいたので、当然女子用の水着を持っていない。

「そうでしたの！言ってくだされば、用意いたしましたのに！」

さすが、金持ち。やることが違う。

「いや、気持ちはうれしいけど。なるべくは自分達で選んだものがいいんだ。」

キラは哀愁をおびた顔付きになる。

「分かりましたわ。なら、キラさん！わたくしの水着を選んでくださいね！」

そう言って、セシリアはキラの腕を自分側に引き寄せる。意識したのか、無意識なのかは分からないが、そのせいでキラの腕はセシリアの巨乳に挟まれる状態になった。

「わかったから、そのセシリア。・・・その。」

キラが赤くなるがセシリアは頭に？を浮かべる。無意識だったようだ。

「キラ。」

「キラ・・・」

なんか知らないが二人が羨ましそうな顔になる。だが、キラは気づいてない様子だった。因みにこの学園と街を行き来する電車の中でキラは男性陣から羨望の眼差しを向けられていた事を彼は知らない。

キラ達は駅を出て、駅前のショッピングモール「レゾナンス」に足を運んだ。このレゾナンスは駅舎を含み周囲の地下街すべてと繋がっていて、食べ物も欧、中、和を問わず完備、衣服も量販店から海外の一流ブランドまで網羅している。その他にも各種レジャーはぬかりなく、子供からお年寄りまで幅広く対応可能。いわく「ここで無ければ市内のどこにも無い」と言われている程だ。

「うわぁぁぁ！！」

女の子である三人はその充実したレゾナンスに目を輝かせていた。四人は色々と寄り道をしながら水着売り場に向かっていく。そして、宝石などを扱う店での事。

「これなんか、ラクスに似合うんじゃない？」

そう言って、キラは片膝をついてラクスの綺麗な指に指輪をはめていく。ピンクサファイアなどをちりばめられているが、派手さは無くラクスを表現したような指輪だ。

「前の誕生日には何もあげられなかったからね。プレゼント。」

「本当にいいですの？」

「うん、これからもよろしくね。」

そう言って、キラはラクスの頬にキスをする。その雰囲気は高校生の男子と女子というよりは大人という雰囲気だ。

「ラクスさん、羨ましいですわ。」

「キラ、かっこ良すぎるよ。」

シャルロットとセシリアは雰囲気にのまれたのか、顔を赤くする。

因みにこの時、ラクスは店にいる女性店員と女子客が羨望の視線を送っていた事を彼女は知らない。

再び、水着売り場を目指して歩き出した四人、その途中キラがシャルロットに話しかける。

「ねぇ、シャルロット。」

「何？」

「なにか、呼び名を決めない？」

「えっ、いいの！？」

シャルロットが目をキラキラさせながらキラに迫る。そういえば、前に同じ事があったような。

「う～ん、じゃあシャルなんてどう？」

「うんいいよ！とってもいいよ！」

シャルロットは有頂天になりクルクルと回りだす。

「気に入ってくれたみたいだね。」

キラがニコッと笑う。

「羨ましいですわ！」

「シャルロットさん、嬉しそうですわね。」

何故かはしらないが以下同文。因みに駅でキラ達を見かけたＩＳ学園の上級生がキラにあだ名をつけたのだがそのあだ名が　キラースマイルヤマト君　である。

「ここが水着売り場だね。」

ようやく水着売り場に到着した四人。さっそく水着を選び始める。

「う～ん、どれがいいかな？」

そして、一つの水着を手にする。それは内側が青で外側が黒の水着である。

さっそく、試着室に向かうキラ、その中で制服を脱いで水着を装着。

「うん、これがいいな。」

一発で気に入った。

「キラー、こっちに来てくださいなー。」

レジに向かう途中、ラクスに呼び止められたのでキラがそっちに顔をむけると花が三つ咲いている。

「キラ、これはどうですか？」

「キラ、どう？似合うかな？」

「キラさん、どうですか？」

「三人共、似合ってるね。可愛いよ。」

ラクスとセシリアはビキニ、シャルロットはセパレートとワンピースの中間のような水着だ。色はラクスがピンク、シャルロットがイエロー、セシリアがブルー。因みにセシリアは腰にパレオを巻いていて優雅に見える。

キラの感想を聞いた三人は嬉しそうに制服に着替えて水着をレジに持っていった。

その後、キラ達は水着売り場を出て、色んな所に寄り道をして買い物を楽しんだ。

「たくさん買ったね。」

よくみるとキラは両手どころか腕一杯に袋を下げている。

「ちょっと、休んでいいかな？。さすがに疲れたよ。」

「分かりましたわ、あのお店で休んでてください。」

そう言って、ラクスが指をさしたのは、コーヒーの有名ブランドを取り扱うカフェだった。

「三人はどうするの？」

「もう少し、買い物をしてくるよ。」

「まだまだ、買いたい物もありますし。」

そう言って、三人は歩いていってしまった。

キラがカフェに入るとそこには様々なコーヒー豆があった。

「バルトフェルドさんが見たら喜ぶだろうな。」

キラはかつての仲間であり敵であった男の事を思い出す。

席に座りブルーマウンテンを注文するキラ。

「すごい荷物だね。」

キラは店員が持ってきたコーヒーを飲んでいたら、突然声をかけられたのでビックリする。顔を上げるとそこには緑の髪をした少年が立っていた。

「これは失礼。僕はリボンズ・アルマーク。君はキラ・ヤマトだね？。」

「何故、僕の名前を？」

リボンズは微笑みながら席に座る。

「僕の協力者から君の事を聞いたんだよ。」

「協力者？」

キラは段々と警戒心を強めていく。

「そんな事より、この前はすまない事をしたね。」

「まさか、あの三機とデストロイは君が？」

リボンズは店員にコーヒーを注文しながら答えた。

「そうだね。でも、勘違いしないで欲しい。あれは僕の意思じゃないよ。協力者の頼みだったんだ。」

キラがある疑問をぶつけてみた。

「君が僕達をこの世界に？」

「違うよ。君達を呼んだのは僕の協力者だ。」

「その協力者って一体誰なんですか？」

「今教えてもいいけど、今教えたら面白くないだろう？」

そう言いながらリボンズはキラの瞳を見る。

「いい目だ。僕の知り合いで少年兵だった男と同じ目をしている。」

リボンズはオーダーしたコーヒーを飲みながら話を進めた。

「今回は君に取引を持ちかけに来たんだ。」

「取引？」

「そう、君は前の世界で戦いを止める為に頑張っていたのだろう？ならば、僕と共にこの世界で恒久和平実現の為に頑張ろうじゃないか。」

「それが取引の内容ですか？。」

キラは警戒心を崩さない。

「そうさ、この世界には破壊と再生が必要なんだよ。」

「破壊と再生・・・」

「そう、君の力でこの世界を一度破壊し、僕が一つにするんだ。その為の準備も進んでいる。」

「そんなことっ！！」

リボンズは静かにキラに告げた。

「僕の世界は破壊と再生を行い平和になった。だから、平和の為には必要な事なんだよ。」

「それはっ・・・」

キラが反論しようとした瞬間、スーツを着た何人かの男女が現れる。

「大将、そろそろ時間ですぜ・・・」

「もうかい？しょうがないね。」

リボンズは立ち上がりながらキラに言う。

「支払いは僕が済ませておくよ。」

「待って・・・キミは一体？」

リボンズは振り向く。

「僕はリボンズ・アルマーク、イノベイターだよ。」

「イノベイター？」

「いい返事を期待しているよ。キラ・ヤマト」

そう言って、リボンズは数人の男女を連れて店を出ていった。入れ違いにラクス達が入ってくる。

「あらあら？お顔が青いですわよ？どうかしましたの」

「キラ、具合でも悪いの？」

「大丈夫ですの？」

「大丈夫。」

キラは三人にそういうと三人を連れて店をでる。

「よう、キラ！」

店をでると一夏と千冬が待っていた。

「そこでクライン達と出くわしてな、それよりヤマト、顔が青いぞ大丈夫か？」

「大丈夫です。」

その後、キラは一夏といっしょにラクス達四人の荷物を持ちながらＩＳ学園に帰ったのだがキラの心の中にはモヤモヤとしたものが渦巻いていた。

一方、店を出たリボンズ達は。

「あんな男が本当に役にたつのですか？」

金髪の女性がリボンズに尋ねる。

「大丈夫だよ。ルイス・ハレヴィ、彼は刹那・Ｆ・セイエイとも互角に戦える男だ。上手くすれば僕達の切札にできる。」

そう言って、リボンズは空を見上げる。さっきまで晴天だったのに今は重々しい雲がたちこめていた。

デートと革新者（後書き）

次回は遂に臨海学校！

海は夏のパラダイス（前書き）

う～ん、クラス全員の名前がまだ、分からない。

遂に、遂に待望の臨海学校がはじまった。

「あちちちち。」

「あちちちち。」

一夏とユウイチは熱された砂を踏みながら女子達が待つビーチへと向う。

「なぁ、ユウイチ。キラは？」

「さぁ、先に行ってるとは言ってたけど。ん？あれじぁねぇか？」

ユウイチが指差した方向を見るとビーチパラソルの下でなにやらうずくまっているキラがいた。

「おーい、キラー。なにやってんだ？」

二人が近づくとキラの他にうつ伏せになっているラクスとセシリアを発見する。

「ああ！ユウイチに一夏。」

何故か冷や汗をかいているキラ。

「どうしたんだ？」

「いや、二人にサンオイルをぬって欲しいんだって言われたんだけど、どうしていいんだか分からないんだ。」

「キラ、手で温めてから塗ってくださいね。」

と、ラクスが説明する。

「じゃあ、まずラクスから。」

そう言って、ラクスの背中にオイルを塗り始めるキラ。因みにラクスとセシリアは胸の水着を外して地面に伏せている状態なので二人の巨乳は圧縮されて凄い事になっている。

「ああ、気持ちぃですわ。」

「ラクスさん、羨ましいですわ。」

「じゃあ、次はセシリアね。」

そう言って、キラはセシリアに移動する。

「俺達は邪魔しちゃ悪いからあっち行ってるな。」

そう言って、二人は三人から離れる。

「一夏にユウイチ、ここにいたんだぁ！。」

二人は声をかけられたので、振り向くとそこにはシャルロットとバスタオルお化けがいた。

「なんだ?そのバスタオルお化けは?」

一夏が気になったのでシャルロットに尋ねる。

「ほら、出てきなってば。大丈夫だから」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める。」

「その声、ラウラか?」

「ほーら、せっかく水着に着替えたんだから、一夏に見て貰わないと」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあってだな・・・」

「もー。そんなこと言って、さっきから全然出てこないじゃない。一応僕も手伝ったんだし見る権利はあると思うけどなぁ。じゃあラウラが出て来ないんなら僕も一夏達と泳ぎにいくけどいいのかなぁ?」

「ええい!脱げばいいのだろ、脱げば。」

ばばっとバスタオルが空を舞う。

「笑いたければ、笑うがいい。」

出てきたのはビキニで黒く、レースをふんだんにあしらった水着を着たラウラだった。

「おかしい所なんて一つも無いよね。」

「ああ、可愛いと思うぞ。」

「そうだな。」

顔を真っ赤にするラウラ。

「そうか、私が可愛いか。」

と、その時、

「織斑君～、レイブン君～、ビーチバレーしようよ～！」

女子三人組が誘いに来てくれた。

「うわっレイブン君、体すごいね。」

「ん？そうか？」

確かに、ユウイチの体はボディービルダーほどでは無いが筋肉のついたがっちりした体をしている。

「ビーチバレーか！いいな。ユウイチ、シャルロット！やるか。」

「いいよ。」

「ＯＫ！」

真夏のビーチバレーの始まりだ。

「ふっふっふ、7月のサマーデビルと言われたこの私の実力を見よ。」

赤い髪の女の子がいきなりのジャンピングサーブを決めた。

「まかせて！！」

シャルロットがブロック。

「わっわっ！」

本音が返ってきたボールを慌ててレシーブする。

「ナイスレシーブ！」

メガネの女の子のアタックが炸裂。

「させるかぁ！」

ユウイチが捨て身のブロックで阻止。こんな感じで試合は進んで行く。

「わぁ！ビーチバレーですか？いいですね。」

見回りの真耶と千冬が現れた。

「ねぇ、織斑先生すごいねぇー！」

女子達が騒ぐのも分かる。普段はわからないが水着姿の千冬はモデル級、いや、それ以上のナイスボディをしている。

「なっ！！」

一夏が途端に赤くなった。

「なんだなんだ？一夏、まさかっ、織斑先生が好みか？」

「ばっ！ちげーよ！」

ムキになって反論する一夏。するとユウイチは千冬に向かって叫ぶ。

「織斑先生～！それ、一夏が選んだんすか～？ラブラブっすねぇぇ！」

次の瞬間、ビーチバレーボールの豪速球がとんできてユウイチの顔に直撃。

「へぶっ！！！」

「下らん事を言うからだ。」

「先生達もどうですか？私、抜けますから。」

そう言って、赤い髪の女の子が抜けた。

「じゃあ、織斑先生！」

「では！」

一夏のチームに真耶、本音のチームに千冬が入る。

「じゃあ、始めますよぉ。」

まず、千冬のサーブから始まった。見事に決まっている。

「はぁ、山田先生の胸。いいなぁ。」

一人の女子がため息をつく。確かに真耶が激しく動くとその大きな胸がブルンブルンと揺れる。それを聞いたユウイチが。

「大丈夫だ。あの胸より凄い胸を俺は知っている。」

ユウイチの脳に浮かんだのは、いわずと知れたアークエンジェルの艦長マリュー・ラミアスとミネルバの艦長だったタリア・グラディスだ。

その後、キラ達も合流してきて。

「よぉ!どした?なんかやつれてね?」

「いや、なんでもないよ。」

いや、どう見てもやつれている様にしか見えない。

ビーチバレーが終わったころキラが本音に質問した。

「本音さん、それ暑くないの?」

本音の水着?はというと全身を覆うほどの狐の形をした着ぐるみである。

「大丈夫だよ～、キラむ～。」

本人が大丈夫なら別にいいだろう。

「あれ、箒は？」

一夏が箒がいないのに気づき鈴に尋ねた。

「知らないよ。いないの？」

「ああ、どこ行ったんだろう、あいつ。」

その後も宿に帰るまで箒が姿を現すことは無かった。

そして、旅館で夕食。

「うわ～、すごいね。」

キラが今まで本格的な日本色をあまり見たことがなかったのか目を輝かせている。因みに一番左の列で真ん中ぐらいの位置、席順はキラの右に一夏、左にユウイチ、目の前にラクス、左右にセシリアとシャルロット、セシリアの横に箒だ。ラウラは正座が苦手なのかテーブル席の所にいる。鈴は違うクラスなので仕方ない。

「う～ん、美味い！さすが、本ワサ！」

「そうだな。旅館自家製なんだろ？」

一夏は当然だが、ユウイチはC．Eにいた頃から豪勢な日本色を

常食していたようで余りおどろいていない様子だ。ワサビも余裕で食べている。

「本ワサ？・・・パクっ」

いっ、今シャルロットは確かにワサビの山を口に入れたような。

「んっ～～～～～！！！」

案の定、鼻を押さえ涙目になるシャルロット。

「あらあら、大丈夫ですか？シャルさん？」

「大丈夫？シャル？」

因みにキラが命名したシャルという呼び名はラクスも使ってるようだ。

「らっらいじょうぶ。ふっ風味があって美味しいよ。」

鼻声になりながらラクスが差し出した水を飲むシャルロット。ほんまにこの娘は。

「んっ・・・つうっ。」

キラはなにか身悶えているセシリアに気づく、

「セシリア、どうしたの？まさか正座苦手？キツイならテーブル席に。」

「いっいえ！大丈夫ですわ。」

セシリアがボソボソっとなにかを言った気がしたがキラは聞き取れなかった。そして夕食後、セシリアが廊下を歩いていると何やらうずくまっている四人組を発見する。

「何をしてらっしゃいますの？」

「しっ！！！」

鈴に注意されるセシリア。よく見ると四人はある部屋の襖に耳をあてている。襖には織斑千冬、織斑一夏と書かれた紙が貼られている。その中から。

「ラクス、どう気持ちいい？」

「あん！とっても気持ちいいですわ！んっ！一夏さん、とってもお上手ですのね！」

中から何かとっても凄い声が聞こえる。声の持ち主はどうやらラクスと一夏のようだ。

「あんっ、一夏さんそこいいですわ！あん。」

「これは、一体何ですの？」

セシリアは顔を真っ赤にしながら耳を襖に近づける。

「んっ！クセになりそうですわ！」

「そう、それは良かった。」

今度はキラの声が聞こえる。

「一夏！次は僕にもやってね。」

「いいぜ。」

「「「「「なっ！！！」」」」」

次の瞬間、襖はメキメキと音を立てて部屋側に倒れる。そのせいでセシリア達は部屋の中に放り出される。

「なにをしている。」

セシリア達が顔をあげるとそこには仁王立ちをしている千冬と奥にはマッサージの途中の一夏とラクス、そしてイスに座ったキラがいた。

「ははははは。」

5人の乾いた笑い声が部屋に良く響く。

「全く、一体何をしているか馬鹿者が！」

襖を直した後、正座をしてお説教を受ける5人。

「まっマッサージだったんですか。」

シャルロットが安心したような声で言う。

「よかった。てっきり。」

とラウラが言うので、

「一体なんだとおもったんだ？」

と一夏が言うと。

「それはもち・・・むぐっ」

四人が慌ててラウラの口を塞ぐ。

一夏は訳がわからず頭に？を浮かべている。

「とにかく、こいつはマッサージが上手い。お前等も順番にしてもらえ。」

すると一夏が布団を敷き直す。

「じゃあ、まずは鈴からだ。」

「えっ！アタシ！」

鈴は嬉しそうにして、布団にうつ伏せになる。

「んっ！たしかにうまいわねっ！あん。」

「鈴さん、声がでてますわよ。」

セシリアのツッコミでさえ今の鈴には聞こえない。それだけ鈴は有頂天になっているのだ。　だが、次の瞬間鈴は恥ずかしい思いをする事になる

「ほう、ピンクとはな、マセガキめ。」

なんと千冬が鈴の浴衣の裾をたくし上げたのだ。一夏とキラは顔を背けるがしっかりと見てしまった。

「なっ！何をするんですか！千冬さん。」

「年不相応の下着だな。教師の前で淫行を期待するなよ。１５才。」

「いっ、いっ・・・い」

顔を真っ赤にする鈴。

「さて、一夏。なにか飲み物でも買ってこい。」

「えっ・・・分かった。」

部屋を出ていく一夏。変わりにユウイチが部屋に入ってきた。

「千冬！買ってきたぜ！」

その手にはスルメが握られている。余談だがキラとラクスとユウイチと千冬はプライベートでは名前を呼び合う仲になっていた。

「遅いぞ！ユウイチ。」

「悪いな。お！なんだ？お前等も来てたのか。」

千冬は部屋に備えつけの冷蔵庫からビールを取り出し、ユウイチに手渡す。

「ユウイチ。余り飲みすぎないでよ。明日もあるんだから。」

キラがユウイチに気をつけるように言うが軽く受け流された。

「千冬さんも気をつけてくださいね。」

「大丈夫だ。」

ラクスも同様に千冬に言うが受け流される。

「なんでユウイチはビールを？」

鈴が質問をした。

「何を言ってる？俺は２０だぞ。」

「へ～、ユウイチって２０だったんだ。」

隣のクラスである鈴は知らなかったようだ。

「さてと、本題に入るか。」

千冬はユウイチと軽く乾杯をしたあと、箒達に向き直る。

「デュノアとオルコットはキラと付き合ってたんだな。お前等三人、一夏のどこが良かったんだ？」

いきなり、話をふられた箒、鈴、ラウラがビクッとなる。

「どこって・・・・つまり」

三人共、赤くなってうつむき始めた。

「確かにあいつはなかなか良いところがある。家事もできるし、料理もなかなかだ。その上マッサージも上手ときた。どうだ?欲しいか?」

三人の顔がキラキラと輝きだす。

「「「くれるんですか?」」」

「やるかバカ」。

「「「ええええ~」」」

今度は暗くなる三人。

「女ならな、奪うくらいの気持ちでなきゃ駄目だ。女を磨けよぉガキ共。」

すると、ユウイチが。

「なかなかのブラコンだなぁ千冬は。」

「「ユウイチ!?」」

キラとラクスが驚いてユウイチを見るが、既に千冬のストレート

パンチがユウイチの顔にめりこんでしまっていた。

こうして、臨海学校の1日目は終了したのだった。

海は夏のパラダイス（後書き）

ラクスの専用機の名前が決まりました。その名も・・・それは次回に。

紅椿と姫桜（前書き）

遂にラクスと箒の専用機が・・・

臨海学校2日目の朝。キラとユウイチは朝早くに旅館の廊下をあるいていた。

「いててっ。」

どうやらユウイチは朝から千冬にストレートパンチをくらった顔が痛むようだ。

「昨日、あんな事を言うからだよ。」

「だよなぁ～、言わなきゃ良かった。」

キラは携帯を取り出して、着信履歴を調べた。

「今日、束さん来るって。」

真夜中に関わらず束はキラに電話をかけていたらしいのだが。

「ああ、例の新型二機が完成したからか。」

「ラクスと箒の専用機か・・・」

そう言って、キラは顔に不安を滲ませる。ラクスが戦う事には賛成し納得したのだが不安が時たま心の奥底からその顔を覗かせるようだ。

「彼女は強い。それは分かってるだろう？それに、ラクスばっかり心配してるとシャルロットとセシリアがヤキモチを妬くぜ。」

「そうだね。」

キラはふっと笑う。どこか覚悟したような顔付きになった。

「僕は彼女達と戦う。そして守るんだ。もう、あんなことにならない為にも。」

かつてキラは愛する者を失った経験がある。一人の狂気の男によって。

「僕は今までどこか自分に甘かったね。だから、これからはどんな事をしても彼女達を守るよ。たとえ、それが相手を殺す事になっても。」

そう言って、キラはユウイチを見つめる。その瞳には揺るぎの無い決意と覚悟が見える。

「ふっ、だから俺はお前が好きなんだよ。」

ドゴォォォン

ユウイチが笑った直後、もの凄い音が聞こえてきた。

「なんだ？なんだ？」

ユウイチとキラが音の聞こえたほうへ行くとそこには美しい庭に

突き刺さっている人参型のミサイルとセシリア、腰を抜かしている一夏に更には走り去る束の後ろ姿が見える。

「束・・・」

「来たようだね。」

その後、キラ達九人は千冬に川岸に集合させられていた。

「専用機持ちは全員揃ったな?」

あることを不思議に思った鈴が手を上げる。

「ちょっと、待ってください。ラクスと箒は専用機をもってないでしょ?」

「ああ、その事だが実は・・・」

何やら崖の方からドドドッと凄い音が聞こえてくる。そして何かが崖をもの凄いスピードで駆け降りてきて大ジャンプ。

「ちーーーーちゃーーーーん!!!」

案の定、束だった。千冬は目の前まで来た束にアイアンクローを決めた。

「やぁやぁ、ちーちゃん、愛をすぐ確かめよう。ハグハグしよ・・・」

「うるさいぞ。束!」

「相変わらず、容赦の無いアイアンクローだねぇ。」

今度は岩の後ろに隠れている箒に声をかける。

「ジャジャーーン！やぁ！」

「ども・・・」

「久しぶりだね～こうして会うのは何年振りかな～？ほんとっ大きくなったよねぇ～、特におっぱいがっ！」

束の手がワキワキと動き出す。

ドカッ

箒が束を木刀で殴った。思いっきり。

「殴りますよ？」

「殴ってから言ったぁ！箒ちゃんヒドイぃ！ねぇ！ヒドイよねぇ？」

束が同意を得ようとキラとラクスに視線を送るが。

「束さんが悪いです。」

「同じくですわ。」

キラとラクスからは同意を得られなかった。だが、ユウイチが

「まぁ、あの胸はたし・・・」

ドスッ

ユウイチが言い終える前に眉間に箒の木刀がつきささる。

「ユウイチーーー！！！」

一夏が駆け寄るが返事は無い。

「束、挨拶ぐらいしろ。」

千冬が頭に手を当てながら束に自己紹介を求めた。

「え～めんどくさいなぁ。ハロ～、私が天才の束さんだよ。終わり～♪」

なんとも素っ気ない自己紹介である。だが、シャルロット達は驚きを隠せないようだ。

「束って。」

「あの天才科学者の！？」

「篠ノ之束！」

全国が探し回ってる人で更にＩＳの開発者がいきなり現れたのだ分からなくもない。

「うっふっふっ、さぁ大空をご覧あれ！」

そう言って、指を上に指したので倒れているユウイチ以外みんな上を見た。

ズズーン

「おわっ！！」

一夏の前にいきなり銀色の菱形の何かが二個、凄い勢いで落ちてきた。束がリモコンを操作すると物体が光の粒子になり消え、変わりに現れたのは赤色のＩＳと灰暗色のＩＳだった。

「ジャジャーン！これぞ箒ちゃんとラクスちゃんの専用機こと「紅椿」と「姫桜」！全スペックが現行ＩＳを上回る束さんお手製ＩＳだよ。」

それはつまり束が作ったＩＳの全てを凌ぐ最新鋭にして最高性能機ということだ。

「さぁ！箒ちゃん、ラクスちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！私とキッくんが補佐するからすぐに終わるよん」

「えっ！？キラってそんなこともできんのか？」

「まぁね。」

驚いている一夏達をおいて、ラクスと箒が二機に乗り込む。

「じゃあ、始めようか。」

姫桜にキラ、紅椿に束がつき二人は空中にディスプレイを呼び出し恐ろしい速度でキーボードを叩く。

「二人とも速ぇ～！」

「キラも篠ノ之博士と同じくらい天才って事？」

復活したユウイチが歩いてくる。

「あの紅椿はどうやら白式と同じく格闘タイプか？」

「ユウイチ！？いつの間に！」

確かに二つの刀以外は武器は無い。だが、ユウイチはその装甲に注目した。

「あれは展開装甲か？」

「ユー君、するどいねぇ～。そう紅椿は展開装甲で展開装甲は～、雪片が進化した物なんだよねぇ～♪」

「「「えっ！！！」」」

一夏達がまた驚く。

「そして、姫桜は装甲はＶＰＳ装甲だな。」

「そっ！姫桜はフリーダムとストレイドの設計データを混ぜた機

体なんだよねぇ～♪更に動力にはこの前キッ君が送ってくれた敵のＧＮ粒子とネクスト粒子を混ぜて作ったＧネクスト粒子を使ってま～す。その他にもストレイドのデバイスドライバも使えるようになってるよ。」

もうなんでもありだこの人。

「ほい、フィッティング終了～。超速いね。さすが私とキッくん」

その後、パーソナライズもすぐ終わった。

「箒ちゃん、ラクスちゃん。試運転も兼ねて飛んで見てよ」

「はい。」

「わかりましたわ。」

まずは箒から天高く舞い上がった。

「うわっ！？」

紅椿はあっという間に上空２００ｍのところまで飛び上がり。優雅に滑空していた。

「どう？箒ちゃんが思う以上に動くでしょ？」

「え、ええ、まぁ・・・」

「じゃあ、刀使ってみてよー。右のが雨月で左のが空裂ね。武器特性のデータ送るよん」

束の指が空中を躍った瞬間、箒が二本の刀をしゅらんと抜く

「はっ！！」

箒が雨月で突きをしたらエネルギー刃を放出し、雲を穴だらけにする。

「お～」

「雨月は対単一仕様の武装で打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を放出、連続で敵を蜂の巣に！する武器だよ～射程はまぁ、アサルトライフルくらいだね。スナイパーライフルの間合いでは届かないけど紅椿の機動性なら大丈夫♪」

箒が余りの性能の高さに喜びを隠せないようだ。

「じゃあ、次はこれ撃ち落としてみてよ。ほーいっと」

またリモコンを操るとミサイルポットが現れ、次々とミサイルを撃ちだしていく。

「箒！」

「やれる！この紅椿なら」

今度は空裂を右脇下に構え、一回転するように振るう箒、するとレーザーが帯状に広がりミサイルを全弾撃墜した。

「こっちは対集団仕様の武器だよん。斬撃に合わせて帯状の攻性エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動で展開するから超便利。」

「凄いわね。」

鈴も思わず目が離せない。

「じゃあ次はラクスちゃんね。」

「はい。」

ラクスがＶＰＳ装甲をオンにすると姫桜は文字通り桜色と桃色に染まる。

「ラクスちゃん、束さんお手製のウルトラセンサーバイザーグラスを装着してね。」

頭部のヘッドホンのような装甲からバイザーグラスが伸びてきてラクスの目を覆った。

「それで普通のハイパーセンサーより数十倍のデータを処理できるよん。」

因みにだが姫桜はフルスキンタイプではない。どこか紅椿と似ている箇所があるようだ。

「行きますわ。」

そう言って、ラクスは舞い上がる。

「すげぇ～！紅椿より速い。」

「これが次世代の速さ・・・」

シャルロット達も最早驚きを通りこして驚愕で圧倒されていた。

そして、桜色の粒子を散らして浮いている姫桜の姿は美しく幻想的でもあった。

「じゃあ、武器特性の情報、送るよん。」

束は先ほどと同様に情報を送った後、今度はミサイルポットを二基呼び出しミサイルを連射する。

「ラクス！！」

「これなら大丈夫ですわ。」

両手のビームライフルと姫桜の腕の小さい翼と背中の大きい翼の合計9枚から光の翼が伸びてきてその翼からピンク色のビームを撃ちだす。

「あれはハイマットフルバースト？」

キラが珍しく唖然としていた。

「ふっふっふっ！次はデバイスの説明だね。いっくん、ユーくん。ラクスちゃんの前に行ってくれないかな。」

「はい。」

「了解。」

二人はストレイドと白式を展開してラクスの前に移動する。

「じゃあ、まずはこのデバイスからね。情報送るよ。ユーくん、ラクスちゃんに攻撃してみて。」

「えっ！？それはさすがに。」

「私は大丈夫ですわ！ユウイチ」

何が大丈夫なのか分からないが彼女達を信じる事にしたユウイチはハイマットフルバーストで攻撃した。

ドゴォォォン

派手な爆発が起き黒煙が巻き起こる。

するとラクスと姫桜が無傷で煙の中から姿を現した。よく見ると装甲の繋ぎ目がピンク色に光って姫桜をすっぽりと覆うビームシールドのようなものが張られている

「っ！！」

「それはネクストアーマーだよ♪絶体防御光波シールドで近接兵器も通さないよ。でも、攻撃を受け続けると消えちゃうから注意してね。更にそれを爆発させると攻撃に使えるよ。」

「これですか？」

つぎの瞬間、眩い桜色の爆発が起き、近くにいた白式が巻き込まれた。

「うおわぁぁぁぁぁ」

さすがのラクスもこれには焦る。

「一夏さんっ！！だいじょうぶですかっ！！」

「うん、シールドエネルギーが半分まで無くなったけど大丈夫。」

「ほい、そこでもう一つこれを使ってね。」

見ると姫桜から大量のGネクスト粒子が散布され白式のシールドエネルギーと装甲を回復していく。

「それはフレンドケア、Gネクスト粒子散布領域内の味方のシールドエネルギーと装甲を完全回復するよ～！」

「凄いですわ。」

束がニシシッと笑う。

「最後にこれ、エネミーゲイザーだね。ユーくんに投げてみて。」

「はい。」

姫桜の手の平に光の玉がいくつも形成される、それをラクスはユウイチに投げてみたのだが。

「ぐっ！ぐあああああっ！」

ストレイドに付着したと思ったら電気を発生しはじめ、ユウイチが機体とともに痺れる

「だっ大丈夫ですか！！？」

「エネミーゲイザーは敵を痺れさせて一定時間拘束できるよ」

「・・・」

シャルロット達や一夏は勿論、キラやユウイチそして乗っているラクスも姫桜の性能に圧倒されて黙るしかなかった。

「さすが、第４世代と第６世代だねぇ～」

束は満足気に笑っていたが千冬は何やら警戒する目で束をみていたのだった。

紅椿と姫桜（後書き）

次回は福音と一夏の・・・・

福音が現れる時（前書き）

旅行に出ていたので更新が遅くなりました。本当に申し訳ありませんでした。

福音が現れる時

紅椿と姫桜の慣らし運転が終わった時、真弥がなにやら慌てた表情で走って来た。

「た、たっ大変です！織斑先生～！」

一体どうしたと言うのだろう。

「どうした？」

「こっこれを！」

真弥は小型の端末を差し出し、それを受け取った千冬は表情が変わった。

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし・・・」

そして千冬は大声で専用機持ち達に指示を出す。

「テスト稼働は中止だ！お前達にやってもらいたい事がある。」

専用機持ち全員が訳の分からない表情になったのは言うまでもない。

「あ、あれ？この人は？・・・」

束の存在に気付いたのか息を切らしながら千冬に聞いた。

「篠ノ之束だ。」

「えええええっーーー！！」

その後、キラ達は旅館の一室に作られた即席の司令室に集められ、現状の説明を聞かされていた。

「今から二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ「シルバリオ・ゴスペル」通称、福音が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった。」

指令室の暗い雰囲気がまるで事の重大さを物語っているような感じがしていた。

「その後、衛星の追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することが分かった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

まぁ早い話、福音が通過するルートに君達がいるから倒してね。という事なのだろう。たぶん。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう。」

この時、ユウイチは実戦経験の少ない一夏達が心配になったのだが表情には出さなかった。

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」

早速、セシリアが手を上げる。

「目標ＩＳの詳細なスペックデータを要求します。」

「分かった。ただし、これらはニヵ国の最重要軍事機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

この年齢で2年の監視とは流石に可哀想である。

「了解しました。」

すると、空中に浮いているディスプレイに次々と福音の情報が表示される。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型・・・私とキラさんとユウイチさんのＩＳと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですわね。」

シルバリオ・ゴスペルはセシリアが言うように広域殲滅を目的としたＩＳであり、特殊射撃に高機動を持たせているので高機動広域殲滅型であり、キラ達の中ではフリーダムとストレイドが分類される。ただし、ストレイドはさらに全距離対応が加えられている。

キラは特にこの特殊射撃に注目した。

「シルバーベル、通称銀の鐘か。どうやら、これが福音の要でありメインらしいね。」

その威力にシャルロットがうめく。

「かなり、厄介そうだね。連続しての防御は難しい気がするよ。」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルも分からん。偵察は行えないのですか？」

「やはり、軍事機密だけあって情報が少ないですわね。」

「偵察は無理だ。この機体は現在も超音速を続けている。最高速度は時速２４５０キロを超えるとある。アプローチは一回が限界だろう。」

「でも、フリーダムとストレイドのスピードなら可能ではないでしょうか？。」

キラ、セシリア、シャルロット、ラウラ、ラクスが真剣に意見を交わすなか、一夏は黙っていて、ユウイチに関しては何やら考え事をしていた。

「一回きりのチャンス・・・ということはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね。」

真弥の言葉に、ユウイチ以外全員が一夏を見る。

「え・・・」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は・・・」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから。」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるＩＳでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう。」

「ちょっ、ちょっと待ってくれ！お、俺が行くのか！？」

「「「「「「当然」」」」」」

六人の声が重なった。

「いや、そんなことをしなくても大丈夫だ。」

今まで黙っていたユウイチが口を開く。

「レイブン、なにか策でもあるのか？」

「ああ、いいか？簡単に考えるんだ。フリーダムとストレイドには、核エンジンとヴォワチュールリュミエールにネクスト粒子という３セットがある。これらのおかげでラクスが言ったように二機は通常スピードの状態ですでに福音を超えるスピードがだせる、そしてトップスピードで極超音速に達し、イグニッションブーストでさらに速くなることができる。」

音速は亜音速、遷音速、超音速、極超音速という四つの段階があり、二機が出せる極超音速に達した物体は空気と圧力との摩擦で温度が１５００度に達する。だが、元々二機は大気圏の大気熱にびく

ともしないので問題は無い。そしてこの極超音速を超えると光速になってしまう。

「まぁ簡単な話、俺とキラで福音に一気に近づき撃墜するという感じだ。」

「ていうか、そんな速度をだして二人は大丈夫なの？」

不思議に思ったシャルロットが心配する。

だが、この二人はコーディネーターであり、キラはスーパーコーディネーターなので問題は無い。そもそも、C．Eの世界ではいつも音速の域で飛んでいたので大丈夫なのである。

「大丈夫だ。もう慣れてる。」

「慣れてるって・・・」

シャルロットが呆れた感じでユウイチを見た。

「織斑先生、この作戦でいいですか？」

「わかっ・・・」

千冬が許可を出そうとした瞬間、ある声が指令室に響いた。

「待った待ーった。その作戦はちょっと待ったなんだよ～！」

その声の持ち主は天井から逆さまに頭を出している束だった。

「とうっ★」

空中で一回転して着地、ドタドタと千冬に駆け寄る。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「出て行け・・・」

頭を押さえ出す千冬。

「聞いて聞いて！ここは断・然！紅椿と姫桜の出番なんだよっ！」

「なに？」

「紅椿と姫桜のスペックデータを見てみて！パッケージなんかなくても超音速機動ができるんだよ！」

「それでもフリーダムとストレイドの方が何十倍も速いぞ。それに、レイブンとヤマトの方が不測の事態に対処できる。」

「いや、それは・・・」

その後、色々と話し合った結果。束の作戦が採用された。

そして、現在時刻十一時。

「全く、俺の作戦の方が早いと思うんだけどな。」

ユウイチはストレイドを纏いながらビーチで愚痴をこぼしていた。

「「まぁ、しょうがないね。」」

通信の向こうでは紅椿と姫桜の調節が行われていた。

「「ユウイチ、今回は偵察だ。僕達がつくまで無理はしないでね。」」

「分かってる。」

作戦はこうだ。紅椿と姫桜の調節が行われている間にユウイチが福音と戦闘、その詳細なデータを実行部隊である。キラ、ラクス、箒、一夏に転送し、その後実行部隊が一気に撃墜するというもの。

「時間だな。」

「「うん、気を付けて。」」

ユウイチはストレイドを大空へ飛び立たせ、極超音速で滑空していく。この時より作戦は開始された。

福音が現れる時（後書き）

静岡に旅行に行ってきました。なかなか楽しかったです。特に旅館で食べた伊勢エビが美味しかったです。

敗北とリベンジ（前書き）

リベンジです・・・

敗北とリベンジ

突き抜けるような夏の青空の中、一機のＩＳが滑空していた。ＩＳの名前はストレイド。そのパイロットのユウイチは超スピードの中、前方に白銀のＩＳを確認し。ユウイチはすぐに通信を入れた。

「キラ、ターゲットの福音を確認。偵察行動に出る。」

「「わかった。気を付けてね。」」

ユウイチはストレイドを駆りこちらに気づいていない福音に向けてビームライフルを連射するが福音はすぐさま反応し、回避行動に移る。

「なッ、避けた!?だがッ逃がさねぇ。」

福音は回避行動をとりながらユウイチに向けて銀の鐘を連射する。

「くそッなかなか速いな。だがこっちだってぇ!」

ユウイチは銀の鐘を避けながらまず不明の格闘能力を調べることにした。

「そらぁ!?」

瞬時加速「イグニッションブースト」で一気に間合いを詰め、ストレイドのブースターの横に格納されている対艦刀エクスカリバーを二基引き抜き、福音の右肩と左脇腹に一撃を入れる。

「なに！？」

なんと福音は右肩に迫った刃を右手でつかみ、左脇腹に迫った刃は左腕で押さえ込んで止めた。

「ふっ！どうやら格闘能力はその拳だけか。」

一方その頃、一夏達実行部隊はビーチで待機していた。

「ユウイチが福音と戦闘を開始したようです。」

それを聞いた一夏達三人の表情に緊張が走る。

「「ああ、こちらからも確認できた。」」

通信相手の千冬もその事は確認したようだ。

「どうやら、格闘能力は肉弾戦だけのようですね。射撃の銀の鐘は連射タイプと爆撃タイプがあるようです。」

ユウイチから送られてくる情報を千冬に伝えるキラ。

「「わかった。後は任せる頼んだぞ。」」

キラはうなずくと今度は一夏達に向き直った。

「三人とも、ユウイチから送られてきた情報によると福音の格闘能力は肉弾戦だけと分かった。そして、射撃は連射タイプと爆撃タ

イプがあるみたいだね。」

一夏が手を上げる。

「と言うことは、連射は威力は低いけど爆撃タイプは威力は高いって事か？」

「うん、でも結局はどちらも驚異だ。だけど当たらなければどうと言うことはないよ。」

確かに当たらなければ何ともないが避けるのもまた難しい。

「大丈夫？ラクス。」

キラは緊張しているラクスが気になったので声をかけた。

「大丈夫ですわ。」

ラクスは笑顔で応えたが明らかに無理をしている。

「大丈夫だよ。僕が守るから。」

そのとき千冬から通信が入る。

「「四人ともそろそろ時間だ。」」

「織斑先生。」

箒が千冬に話しかけた。

「私は状況に応じて一夏達のサポートをすればよろしいですか？」

「そうだな。だが、無理はするな。お前はその専用機を使いはじめてからの実戦経験が皆無だ。突然、何かしらの問題が出るとも限らない」

「わかりました。できる範囲で支援します。」

どこか箒の声は弾んでいるように聞こえるのだが気のせいだろうか。

「「織斑、ヤマト、クライン。」」。

今度はプライベートチャネルで三人に通信が入る。

「「どうやら、篠ノ之は浮かれているな。あんな状態では何かをし損じるかもしれん。いざというときはサポートしてやれ。」」

「「わかりました。」」

「わかりましたわ。」

今度はオープンチャネルに切り替わる。

「「では、始め！！」」

すると、紅椿の背に白式が乗り始めた。これは一夏の白式では三機のスピードについていけない為、こうするしかない。

「くっ！なんてスピードだ、すげぇよ紅椿。」

紅椿が飛翔するとそのスピードに一夏が驚愕する。だが、一夏は紅椿の背に乗りながら更に信じられない物を見た。なんと、フリーダムと姫桜が楽々と紅椿を追い越していったのだ。

「わかっちゃいたけど速すぎる。」

数分後、四人は高機動戦闘を繰り広げるストレイドと福音を確認した。

「あれがシルバリオ・ゴスペル・・・」

「ユウイチ!!」

「お前等!」

ユウイチが福音を蹴り飛ばしキラ達のところまで下がった。

「やっと来たなっ待ちくたびれたぜ。」

福音が牽制とばかりに銀の鐘を連射する。

「一夏っ!!私があいつの動きを止める。その隙に攻撃をっ!」

「おっ、おう!」

一夏と箒は福音の攻撃をかわすと二人で福音めがけて突っ込んでいった。

「なぁキラ、箒はまさかコンバットハイに?」

「やっぱりわかる?。」

「まずいな・・・」

コンバットハイは新兵によく見られる現象でこれにおちいった兵がいる部隊は全滅する可能性が高いのだ。

「今は考えてもしょうがない。ユウイチ、ラクス。行くよ・・・」

「あいよ。」

「了解ですわ。」

こうして三人も戦闘に参加した。

「はぁぁぁ!!」

箒が物凄い速度で雨月と空裂で斬撃を一撃ニ撃と加えていく。だが、福音はそれを腕で弾いてかわしていった。

「させるかぁぁ!!」

ユウイチが腰のドラグーンとネクスト粒子で複製したドラグーンを操り逃げようとする福音の退路を断つ。

「ユウイチ!!」

ドラグーンによる攻撃が止んだと同時にキラがビームサーベルで斬りかかる。

「キラ！」

福音はそれすらも避けてキラに銀の鐘を叩き込み上へと逃げた。

「くっ！！」

だが、ラクスが姫桜の二つのビームライフルを繋げて作ったスナイパービームライフルが狙いをつけていた。

「狙い撃ちますわ。！」

ラクスの放ったピンク色の鋭いビームが福音の肩を貫通。よろけた福音の隙をついて箒が迫る。

「はぁぁぁ！！」

だが、福音は素早く反応し、ウイングスラスターの全砲門から銀の鐘を箒に向けて撒き散らした。

「なんのっ！！」

箒に何発か当たったが勢いを殺す事はできず接近を許してしまう。

「これでっ」

箒は二刀流と更には後ろのスラスターに収納されているビットを駆使して福音の動きを止める。

「一夏！今だ！」

「うおぉぉぉぉ！！」

一夏は瞬時加速［イグニッションブースト］と零落白夜を使って全速力で突っ込んでいく。だが、一夏は箒と福音を通りすぎて海の方へ向かった。

「一夏！？」

「なんだ！？」

「どうしたの？」

「一夏さん？」

四人が唖然としていると一夏はさっき福音が撒き散らした銀の鐘の一発目に辿り着くと雪片で掻き消した。それを見た福音は箒を蹴飛ばし一夏に襲いかかる。

「なにをやってる！？せっかくのチャンスに・・・」

「海上に船がいるんだ。どうやら密漁船みたいだ。」

確かに海を見ると国籍不明の船がいる。

「まじか！こんなときに。」

「皆！船を守るよ。」

すると箒が反論してきた。

「キラ！犯罪者を庇って作戦を無駄にする気か？」

「でも見殺しには出来ないよ。」

すると白式からキュインインと音がして雪片のレーザー刃が消える。
どうやらエネルギー切れのようだ。

「エネルギーが・・・」

ユウイチがキラに向かって叫んだ。

「キラ！状況はこっちが不利だ。一時撤退を！」

「分かった。ラクス！援護射撃行くよっ。一夏と箒はその隙に逃げて。」

二人は同時に福音に向けてハイマットフルバーストを放った。福音が回避行動をとっている間に一夏は撤退しようとするが箒はなんと福音目掛けて突進した。

「箒！？」

「何を？？」

ユウイチが箒に通信を入れ、撤退を促そうとする。

「箒！一時撤退だ。下がれ！」

「今、この時を逃す訳にはいかない。私が一人でやる！」

そう言って、箒は通信を切った。

「あいつ・・・」

すると近くにいた一夏が箒に向かって叫んだ。

「箒！！一体どうしたんだ？らしくない、本当にらしくないぜ。」

「っ！！」

箒は明らかな動揺を顔に見せそれを手で隠すような仕草をした。
その時落とした刀が空中で消える。

「具現維持限界［リミットダウン］っ！！」

それはつまり紅椿のエネルギー切れを示していた。しかもここはアリーナではない戦場だ。福音がそれを見逃す訳も無い。
福音は再び一斉射撃体制にはいる。しかも今度は爆撃タイプだ。

「箒ぃぃぃぃ！！！」

一夏は全速力で箒と福音の間に入り福音が撒き散らした銀の鐘を全て受け止めた。

「一夏！！！」

「箒さん！！」

大爆発が起き、煙の中から箒と一夏が落下していく。

「くっ！」

キラとユウイチが落下していく一夏と箒をキャッチした後、千冬に通信をする。

「「一体どうした！？」」

「これ以上の作戦継続は無理だ。撤退する。」

「「了解だ。」」

「ラクス！援護射撃！！」

ラクスが援護射撃をしながらキラ達は撤退した。

「箒さん！一夏さん！！」

ラクスが二人に呼びかけるが返事は無い。

「箒は心配ないけど、一夏が危ない。二人共、急いで戻るよ！。」

キラは遠ざかっていく福音を睨みつけるように見つめた。今回の作戦はキラ達の敗北という形で幕を閉じた。

旅館まで撤退したキラ達は一夏の手当てをした後、司令室にこもった。

「わかってはいたけど箒がねぇ。」

「わかっていたのに止められなかった僕の責任です。」

「キラ・・・」

ラクスが心配そうに寄り添う。

「今回の件は誰の責任でもない・・・」

するとユウイチがたちあがって部屋を出ていこうとした。

「どこへ行く?」

「トイレ。」

「そうか。」

ユウイチが部屋をでるとシャルロット達に出くわした。

「よぉ!」

「ユウイチ!キラとラクスの様子はどう?」

「はっきり言うとショックみたいだな。ラクスにいたっては初陣だ。それがこんな事になっちまって、気が滅入ってるだろ。」

「そう・・・。」

ユウイチがニカッと笑う。

「まぁ、お前等が体を使ってメンタルケアすれば大丈夫だろ。」

ユウイチがセクハラまがいの事を言うがシャルロット達は怒る気分で無い。

「ユウイチさん、あっあなたは大丈夫なのですか？」

セシリアが真剣な表情で聞いてきたのでユウイチは真剣な顔で答えた。

「大丈夫だ。こういう事には慣れている。」

今度はラウラが驚いた表情で口を開いた。

「慣れているとはどういう事だ？お前は実戦経験はないはずだろう？」

「色々とあんのよ俺にも。とにかくあの二人の事はよろしくな。」

そう言って、ユウイチは歩いていった。

「ねぇ、ユウイチ達三人は何かを隠してる気がするよ。」

シャルロットが今まで疑問に思った事を口にする

「ユウイチ達は何処か私達と何かが違う。一体何を隠してるのかな？」

「なんでそう思う？」

「だっておかしいよ。ユウイチ達のＩＳ・・いきなり第六世代なんておかしいじゃない。」

シャルロットは考えるように目を細めた。

「僕だって分かるよ。二人のＩＳは明らかにこの世界の技術を超えてるよ。」

すると今度はセシリアが口を開いた。

「そうですわね。それにお二人の強さもおかしいですわ。とても一夏さんと同時期にＩＳに乗ったとは考えられませんわ。」

「それに三人の身体能力も高すぎる。ラクスは常人より高いし、ユウイチとキラは異常に高い。」

するとシャルロットはある一つの疑念をいだいたようだ。

「まさか・・・いやぁそんなまさかね。」

「どうしましたの？なにか分かりましたの。」

「いや、一瞬ある事が浮かんだけどあり得ない事だよ。」

「「？」」

一方箒は旅館に戻ってから目覚めない一夏に付き添っていた。

「・・・」

今、自分がここにいても一夏が目覚めない事は彼女自身知っている。

「一夏・・・私は・・・」

彼女はあの時一夏達が犯罪者をかばおうとしたことが理解ができないようだ。

「あいつらは犯罪者だ。それなのになぜ庇おうとした?」

彼女が際限の無い自問自答をしようとした時、部屋のドアが開いた。

「箒さん、そろそろ外に出てはどうです?」

入ってきたのはラクスだった。

「ラクス・・・」

「もうずっとここでこもってらっしゃるでしょう?」

そろそろ箒も体を休めないと肉体的にも身体的にも危ない頃だろう。

「ここにいたいんだ。」

「箒さんがここにいても一夏さんは目覚めませんわよ。」

それは箒も分かっている。だが今の箒は一夏から離れられないのだ。

「私には分からない。なぜ一夏は彼等を・・犯罪者を守ろうとする？」

箒には分からなかった。その全てを守ろうとする一夏が。

「・・・」

ラクスはただ黙って聞いていた。

「それが一夏の強さなのか？だから強いのか？」

彼女は自分の弱さに打ちのめされていた。そんな彼女にラクスの柔らかい手が触れた。

「それで・・・あなたはどうなされるおつもりで？」

「分からない。でも、戦えるなら戦いたい。」

ラクスは外の燃えるような夕焼けを見つめた。

「諦めるのですか。」

「仕方ないじゃないか。敵の居所も分からない！」

「場所ならわかるわよ！」

何と鈴がドアをバンと開けて入ってきたのだ。どうやら、後ろに

も他の面々がいるらしい。

「今、ラウラが・・・」

するとラウラが入って来た。

「出たぞ。ここから三十キロ離れた沖合い上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたがどうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」

携帯型の端末を箒に見せる。

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん・・・。お前の方はどうなんだ。準備はできてるのか」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ」

「ああ、それなら」

またドアが勢い良く開く。

「たった今完了しましたわ」

「準備オッケーだよ。いつでもいける」

「僕も行けるよ。」

なんとキラまでもが入ってきた。

「キラ・・・」

「キラも入ってくれるから鬼に金棒だね。」

「シャルから話は聞いたよ。フリーダムの専用パッケージ［ミーティア］をダウンロードしたから準備万端だね。」

ラクスが箒の瞳を見つめた。

「箒さん、諦めたらそこで終わりなのです。そしてあなたはここで諦めるような人ではないでしょう。」

鈴が腰に手を当てながら聞いた。

「で、あんたはどうするの？」

「私・・・私は：」

拳をギュッと握り決意が現れた顔付きになった。

「戦う・・・戦って、勝つ！今度こそ、負けはしない！」

「決まりね」

ふふんと腕を組み、鈴は不敵に笑う。

「じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実に墜とすわ」

「ああ！」

遂に戦士達のリベンジが始まったのだった。

敗北とリベンジ（後書き）

最近、携帯の充電が少なくなるのが早い気がします。

海上決戦（前書き）

徹夜で書きました。

海上決戦

海上２００ｍ上空に福音が静止している。福音はまるで胎児のように体を丸めていた。不意に福音が頭を上げる。次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした。

「初弾命中！続けて砲撃を行う！」

数キロ離れた場所に［シュヴァルツェア・レーゲン］が浮いていた。ラウラは、福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した。

その姿は砲戦パッケージ［パンツァー・カノーニア］を装備している

（敵機接近まで・・・４０００・・・３０００・・・くっ！予想よりも速い。）

あっという間に距離が１０００ｍを切り、福音がラウラへと迫る。

「させないっ！」

フリーダム専用パッケージ［ミーティア］を装備したキラが一斉射撃で牽制して福音の接近を阻止した。

「遅いよ」

逃げて体制を立て直そうとした福音に真後ろから攻撃を仕掛けた者がいた。［ミーティア］に掴まりステルスモードに入っていたシャルロットである。ショットガン二丁による近接射撃を背中に浴び、

福音は姿勢を崩す。けれど直ぐに体勢を立て直して銀の鐘［シルバーベル］による反撃を開始した。

「おっと。悪いけど、この［ガーデンカーテン］は、そのくらいじゃ落ちないよ。」

リヴァイブ専用パッケージは、実体シールドとエネルギーシールドの両方によって福音の弾雨を防いだ。防御の間もシャルロットは得意の高速切替［ラピットスイッチ］によってアサルトカノンを呼び出し、タイミングを計って反撃を開始する。

更にはミサイルの弾幕を張るキラと、距離を置いての砲撃を再開するラウラ。三方からの射撃に、福音はじわじわと消耗を始める。そして全方向にエネルギー弾を放った福音は全スラスターを全開にし、離脱を図った。

「させるかぁぁぁ！」

海面から紅椿と背中に乗った甲龍が飛び出し。箒は一気に福音に迫るが銀の鐘［シルバーベル］の弾幕を張られ、一向に近づけなくなってしまった。だが、鈴の甲龍の攻撃特化パッケージ［崩山］の衝撃砲全四門が火を噴き福音に襲いかかる。

「嘘っ？避けた！？」

福音は衝撃砲の嵐を回避し、鈴に襲いかかる。だが、ステルスモードで待機していたラクスとセシリアがそうはさせない。

「させませんわよ！」

「まだ、私達がいましてよ。」

ラクスがデバイスドライバの［エネミーゲイザー］を福音に投げ、その間にセシリアが狙いをつける。

「セシリアさん、今ですわ！」

「了解ですわ！！」

［エネミー・ゲイザー］が当たりビリビリと痺れて動きを止める福音にブルーティアーズの高機動パッケージ［ストライク・ガンナー］に付属している［スターダスト・シューター］が放ったレーザーが直撃した。

「やりましたの！？」

「まだよっ！？」

両腕を左右一杯に広げ、更に翼も自身から見て外側に向ける。刹那、眩いほどの光が爆ぜエネルギー弾の一斉射撃が始まった。

その頃、司令室でもこの戦闘を確認する事ができた。

「あいつ等！？」

「命令違反です。呼び戻しましょう！！」

「無駄だよ。」

真弥がキラ達に通信をいれようとするがユウイチがそれを遮った。

「えっ!?」

「多分、通信は出来ないよ。」

その理由としてはキラが通信を遮断しているからである。それにキラを含め彼女達が通信で呼び戻そうとしても簡単に戻ってくる訳も無い。でなければ命令違反をしてまで戦いに行くわけがないからだ。

「まぁ、こうなるだろうとは分かっていたがな。」

「ふん!!」

ユウイチが不機嫌そうに立ち上がり司令室を出ていこうとした。

「行くのか?」

「ああ。俺だけ仲間外れは許せないからな。」

「ユウイチ!!」

千冬は作戦中にも関わらずユウイチを名前で呼ぶ。

「死ぬなよ。」

「一体誰に言ってんすか?先生。」

そう言って司令室を出ていくユウイチ。

「たくっ、あいつ等水くさいねェ〜。一言言ってくれれば。」

ユウイチは庭園に出ると、ブレスレットの付いた腕を天高く上げる。

「［ストレイド］来い！」

次の瞬間、ユウイチの全身を装甲が覆う。

「さてと、行きますか。」

ユウイチが飛び立とうとした時、後ろから声がかけられた。

「ユウイチ！待ってくれ！」

声の持ち主は一夏だった。一夏はあの昏睡状態からやっと目が覚めたらしい。

「一夏！！大丈夫なのか？傷は？」

そう言って、一夏の体をペタペタと触るユウイチ。

「ああ、大丈夫だ。それより教えてくれ！皆、戦ってるんだろう？なら、俺も行く。」

「本気か？」

「ああ、本気だ。俺は今まで守られてばっかだったからな。だから・・・今度は俺が守る。」

ユウイチは静かに一夏を見つめた後、ため息をついた。

「やれやれ、しゃーない。行くか！」

「おう！」

一夏は目を閉じて［白式］を呼び出す。そして、呼び出された白式の姿にユウイチが驚いた。

「一夏、それ・・・」

「ああ、起きたらこうなってたんだ。」

それは［白式］が第二形態移行［セカンドシフト］をした姿だったのだ。

「やれやれ、寝てる合間に第二形態移行［セカンドシフト］をやっちまうとは恐ろしい奴だな。」

「なんかわからないけど夢の中で力が欲しいかって聞かれたから仲間を守る力が欲しいって答えたんだ。そしたらこうなってたんだよ。」

「・・・夢？」

真剣な表情で考え込むユウイチ。

「まぁ考えてもしょうがない。行くか！」

「ああ！」

二機は月光で照らされた夜空に舞い上がり、超スピードで仲間の

元へと向かっていった。

一方、海上ではキラ達と福音が物凄い戦闘を繰り広げていた。いくつもの軌跡と爆発が夜空を飾る。

「鈴！危ないっ！」

キラが鈴に銀の鐘［シルバーベル］を浴びせようとしていた福音にビームシールドを展開したまま体当たりをくらわせる。福音は体勢を崩して落下していった。

「くっ！チャンスですわね。」

セシリアが落下していく福音に［スターダスト・シューター］で狙いをつけてトリガーを引く。

けれども福音は落下しているのにも関わらず体勢を立て直してレーザーを避けた。

「今のを避けましたの？なかなか手強いですわね。」

だが、箒が超音速で福音に飛来、二刀流の連撃をくらわせようとする。

「はぁぁぁぁ！！」

すると福音は唸りをあげて迫る二つの刃を左右両方の手で掴んでしまった。

「なっ！」

驚愕する箒。その為、隙が生じてしまう。それを見逃さない福音は翼にエネルギーを充電し始める。

「くっ」

「箒！武器を捨てて離脱しろ！」

「たぁぁぁぁぁ！！」

箒は紅翼を一回転させ、つま先に生じたエネルギー刃をかかと落としみたいに福音に叩き込んだ。

「やった！」

片方の翼を失い落下していく福音。さらに落下の途中キラが放ったドラグーンハイマットフルバーストに直撃し、もう片方の翼も失って海に消えた。

「無事か・・・」

ラウラが聞いて来たので箒は呼吸を整えながら答えた。

「私は大丈夫だ・・・」

全員が勝利を確信した直後、海上に異変が起きる。

「あれは・・・？」

海面が強烈な光の珠によって吹き飛んだのだ。その中心で青い雷を纏った銀の福音［シルバリオ・ゴスペル］が自らを抱くようにうずくまっている。

「これは一体？」

「まずい！これは第二形態移行［セカンドシフト］だ！」

「「「「！！」」」」

全員が驚く中、福音の翼があった頭部から今度はエネルギーの翼が生えてくる。

「っ！？。全員、散開！」

キラが福音から明確な敵意を感じ取り全員に叫ぶが既に福音はラウラの目の前に移動していた。

「なっ！？」

広げたエネルギー翼から至近距離で一斉射撃を受けた為、ラウラは気を失って海に落下した。

「よくもラウラを！！」

「駄目だ！シャル！」

キラがシャルロットを止めようとしたが既に時遅く、超音速で飛来した福音はそのエネルギー翼を大きく広げシャルロットを抱く。その中で銀の鐘［シルバーベル］の嵐がシャルロットに襲いかかった。

「くそっ！シャル！」

至近距離からの銀の鐘［シルバーベル］の猛攻を受けたが、［ラファール・リブァイブ・カスタム?］の絶対防御のおかげで気絶はしたが無傷のようだ。

「くそ！これ以上はやらせないぞ。」

シャルロットの落下を見たキラは頭の中で何かが割れたような感覚がした。その直後キラの視界はクリアになり思考が鮮明になる。

「はぁぁぁぁ！！」

キラは咆哮を上げながらビームサーベルを抜き放ちながら［スーパードラグーン］を全基展開し福音に攻撃を仕掛けた。

「鈴さん！セシリアさん！シャルさんとラウラさんをこちらに［フレンドケア］で治療しますわ」

「わかったわ！」

「わかりましたわ！」

ラクスの指示を受け、二人はラウラとシャルロットの落下地点に急ぐ。

「キラ！」

箒もキラを助けようと戦いに参加した。しかし福音はエネルギー翼

から最大エネルギーで銀の鐘［シルバーベル］を掃射し一撃で［紅椿］を落とした。

「くっ、箒！！」

福音はキラが一番の脅威と判断したのか［ストライクフリーダム］に猛攻撃をしかけ始める。

「くっ！！キラっ」

「箒さん！待って下さい。」

ラクスはセシリアと鈴に箒が落下した孤島にシャルロットとラウラを集めさせ一気に回復させようとしていた。

「これで大丈夫な筈です。」

［姫桜］からピンク色の粒子が散布され孤島全域に広がり［シュヴァルツェアレーゲン］、［ラファール・リヴァイブカスタム?］と［紅椿］さらに［ブルーティアーズ］と［甲龍］そして［姫桜］自身もシールドエネルギーと装甲が全回復した。

「これならいける！」

「うん、凄いよ。」

「皆！行こう！」

五人が飛び立たった後、ラクスは何気なくレーダーを見ると二つの機影がかなりのスピードで近づいているのに気付いた。

「これは！？」

ラクスはすぐさまキラに通信を入れる。

「キラ！こちらに近づく二つの機影を確認しましたわ。これは・・・［ストレイド］と［白式］ですわ！」

「えっ！？ユウイチと一夏が？」

直後、箒に接近していた福音が荷電粒子砲の狙撃を受けて吹き飛んだ。

「っ！？」

「なにっ？」

白く輝きを放つ機体が舞い降りて来る。

「俺の仲間は、誰一人やらせねぇ！」

舞い降りて来たのは第二形態移行［セカンドシフト］をした［白式］と一夏だった。

「一夏！！」

「一夏っ大丈夫なの？」

一夏の元に仲間が駆け寄ってくる。

「ああ！大丈夫だ。皆！あいつを倒そうぜ！。」

すると［ストレイド］が続けて降りて来た。

「お前等・・・」

明らかに不機嫌なユウイチの声がキラの耳に入る。

「ユウイチ・・・」

「再戦すんのになんで俺を呼ばないんだよぉ！！お前等、全員後で俺に回転寿司を奢れ！！」

キラ達は一瞬ずっこけそうになったが快く了承した。

「じゃあ、再戦と行くか。」

「うん！」

「オッケー。」

「今度こそ負けませんわ。」

ユウイチを先頭にキラ、ラクス、セシリア、シャルロット、ラウラ、鈴の順に福音に向かって行った。

「箒、これやるよ。」

皆が福音に向かって行ったのを確認した一夏は箒にあるものを渡した。

「リボン？」

「誕生日、おめでとうな」

「あっ・・・」

そう今日は7月7日、箒の誕生日なのだ。

「せっかくだからな使えよ」

「ああ・・・」

「じゃあ、行ってくる。」

そう言って、一夏は飛び立って行った。

「はぁぁぁぁぁ！！！」

ユウイチは福音目掛けて［パルマフィオキーナ］をくらわせようとジグザグに飛行し、幻影を撒き散らして一気に福音に迫った。だが、福音は空中で宙返りをして逃げる。

「逃がさない。」

キラは逃げる福音に［カリドゥス複相ビーム砲］で狙うが福音は放たれた大出力のビームさえ避けた。

「くっ！案外しぶとい。」

福音が避けた先に待っていたのは［雪片弐型］を右手で構える一夏だった。

「逃がさねぇぇぇぇ！」

一夏は「雪片弐型」のレーザー刃の鋭い縦斬りで襲いかかるがまた宙返りで避けられてしまった。だが、左手に装備された新兵器「雪羅」で砲撃を行う。

「くっ！速い」

エネルギー翼を広げ、さらに胴体から生えた翼を伸ばす。そして、次の回避の後、福音の掃射反撃が始まった。

「［雪羅］！シールドモードに切り変える」

次の瞬間、［白式］の前にエネルギーシールドが出現し、銀の鐘［シルバーベル］を相殺した。

「はぁ、はぁ、そろそろエネルギーが。」

ただでさえ前の［白式］が燃費が悪かったのに、更に四つの大型ブースターと［雪羅］が装備された為、前よりもシールドエネルギーが減るのが早くなってしまい［白式］のエネルギーがもう危険域に入っている。

「一夏！これを受けとれ！」

箒が一夏に近づき手を差しのべて来た。

「これは！？」

なんと一夏が［紅椿］の手を触った瞬間、［白式］のエネルギーが回復したのである。これこそが紅椿のワンオフ・アビリティー、［絢爛舞踏］である。

「エネルギーが回復した!?おおし!これなら行けるぜ!」

再び一夏は箒と共に福音に向かって飛び立って行った。

「一夏ばっかに夢中になってんじゃねえぞ」

ユウイチが福音の後ろに現れ、［ストレイド］の専用ビームシールド［ムーンライトビームシールド］と一体になっている［ムーンライトビームブレイド］で斬りかかった。両腕の白と青色のビームシールド発生装置から放射された青いビームブレイドは一瞬にして右のエネルギー翼と左手を破壊する。

「私達がまだいる!」

スピードが落ちた福音に箒達、女子全員の一斉射撃が襲いかかった。更にキラが一斉射撃の間を縫うように飛び回り、瞬時加速［イグニッションブースト］に入り、また加速中に瞬時加速［イグニッションブースト］に入る二重瞬時加速［ダブルイグニッションブースト］に大技に入る。

「はぁぁっ!」

キラの姿を捉えられなかった福音は残っていたエネルギー翼を斬られてしまった。

「一夏!今だ!」

太陽を背に一夏が身に纏う［白式］が福音目掛けて鷹のように飛来する。

「絶対、逃がさねぇぇぇぇ！！」

一夏は全ブースターを全出力のまま［雪片弐型］のエネルギー刃を福音の胸に突き刺した。

「おおおおお！！！」

激しい火花を散らしながら福音は一夏の首に手を伸ばす。そして、その手が首にかかった瞬間、福音は全機能を停止した。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・」

アーマーを失い操縦者らしき人が海に墜ちて行くが、キラが海面に到達する前にキャッチする。

「終わったな。」

「ああ・・・やっとな。」

旅館に戻ったキラ達は長時間正座させられた挙句、反省文を書かせられるハメになってしまった。

「まっ！覚悟してたけど流石に辛いね。」

「しょうがないだろ。お前等は重大な命令違反をしたんだ。」

「くそっ！あのまま行かなきゃよかったぜ。」

一人騒がしくわめくユウイチをキラがなだめた。

「まぁまぁ、帰ったら回転寿司を奢るから静かにしようよ。」

「絶対、大トロを食べてやるからな。」

それでも大人しくしないユウイチに千冬の鉄拳が炸裂した。

「まぁ、よく帰って来たな。」

その言葉に一夏達が驚いた様に顔を上げる。どうやら一夏達は思ってもいなかった言葉に驚いたようだ。

「一夏、織斑先生も人の子だよ。」

「レイブン、それはどういう意味だ？」

「あ・・・」

再びユウイチの頭に千冬の拳骨が炸裂した。

キラは正座を長時間耐えた後、一人砂浜で月を眺めていた。

「分かってるよ。ずっと見張ってたんでしょ？」

キラは誰もいない筈の砂浜で誰かに話しかけた。

「やれやれ、気付いていたのかい？」

すると暗闇からリボンズ・アルマークが姿を現した。

「そろそろ、取引の返答は決まったかい？」

キラはまっすぐにリボンズを見つめる。

「僕の答えは・・・。」

数分後、銃声が夜のビーチに木霊した。

海上決戦（後書き）

次回遂にリボンズ達とキラ達のバトルです。

対話と対立（前書き）

どうも書き方が台本みたいになってしまう。

対話と対立

リボンズ・アルマークが暗闇から現れた時から、いや、初めてあった時からそして取引を持ち掛けられた時からキラの答えは決まっていたのかもしれない。

「そろそろ、取引の返答は決まったかい？」

キラはまっすぐにリボンズを見つめる。

「僕の答えはＮｏだ。」

するとリボンズは目を細めながら聞き返した。

「なに？」

どうやら、リボンズはキラが取引に応じると信じていたらしい。

「どういう事だい？キミは戦争を戦いをやめさせたいのだろう？」

「ええ、でも僕はキミとは違うやり方で戦いを止めて見せる。キミの言う破壊と再生をしなきゃ世界は平和にならないなんて間違ってると思うから。」

リボンズは憎々しげにキラを見た。

「やれやれ、キミも困った人だね。世界の変革には痛みが伴うと言うのに。」

キラは哀しそうな顔でリボンズを見詰めた。

「確かにそうなのかもしれない。でも、仮にそうだとしてもそれだけじゃすまないと思う。」

「どういう事だい？」

「世界が再生された後は？この世界を平和にした後は？」

リボンズはうんざりとした顔で答える。

「世界を平和にした後はこのイノベイターである僕が導いていく。僕は神そのものなんだから。」

だが、キラはそれをバッサリ否定した。

「違う！僕はイノベイターがどういうのかは知らないけど、キミは神じゃない。それに世界は導いて行くものじゃない。分かりあって築いていくものだ！」

有史以来、人は様々な戦いを繰り広げて来た。それでも最後は手を取り合って歴史を築いてきたものだ。かつて、あれほど激しい戦いをしていたキラとシンが手を取り合えたのもそれである。

「くっ、人間風情がっ。」

この時キラは理解した。このリボンズ・アルマークという男も自分より下の人間を見下しているということが。

「僕はイノベイターだ。人類を導く存在だ。それを否定するとい

うのかい？」

「なんであれ、僕はキミとは行けない。」

そしてキラが旅館に戻ろうとした時、何処からともなく大声が響いた。

「キラッ！！！！しゃがめーーー！！」

その声の言うとおりにキラがしゃがむと頭の上を一発の銃弾が通り過ぎて行った。

「っ！？」

「大丈夫か！？」

どうやら、叫んだのはユウイチらしい。息を切らしながら走って来る。

「ユウイチ！？」

「やれやれ、ユウイチ・Ｓ・レイブン・・・キミの噂も聞いているよ。」

「へぇ～、そんなことはどうだっていい！よくも俺の隊長を後ろから撃ちやがったな！。」

「撃ったのは僕じゃない。彼だよ。」

すると赤髪の男が出てきた。どうやら、前のカフェに現れたスー

ツ姿の男らしい。

「悪いな大将！外しちまった。」

「別にいいさ。さて、キラ・ヤマト、ユウイチ・S・レイブン！取引に応じないと言うのならキミ達は邪魔だ。この僕が直々に排除してあげよう。」

するとリボンズと男は光の粒子に包まれ粒子が消えたかと思ったらISに包まれた二人が現れる。

「この［リボーンズガンダム］でね。」

「俺の名前はアリー・アル・サーシェスだ！［アルケーガンダム］行くぜっ！」

キラとユウイチは素早く［ストライクフリーダム］と［ストレイド］を展開して上空に上がる。

「お前等の機体もガンダムなんだってなぁ！そうこなくちゃな！」サーシェスの［アルケーガンダム］は右腕に装備された［GNバスターソード］を引き抜き、［ストレイド］に斬り掛かってきた。

「くそがっ！！」

ユウイチもすかさず［対艦刀エクスカリバー］を抜いて斬り掛かる。二機は激しいつばぜり合いをしながら戦闘に入った。

「ユウイチ！！」

「よそ見をしている暇があるのかい？」

リボンズは背中にある［フィン・ファング］を全四基展開しキラに差し向けた。

「くっ！これは！？」

キラも［スーパードラグーン］を全基展開し応戦する。

「なかなかやるじゃないか！誘導兵器を八基を操作してこのスピード！」

リボンズは［ＧＮバスターライフル］を連射し、更に［ＧＮビームサーベル］を抜いて猛攻撃を仕掛けて来た。

「くっ！この程度でっ！」

だが、キラは［ヴォアチュールリュミエール］を展開し極超音速で逃げ回る。

「これはっ！予想以上だね。［フリーダム］の性能とネクスト粒子は。」

キラはビームライフルを連射してビームサーベルを抜いてリボンズに迫った。

「だから、確実に消えて貰う為に卑怯だけどやらせてもらうよ。」

その時、サーシェスと斬り合いをしていたユウイチに異変が起きた。なんと極太のビームがユウイチを襲ったのだ。

「なんだ!?増援か?」

ビームはユウイチが避けたかと思うとグルンと曲がり再び追撃を始める。

「なんだ?フォビドゥンか?」

「あれは・・・?」

遠くから人型のＩＳとモビルアーマー型のＩＳがこちらに接近してるのが見える。

「前に鹵獲した［ジンクス］と［アヘッド］のデータベースにあったぞ!確か・・・「レグナント」と［ガデッサ］だったか?」

敵は［レグナント］一機と［ガデッサ］タイプ三機と［アヘッド］一機のようだ。

「よそ見してんじゃねぇよっ!行けよ!［ファング］!」

サーシェスは腰に装備されていた誘導兵器を展開し、かなりのスピードでユウイチに迫る。

「ぐっ!この程度!」

ユウイチも［ウィスプドラグーン］を十二基展開し迎撃させた。

「十二基!?やるじゃねえか!」

サーシェスと戦っている間にも青いカラーの［ガデッサ］が襲いかかってくる。

「お前等もイノベイターか?」

右手の［エクスカリバー］でサーチェスに対処し、左手の［エクスカリバー］で青い［ガデッサ］に対処する。

「そうよ!私はアニュー・リターナー!あなたの言う通り、イノベイターよ。」

そう言うなりアニューの［ガデッサ］は体から［ファング］を展開しサーシェスの［ファング］と共にユウイチを翻弄する。

「ふん!まだまだぁ」

ユウイチは二機から離れ追撃してくる［ファング］を［エクスカリバー］で斬り墜としていく。

「逃がさないっ!ガンダムゥゥ!」

いつの間にか［レグナント］が近づいていて爪状の［ファング］を射出してきた。

「ぐっ!こいつのパイロットも女!?」

「私はルイス・ハレヴィ。ソレスタル・ビーングではないとはいえ、ガンダムに乗っているならっ。」

「なんだとっ！？」

ルイスは更に曲がるビームとワイヤーを放った。

「くそぉぉぉ！！」

一方キラもリボンズを相手に奮戦していたが「ガデッサ」が二機と［アヘッド］が一機加わった為に苦戦していた。

「くっ！」

「援護させてもらいますよ。リボンズ・アルマーク。」

「はぁぁぁぁっ！！」

一機の［ガデッサ］が［ＧＮメガランチャー］を充電し、もう一機は手の爪からビームサーベルを放出し迫ってきた。

「くそっ！」

「ピンチだね。キラ・ヤマト。」

更には［アヘッド］もビームサーベルを抜いて斬りかかった。

「キラ・ヤマト！世界恒久和平に協力しないのならここでっ！」

「その声！サイ！？サイ・アーガイル？」

「私の名前はアンドレイ・スミルノフ。サイという名前じゃない

！」

一方、旅館でもこの戦闘は見えていた。

「あれって、キラとユウイチ！？」

遠く行われている戦闘をハイパーセンサーで見ていた一夏が声を上げた。

「あの二人なんでっ！？」

「一夏！僕達も！」

ＩＳの準備をすませていたシャルロット達はキラとユウイチを助ける為に飛び立とうとしていた。

「ああ！行こうぜ。」

六人がＩＳを展開し飛び立とうとした瞬間、千冬とラクスに呼び止められる。

「まて、お前等！！」

「千冬姉っ！！」

「何処へ行くつもりだ？」

「決まってる。二人を助けるんだ。」

するとラクスが一夏達に現実を突きつける。

「今の私達が行っても逆に足手まといになってしまいますわ。」

「そんなことっ！！」

「では、どうすると言うのだ？あの戦闘の中に入っていけばお前等は瞬時に落とされる。つまり、お前等はあの二人の邪魔になるだけだ。」

「くっ！！」

結局五人は助けに行くのを諦めた。だが、一夏はどこか納得できないところがあるらしい。

「大丈夫だ。あの二人はやられない。お前もしっているだろう？」

「分かっているけど。」

多分、一夏は力を手にしたのにまだ守られている事が許せないのだろう。

「くっ！あの機体の速さは一体？」

［ガデッサ］のパイロット、リヴァイヴ・リバイバルはフリーダムの性能に驚愕していた。

「くっ！イノベイター三人がかりでも苦戦するとはっ！」

いくら［ＧＮメガランチャー］を撃ってもかするどころか一発も当たりはしない。そして僚機の［ガロッゾ］も必死に追いかけるが逆

に引き離される。

「くっ！この［ガデッサ］タイプ二機がこうも苦戦するとは。」

リボンズも奮戦しているが高速機動している敵の誘導兵器に悪戦苦闘していた。

「この二人、もしかしたらかなりの強敵かもしれない。」

一方サーシェスも［ストレイド］のスピードに翻弄されていた。

「くそっ！なんだっあのスピードはよっ！」

今は殆どの［ファング］を落とされ、武器は［ＧＮバスターソード］しか無い。

「くっ！この野郎っ！」

サーシェスは斬りかかったが避けられ、逆に［ストレイド］の光の翼からの一斉射撃をまともにくらい、一気にシールドエネルギーが消える。

「くっ！これまでかっ！」

残りのシールドエネルギーが１０しかなくなってしまい、仕方なく撤退する事にした。

「くそっ！予想以上だぜ。」

「くっ、まさかあの男がやられるとは。」

まさか三機で掛かってこうも押されるとは思っていなかった。これでは確実に消すどころか自分達が殺られてしまう。

「くっ！いくらこの［ガッデス］が戦闘向きではないとは言え」

不意にリボンズ達のほうへと目をむけるとやはり苦戦しているようである。

「ハレヴィさん撤退しますよ。」

すると、ルイスは驚きの声を上げた。

「なっ！私はまだっ！」

「でもそろそろ二機のシールドエネルギーも危ない頃です。ここは撤退したほうが。」

確かに［ガッデス］と［レグナント］のシールドエネルギーは１００を切っている。

「くっ！まさか、三機がかりでも勝てないなんて。」

ルイスとアニューはなにか［ストレイド］のパイロット、ユウイチ・Ｓ・レイブンにうそ寒いものを感じながら撤退していった

「なっ！三人が撤退していく！？」

［ガラッゾ］のパイロットのヒリング・ケアは［ストライクフリーダム］と戦闘しながら三人が撤退していく事に驚く。

「くっ！イノベイターなのに！たった二機に圧倒されるなんて。」

すると［ストライクフリーダム］は二つのビームライフルを繋げてロングライフルにして、撃ってきた。

「しまったっ！！。」

近接戦闘をしようとしていたヒリングは大出力のビームをまともにくらい、シールドエネルギーが大幅に減少する。

「くそっ！人間のくせに。」

ヒリングも仕方なく撤退していく。

「まさか！ヒリングがやられるなんて。」

リヴァイヴはヒリングの撤退に驚きながらもリボンズと戦うキラに［ＧＮメガランチャー］で狙いをつける。

「これでっ！！」

「させるかっ！！」

［ストレイド］の接近に気付かなかったリヴァイヴは［ＧＮメガランチャー］を破壊され、胸部に［パルマフィオキーナ］をくらってしまう。

「くっ！限界か。」

リヴァイヴもシールドエネルギーが残り少ない為、撤退する。

「くっ！人間風情がっ僕にたてつく気か！？」

リボンズは叫びながら［ＧＮバスターライフル］を連射するが避けられてしまう。

「これでっ！！」

キラは二重瞬時加速［ダブルイグニッションブースト］に入り一瞬でリボンズの［リボーンズガンダム］に接近し、［ＧＮバスターライフル］を切り裂いた。すると諦めたのかリボンズとアンドレイの［アヘッド］は撤退していく。

「撤退・・・諦めたのか？。」」

「キラ！大丈夫か？」

今回はキラ達の勝利で終わったが次はどうなるか分からないだろう。

「はぁ、はぁ、はぁ、なかなか危なかったね。」

「だなっ。」

その後、二人は旅館に戻り一夏達の質問攻めに悪戦苦闘していた。

そして、臨海学校も終わり、その帰りにパーキングエリアで止まったのバスの中での事。

「織斑一夏君はいるかしら？」

入って来たのは金髪の見知らない女性だった。

「あっ！俺ですけど」

すると女性は興味津々に一夏を眺める。

「あ、あの、あなたは？」

「私はナターシャ・ファイルス。銀の福音［シルバリオ・ゴスペル］のパイロットよ。キラ君とユウイチ君にはもう挨拶はしたわ。」

それはたぶんキラがナターシャをキャッチした後の話だろう。

「えっ・・・・」

困惑している一夏の頬になんとナターシャの柔らかい唇が触れたのだ。

「ちゅっ・・・これはお礼。ありがとう。白いナイトさん」

「え、あ、う・・・」

「じゃ、またね。バーイ」

「は、はぁ・・・」

ナターシャがバスを降りた後、一夏は恐る恐る後ろを見ると。

「一夏っ、これはどうゆう事だ？」

「嫁としての自覚が足りんようだな。」

やはりそこには黒い修羅と銀の修羅が仁王立ちで降臨。

「ごめんなさい。」

「「許さん！。」」

次の瞬間、一夏の悲鳴がバスの中に響き渡った。

「大変だね。一夏は」

「仕方ないですわね。」

キラの近くに座っているセシリアとシャルロットが呆れた様にため息をついた。

その後、案の定、学園に帰るまでバスの中は一夏にとって地獄だったとさ。

対話と対立（後書き）

次回はまだ未定です。

騎士道と武士道（前書き）

今回はユウイチがメインで

騎士道と武士道

ここはＩＳ学園の外にあるカフェ、そのオープンテラスの真ん中にあるテーブルでユウイチは一人でコーラを飲みながらノートパソコンを操作していた。

「やれやれ、やっぱりあいつ等の情報はねぇな。」

あいつ等とは勿論、臨海学校で戦ったイノベイター一味である。

「だけど、あのアリー・アル・サーシェスと名乗った男は傭兵だな。」

根拠は無い。でもユウイチは何かあの男に共通している何かを感じたからだ。

「それにＧＮ粒子・・・調べる事は色々ありそうだな。」

ユウイチはため息をつく、その時ユウイチはある事に気付いた。

「なんだ？・・・」

さっきまでいた客が全員いなくなっていたのだ。今日は日曜日だからか結構な数の人数がいた筈なのだ。それが突然いなくなるのは明らかにおかしい。

「？・・・」

ユウイチが首を傾げているとカフェの入口のドアが開きスーツを着た男女三人組が入ってくる。男女はまっすぐにユウイチの所へと来るとテーブルの席に座る。

「なんだ？お前等？」

「これは失礼。私の名はグラハム・エーカー。」

「私はルイス・ハレヴィ。」

「私はアニュー・リターナー。前に会ってるわね。」

ユウイチは明らかに警戒心を抱いた目で三人を睨んだ。

「噂をすればなんとやらだな。イノベイターがなんの用だ？」

「因みに言うが、私はイノベイターではない。今回、キミの前に現れたのは警告を告げに来たのだ。」

「警告？」

「そう、今後一切私達のやることに手を出さないで欲しいの。もし邪魔をしたらあなたの仲間の命の保証はできないわ。」

と・・・アニューが警告をしてきたが、ビビるユウイチでは無い。

「おいおい・・・そんな事は約束できないな！それにキラとラクスが戦うって言うなら従うしかないしな。それにリボンズ・アルマークが言っていた破壊と再生だっけ？それも何か胡散臭いしなぁ。」

ユウイチは残っていたコーラを飲み干した。

「まぁいいです。一応警告はしましたよ。」

アニューは立ち上がろうとしたがグラハムとルイスはイスに座ったままだ。

「どうしたんです？二人共？」

すると黙っていたルイスが口を開く。

「なぜ貴方は戦うのですか？それに私達は世界を平和にするために戦っているというのにそれを邪魔する気？」

ユウイチは首を傾げて見せた。

「そうかもしれないな。だけど、この世界の奴らはどう思うかな？無差別に基地を攻撃する事が平和に繋がるのか？」

「それは・・・」

「もういい、ルイス・ハレヴィ准尉。今度はこっちの番だ。」

グラハムは立ち上がり右手を差し出して来た。

「真剣な果たし合いを所望する。」

「果たし合い？なんでいきなり？」　するとグラハムは妙に迫る気迫と熱のこもった声で答えてきた。

「私は前の世界でガンダムに苦汁をなめさせられた。だからこそ私にとってガンダムを超え、倒す事こそが私の宿命であり運命なのだ。」

ユウイチはやれやれといった感じで聞き返す。

「といっても俺はアンタらの前の世界のガンダムのパイロットじゃないし。」

「だが、リボンズ・アルマークから聞いたが、キミもガンダムのパイロットなのだろ?」

「血の気が多いねぇ侍さんよ。」

「侍だと?」

ユウイチはふふんと鼻を鳴らす。

「あんたの口調と物腰が侍みたいだからな。」

「確かに私は戦いをする者だけが到達する極みと武士道を探してはいる。」

「なるほどねぇ。しょうがない受けてやるよ。あんたが武士道なら俺は騎士道だ。」

「有り難い。」

「でっ?場所はどうする?まさかここで戦う訳ではあるまい?」

「来れば分かる。」

そう言うと三人はカフェを出ていった。仕方なくユウイチも三人に続く。

カフェを出て行き、通りを四メートル進んだ所で人気の無い露地に入る。そして更に五メートル行くと都会には似合わない空き地に出た。

「おい、こんな所でやるのか？」

「いや、ここから上空に上がるんだ。」

そして、グラハムはＩＳを展開した。

「ほう、まるで武者鎧みたいなＩＳだな。」

「名は［スサノオ］、我が盟友の作だ。」

そう言って、グラハムと既にＩＳを展開していたルイスとアニューが上空に上がる。

「やれやれ」

ユウイチも素早く［ストレイド］を展開しＶＰＳ装甲をＯＮにして空に舞い上がった。

「いざ、尋常に勝負！」

「くっ！」

グラハムは［シラヌイ］と［ウンリュウ］を抜刀し、斬り掛かってくる。ユウイチは素早く［エクスカリバー］を抜いて防御の構えを取り二機は凄まじいつばぜり合いに入る。

「くっ！あの二人は観客か？」

ルイスとアニューはＩＳを展開しては入るが戦闘に参加する気配は無い。

「そうだ。私の戦いは基本は一体一。邪魔はさせない。」

「それは有り難い事でっ！」

ユウイチは［スサノオ］を蹴り飛ばし、一気に懐に入ると右脇腹に膝蹴り、頭部に肘鉄を食らわせた。

「この程度っ！！」

グラハムは膝蹴りは直撃したが［シラヌイ］で肘鉄を回避した。

「はぁぁぁぁ！！」

更に二本での連続攻撃に以降する。右から左、左から下、下から上へと攻撃していき、最後に強烈な脇腹に構えて水平に実剣を振る水平斬りをヒットさせる。

「ぐあっ！！」

連続攻撃は避わしていたが最後の水平斬りは直撃してしまった。

「マジかよ！ＶＰＳがっ！」

よく見るとＶＰＳ装甲が若干溶けている。

「まさか・・・実体剣にＧＮ粒子を纏わせてビームサーベルみたいに熱で斬るとはな。」

ＶＰＳ装甲がネクスト粒子で強化されていなかったら完全に斬られていた。とは言っても絶対防御があるから問題は無いが。

「なるほど、これが噂のＶＰＳ装甲か。」

そう言いながらもグラハムは攻撃の手を緩めない。だがユウイチも［エクスカリバー］を駆使して全ての攻撃を外させて行く。そしてユウイチはグラハムの連続攻撃の隙をついて斬撃を食らわした。

「ぐっ！話に聞いていた通りだな。」

更にユウイチはドラグーンを起動。八基を複製し、合計十基を差し向ける。

「くっ！！これはっ」

かなりのスピードで動くドラグーンを相手に少し翻弄されるグラハム。そればかりかドラグーンはビーム刃を形成し接近戦と射撃戦の両方でグラハムを苦戦させる。

「卑怯な！」

ドラグーンを破壊したとしても破壊された分、粒子で複製するため数は減らなかった。

「これではキリがない。さすればっ！」

「っ！！」

ユウイチは異様な気配を感じ取りドラグーンを全基戻した。

「トランザム！！」

なんとグラハムが叫ぶと［スサノオ］が赤く発光し始めたのだ。

「なんだ？トランザム？車の名前じゃなかったか？」

しかも赤く発光した［スサノオ］はいくつもの幻影を発しかなりのスピードで襲来する。

「速い！」

［スサノオ］の袈裟斬りを食らったユウイチは後ろに大きく吹っ飛ばされた。

「はぁぁ！！」

［スサノオ］の胸部分がパカッと開き、中から砲口らしき物が出てきて巨大な光の玉を形成して発射した。

「ぐあっ！！」

ビームシールドで防いだものの［ストレイド］の頭部が破壊されユウイチの素顔が出てきた。

「どうした？少年！それで全力なのか？これではあの少年には遠く及ばない。」

「くっ！少しなめてたな。」

ユウイチは体勢を崩したままだったがそこから一気に二重瞬時加速［ダブルイグニッションブースト］に入り、グラハムの背後に移動すると二本の［エクスカリバー］と脚部にある［グリフォン２ビームブレイド］での連続攻撃を繰り出す。

「ぐっ！そうだ！こうでなくては！」

グラハムは腰部と肩部、更に頭部を破壊されながらもユウイチを蹴り飛ばし［シラヌイ］と［ウンリュウ］を連結させた強化ブレードで思いっきり振りかぶりユウイチを縦に切り裂こうとした。

「斬り捨て御免！！」

「くっ！！この力だけは使いたくなかったがっ！」

直後、ユウイチの髪と目の光彩部分が蒼白く輝きだしたのだ。それは明らかにキラのＳＥＥＤ能力とは違う。

「！？」

「！！」

「っ！」

観戦していたルイスやアニュー、当然グラハムも驚いたがグラハムは構わず刃を振り降ろす。

「・・・」

ユウイチは無言で刃がむき出しの自身の頭部に直撃する前に［スサノオ］の両腕を掴み［パルマフィオキーナ］で装甲を破壊する。

「なんの！？」

だが、装甲は砕け散ったが腕自体が無くなった訳では無いのでグラハムは構わず強化ブレードを振り降ろす。

「はぁぁぁぁ！！！」

［シラヌイ］の強化ブレードの刃がユウイチの生身の頭部に到達したと思った瞬間、なんと［ストレイド］が量子化して消えたのだ。

「なにっ！！」

「そんな！ダブルオーライザー以外で量子化できる機体があるなんて！」

「っ！」

するとグラハムの背後にユウイチが現れ、至近距離でドラグーンハイマットフルバーストを直撃させた。

「くっ！！」

至近距離で２０近くのビームを受けてしまい、ほとんどのシールドエネルギーが無くなってしまった。

「ははははっ！さっきアンタが斬ったのはデコイだよ。」

「デコイだと！？」

「そっ！デバイスドライバ［デコイ］だ。」

今やＣ．Ｅの動力源になっているネクスト粒子は物を複製する技能があり、医療などに役立っている。今回の［デコイ］はドラグーンの複製と同じようにネクスト粒子で質量のある分身を作り出し、それを囮に使う能力である。パイロットの能力が高ければ動かす事も出来るがユウイチはまだその域に達していない。

「小癪なっ！」

「止めておけ。もうシールドエネルギーが無いだろう？」

ユウイチの言うとおり［スサノオ］のシールドエネルギーは残り１０しかない。因みに［ストレイド］のシールドエネルギーは残り１２０だ。

「くっ！ここまでかっ」

グラハムはユウイチの蒼白く変化した目を睨みつけた。

「ミスターブシドー！ここまでです！この空域に［ストライクフリーダム］と［姫桜］が来ますっ。」

レーダーを監視していたアニューが警告してくる。

「なにっ！水入りかっ！」

「なっ！お前等、もう［姫桜］の事を？」

グラハムはそれには答えず機体を翻し撤退していった。ルイスの［レグナント］とアニューの［ガッデス］もそれに追随して撤退していく。

「ユウイチっ！！」

その直後、［ストライクフリーダム］と［姫桜］を身に纏った、キラとラクスが駆け付けて来た。

「キラ！ラクス！なんでここに？」

「なんでって・・・あんなに激しく戦闘すれば誰でも気付くよ。」

「お怪我はありませんか？」

ユウイチは二人に激しく心配されたが怪我は無いと二人を落ち着かせた。

「やれやれ・・・まさか、あれを出すハメになるとは。」

もう元の色に戻っている金髪をいじりながらユウイチはため息をついた。

「しょうがないねぇ。」

一方グラハム達はというと。

「あれは一体なんなのだ?」

案の定、ユウイチが出した不思議な力について撤退しながら議論していた。

「分かりません。」

「これはリボンズに報告したほうが・・・」

アニューはしばし考え込む。

「どうした?」

「どうしました?」

アニューは一つの答えを導き出したようだ。

「もしかしたら彼はイノベイターとは違う変革を遂げた人物なのかもしれません。」

「イノベイターとは違う?」

「まだ確証は持てませんが。」

「でも、もしそうだとしたらどうなるんです？」

「それは分かりません。でも良くない事は確かです。」

アニューは一層、ユウイチという存在に違和感を覚えた。

「ユウイチ・S・レイブン・・・彼は一体？」

気付くといつの間にか雨が降り出していた。どんよりした空と海、それはまるでこれからの事を暗示しているようにも見えたのだった。

騎士道と武士道（後書き）

今年は金の出費が多いですね

ネクスト粒子とＧＮ粒子（前書き）

う～ん、粒子学が難しくて今回の話が薄くなってしまいました。

ネクスト粒子とGN粒子

某国某所、洋風の山岳地帯に似合わない日本の屋敷の玄関の前にキラとラクスは立っていた。

「うん、ここがそうだね。束さんの現住所。」

「結構、長旅でしたね」

飛行機で四時間、バスで五時間揺られて、この険しい山岳地帯をＩＳで飛行してきたのだ。それは疲れるって。そしてキラとラクスに最後にある試練が待ち受けていた。

「え・・・えっと。」

「ロッ・・・ロボットですの？」

一昔前の足軽みたいな格好をしたロボットがキラ達の前に立ちはだかっている。

「やぁやぁ！お二人さん！やっと来たね。」

玄関の戸が開き束が現れた。

「たっ束さん！」

「ゴメンゴメン！ばんぺい君2号のデータベースに二人をまだ入れてなかったよ。」

二人は首を傾げた。

「「ばんぺい君2号？」」

「うん、ある人が作ってくれたの。」

その後、三人は美しい日本庭園を抜けてリビングに向かう。

「今日、ゆうくんは～？」

「ストレイドの修理に忙しくてこれませんですの。」

「ああ！例の・・・」

束にもイノベイターの事はキラ達から聞いていた。因みに今回二人が訪れた理由もイノベイター関連だ。

「世界の変革者・・イノベイター。なんか嘘臭いよねぇ」

「はぁ・・・」

束は振り返りキラにキラキラとした目で詰め寄る。

「それよりゆうくんから聞いたよ～！きっくんてばさらに二人の彼女を作ってたんだってぇ～！」

言わずと知れたセシリアとシャルロットである。

「まぁ・・・」

「しかも二人とも巨乳なんだってぇ？このおっぱい星人めっ！」

なんだこの人？

「そんな事より本題に入りますよ。」

キラはリビングに入ると［ストライクフリーダム］の腕部分だけを展開し束にユウイチから渡された映像記録と［ストライクフリーダム］自体に入っている映像記録を見せた。

「ふむふむ・・・なかなかの機動性だね。この敵の機体。しかも可変機能もあるなんてねぇ」

［レグナント］と［グリフォンレイダー］と［リボーンズガンダム］の映像を見て関心する束。

「キラ！束さん！今日はすき焼きにしますからちょっと待って下さいね。」

台所ではばんぺい君と一緒にラクスが料理しているようだ。

「しかもこのトランザムという能力が厄介そうです。」

「そうだねぇ。実際、ゆうくんが手こずったんでしょ？」

あの後、ユウイチ自身も手こずるとは思いもしなかったようで悔しそうな表情をしていた。

「高圧縮したＧＮ粒子を一気に解放して機体のスペックを三倍に引き上げてるね。」

更に束はＧＮ粒子についてもちょっとだけ調べていた。

「ＧＮ粒子は木星じゃないと作れないようだね。でも彼らのＧＮ粒子は違う。どうやらオリジナルのＧＮ粒子を真似て作った擬似ＧＮ粒子だね。さて、オリジナルのＧＮ粒子はどこにあるのやら。」

「木星？なんでそんな所から？」

束は無邪気な顔でキラにある事を言ってきた。

「でねぇ～、ネクスト粒子にもあるもの凄い事があるんだ。」

「凄い事？」

「うん！なんとネクスト粒子は空間に作用するんだよぉ」

「えっ？」

「これ見て！」

束は複数のタッチパネルとモニターを空中に呼び出した。見ると一つのモニターである事が起きている。なにか白い塊の回りが回転したかと思うと空中に穴が空き始めたのだ。

「これは？」

「これはねぇ、高濃度圧縮したネクスト粒子に高エネルギーと左回りにスピンを与えたんだよ。すると空間に穴が開いたという訳さ！」

？

「空間に穴？」

「そう！ネクスト粒子は空間に作用できる粒子という訳。」

「でも空間に穴だなんて・・・」

束は更にニヤニヤする。

「でねっネクスト粒子はＧＮ粒子とひとつ共通点があるんだよ。」

「共通点ですか？」

「それはね、ネクスト粒子とＧＮ粒子もドライブの中での発生方法が同じというわけさ！つまりネクスト粒子はネクストドライブの中で重粒子を蒸発させずに質量崩壊をおこさせ、陽電子と光子「ネクスト粒子」を発生させるんだけどＧＮ粒子も全く同じ方法なんだよ。これがあの莫大なエネルギーの源でもあるね。」

まぁでもＧＮ粒子もネクスト粒子も性質は違っても同じ変異ニュートリノなのだから不思議では無い。

「この束さんが一番気になるのはこのネクスト粒子を作ったＩＦ社だね。複製する能力に空間にも作用する能力Ｅｔｃ．」

明らかにＣ．Ｅの技術を超えた技術である。だが、ＩＦ社はそれを人工的に作り出したのだ。

「皆さんご飯ですよ。」
ラクスがすき焼きを持ってきた。肉は松阪牛らしい。
「わぁ！美味しそう！」
束は一っ飛びでテーブルにつく。
「んぐっ・・・うまうま～」
「キラも美味いですか？」
「うん、美味しいよ。セシリアとシャルにも食べてほしかった。」
とは言っても事情を知らない彼女達を連れて来る訳にもいかない。
「あっ！そうだ！きっくん。もしかしたらＩＦ社とネクスト粒子が前の世界に帰る鍵かも知れないよ。もしかしたらＩＦ社が犯人かも知れないね。」
キラは思わず噎せた。
「ゲホッゲホっ、それはどうしてですか？」
「だって全長１８メートル近くの機体数十機とあのデストロイを飲むこんだ穴がもしネクスト粒子の影響ならそれだけデカイ機材も必要でしょ？それを用意できるのは開発したＩＦ社ぐらいだって。」
キラは納得して黙った。
「まぁ、二人とも今夜はゆっくりしていってね。」

その後、二人は色々と遊びながら久しぶりの夜を楽しんだとさ

ネクスト粒子とＧＮ粒子（後書き）

次回はリボンズ達の話にしようと思います。

革新者達の日常（前書き）

リボンズ達の話です。

革新者達の日常

ここは太平洋上のどこかの島。表向きは何もない無人島だか実はリボンズ達の隠れ家でもあった。この島以外にも複数の島がありそれらはアロウズ部隊の隠れ家になっている。

「ふむ・・・」

その島の地下でリボンズはアニュー達が持ち帰ったユウイチの力について調べていた。

「やはりイノベイターと違う力だ。でも根本的に一緒なのか？」

ユウイチの経歴を調べたがやはり何も分からなかった。

「キラ・ヤマトとラクス・クラインを捕まえるのは簡単だと思ったがこんな異質な力に出会うとは。」

記録映像ではユウイチの髪と目の光彩部分が蒼白く発光している。イノベイターやイノベイドなら目の光彩部分だけが輝くが彼は髪まで輝いているのだ。

「話に聞いたＳＥＥＤでも無い。かといって純粋種のイノベイターでもない。」

リボンズが堂々巡りを始めた時、後ろにある大きな扉が開かれた。

「答えは見つかりましたか?リボンズ・アルマーク。」

入ってきたのは藍色というか薄い紫色というかそんな色の髪をしたロングヘアの女性だった。年はユウイチと同じ二十歳だが、何処か二十代とは思えない落ち着きがある。

「いや、まだ見つかっていないよ。沙藤美哉。」

沙藤美哉・・・彼女こそが・・いや、彼女とその夫である沙藤健人がリボンズ達の協力者であり、キラ達をこの世界に飛ばした張本人である。

「そろそろ教えてくれてもいいんじゃないか?貴女達の事、キラ・ヤマトとラクス・クラインの保護の理由、そしてユウイチ・S・レイブンの正体。」

美哉は左手の薬指に納められている指輪をいじりながら答えた。

「いいでしょう。貴方達にも知る権利はありますから。」

そう言って、美哉は話始める。

「全ての事の発端は・・・」

その頃、上のビーチではイノベイター・・もといイノベイドのリヴァイブ達やエクステンデットのオルガ達がバーベキューをしていた。

「ねぇ、アンタ達三人て他にやる事無いの?」

ヒリングが小説に読み耽っているオルガにちょっかいを出していた。

「ああ？邪魔だよ！どっか行けよ！」

「だって、他の二人も無反応だし・・・ねぇ、寂しいなら付き合ってあげようか？」

「うっせぇよ！どっか行けよ！それに寂しくなんかねぇ！」

「ちぇ～、せっかく水着用意したのに台無しじゃない。」

バーベキューをしている方向に目を向けると男はいるのだがそのメンツが微妙だ。一人はアロウズの制服のままで更に仮面をつけているミスターブシドーはノリがよくない。その横にいるビリー・カタギリはぶっちゃけ彼女のタイプではないらしい。

他にも暑苦しい格好をしているロングヘアの男、名前はロンド・ギナ・サハクだったか・・正直近寄り難いタイプだ。この中でいいといったらノリのいいサーシェスか既婚者だがイケメンの沙藤健人だ。

「ああ、いいですか？お嬢さん。」

爬虫類を思わせる口調で現れたのは最近アロウズに合流したムルタ・アズラエルである。彼は王留美の変わりに資金を調達してくれるマネージャーのような存在だ。更に後ろにいるオルガ、クロト、シャニの保護者的な存在でもあるらしい。

「キミ達！もう少し愛想良くできないんですか？いくらγグリフ

ェタンの鎖が無くなったからといって好き放題やられては困りますよ。」

アズラエルは子供に言い聞かせる様にさとすが三人は普通に無視してゲームなり音楽に没頭していた。

「あんたも大変なのね？」

「ほんと困ったものです。」

「まぁ、いいじゃありませんか？」

今度はやはり資金調達をしてくれるエージェント、ロード・ジブリールが現れる。

「戦場で思いっきり頑張ってくれてるのでしょう？」

この二人、実は元死人なのだ。だけどリボンズの協力者の沙藤美哉と沙藤健人がネクスト粒子の複製機能を使い二人を生き返らせたのだ。この二人以外にも多数の人数を生き返らせているらしい。何を隠そうアニュー・リターナーも死んだ身なのだか彼女達の努力で生き返っている。

「ヒリング・・・どうも変な男に絡まれるクセがあるな。」

二人に絡まれているヒリングを見たリヴァイブが心の中で手を合わせた。

「ハレヴィ准尉、どうした？気分でも悪いのか？」

リヴァイブがルイスを見ると黙ったままなので一応声を掛けてみた。

「いえっ！ただ疲れただけです。」

いつもならアンドレイ・スミルノフがいるのだが彼は今出ている。

「辛かったら休んだ方がいい。」

「大丈夫です。」

なら大丈夫なのだろう。リヴァイブは再び肉を口に入れた。

そして、再び地下室では話を聞いていたリボンズが驚愕に顔を歪ませていた。

「そんな事が・・・」

「全て事実です。」

リボンズは思わず美哉を睨み付ける。

「まぁいい、これでわかったよ。貴方達がキラ・ヤマトとラクス・クラインを気にする訳とユウイチ・S・レイブンを危険視する訳が。」

「ユウイチ・S・レイブンは貴方達と私達と最も近く最も遠い存在ですから。」

リボンズは目の前のリンゴを手に取り口に運ぶ。

「でも、どうするんだい？ユウイチ・Ｓ・レイブンは僕が対処するとしてキラ・ヤマトは？」

「ついて来てください。」

美哉は部屋を出ていき、リボンズもそれに続いた。しばらく歩いていくと研究室みたいな部屋にたどり着いた。

「キラ・ヤマトの事は彼に任せましょう。」

部屋に入ると中にはベッドの様な水槽がおかれている。リボンズが中を覗くと見事な金髪をした男性が入っていた。

「彼は？」

美哉は青く発光した水に浸かっている彼を哀しそうな目で見る。

「彼は世界の競争に創られ、キラ・ヤマトと深い因縁を持ち、そして彼に殺された。彼の名はラウ・ル・クルーゼ。」

リボンズは興味津々に今はまだ眠っているクルーゼを見た。

「あなたはこれから彼とコンビを組んで下さい。」

美哉は待機状態のＩＳを撫でながら目を細める。

「これが彼の新しい力です。」

「彼のガンダム？」

美哉は黙って部屋を出ていこうとした。

「そういえば、ある情報が入りましたよ。」

「情報？」

美哉は振り返らず答えた。

「貴方と因縁のあるソレスタルビーイングがC．Eのアスラン・ザラ達と合流したと・・・」

そう言って、美哉は出ていった。

「彼等が・・・C．Eに・・・」

一人に残されたリボンズの顔には珍しく苛立ちが含まれていた。

革新者達の日常（後書き）

今回、出てきた二人はセキレイのあの二人がモデルです。

彼女は生徒会長（前書き）

生徒会長登場！

彼女は生徒会長

夏休みが終わり、秋晴れの9月3日、ＩＳ学園のグラウンドでは1組と二組の合同実戦訓練が行われていた。

「はぁぁぁぁ！！」

「おぉぉぉぉ！！」

対決しているのは鈴と一夏だ。最初は一夏が優勢だったが（白式）の燃費の悪さが災いして鈴に巻き返しを食らっているのが現状だ。

「やれやれ・・・（白式）の当分の課題だな。」

「そうだね。解消の為には（紅椿）の（絢爛舞踏）が必要なんだけど。」

「ですが・・・あれから箒さんは一度も発動できていない様子ですわね。完璧に発動できるまで（姫桜）で回復するしかありませんわね。」

「そうだね・・・」

キラがふと視線を泳がせると何やら携帯に怒鳴りつけているセシリアが写った。

「ああっ！もうっ！・・・」

「どうしたのセシリア？」

会話が途切れたタイミングを見計らいキラが話しかける。

「あっ！キラさん・・・なっなんでもないですわ。」

乾いた笑いで誤魔化そうとするがキラ達の目は誤魔化せない。

「もしかして・・・イギリスに実弾系の装備を頼んでたの？」

「ギクッ！！」

明らかにセシリアがギクッとした。

「なるほどなぁ！確かに一夏と戦う時はエネルギー兵器だけというのは分が悪いもんな。」

「最近、セシリアさんの成績が落ちてきてますわよね？」

確かに成績のランキングをしたらセシリアは下の方だ。

「これ以上成績が落ちたらキラさんの恋人としてお恥ずかしいですわ。」

セシリアがどよんとした表情になってしまった。

「大丈夫だよ。僕は気にしないし。」

「わたくしが気にするのですわ！！」

セシリアは語気を強めてキラに詰め寄る。確かにセシリアの性格からしてこれ以上の成績の低下はプライドが許さないのだろう。

「キラー！！どうしたの？」

騒いでいる四人が気になったのかシャルロットが駆け寄ってきた。

「あ！シャル！実はね・・・」

その後、四人がかりでセシリアを慰めて授業は終了した。そして放課後の事。

寮の廊下でキラとユウイチは話しをしながら食堂に向かっていた。

「えへへ・・・。」

「ユウイチってホントにコーラ好きだよね。」

するとユウイチの顔に影が降りる。

「死んだ弟が好きだったんだ。だからかな・・・以来飲み続けてるんだ。」

キラはしまったという顔になった。

「ゴメン・・・弟がいたんだ。」

「いいよ！昔の事だし。」

しばらく話してもうすぐで食堂と言う所で二人は立ち止まる。

「ん・・・？」

二人は同時に振り返る。そこには誰もいない。だが、二人はそこに気配を感じ取っていた。

「尾行は良くないと思いますよ。」

「そうそう、追いかけられるのは面白くないからな。」

すると廊下に置いてあるデカイ植木鉢から一人の女子が出てきた。水色の髪、結構な膨らみをしている胸、ストッキングを履いて大人な感じを醸しだしている足。どれをとってもかなりのナイスバディだ。リボンの色が二年のだから多分・・二年だろう。

「あはっ！ばれちゃった？」

てへっと舌を出してイタズラがバレた子供の様に笑う彼女。

「貴女でしたか・・更織楯無さん。」

「へぇ～。じゃあアンタがこの学園の生徒会長で更織家の十七代目当主か！」

「うん、楯無って呼んでねぇ。たっちゃんでも可。」

そうこの人こそが生徒会の長であり。この学園の最強の人物である。ただし・・この二人を除いてではあるが。

「でっ?その楯無がなんで俺たちを尾行なんてしてたんだ。」

ユウイチは一応年上なので呼び捨てで話す。

「いやぁ、実はね～キミ達二人に興味があるんだ。この私を差し置いて、学園最強・・いやっ!世界最強なんて言われてるキミ達二人にね。」

楯無は扇子を開く。するとそこには（興味）という字が書かれていた。

「そんな事を言われてたんですか?」

キラは知らなかったのか首を傾げる。

「そうよ!なんてったって、あの織斑先生に言われてるのよ!」

「で?本当の狙いは何なんだ?」

楯無はニッと笑い、口から見えた白い歯がキラリと光る。

「まずはキラ君!私と戦いなさい!もし私が勝ったら・・ユウイチ君と戦うわ。」

再び扇子が開かれ、今度は（勝負）とある。

「あ～!やっぱりこうなるのか～。」

「どうする?僕はいいけど?」

「キラが良いって言うなら別に良いけど。」

また楯無は二シシッと笑う。

「じゃあ、明日は休みだから午前十時に第3アリーナにね。」

そう言った後、楯無は手を振りながら走り去っていった。

「やれやれ・・・。」

「大変だね。」

二人は食堂で夕飯を食べた後、それぞれの部屋に戻る事にしたようだ。

「ふぅ～、明日も大変だな。」

そう言うとキラはパソコンの電源を入れた。

「キラ？どうしましたの？」

ちょうどシャワーを浴び終えたラクスが話しかけて来た。彼女はパジャマを着ているもののお湯を浴びたその体からは微かな熱とシャンプーかボディソープの良い匂いを放っていて、キラの鼻をくすぐる。

「いや、さっきね。食堂の前で勝負を申し込まれて。」

「勝負ですか？」

何やら廊下からドタドタと足音が聞こえてきた。

「キラッ！明日っ勝負するって本当なのか？」

案の定、一夏達だった。少しは静かにできないのか？

「うん。確か・・・更織楯無っていう人。」

「それって生徒会長じゃない。しかもロシア代表って話よ。」

息を切らしながら鈴が詰め寄る。

「まぁね」

キラは慣れた手付きでパソコンを弄り始める。

「え～と、出た出た。使用ＩＳは（ミステリアス・レイディ）主な特長は攻防両方に使えるナノマシンで制御された水だね。」

「キラさん？それはもしかしてハッキングですの？」

「うん。まぁ大丈夫だよ」

何が大丈夫なんだろうか？

「とにかくこの水は厄介だね。まずはこの水の対処する方法をみつけなきゃ。」

結局・・・皆で考えて１１時ぐらいに皆が帰っていった。そして次の日。

「今日も結構な人数がいるな。」

ユウイチがアリーナの観客席を見渡すと結構な人数がいた。それは多分、生徒会長の楯無とキラの試合だからだろうか？

「キラ・・・大丈夫でしょうか？」

「　大丈夫だって。心配すんな。」

ユウイチはラクスの片を叩き緊張をほぐす。。

「キラはどうするのかな？」

首を傾げるシャルロットにラウラが答える。

「大丈夫だ。キラの事だ。なにか思いつくだろう。」

そう言って、ラウラは静かに目を閉じた。

「なにかって・・・思いつかなかったらどうするんだ？」

一夏は思わず楯無のＩＳに視点を合わせた。楯無の（ミステリアス・レイディ）は一夏達のＩＳほど装甲は無く。変わりに水のフィールドが張られていて、まるで水のドレスのようだ。更に目を引くのが左右に浮いているクリスタルのようなパーツである。そこからも水のヴェールを形成していてマントを羽織っているかのようにも見える。更には水が回転してドリルのようになっているランスを持っていた。

「キラ！負けんなよ。」

一方キラ達は。

「ほんと全身装甲なんて変な機体ね。」

（ストライクフリーダム）を見た楯無は興味津々に眺める。

「お互い様でしょ？」

「そりぁそうね。」

そうこうしている内に試合開始の笛が鳴った。

「行かせてもらうよ。」

先手を取ったのはキラ。ビームライフルを2丁で連射しながら突撃する。だが、ビームは楯無に当たる前に水のヴェールに当たり霧散してしまった。。

「無駄よ。」

楯無は持っているランスを振りかざし迫ってくる。

「くっ！」

キラも空かさずビームサーベルを一つ抜いて斬りかかった。

「はあっ！！」

「くっ！」

二機は激しい鍔是り合いに入り火花を散らす。

「キラ！」

「キラさん！」

思わず箒とセシリアが声を上げた。だが、二人は意に介さず斬り結ぶ。

「これなら！」

「誘導兵器ね。」

ネクスト粒子で複製して１４基が襲いかかる。

「おっと！数が多いわね。」

さすがの自慢の水でも全方向からの攻撃は防げずダメージを受けてしまう。

「くっ！残り４００っ！」

キラは更に胸部の（カリドゥス複相ビーム砲）を掃射し始める。

「きゃあ！」

一発のビームが水のヴェールを突き破り本体にダメージを与える。

「くっ危ないわね。」

ランスに付属しているガトリングで応戦するがＶＰＳ装甲なので効果はないようだ。

「なんてデタラメな性能なの!?シールドエネルギーがまだ１００近くあるなんて反則じゃない。」

「まだまだですよ!」

だが、楯無も最強の名は伊達じゃない。すでに伏せたカードが発動しているのだ。

「見て!キラの周りに何か!?」

「っ!!」

鈴が指差した方向を見ると何やら霧の様なものが浮かんでいる。

「何?霧?」

「掛かったわね。食らいなさい。（熱き情熱）を!!」

楯無はニッと笑い指で作った銃をキラにむける。次の瞬間、大爆発がキラを襲った。

「あああああああっ!!」

「キラっ!!」

「キラさん！！」

「っ！！」

彼女の（ミステリアス・レイディ）の技の一つ（熱き情熱）がキラの（ストライクフリーダム）に炸裂したのだ。（熱き情熱）は霧を構成するナノマシンにＩＳがエネルギーを送りナノマシンが熱に転換し、一気に爆発させるというかなり有効的な技だ。ただし範囲は限られるとか。

「ふふっ、油断したわね。」

だが次の瞬間、一本のビームが（ミステリアス・レイディ）に直撃した。

「きゃあ！何？」

すると（ストライクフリーダム）が姿を表す。しかもキラはＳＥＥＤ覚醒していた。

「あれはあの時の！」

「なんだ？目の光彩が？」

「一体何ですの？あれは？」

一夏達も驚いたが楯無はもっと驚いていた。

「なんで？無事なの？あれをまともに食らって無事な筈が・・・」

「まぁ、確かに危なかったです。ですけど、ビームシールドを全力展開することで助かりました。」

確かにデストロイのビームを防ぎきる事が出来るのだから大丈夫なのだろう。

「それより、なんで目の光彩部分が?。」

「秘密ですよ!まぁ、５００まで削ったんですから。褒めてあげます。」

楯無はランスを掲げて突進を仕掛けた。

「甘い。」

キラは捌きながら話す。

「確かに貴女は強い!でも僕達はその上を行く!。」

「くっ!」

ランスで鋭く突きをだすが簡単にかわされてしまった。

「嘘っ!」

「これで!」

がら空きになった楯無の腹に（カリドゥス複相ビーム砲）をかますキラ。そのおかげで（ミステリアス・レイディ）のシールドエネルギーは１００から０になってしまった。

「（ミステリアス・レイディ）シールドエネルギー・エンプティ！勝者キラ・ヤマト！」

「あ～あ！負けちゃった。」

地上に降りた楯無は土の上で悔しそうにする。

「満足しました？」

キラが降りて来る。その姿は大天使さながらである。

「楯無さんは確かに強いですね。でも僕達の領域にはあと一歩ですから頑張ってください。」

すると楯無は再びイタズラの笑みを浮かべる。

「今回、貴方に更に興味が沸いたわ。だからこれからもよろしくね！キラくん！」

「そんなぁ！」

楯無に抱きつかれたキラはガックリと肩を落とし、ため息をついた。

彼女は生徒会長（後書き）

フラグ立てようかな？

学園祭の出し物（前書き）

眠いです。

学園祭の出し物

楯無とキラが戦った日から2日が過ぎたある日、ＳＨＲと一時間目を半分使っての全校集会が開かれた。当たり前だが全校集会だけあって一年だけでは無く二年と三年からも大勢の女子が集まって来ているのでホールはいつも以上に騒がしかった。

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます。」

生徒会役員の一人がそう告げると一斉にざわめきが消える。

「やあみんな。おはよう。」

壇上に上がり挨拶を始める楯無。しかもその顔はなにかを企んでいる顔だ。

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更織楯無。キミ達生徒の長よ。以後、よろしく」

ニッコリと微笑を浮かべる彼女は同性問わず人気があるようで、所々で熱っぽい視線を送る女子がいる。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは・・・」

「まさか・・・」

静かに聞いていたキラは勘づいたのか少し顔が青くなる。しかし楯無は意に介さず、それどころかソレを楽しむような表情で告げた。

「名付けて、［各部対抗男子三人争奪戦］！」

ぱんっ！と小気味のいい音を立てて、持っていた扇子が開かれた。それに合わせて後ろに投影されていたディスプレイにキラと一夏とユウイチの顔がデカデカと映し出される。

「え・・・」

「えええええええ！！！」

刹那、冗談抜きでホールが揺れる。これが女子の力か。

「キラ・・・これは一体？」

ラクスとユウイチがキラに聞くとキラはやられたという表情になる。どうやらキラはまさにこれを予想していたらしい。

「まさか・・・こんな事をしてくるなんて・・・」

「静かに。学園祭では毎年各部活動ごとの催し物を出し、それに対して投票を行なって、上位組は部費に特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれではつまらないと思いー」

びしっ、と扇子でキラ達男子三人を指す楯無。

「男子三人を一位の部活に強制入部させましょう！」

再び咆哮が上がる。

「素晴らしい！素晴らしい！全くもって素晴らしいわ！会長！」

「やぁぁぁってやぁぁぁるわぁぁぁ！！」

こうなった時の女子の迫力は凄まじく赤ん坊だったら確実に泣いてるだろう。

「キラ！いいのか？これ？」

焦った表情でキラに話しかける一夏。

「これはちょっと不味いかも」

確かに不味い。キラ達三人がもし部活に入部したら他の専用機持ち達の訓練がおろそかになってしまう。まぁ、それはいくらでも改善できるとして本当の問題はリボンズ達の事だ。もし部活関連でバラバラになってしまった所をリボンズ達に各個撃破なんて事になった日には目も当てられない。

「う～ん、これはなんとかしなきゃ。」

キラが悩んでいるとユウイチが声をかける。

「この事は俺に任せておいてくれないか？」

「えっ？どうするの？」

「いや、利用できるものは利用しないとな・・・」

ラクスは分かったのか納得した表情になる。

「もしかして彼に会うのですか？」

キラも分かったようでユウイチを見た。

「まさか・・・轡木十蔵？」

轡木十蔵・・・彼は普段はこの学園の用務員をしている老人で親しみやすさからか生徒達から［学園内の良心］などと呼ばれている。だが、その正体はＩＳ学園という空間を実質的に運営している事実上のＩＳ学園の王なのだ。

「まぁ、失敗したらなんとかしてくれ。」

その後、教室にて放課後の特別ＨＲ。今はクラス事の出し物を決めるため、わいのわいのと盛り上がっていた。

「え～と・・・」

クラス代表の一夏はキラが黒板に書いたクラスメイトの出した案を見て唖然としている。その内容は［男子三人のホストクラブ］［男子三人とツイスター］［男子三人とポッキー遊び］［男子三人と王様ゲーム］だ。

「却下・・・」

一夏が却下の一言を言うと大音量でブーイングの嵐。

「あ、あほか！誰が嬉しいんだ？こんなもん！」

「だってイケメン三人組よ！誰だって喜ぶわ！」

「そうだそうだ！」

確かに一夏は人並み以上にカッコイイしキラとユウイチはモデルを遥かに上回るレベルの美形である。

「キラとユウイチは分かるけど俺はそんなかっこよく無いぞ！。」

さすがは一夏。自分のレベルを分かっていない。これでは宝の持ち腐れだ。

「男子三人は女子の共有財産よ！」

女子達にブーブーと言われ一夏は助けを求める様に千冬を探すが彼女は既に職員室に戻ってしまっている。仕方なく副担の真耶に助けを求めた。

「山田先生、だめですよね？こういうおかしな企画は」

「え、え～と・・・わ、私はポッキーなんかいいと思います。」

頬を赤く染めて恥ずかしがる真耶。ダメだこりぁ。

「とにかく、もっと普通な意見をだな！」

「メイド喫茶はどうだ？」

なんとあのラウラがメイド喫茶を提案してきたのだ。そのせいでクラスの皆がポカンとしている。

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。確か、招待券制で外部からも入れるだろう？それなら休憩場としての需要も少なからずあるはずた。」

口調はいつもと同じだがキャラに合わない提案だった。だが、よく考えれば最初に来た頃は触れれば斬れるような気を放っていたラウラがメイド喫茶を提案したのだ。これはとってもいい変化であると言えよう。

「え、え～と・・・皆はどう思う？」

取りあえず多数決を取り始める一夏。

「いいんじゃないかな？キラ達には執事か厨房を担当してもらえばオーケーだよね」

そう言ったのはシャルロットで、この援護射撃はクラスの皆のハートをわしづかみにした。

「執事！とてもいい！」

「それでそれで？」

「メイド服はどうする？私、演劇部衣装係だから縫えるけど！」

盛り上がるクラス、メイド服の事で騒いでいるとまたしてもラウ

ラが提案した。

「メイド服ならツテがある。執事服も含めて貸して貰えるか聞いてみよう。」

更なる発言にクラスメイトは固まったままラウラに視線を集中させた。

「ごほん。シャルロットがな」

恥ずかしいのか顔を赤くするラウラがまた可愛い。

「ラウラ?それって、先月の?」

それを聞いたキラはあることを思い出す。

「「そういえば夏休みに二人でバイトをしたって言ってたな。そこから借りる気かな?」」

そう二人は夏休みに喫茶店でバイトをしていたのだが思わぬ事件が発生し、二人で活躍したのである。

「うむ」

「き、訊いてみるけど、無理でも怒らないでね。」

不安気にシャルロットが言うとクラス全員は「怒りませんとも!」と断言した。

「じゃあ、出し物はメイド喫茶でいいね。」

キラは黒板にチョークをなめらかに走らせてメイド喫茶と書いた。
こうして1組の出し物はメイド喫茶改めて［ご奉仕喫茶］に決まった。
そしてその日の夜の事。
「報告は以上です。」
学園長室では生徒会長の楯無がＩＳ学園の長、轡木十蔵にある事を報告していた。
「困りましたね。」
報告の内容は勿論最近、様々な国の軍事基地やテロリストを無差別攻撃している謎のＩＳ部隊つまりリボンズ達の事だった。
「やはり彼等三人が何か知っていると思われます。学年別トーナメントの時から度々彼等と戦闘していると報告を受けています。それに彼等の機体の所々に共通点が見られますし」
どちらの機体もこの世界のテクノロジーを遥かに超えた技術、携行可能のビーム兵器、実弾を受けつけないＶＰＳ装甲などといったものはこの世界ではオーバーテクノロジーなのだ。
「彼等の機体の動力にはＧＮ粒子とネクスト粒子と言われる粒子が用いられています。更にキラ・ヤマトとユウイチ・Ｓ・レイブンの機体には小型核融合炉まであると聞きます。」
この事が世界に知られたら一気にパワーバランスが崩れ戦争になってしまう。

「これは困りましたね。彼等はもしかしたらこのＩＳ学園に来るとおもいますか？。」

テーブルの上には盗撮したのか戦闘をしているキラ達とリボンズ達の写真がおかれている。

「現に学年別トーナメントの時に侵入してますから近い内にまた現れるかと」

そうなれば今度こそ死者がでて彼等の事も明るみに出てしまう。だが、彼等はそんな事は気にしないだろう。

「これは早急にキラ・ヤマト、ラクス・クラインそしてユウイチ・Ｓ・レイブンを引き込む必要がありますね。」

すると楯無は胸を張りだした。

「私にお任せ下さい。必ずあの三人を引き入れてみせます。」

「承知しました。ですが、くれぐれも気をつけてくださいね。」

「分かっています。」

そう言って楯無は部屋を出ていく。その数分後に十蔵も部屋の電気を消して出ていった。だが、二人は気付いていない今の会話は部屋の中で隠れていたユウイチによって全て聞かれていたということを。

学園祭の出し物（後書き）

次回は早くも学園祭開幕！そしてあの男の登場！

始まる学園祭と宿敵の再来（前書き）

ラウ・ル・クルーゼ登場です。

始まる学園祭と宿敵の再来

色々とあったが遂にやって来た学園祭当日。１組のご奉仕喫茶は美形男子三人の接客が受けられると聞いた女子達が波の様に押し寄せていた。

「はいは～い！順番守ってぇ～！」

クラスのしっかり者、鷹月静寝さんがテキパキと働いている。その動きは本物の店員と間違える程だ。

「ヤマト君！５番テーブルから指名だよぉ！！あっ！クラインさん、これを７番テーブルにお願いします。」

かなりの人数が来ているので流石のキラやラクスもてんてこ舞いだ。

「これは案外大変ですわね。」

近くでせっせと働いているセシリアにキラが声を掛ける

「セシリア。その服似合ってるね。可愛いよ。」

「かっかわ・・・」

「かっかわ・・・」

それを聞いたセシリアは一瞬で茹で上がり真っ赤になる。

「あ～、セシリア、ズルいよ！キラ、僕にも言ってよ。」

たまたま聞いたシャルロットとラクスが詰めよって来た。

「じゃあ、この後に四人で色んな所に行こうよ。ねっ？」

「そういう事なら・・・」

嬉しいのかシャルロットの顔は笑顔で緩みきっていた。

「こらぁ！そこの四人！サボんなぁ！」

四人を見ていたユウイチに叱られ四人は仕方なく仕事に戻った。

「一夏ぁ大丈夫か？」

ユウイチはテキパキと仕事をこなしている一夏に声を掛けた。

「大丈夫だ。こんなの訓練程キツくないから。」

「そうじゃ無くて。」

「あの事か・・・」

実は数日前に一夏は楯無の挑発を受けてしまい。勝負して負けてしまったのだ。以来彼とその仲間は楯無の訓練を受けている。

「なんで、挑発を真に受けたんだ?」

「いやぁ、ユウイチ達といたら後で痛い目にあうなんて言うからさ。」

「ふぅん・・・」

すると噂をすれはなんとやらで楯無がメイド服で現れた。

「やぁ!ユウイチ君!」

「何しに来たんだ?アンタは?」

「なにってお茶しに来たんだよぉ」

「その格好で?まぁいいけど。」

ユウイチはふと後ろを向く。するとさっきまでいた一夏がいない。辺りを見回すと奥のテーブルで鈴にポッキーを食べさせている一夏を発見した。

「なんだ・・・そういう事か。」

ユウイチは再び視線を戻すと今度は楯無がいなくなっている。

「もう!疲れるな!」

ユウイチはブーブーいいながら仕事に戻って行った。

二時間後、キラ達はようやく休憩時間が回って来たので所々を回る事にした。

「三人共なんか行きたい所とかある？」

するとさっそくシャルロットが手を上げる。

「どこ行きたいのシャル？」

「ちょっと、料理部の所にね。」

「料理部？」

「うん、日本の伝統料理を作ってるんだって。せっかくだから、作れるようになりたいなぁって」

「なるほど、じゃあ行こうか？」

「うん！」

そう言って四人は料理部が使っている調理室へと向かった。

一方ユウイチは誘う相手もいないので一人ぶらぶらと歩いているとあるものが目に入る。

「たこ焼き屋かぁ！ちょうど小腹が空いてきたし食うか。」

ユウイチ・S・レイブン。この男コーラの他にたこ焼きが好物であるのだ。

「あっ！レイブン君だ。」

たこ焼き屋は二年が運営しているので当然二年生の教室でやっている。ユウイチが入ると二年生がゾロゾロと集まってきた。

「あの注文は？」

おかっぱ頭の女子が注文を尋ねて来たのでユウイチはいつもの品を頼んだ。

「たこ焼きとコーラを一つね。」

「かしこまりました。」

おかっぱ頭の女子が厨房に向かうと回りで待機していた女子が突撃してきた。

「あのサインお願いします。」

「あの写真を一枚！」

「あの握手を・・・」

何十人もいるのにも関わらずユウイチは平然と応えていく。その風景はまさにアイドルと押し寄せるファンだ。

「はいはい！順番にね～」

一方、一夏は親友の五反田弾と学園祭を回っていてちょうどその光景を目にしてしまった。

「ユウイチすげぇ～な」

「あれがＩＳを動かせる男子三人組の一人か？おわっ！すげぇ美形だな。」

「ほんとにスゲーからなあの二人は。」

訓練を思い出したのかブルブルと震えだす一夏。

「どうした？大丈夫か？」

「ああ！大丈夫だ。そんな事より早く鈴の所に行こうぜ。」

そう言って二人は再び一年二組を目指して歩きだした。

再び視点をユウイチに戻すとユウイチは女子達の要望に応えた後、ようやくたこ焼きにありついていた。

「うまうまっ！なかなかいいじゃないか。」

五個目を口に放り込んだ時、ユウイチにあるものを見た。

「あれは・・・」

見たのはスーツ姿の女性で見た目は普通なのだが歩き方がなんかおかしい。今ではユウイチしかわからないがその歩き方は軍人そのも

のだ。更にその雰囲気は微かに殺気を放っている。

「せっかくの学園祭なのに。」

ユウイチはため息をつき［ストレイド］でキラの［ストライクフリーダム］との回線を開いた。

その頃キラはシャル達三人と調理室を出た後、色んな所を回りお化け屋敷から出てきたところだった。

「ん？」

［ストライクフリーダム］のチャンネルに［ストレイド］から通信がくる。キラは不思議に思いながら回線を開いた。

「なにユウイチ？」

するとユウイチは何処か緊張をした様子で話しかけて来た。

「「実はなんか不審な奴がいてな一応報告しとくよ。」」

「不審？」

「「ああ、なんか隠しきれてない殺気を放ってて、セールスウーマンの格好をしてたけど足運びが軍人なんだ。」」

「分かったよ。一応・・」

途中までいいかけたキラはあるものを感じ取る。それは命を賭け

た者にしか分からない気配だ。

「どうしましたのキラ？」

「三人はここで待ってて、後でユウイチが来るから。」

セシリアとシャルロットは？のマークを出していたがラクスはその表情から理解したようだ。

「分かりました。セシリアさん、シャルさん。ここで待ちましょう。」

「えっ？どうゆう事ですの？」

「詳しい事はユウイチが来てからで・・」

そう言ってキラは気配のした方へと走りだす。キラの感じ取った気配とは殺気で、しかもこのレベルの殺気は戦場でしか感じ取る事しかできない・・それはつまり。

「誰かが戦ってる。」

キラは走りながらユウイチに通信を入れる。通信の向こうにいるユウイチもやはり感じ取っていたようだ。

「「キラ！この気配・・誰かが戦ってるのか？」」

「そうみたいだね。とにかくユウイチはお化け屋敷の前にいるラクス達と合流して！僕は織斑先生に連絡を取ってから気配の出所に行ってみるよ。」

「「了解！」」

キラが通信を切った時、運良く見回りをしている千冬と出くわした。

「ヤマトか。どうした？」

「先生！この学園の中で誰かが戦闘をしているようです。」

すると千冬の表情がスッと変わる。

「本当か？本当だとしたらマズイな。とにかくヤマトは鎮圧に向かえ！私は山田君を探す。」

「分かりました。」

再び走り出す。キラは念のため一夏にも通信を入れた。だが、一夏からの応答はなかった。

「目的は一夏か！まさかこんな時に狙うなんて。」

自分を恥ながらもプライベート・チャネルを使った相互位地確認操作を行う。

「えっ？更衣室？何で？」

一夏の現在位地は第四アリーナの更衣室と出た。キラはちょっと不思議になりながらも人気の無い所に出ると［ストライクフリーダム］を展開し、更衣室に向かった。

「正面から入る時間は無さそうだね。仕方ない。」

第四アリーナまで来るとキラはまず更衣室の壁に照準を合わせて［ハイマットフルバースト］を撃ち、壁が崩壊すると同時に更衣室に飛び込んだ。

「なんだ？」

「キラ！」

「キラくん！？」

まず目に入ってきたのは倒れている一夏と楯無とＩＳを身に纏い［白式］のコアを手にしている謎の女性だった。

「げっ！キラ・ヤマトか！！」

キラの登場は予定外だったのか女性の顔には驚きと焦りが見える。

「貴方は亡国機業の人間ですね。」

亡国機業・・それはかつての二次大戦の頃に生み出され、国家に寄らず、思想を持たず、信仰は無く、民族にも還らないの一点張りの組織らしい。故にキラでも詳しい事はつかめていない。

「そうさぁ！ご存知のようだなぁ！私はオータムってんだ！覚えとけっ！」

「まずは［白式］を返してもらいますよ。」

するとオータムは下品に笑いながら四本足の機械を向けた。

「やって見ろよ！お前も剥離剤［リムーバー］の餌食にしてやる！」

だがオータムの目の前にはキラは既にいなかった。

「なっ！！」

次の瞬間にはオータムのＩＳ［アラクネ］の装甲、武装、後ろの８つの装甲脚がバラバラにされていた。キラが［アラクネ］の横を通り過ぎる瞬間にビームサーベルを一閃させたようだ。

「なっ！なんだ？このスピード！」

「さあ！一夏、［白式］を」

「おう！」

一夏は菱形のコアに意識を集中させる。すると・・・。

「来い！［白式］！」

全身が光に包まれ光が消えたかと思うとそこには［白式］を身に纏った一夏が現れた。

「くそっ！ここまでか！」

「洗いざらい喋ってもらいますよ。」

キラは横たわっているオータムを拘束しようとした瞬間、嫌な気配を感じ思わず後ろに飛びずさる。

「っ！！」

するとさっきまでキラの頭があった場所を無数の緑色のビームが通り過ぎていく。後ろに下がるのが遅れていたらキラはビームに直撃し蒸発していただろう。

「そんなまさか・・！！」

「キラ！大丈夫か？」

「キラくん？」

二人も思わずビームが飛んで来た方向を見ると無惨に破壊された更衣室の壁の向こう側からこちらに来るＩＳの姿が確認できた。そのＩＳの大きな特長としては光背の様なバックパック。そしてソレを取り巻く砲塔。見たところ［ストライクフリーダム］と同じガンダムタイプのようだ。

「キラ・・あいつは？」

圧倒的な威圧感を放つ機体に怯えながらも一夏はキラに質問する。

「キラ？」

返事が無いので思わずキラを見る一夏。すると彼の目に入ったのは珍しく動揺をしているキラだった。

「なんで？・・貴方が？」

キラの質問に応えるように頭部が開き見事な金髪の男性の顔が現れる。

「久しぶりだね。キラ・ヤマト・・」

「ラウ・ル・クルーゼ？」

そう、彼はラウ・ル・クルーゼ。前の世界のヤキン・ドゥーエ攻防戦でキラが倒した男だった。

「なんで？貴方が？貴方は僕が殺した筈。」

殺した。その言葉に一夏と楯無が思わず反応してしまう。

「殺した？キラ、一体何を言ってるんだ？」

「キラくん？あなたは何を？」

クルーゼとキラはそんな二人を無視して話を続けた。

「あなたも生き返ったという事ですか？」

「そういう事だ。おかげであの忌まわしいテロメアの問題から解放されたよ。」

ラウ・ル・クルーゼは前の世界ではクローンでありテロメアが短く人より早く老化するという欠点を持っていたのだが、今はネクス

ト粒子の複製機能のおかげでその問題を克復している。それだからか今のクルーゼは前の老人の様な顔では無く、若くムウと同じような顔をしていた。

「とにかく私も再びキミの敵となった。だから着けるかね。キミとの決着を！」

「くっ！貴方は平気で多くの人の命を奪う。だから今度も必ず貴方をっ！」

再び世界を越え因縁ある二人の戦いが始まろうとしていた。

一方、オータムは辛くも脱出に成功し、ＩＳ学園から逃げようとしていた。

「冗談じゃねぇぜ。あんなのに関わってたら命がいくつも有っても足らねぇよ。」

［アラクネ］は損傷しているので仕方なく徒歩で移動している。

「お待ちください。お客様。」

「ああん？」

あと数歩で敷地外というところでオータムは誰かに呼び止められた。彼女が振り返るとそこにはＩＳを展開したユウイチ、ラクス、ラウラ、シャルロット、セシリア、鈴、箒、真耶、後は学園のＩＳの鎮圧部隊の先生方が立っていた。

「逃げ場は無いぜ。」

「くっ！ここまでかっ。」

ユウイチがオータムを取り押さえようとした刹那、ユウイチに四本のビームが飛来した。

「なんだ？」

ユウイチは回避行動をとりながら上空を仰ぎ見る。そこにはＭＡ状態の（リボーンズガンダム）が浮いていた。

「久しぶりだね。ユウイチ・Ｓ・レイブン。」

「またてめぇか！リボンズ・アルマーク！」

下では始めて見る（リボーンズガンダム）に筈達が驚きの声を上げた。

「何？あのＩＳ？」

「初めて見る機体です。」

「あれは・・！」

ユウイチを援護する為、全員がリボンズがいる位置まで上がって来た。だが、よく見るとリボンズの仲間達がいない。

「お仲間は何処だ？」

「心配しなくてももう来てるよ。」

「何？」

すると後ろにいた［ラファールリヴァイヴ］数機にビームが直撃し崩れ落ちる。パイロットは絶体防御のおかげで無事のようだ。

「あれは・・！」

ユウイチ達がビームの飛来元を見ると数十機の編隊が目に入る。

「これで準備は整った。さぁ！始めようか！」

「上等！」

今、この場所で世界にＩＳが生まれてから初のＩＳによる大規模な戦闘が始まろうとしていた。

始まる学園祭と宿敵の再来（後書き）

次回はほとんどガチバトルです。

自由と天帝の戦い（前書き）

う～ん・・・もうちょっとキラとクルーゼの戦いを入れたかった。

かつて世界を滅ぼそうとした男、ラウ・ル・クルーゼ。彼は再び自分を殺した男、キラ・ヤマトの前に立ち塞がる。新たなる力、「ネクスト・プロヴィデンス」を駆って。

「はぁ！」

「くっ！」

二人はＩＳ学園の上空で激しい戦闘を繰り広げていた。それは美しくも凄惨な戦いだった。

「ほう・・・前よりもやるじゃないか。」

クルーゼは左手にビームジャベリンを持ちキラに強烈な斬撃を入れる。

「その機体・・・発展型ですね。」

「そうだ。名は［ネクスト・プロヴィデンス］。彼女が用意してくれた。」

「彼女？」

「おっと！喋り過ぎは良くないな。」

クルーゼはそう言いながらも何処か楽しげに笑う。どうやらテロメアの鎖が無くなったのが嬉しいようだ。

「さぁ、この攻撃に耐えられるかな？」

「くっ！」

［ネクスト・プロヴィデンス］の増設された四つのバックパックから全てのドラグーンが放たれる。その数１６、しかもネクスト粒子で複製して数は９０に増えた。

「まずい！」

キラもドラグーンを放ち複製して２４のドラグーンを操るが数が圧倒的に足りない。

「そんな数でこの数に対抗する気かね？」

「くそぉぉぉ！！」

キラは雨の様に降り注ぐビームを避けクルーゼに近づこうとするがなかなか進めない。

「こんな事でっ！！」

「前にも言った筈だよ？キミは赦されない存在・・・故に存在してはいけない。」

「ちがう！存在しちゃいけない命なんて無い！」

キラはやっとの思いでビームを抜けきるとビームサーベルを使って猛攻撃に移行した。

「だがキミを知ったらこの世界でもキミを羨む人間は必ず現れる。そして恐怖から必ずや戦いが起こる。キミはどうしようと言うのだ？」

「覚悟はある。」

光と闇を象徴するかのような二機はビームサーベルをなんども交え、そしてライフルによる撃ち合いへと戦いを変えていく。そんな二機を見ていた一夏と楯無は羨望と恐怖が二人の胸を支配していた。

「なんなの？あの二人・・・」

「キラ・・・」

二機は一見すれば避けようの無い攻撃を易々と避け、更に一夏達には出来ないような攻撃を繰り出す。この高度な操作テクニックを見て楯無はある疑問を抱いた。

「一夏君！！何処にいくつもり？」

見ると一夏は白式を展開し飛び立とうとしている。

「キラを助けるんですよ！」

「やめなさい！今、私達が行けば逆にキラ君の足かせになるだけよ。」

楯無の言った事は正しかった。今、一夏があのビームの嵐の中へ飛び込んでもどうしようも無いだろう。更にキラは一夏を守りながら戦う事になる。だから今は二人に出来る事は見守る事しか出来ないのだ。

「くっ・・・」

「落ち着きなさい。キラ君を信じるのよ！」

その時の一夏の瞳に悔しさが混じっていた。だが、悔しい思いをしているのは一夏だけでは無い。

「キラ君・・・負けないで。」

彼女には祈る事しか今はできない。自由が天帝に負けないことを。

一方、別の場所ではユウイチ率いるＩＳ学園の部隊とリボンズが率いるアロウズ部隊が激しい接戦を繰り広げていた。それはこの世界にＩＳが誕生してから初の激戦である。

「あれは！！」

リボンズと斬りあっている時、ユウイチの目に敵のＩＳと凄まじい戦いをしているキラの姿が目に入った。

「あの機体・・・［プロヴィデンス］か？」

かつてユウイチはキラからその機体の話を聞いたことがあった。無論、そのパイロットの事も。

「よそ見している暇があるのかい？」

ユウイチの隙をついてリボンズが蹴りを直撃させる。絶体防御があるとは言え、痛みまでは消してくれない。

「つぅ～～！ドジった。」

現在、戦況は明らかにリボンズ達に傾いている。何故ならリボンズ達は何度も実戦を経験しており経験値が明らかに段違いだからだ。

「あの機体・・・厄介ですわね。」

セシリアがシャニの［デスフォビドゥン］にレーザーを連射するが全弾が機体に当たる前に軌道を変えて建物などに直撃してしまった。［デスフォビドゥン］は前の機体とは違い、ビーム屈曲装置［G・パンツァー］を機体内部に取り付けて常にその装置を作動させているので絶体的な防御率を誇っている。更にかつてリフターがあった場所には［ヴォワチュールリュミエール］発生装置が取り付けられとおり、それをマントの様に展開させ驚異のスピードを実現させる事にも成功している。

「うらぁぁぁぁ！！」

ビームが曲がりセシリアを蛇の様に追撃を始める。

「くっ！」

「セシリア！！」

箒がセシリアを助けようと動くが武者鎧のようなＩＳ［スサノオ

」に阻まれた。

「少女よ！キミも二刀流か、ならば、見せて貰おう。キミの武士道を！」

「武士道だと！」

［スサノオ］と［紅椿］は互いの二本の得物で相手を斬りつけ、そして鍔是り合いに入る。

「くっ！お前達の目的はなんなのだ！！」

「目的だと？それは戦う者のみが到達する極みを見つける事だ！」

「くっ！」

二機は激しく交差する。すれ違う瞬間にいくつもの斬撃を繰り出し火花が散った。それはまるで戦場に咲いた様にも見えた。

「イノベイターの傀儡に成り果てようともこの武士道だけはっ。」

グラハムはいったん箒を突き飛ばすと後ろに下がった。

「トランザム！！」

瞬間、［スサノオ］が赤く発光し、さっきまでとは比較にならない程のスピードで箒の後ろに移動する。

「斬り捨て御免！」

「きゃあああ！」

強烈な攻撃を食らい［紅椿］のシールドエネルギーが大幅に減少した。

一方、鈴はラウラと共に［ガデッサ］と［ガロッゾ］との戦闘の真っ最中である。

「あんた達人間なんかに！！」

ヒリングは両手のビームクロウで鈴の［甲龍］に襲いかかる。

「あんた達は一体なんなのよ！」

［双天牙月］で攻撃を受け止めそこから反撃に移った。

「はぁぁぁ！！！」

至近距離で［龍砲］を連射し、［双天牙月］の連続回転斬りをお見舞いする。

「甘い！！」

だが、ヒリングは右足を蹴り上げ、［双天牙月］を弾き飛ばす。

「しまった。」

得物を失った鈴の目に入ったのは［ＧＮメガランチャー］を構える［ガデッサ］だった。

「沈めぇーーーー！！」

迸る光が鈴に直撃する刹那、ラウラが間に入りＡＩＣを展開しビームを受け止める。

「ラウラ！」

「大丈夫か？」

「ええ！でも不味いわね。」

これ以上続けば確実に鈴達が負けてしまう。どうしたものかと考えていると二機が突っ込んできた。

「きた！」

「いくぞ！」

四機は自分の全ての力を持って、激しくぶつかった。

「ラクスっ大丈夫！」

「大丈夫ですわっ！」

シャルロットとラクスも一回り大きいＩＳ［レグナント］と［ガッデス］に苦戦していた。

「このぉ」

シャルロットがアサルトライフルを連射しても［レグナント］の

［GNフィールド］に阻まれ、ラクスがビームサーベルで接近戦を挑んでも［ガッデス］によって邪魔されてしまう。

「行けぇ！ファング！」

［レグナント］のパイロット、ルイス・ハレヴィが叫ぶと手の爪状のパーツが分離し、意思を持つ様に二人に襲い掛かった。

「くっ！？」

「これはっ！？」

更に［ガッデス］からもファングが放たれ二人を追撃しはじめた。

「ラクス！このままじゃ！」

「ええ・・・マズいですわね」

真耶と教師達も［エンドカラミティ］と［グリフォンレイダー］と［アヘッド］に苦戦を強いられている。その時、思いがけない事態が起きた。リボンズの手によって。

「お前達の目的は一体何だ？」

「目的？いいだろう。教えてあげるよ。」

するとリボンズはオープンチャンネルを開き、目的を話し始めた。

「僕達の目的はキラ・ヤマトとラクス・クラインを奪取、そしてキミの完全な抹殺だよ。」

「何っ！？」

思わずその場にいた全員が戦闘を中断し、その言葉に耳を傾けてしまった。

「なっ！？キラとラクスの奪取だと？」

「そうだよ・・・そしてキミの抹殺さ。」

「まさか・・・キラの言っていた協力者って言うのは。」

「分かったようだね。そう、全て沙藤美哉から聞かせてもらったよ。キミの事、C．Eの真の歴史の事。企業の事も」

ユウイチは今まで見たことの無い顔でリボンズを睨みつけた。一体何が彼にそんな顔をさせるのだろう？

「てことはあの戦いの事もか。」

「そうだね。キミを含めた22人の傭兵の戦いの話なんて凄かったね。ラストレイブン・・いや、レイブンズネストの傭兵と言った方がいいかな？」

「貴様ぁぁーーー！！！」

ユウイチはとてつもない怒号を発しながら「リボーンズガンダム」に突っ込んでいった。

一方キラ達にもこの通信は聞こえていた。

「まさか・・僕とラクスを！」

キラはクルーゼと斬り結びながらこの通信の内容に驚愕していた。だが、彼が気になったのはリボンズが言っていたユウイチの事、ラストレイブンと言う言葉に企業の事、組織なのかは分からないがレイブンズネストという単語、C．Eの歴史にもなにかあるようだ。しかもユウイチはなにか知っている様でもあった。それに沙藤美哉という女性・・。

「私も全てを聞かされた時は驚いたよ。」

「あなたも知っているんですね。」

「そうだよ。でも、ユウイチ・S・レイブンから全て聞いた方がいいんじゃないかね。」

クルーゼはビームジャベリンを振って一旦下がるとドラグーンを５０基ほど飛ばして来る。

「うわっ！」

ビームの一発が直撃し、［ストライクフリーダム］の左翼を吹き飛ばす。更にスピードが落ちた［ストライクフリーダム］に２０基のドラグーンがビームの嵐をお見舞いさせる。

「まずいっ！」

半分ほどは避けたが半分は当たり、シールドエネルギーの半分以上が消えてしまった。

「くそぉぉぉぉ！！」

「ふはははは！！そんなものかね？キミの力は。」

キラが次の攻撃に反応できる様に構えを取っているとどうやらクルーゼに通信が入ったようだ。

「本当にか？分かった・・帰投する。キラ君！この勝負はまた今度にしよう。リボンズ・アルマーク！帰投するぞ。」

クルーゼが何処かへ飛び去り、キラがユウイチ達の方向を見るとリボンズ達も撤退していくのが見えた。

「キラ！」

「キラ君！」

クルーゼが居なくなって安全になったので二人が上がって来る。

「キラ・・あの男は一体？」

「大丈夫？怪我は無い？」

「大丈夫です。今はそんな事よりも。」

三人はユウイチに顔を向ける。するとラクス達も不思議そうな顔でユウイチに視線を向けていた。

「ユウイチ・・・キミは一体？」

そう言ってキラはユウイチの顔を見つめると彼の顔は怒りと悔しさで歪んでいた。

自由と天帝の戦い（後書き）

次回はＡＣシリーズから奴が出ます。

ナインボール（前書き）

ＡＣシリーズからナインボール登場！

ナインボール

ＩＳ学園でキラ達とクルーゼ達が戦っていた時、北アメリカ大陸北西部、第十六国防戦略拠点。通称［地図にない基地］である戦いが行われていた。

「なんなのコイツ！？」

少し前、最初は［ジンクス］の部隊が襲撃してきたのだが途中で謎の赤い機体が乱入、あっという間に［ジンクス］部隊を壊滅させてアメリカ軍にも攻撃を仕掛けてきたのだ。

「たった一機でこうまで！」

ナターシャが［シルバーベル］の碗部装備砲バージョンを敵ＩＳに向けてエネルギー弾を連射するが全て避けられてしまった。敵ＩＳは左肩に装備されたグレネードランチャーを放って来る。

「くっ！？」

ナターシャは寸前のところで避けるが爆風に吹き飛ばされる。今やアメリカ軍基地は壊滅状態、完全にアメリカ軍の敗北が決まっていたが、しかし敵ＩＳは生き残った者まで殺していた。そしてその力は圧倒的でナターシャでも歯がたたない。

「くっ！こんな所で！」

赤と黒にカラーリングされた機体は動けないナターシャにも銃を向けた。

「増援を確認。距離３ｍ。」

「えっ！！」

するとボロボロの廊下の天井から一機の虎模様のＩＳが降りて来た。

「ナタルを返してもらうぜ！」

降りて来たのはアメリカの第3世代の［ファング・クエイク］だった。パイロットは国家代表のイーリス・コーリングである。

「当初目的は既に完遂。撤退開始。」

「なっ！？これだけ好き勝手にやっておいて逃げる気かよ！」

イーリスは投げナイフを投げるがＩＳはスラリと避けてポッカリと開いた大穴から逃げてしまった。

「ナタル！大丈夫か？」

「ええっ大丈夫よ。」

二人は謎のＩＳの圧倒的な力に恐怖を覚え、体が少しだけ震える。

「あの機体の粒子・・確かあの子達の機体も同じようなものがあったわね。」

「えっ？」

「イーリス・・ちょっと日本に行ってくるわ。」

「その体でか？」

「大丈夫よ。」

ナターシャは日本で再び彼等と会うことを決める。真実を知るために。

一方、逃げた謎のＩＳはその基地からすでに３００ｍの位置まで移動していた。夕陽に照らされた赤と黒の機体は美しい光沢を放っている。するとＩＳに通信が入った。どうやら次のターゲットの指令らしい。

「ターゲット情報確認。ターゲット現在位置・・日本、ＩＳ学園、ターゲット名・・・キラ・ヤマト、ラクス・クライン。認証。」

すると前から数機の［ジンクス］が飛来してくる。どうやら敵討ちに来たようだ。

「見つけたぜ！赤い奴ぅ仲間の敵討ちだ。」

「敵性勢力と断定。排除開始。」

［ジンクス］の数は十機の編隊で謎のＩＳを取り囲む様に飛んでくる。

「数ではこっちの方が有利だ！」

四機がビームサーベルを抜き放ち接近戦を挑んでくる。謎のＩＳはパルスライフルを連射し、三機を落として、残りの一機は左腕に内蔵されているビームブレイドで真っ二つにした。

「なっ！？あっという間に四機を！」

謎のＩＳは右肩のミサイルポットからミサイルを放ち三機を撃墜しながら突っ込んで行く。

「くっ！一撃でっ！」

残った三機は後退をしながらビームで攻撃する。だが、謎のＩＳには一発も当たらない。逆に謎のＩＳは左肩のグレネードランチャーを起動し撃つ。

「うわぁぁぁ！！」

「ぐあああああ！！」

二機が巻き込まれ凄まじい爆発がおこる。これではパイロットは助からないだろう。

「ひっ！た、助けて・・・」

最後の一機が怯えて逃げ出すが謎のＩＳは無情にも後ろからビームブレイドを突き刺さし地面に叩きつけた。

「排除完了。」

静けさが戻った空で謎のＩＳは再びブースターを吹かし移動を再

開する。その時、謎のＩＳの左肩に描かれた数字の９のエンブレムが夕陽に照らされて輝いた。

ナインボール（後書き）

次回はキラ達の正体がバレます。

明らかになる過去（前書き）

すみませんが、過去話は勝手ながら大部分を省かせてもらいました。あと、かなりつまりながら書いたので誤字脱字があったらスンマセンです。

明らかになる過去

学園祭の戦いの後、政府はクルーゼ達の正体を探るべくキラとラクスとユウイチ達三人を取り調べる事にしたのだがＩＳ学園の轡木十蔵と織斑千冬の説得でＩＳ学園で取り調べる事になったというのが今の現状だ。因みに取り調べるのは千冬である。因みにオータムと名乗った女には逃亡されてしまった。

「あの三人・・・大丈夫かな？」

「心配ですわね。」

ＩＳ学園の廊下を一夏とセシリアが歩いていた。どうやら今から寮に戻る所らしい。

「あれからずっと取り調べだろう？寮にも一度も戻って来てないみたいだし。」

「ずっと懲罰室に泊まってらっしゃるみたいですわ。」

二人が三人の心配をしていると後ろから真耶がバタバタと走って来た。なにか重要なお知らせがあるらしい。

「どうしたんですか？先生。」

一夏が尋ねると真耶は乱れた呼吸を整えながら早口で答える。

「織斑君、オルコットさん！急いで私と一緒に1組に来てください。」

「どうしてですの？」

「急いでください！」

二人はしょうがなく真耶についていった。

「失礼します。」

三人が1組に入ると中は全てのイスと机がかたずけられていて、変わりに真ん中にキラ達三人が座っている。更にその三人を取り囲む様に様々な国の軍人が壁際に立っていて一緒に混ざっているシャルロット達が場違いに見える。

その中で一夏は金髪の女性に目が行く。

「あれ？ナターシャさんだ。」

「本当ですわ。」

他にはラウラの部隊の副隊長のクラリッサ・ハルフォーフやロシアのレジーナ・バレンタインが立っていた。因みにレジーナはオルガが襲った基地で仲間の為に挑んだＩＳ部隊の隊長だ。それと何故か生徒会長こと更織楯無と用務員の轡木十蔵がいる。だが、一夏はある女性を見ると思わず声が出てしまった。なんとその中にオータムと名乗ったあの敵女がいたのだ。

「先生！なんであいつがここに？」

「織斑君！落ち着いてっ！今回の件で彼女の組織と手を結ぶ事に決定したんですよ。」

「協力って・・・そんな・・・」

いくら学園が決めた事とはいえ自分の命を狙った人間と協力するのは一夏にとって気に入らない所があるようだ。

しばらくすると千冬が入ってくる、彼女は教卓の位置まで来ると喋り始めた。

「今回皆さんに集まって貰ったのはこの三人が語る真実を聞いてもらうことです。」

流石の千冬でも各国の軍人がいるので敬語だ。

「真実って・・・何の？」

「分かりませんわ。」

「では三人共！自分の名前と所属を言え。」

するとまずキラから聞き慣れない事を言い出した。

「ぼくは　ＺＡＦＴ軍エターナル所属キラ・ヤマトです」。

「同じくＺＡＦＴ軍エターナル所属、ユウイチ・Ｓ・レイブンだ。」

「ざふと？・・？」

一夏とセシリアはたまりかねてシャルロット達の所へ行くとラウラに聞いた。

「なぁ・・ラウラ、ＺＡＦＴって何だ？」

「知らないな。この世界にはそんな軍は存在しない。」

ラウラの言っている事は本当の事の様で他の軍人達もザワザワと騒ぎ始めた。だが次にラクスが言った事は一夏の常識をぶっ飛ばしてしまった。

「わたくしはプラント最高評議会議長、ラクス・クラインですわ。」

「議長？ラクスが？」

「まさかクラインはその年で最高評議会の議長なのか？」

驚きのあまり一夏達は口をパクパクさせ、ほかの者達は思わず息を飲んだりとしていた。因みに千冬は別の世界から来たのは知っていたがその素性までは知らなかったので一瞬だけ唖然となった。それはそうだろうラクスはまだ十代だ、それなのにプラントと言う国のトップという立場なのだから。

「なるほど。お前等はＺＡＦＴと呼ばれる軍の所属でクラインに至ってはプラントと言う国のトップなんだな。じゃあ次はお前達の世界の歴史など詳しい事を教えてくれ。」

「ちょっ、ちょっと待ってくれ！三人は別の世界から来たってい

うのか？」

驚く一夏を無視してキラは頷く。

「分かりました。」

そう言ってキラが話し始めた。

「まず、僕達の世界の年号はC．E　、西暦末期に石油燃料の枯渇や宗教戦争と民族紛争の激化、環境汚染の深刻化や生活不況が起こり世界各地の勢力が分割、ブロック化が進んでしまった。そして世界の統合、再編を目的とした戦争、［再構築戦争］が勃発したんだ。」

因みに年号が変わったC．E1に中央アジア戦線［カジミール地方］で最後の核が使われる。

「年号が変わっても再構築戦争は終わらず結局C．E9に終結した。結果、様々な統合国が生まれました。代表的なのを挙げるとアメリカやカナダと言った大西洋連邦、ロシアやEU諸国のユーラシア連邦、ソロモン諸島のオーブ連合首長国です。」

次はラクスが悲しそうな顔で話し始める。

「それからしばらくしてC．Eの歴史を大きく変える出来事が起きるのです。」

「歴史を変えるだと？」

「事の発端はジョージ・グレンという男の方です。彼は自身が設計した木星探索船で木星からある事を告白したのです。」

「あること?」

一夏が聞くとユウイチがある事をうわ言の様に言う。

「ボクは、ボクの秘密を今明かそう。ボクは、人の自然そのままに、この世界に生まれた者では無い。この言葉が混沌の時代の幕開けだったんだ。」

言わずと知れたジョージ・グレンの告白だ。

「どういう事だ?」

「それはね一夏・・彼は普通に生まれて来たのでは無く遺伝子操作で生まれてきたんだ。」

「何だって!?」

遺伝子操作は一夏達の世界でも行われている。と言っても動物や花と言った範囲だ。人間にするなど聞いたことは無い。ソレを聞いた軍人達も騒がしくなった。

「静かに!で?それでどうしたって?」

「つまり彼は僕達の世界の特徴であるコーディネーターの最初の一人で、彼はこの後、コーディネーターの製法をネットで公開したんです。」

病気や怪我の耐性、高い運動能力と学力に自在に設定できる容姿などコーディネーターは色んなメリットを持っているがメリットが

あるなら当然デメリットもある。

「なるほど、遺伝子操作で生まれてくるコーディネーターか。まさかお前等も？」

「そうですわ、私達三人共コーディネーターですわ。」

周囲の人達はやっぱりという顔になる。かなりの容姿に高い運動能力と高度な戦闘テクニック。明らかに一夏達のレベルを圧倒的に超えているので一夏達は不審がっていたのだが今ので納得したようだ。

「ですが、当然旧世代者との問題も発生してくるのではなくて？」

セシリアの言うとおりナチュラルとの問題は当然あった。それは人間の根本的な所によって発生する当たり前な問題だった。

「うん、やっぱりナチュラルはコーディネーターを羨んだり恐れたりするし、コーディネーターもナチュラルを見下したりしたよ。」

「ジョージ・グレンの暗殺など他にも多数の事件が発生していましたわ。ですが、ある事件が起き、ナチュラルとコーディネーターは武力衝突へと発展してしまったのですわ。」

「ある事件？」

それはC．Eの人達には忘れられない有名な事件だ。

「その頃コーディネーターの人達は宇宙に進出して、いくつものコロニー、通称［プラント］を建設してコーディネーターの国を作

ったんだ。やがてプラントは独立を求めて地球の地球連合と開戦の火蓋を切ってしまった。そしてC．E７０、２月１４日にプラントの近くで戦闘が起きて地球軍の主力だったＭＡの［メビウス］が農業プラント［ユニウスセブン］に一発の核ミサイルを発射し、多くの人命が失われてしまった。」

その事を聞いた瞬間、一夏が叫びだした。

「なんだよそれ！！そのＭＡのパイロットは何考えてんだ。罪の無い人達が住む所に核を撃つなんて。」

「うん、そうだね。でも、そのＭＡのパイロットは反コーディネーター組織［ブルーコスモス］の人間だったんだ。彼には民間人だろうが敵だろうがコーディネーターなら憎しみの対象だったと思うよ。そしてプラントのパトリック・ザラ率いる強硬派の憎悪と敵意が頂点に達し水面下で設立した組織［ザフト］を使いオペレーション・ウロボロスを決行、地球に核分裂を阻害する・・つまり核を使え無くする装置［Ｎ・ジャマー］を大量に散布、地球の地下深くに埋め込んだんだ。地球は石油燃料が枯渇していた為、原発に頼ってたんだけどそれが使えなくなってしまいエネルギー不足を招いて多数の死者が出てしまった。」

途中まで聞いていたナターシャが手を挙げる。

「一つ分からない事があるわ。数で勝る地球にどうやってオペレーション・ウロボロスを成功させたの？」

それはその場にいた全員が疑問に思っていた事だった。普通なら地球に辿り着く前に圧倒的な数の地球軍に包囲される筈である。するとその疑問にはユウイチが答え始めた。

「それはザフトが開発した新型機動兵器、通称［モビルスーツ］が関係している。ＭＳは平均１７ｍの人型兵器だ。戦車を超える装甲、ＭＡを凌ぐ機動性と火力・・・人の形をしているから様々な作業もできる。あの時から戦場の主力はＭＡからＭＳに変わったんだ。」

その当時のザフトの主力機［ジン］の活躍によって地球軍に数で劣るザフトが戦争の前半は圧倒していた理由でもある。

「じゃあキラ達のあの二機は元はモビルスーツだったのか？ん？まてよ・・・地球は核を使えないんじゃなかったか？なんであの二機は核を積んでいるだ？」

確かに［Ｎ・ジャマー］が核分裂を阻害するので核は使えない筈なのだがあの二機は核を積んでいる。

「まぁ、そうだね。その話は後でするよ。」

そして話はキラ達の体験した事に移行していく。

「戦争が始まってから十一ヶ月、あの運命の日・・・中立コロニー［ヘリオポリス］で学生だった僕は地球軍の新造艦［アークエンジェル］に引き渡される筈だった地球軍初のＭＳ、通称［Ｘナンバー］や［Ｇ］と言われる五機の機体の奪取作戦に巻き込まれたんだ。そしてその作戦の指揮をしていたのがラウ・ル・クルーゼ。」

「ラウ・ル・クルーゼ・・・キラ君が戦ったＩＳのパイロットね。」

楯無がそう言うと一夏達が少し身を強ばらせた。

「うん、彼はザフト軍の知将とも呼ばれていて、その証拠に次々と［G］は奪取されていった。その時、僕は銃弾が飛び交う戦場を逃げ惑っていると後の［アークエンジェル］の艦長になるマリューさんと出会ったんだ。でも運命的な出会いはそれだけじゃなかった。マリューさんと撃ち合っていたのは小さい時に親友だったアスラン・ザラと再開したんだ。」

キラはあの時の事を今でも鮮明に思い出せる。燃え盛る炎、怪我をしているマリュー・ラミアスにナイフを持ってこちらに来るアスラン・ザラ。

「結局、僕はその後マリューさんと一緒に［G］の一機である［ストライク］に乗り、もう一機の［イージス］はアスランに強奪されたんだ。で、アスランは戦線を離脱したけど［ジン］が奪取に失敗した［ストライク］を破壊しに来た。」

当時の［G］は様々な新兵器を登載していた試験機でもあった為、ザフトにしては地球軍に一機でも残しておく訳にはいかなかった。奪取が失敗したなら破壊するしかない。

「でも［G］はフェイズシフト装甲を使ってたから実弾しか持ってない［ジン］じゃどうしようもなかったね。そして僕は［ストライク］の滅茶苦茶だったＯＳを書き換えて［ジン］を撃退したんだ。」

「ちょっと待って来れ。戦闘中にＯＳを書き換える？キラはどんだけスゲェンだ！」

「本当、規格外だわ。」

一夏と鈴が言うように戦闘中にＯＳを書き換えるのは一般のコーディネーターでも難しい。

「とにかく、僕はその後も部隊の追撃を退け［アークエンジェル］に乗って崩壊した［ヘリオポリス］を抜けて月基地に向かおうとしたけど［アークエンジェル］の物資が底を尽きかけたから一旦、デブリ帯に向かったんだ。そして、デブリで僕達が見つけたのは崩壊した［ユニウスセブン］だったよ。しょうがなく僕達はそこから水やら物資を補給した。その時だったね。ポッドで漂流していたラクスを見つけたのは。」

「懐かしいですわね。」

その時を懐かしむ二人を見たシャルロットが微笑む。

「それが二人の出会い？」

「まぁね。でも［アークエンジェル］は地球軍艦でラクスは当時のプラント最高評議会議長シーゲル・クラインの娘って事で結構もめたよ。」

得にフレイ・アルスターが問題を起こしたがキラはその事は言いたくなかった。

「その後、ザフトの襲撃を受けて危機に陥ったけど［アークエンジェル］の副官ナタルさんがラクスを人質にした事でそれは回避された。」

瞬間、シャルロットが珍しく怒った。

「ヒドイよ！関係ないラクスを人質にするなんて。」

因みにナターシャがナタルの名前を聞いた瞬間ピクッとしたが触れないでおこう。

「僕もそう思ってその後、ラクスをアスランに返したんだ。なにせその時はアスランがラクスの婚約者だったから。」

すると鈴がある事を聞いてくる。

「あれ？確かプラントの強硬派のリーダーってパトリック・ザラっていう人よね？そしてキラの親友の名前がアスラン・ザラ。ラクスの父親はプラント最高評議会議長。これって政略結婚？」

まったくもってその通りである。

「そうですわ。でも、わたくしはあの時キラを見て惹かれてしまったのかもしれないですわね。」

「まさに禁断の恋ってやつね。」

女子が好きそうな話題だ。でも、まさにそうである。ラクスはプラントの最高評議会議長の娘でキラはコーディネーターだが連合のモビルスーツのパイロット。まさに禁断の恋だ。

「その後、僕達は色々とあって地球に降下したんだけど場所が悪かった。なにせザフトの勢力の真っ只中のアフリカに降下したんだから」

その後、キラはバルトフェルドとの出会い、インド洋の死闘、「G」の一つ「ブリッツ」の撃破、アスランとの激闘に友達のトールの死やアスランに撃破された「ストライク」の変わりにラクスから「フリーダム」を受け取った事、「Nジャマーキャンセラー」の事、アラスカの救出劇と「サイクロプス」の存在、パナマ基地の悲劇、地球軍の量産型MSの開発の成功、地球軍によるオーブ進攻作戦などを話した。そして戦争の舞台は宇宙に移行していきそこであった事を話して今度はコロニー・メンデルの話になった。これはキラの重要な部分である。

「僕は「フリーダム」でクルーゼの「ゲイツ」を破壊したんだけどクルーゼは研究所に逃げ込み、ムウさんはクルーゼの後を追って行ってしまった。だから僕も二人を追ったんだ。でも僕はその中で自分の秘密を知る事になったんだ。」

「秘密？」

「うん、コーディネーターは生まれてくるまでが大変なんだ。母胎の影響による欠陥、母体との不適合、早産、流産。」

人体としては当然なエラーだ。だが、人はそうは考えない。

「そしてついに解消方法を考えついた人がいたんだ。彼の名はユーレン・ヒビキ、彼は母体こそが不確定要素と考え、常時安定させる為の装置、いわば人口子宮を作った。」

彼はいくつもの実験を繰り返し、そして最後の試みに出た。自らの遺伝子を受け継ぐ者を、最高のコーディネーターとして産み出そうと。

「そしてスーパーコーディネーターとして生まれたのが僕だった。」

「なっ！！そのユーレン・ヒビキって奴は命を何だと思ってんだ。」

「まったくだ。」

ラウラも試験管ベイビーとして産み出されたのだから共感する所があるのだろう。

「更に実験に失敗したけど生まれてきた人はいるみたいだね。カナード・パルスっていう人がそうだよ。」

キラはマルキオの伝道所で一度だけ会った事がある。何処と無く二人は似ている。それがキラの印象だった。

「あとその時、クルーゼの秘密も分かったんだ。彼はムウさんの父親のアル・ダ・フラガさんのクローンだったんだ。でも、彼は失敗作だったんだ。テロメアが短く、彼と同じ年月しか生きられない。そして彼は捨てられた。」

この時、一夏や千冬や他の全員は何も言えなくなっていた。というより半分哀れんでいたのだろう。C．Eの世界での命にたいする大切さが全く見られないからだ。

「でも、彼はアル・ダ・フラガを殺してプラントに渡ってラウ・ル・クルーゼとして生きて行く事になったみたいだね。そして彼は世界に復讐する事にしたんだ。」

そして戦争はさらに滅びに向かって加速した。クルーゼによって地球軍に［Ｎジャマーキャンセラー］の情報が渡ったせいで核によるザフトの要塞ボアズの陥落。プラントに対する核攻撃、そしてザフトの新兵器［ジェネシス］による多大な被害とそれによる月基地の消滅。もはや一夏達の想像を超える戦いに一夏達は黙って聞くしかなかった。

「そして最後の戦いの時、暴走する二つの軍の中で僕はクルーゼを見つけたんだ。」

あの時、混戦するヤキン・ドゥーエの中をクルーゼは楽しむかのように戦っていた。

「彼はもう武装解除じゃ止められなかった。だから僕は彼を殺すしかなかったんだ。」

キラの［フリーダム］とクルーゼの［プロヴィデンス］の戦いは熾烈を極め、キラは遂にビームサーベルを［プロヴィデンス］のコクピットに突き立てた。

「この後、アスランの［ジャスティス］の核自爆によって［ジェネシス］は崩壊、直後アイリーン・カナーバによってようやく終戦を迎えた。」

「アスランは？」

「アスランはカガリが助けたから大丈夫だったよ。」

その後の［ブレイク・ザ・ワールド］やラクス襲撃事件、ベルリンの悪魔、エクステンデットの強化人間、ロゴス関係やザフトのオーブ進攻作戦、レクイエムの悲劇、デュランダルの［デスティニープラン］、ネクスト粒子の誕生、それによる技術革命など知っている事をキラは全て話した。

「かなり凄い世界だな。よし、次はレイブンだ。お前が知っている事を話せ！」

「了解。」

今、キラとラクスも知らないＣ．Ｅの裏の歴史が明らかになろうとしていた。

明らかになる過去（後書き）

次回はC．Eの裏の歴史話です。

明らかになる歴史（前書き）

更新です。

明らかになる歴史

キラがC．Eの表側の歴史を語り終わって。今度はユウイチがキラとラクスも知らない裏側の歴史を語ろうとしていた。

「レイブン、知っている事を話せ。」

「了解。」

千冬が言うとユウイチは語り出した。

「全ての発端はC．Eがまだ西暦と呼ばれていた頃、再構築戦争が始まる数十年前にある企業が火星で広範囲の莫大な熱を感知したんだ。」

「熱？」

それはあり得ない事だった。当時は火星には何もない筈だからだ

「それはまるで何かが起動したような熱だったんだ。」

その時、企業は国際連合には知らせず火星行きのシャトルを作り極秘に調査班を送りこんだ。

「企業の調査班が火星で見たのは岩石しかない火星には似合わない明らかに人工の施設だった。彼等は調査の為、中に入り施設を調査したんだけど中はオーバーテクノロジーの山だったらしい。そして彼等は施設の最深部で未知の粒子と数百体の生命体を発見した。」

「未知の粒子ってまさか！」

「そう、後のネクスト粒子だ。」

キラ達は生命体の事にも興味を示した。ユウイチが言うには生命体は人間そっくりで一体が人間でいう成人の状態、後は全部、受精卵の状態だったらしい。

「彼等が入っていたポッドには［ジェネレイド］と書かれていたらしい。身体検査をした結果、普通の人間にはあり得ない力を持っていたと報告されている。」

「あり得ない力？」

「詳しい事は知らない。」

キラはかなり気になったが追求はしなかった。

「とにかく最初の成人の状態で見つかった彼女は後に一人の研究者と結婚したらしい。」

「結婚？」

「まぁ、色々とあったんだろう。でも、リボンズが言っていた沙藤美哉は彼女だからたぶん俺達をこの世界に送り込んだのはたぶん美哉達だろう。」

黙って聞いていた一夏が不思議に思い口を開いた。

「なんでその［ジェネレイド］とかいう彼女がキラ達をこの世界

に飛ばしたんだ？」

するとユウイチは考え込み、そして閃いたように顔を上げる。

「とにかく詳しい事はわからん。話を元に戻すぞ。その後、調査をした企業はその施設を使い他の企業をまとめたんだ。」

詳しい事は、調査した企業Ｂ．　Ｇ社を含めた６社のデカイ企業は、その各企業の傘下にいる多数の子会社などを集めて巨大な企業複合体を形成、独自の軍まで作り上げたと言うことだ。

「企業複合体は統治企業連合と名をつけて世界の支配に乗り出した。」

まず、統治企業連合が乗り出したのは経済界だった。経済界を立て直し資金を確保する思惑だったらしい。

「やがて彼等は戦争経済に目をつけ軍事企業であるＤＲ社を筆頭に次々と兵器やら銃器やらを市場に出し、民兵やら傭兵やら政府軍に売って金を荒稼ぎし、戦争の影響で激変する株価も彼等の物となった。」

そうやって統治企業連合は当時の様々な国をも凌ぐ資金と軍事力を有する事に成功する。

「そいつ等は戦争で金を稼いだという事か？なんて卑劣な。」

箒の言う通り普通なら許されない事だ。だが、国は彼等に勝てないのだ。オーバーテクノロジーを持ち、今や政治まで自由に左右できる彼等には。

「あのブルーコスモスの母体であったロゴスでさえ統治企業連合の駒だったんだからな。」

「ロゴスが？」

つまりはロゴスが稼いだ金の半分は自動的に企業連の懐に行くというシステムで。この事は徹底された情報操作で隠蔽されていた為、ロゴスメンバーのジブリールやプラント最高評議会前議長のデュランダルでさえ気付く事は出来なかったようだ。

「やがて企業連はより良く世界を裏から統括する為、世界各国の代表達を煽り再構築戦争を勃発させた。」

「なっ！再構築戦争は企業連が世界を操る為だけに始めさせたと言うのか！！」

　箒の言う通りあの再構築戦争は企業が世界より良く統括する為だけに起こさせた戦争だった。自分達は被害を受けず、他人同士を戦わせる卑劣なやり方だった。

「企業連・・・酷すぎるぜ。」

「本当だよ。」

　キラや一夏の性格上、それは決して許さないだろう。だけどソレを思っているのは二人だけでは無い。この場にいる全員が同じ思いだ。

「再構築戦争が終わり、企業は効率よく世界を支配する事ができ

るようになったが、そんな彼等にも恐る存在があった。」

「恐る存在？」

キラが聞くとユウイチは思い出す様に言葉を繋げた。

「その頃の世界は誰もが知らずにかつ必然的に企業の支配を受けていたのだが唯一企業の支配を受けず高額の金額で依頼を遂行する傭兵達がいた。」

「傭兵？」

ユウイチの目がキラリと光る。

「彼等の名は［レイヴン］。」

「［レイヴン］？」

「最初の［レイヴン］達は２２人。その［レイヴン］達に企業はＣ．Ｅの本当の最初のモビルスーツ、［プロトネクストＭＳ］を分け与えた。」

歴史としては［ジン］が最初のＭＳだが本当の歴史はこの［プロトネクストＭＳ］だ。

「それでどうしたのだ？」

等が聞くとユウイチは苦痛を感じているかの様に顔を歪ませる。

「Ｃ．Ｅ６０、企業は［レイヴン］達を恐れ２２人全員に懸賞金

をかけた。つまり［レイヴン］同士のデスマッチってヤツだ。」

「まさかユウイチさん、貴方は。」

「おれもその中の一人だ。」

多分その場にいた全員が納得した筈だろう。これがユウイチの強さの証だからだ。

「辛かったですわね。」

ラクスは慈愛に満ちた顔でユウイチの髪を撫でる。

「ああ、でもまぁ結局、俺以外の２１人の［レイヴン］と企業連の大企業２社が消えて、戦いは終結した。」

「まさかグローバル・スカイ社とアライブ社？」

キラは前に倒産した企業を思い出す。その二つの会社は倒産する筈が無いと言われていたのにいきなり倒産したとして大騒ぎになったものだ。

「ん？待てよ、ユウイチは今何歳だ？Ｃ．Ｅ６０ってその頃はキラは子供だろう？ユウイチとキラはそんな年は離れて無いだろう？」

確かにキラとユウイチはあまり年は離れていない。だがＣ．Ｅ６０で戦ったとなると幼少期に戦った事になる。

「そうだな。それも話すか。理由は［レイヴン］の中には強化人

間がいるという事だ。勿論連合の薬物強化では無く、肉体の一部を人工の物に変えるだけだ。俺の場合は筋肉や心臓だ。更に血液の中にナノマシンが入っていて老化を防いでいる。」

「老化を防ぐ？そんな事あり得るのか？」

まぁ、みんなの疑問もわかるが実際防いでいるのだから仕方がない。

「とにかくあの戦いが終わった後も［レイヴン］に志願してくる者は後を絶たなかった。だから、企業はあるもので［レイヴン］達をまとめあげ、俺をトップに君臨させた。」

そもそも［レイヴン］は強力な力を持っている存在だ。でなければ２２人の戦いの時に２つの大企業が滅びる訳がない。だから企業は［レイヴン］達をまとめ上げた。そうしなければ［レイヴン］という力はあまりにも強大すぎる。

「そのあるものとはなんですの？」

ラクスは企業のものが気になり聞いてみた。

「火星の施設で見つかった超高性能ＡＩだ。人格を持ち、従来のＡＩより遥かに高性能なんだ。その名は［レイヴンズ・ネスト］。」

企業の高すぎる技術力にキラ達や軍人達やあのオータムでさえ恐れを抱いた。

「［レイヴン］はランキングを付けられ［レイヴンズ・ネスト］の監視下の元依頼を遂行する事になった。

この時には企業にとって［レイヴン］達は恐ろしい存在では無くなっていた。それから数年後、俺はトップの座を降りてＺＡＦＴに入隊し、キラの部隊に配属された。」

「なんでＺＡＦＴに？」

キラはその事が気になった。わざわざトップの座を降りてＺＡＦＴに入隊したのはおかしい。

「わからない。でもプラントがあんな事になって黙ってはおけなかったから。」

キラはいかにも彼らしい理由に少し笑いが出てしまった。

「キラやラクスやユウイチの過去は分かったけど三人は三人だ。コーディネーターだろうがレイヴンだろうが友達には変わらないだよな？」

一夏に箒達五人が当然！と言わんばかりに声を上げる。

「当たり前だ！」

「何を当然の事を言っている？」

「本当よ！」

「僕とセシリアはキラの恋人だよ？」

「そうですわよ。一夏さん！」

「なっ！そっち？」

この時、キラ達三人にとって自分達がこの世界で一夏達に出会えた事が幸せだったと改めて思えた瞬間だった。

明らかになる歴史（後書き）

次回は敵の事とこれからの事の話し合いです。

敵とこれからの事（前書き）

今回は敵とこれからの事の話です。

敵とこれからの事

ユウイチが知っている事を洗いざらい話し終わった頃、ナターシャが唐突に口を開いた。

「三人共、大体の事は分かったわ。でも、私はある事を聞きに来たの。いいかしら？」

「いいですよ。」

「はいですわ。」

「俺もＯＫっす。」

ざわつく一夏達や軍人達には目もくれずナターシャは黒板の所に空中投影型のディスプレイを出現させる。

「なんだ？」

一夏が見たのは何処かの基地とその基地を襲撃している［ジンクス］だった。

「詳しい事は言えないけど、数日前にとあるアメリカ軍基地に貴方達が報告していたＩＳ［ジンクス］数十機の襲撃を受けたわ。だけど・・・」

するとディスプレイの画像が［ジンクス］から赤と黒にカラーリングされたＩＳに切り替わる。

「その襲撃から数分後、謎のＩＳが乱入し二分足らずで［ジンクス］を一掃、更には五分足らずでアメリカ軍基地を壊滅させたわ。」

「なんだって！！」

思わず一夏は声を上げる。一夏だけでは無い、ラウラや真耶や軍人達もほぼ全員が驚愕していた。あのオータムでさえ。そりぁそうだろう。一夏達には脅威の［ジンクス］を二分、世界のトップのアメリカの基地を五分足らずで破壊する。もはや出鱈目な戦闘能力だ。

「貴方達三人はこの機体をしっていて？」

「いえ・・・知りません。」

「私もですわ。」

するとナターシャの目に何やら真剣に見つめるユウイチが映った。

「貴方は知っているようね。」

皆がユウイチを見つめるとユウイチはため息をついて答えた。

「ああ、知ってるよ。驚いたな、こいつは［ナインボール］だ。」

「［ナインボール］？詳しい事を教えて。」

やけにムキになる所を見るとどうやら自分の手で片付けたいようだ。

「こいつは最初はアリーナのトップランカーだった。だが、その

正体はＡＩチップで制御されている無人機だ。」

「無人機？」

「そうだ。統括しているのは［レイヴンズ・ネスト］。目的はイレギュラーを排除することと企業間のパワーバランスを保つことだ。」

「イレギュラーって？」

イレギュラーとは［レイヴン］達の世界では稀に現れる異常な力を持った者の事を指す。かつての２２人の戦いの時はユウイチともう一人の［レイヴン］がそうであった。［ナインボール］は世界のパワーバランスを崩しかねないイレギュラーを排除する為に作られたのだ。それと成長が大きい企業と小さい企業の調整も［ナインボール］の役目である。

「その［ナインボール］でも対応仕切れないイレギュラーが現れる時があるんだけど、その時は［ナインボール］の上位機種［ナインボール・セラフ］が出てくるんだ。」

噂では可変式の機体で超スピードで近付かれ特大ブレードで切り裂かれてしまうという。

「色々と厄介ね。」

「戦う気なら気をつけろよ。強さは並じゃないぜ。」

「ご忠告ありがとう。気を付けるわ。」

投影型のディスプレイを片付けると元の位置に戻っていった。

「他に質問は？」

すると一夏が素早く手を挙げた。

「話に無かったけどリボンズ達は一体なんなんだ？」

それは他の人達も気になっていた所だった。でも、キラ達は彼等の事は良く知らない。

「一夏、残念だけど僕達も彼等の事は良く知らないんだ。たぶん、彼等は僕達とはまた違った世界の人達だと思うよ。」

「そうなのか・・・」

「他に質問は？」

千冬が当たりを見回すが手を挙げる者はいない。

「いないようだな。では、これからの事を説明する。これから行われるＩＳ高速機動バトルレース［キャノンボール・ファスト］は例年通り行われる。だが、リボンズ・アルマークの一派という脅威がある為、貴方達、軍と［亡国機業］に警備を頼みたい。質問は？」

さっきのように見回すが手を挙げる者はいない。

「いないな。相手はこちらの技術を遥かに超えた相手だ。各人、十分に気を付けるように。では解散！」

様々な軍人達が部屋を出ていくなか、あのオータムが一夏に声をかけてきた。

「待てよ、ガキ！」

「なんだよ！」

協力する事になったとは言え、一度は自分の命を狙った人間に親しくするなんて流石の一夏でもそこまでお人好しでは無い。

「今回は協力する事にはなったけどな、全部片付いたらテメーを今度こそ殺してやるからな。」

「挑むところだ！」

オータムは一夏を一瞥すると先をあるいている二人組の所へと戻っていってしまった。

一方、誰もいなくなった1組の教室では千冬とキラ達三人が更にこれからの事を話していた。

「やれやれ、他の世界から来ていた事は知っていたがここまで厄介だったとはな。」

「すいません。」

三人は申し訳なさそうにすると千冬は優しく笑い掛けた。

「お前等のせいじゃないさ。だが、流石の私でも今回の事は手に負えない。だから束を呼んだ。」

「え？束さんを？」

「おい！束！いるんだろ？出てこい！」

すると丁度ラクスの真下の床がパカッと開き、中から束が出てきた。

「キャア！」

「呼ばれて飛び出てジャジャジャ～ン！お！ラクスちゃん、今日はピンクのパンツだね。」

「束さん！」

なんちゅう所から出てくるんだこの人はとキラとユウイチは思っていたが千冬は慣れているらしく、普通にスルーしていた。

「後で一夏達にも説明しておく。束！事情は聞いていたな。」

「もうバッチリ聞いてたよ。企業連だっけ？なかなかズルい奴らだよね～。」

どうやらずっと床下で聞いていたらしい。

「でもゆうちゃんはまだ話していない事があるよね？」

「話していない事？」

三人がユウイチを見ると観念したかのようにため息をつく。

「やれやれ束ちゃんにはそういう隠し事は出来ないか。」

因みにラクスには感情的な隠し事は出来ないと彼は思っている。

「そりゃ、束さんだから。」

するとユウイチの髪と目が蒼白く発光し始めた。しかも目の瞳部分は猫の様に鋭くなっている。

「ユウイチ！なんなのそれ？」

「っ！」

「この力はな、［ジェネレイター］の力なんだ。」

「［ジェネレイター？］」

「［ジェネレイター］とはいわゆる新人類ってやつだ。リボンズ達の世界では［イノベイター］とか言うらしいな。」

因みにユウイチはC．Eの初の［ジェネレイター］の為、［ファースト・ジェネレイター］と呼ばれている。

「なんでそんな大事な事を言わなかったんだ？」

千冬に指摘されてユウイチはギクッとして黙り込んだ。

「まぁいい、追及はしないさ。で、束！お前にはしばらくＩＳ学園にいてもらう。前代未聞の事だ。想定外の事もありうる。」

「オッケー！部屋を用意してくれると嬉しいな！」

束は嬉しいそうにクルクルと回り出した。

「あっ！そうだ、三人のＩＳを束さんに渡してくれるかな？」

「どうしてですか？」

すると束はイタズラを思いついた子供のように笑う。

「束さんが強化してあげるよ。ついこのあいだ面白い事を思い付いたから。因みにキラ君は手伝ってね。」

「分かりました。」

三人が束にＩＳの待機状態である。イヤリング、ネックレス、ブレスレットを渡した。余談だがイヤリングが［ストライク・フリーダム］、ネックレスが［姫桜］、ブレスレットが［ストレイド］だ。

「そうだ！束、私もお前に相談がある。」

「なにかな？ちーちゃん？」

「いいから来い！」

直後、千冬は束の首根っこを掴むと引きずって教室を出ていってしまった。入れ違いで楯無が入ってきた。

「あれって篠ノ之束博士よね？なんでここに？」

「それは、色々と。」

「まぁいいわ。実は三人に折り入って頼みがあるの？」

「頼みですか？」

すると楯無は顔の目の前で手をパンッと合わせる。

「お願いっ！明日からでいいから妹のＩＳの完成を手伝ってあげて！」

思わず三人はキョトンとしてしまった。

「妹さんのＩＳをですか？」

「でもどうしてですの？楯無さんが手伝ってあげれはいいのではないですか？」

「それはちょっと無理なの。」

瞬間的に三人は理解した。どうやら更織姉妹はどうやら仲はギクシャクしているようだ。

「まぁ、それは別にいいですけど。」

「本当？やった！」

「でっ？その妹の名前は？」

「更織簪よ。ＩＳ名は［打鉄・弐式］。」

そこまで聞いてユウイチはあれっと思った。

「工場で完成しなかったのか？」

「うん、［白式］にほとんど回しちゃったみたいね。」

「なるほど。」

「分かりました。簪さんのＩＳの完成を手伝えばいいんですね？」

「うん！よろしくね。くれぐれも私の名前は出さないようにね。」

そう言って楯無は手を降りながら教室を出ていった。

「色々と忙しいね。僕達。」

「そうですわね。」

ようやく教室から出た三人が目指すは勿論、久しぶりに再会することができる自分の部屋のふかふかのベットだった。

敵とこれからの事（後書き）

次回は更織簪が登場します。

更識簪とユウイチの茶番（前書き）

ん～、簪の出番が少ない気がする。

更識簪とユウイチの茶番

ＩＳ学園のＩＳ整備室。それは二年生から始まる［整備科］の為の施設でアリーナに隣接する形で存在している。

「・・・各駆動部の反応が悪い。それに荷電粒子砲の出力も落ちてる。」

そのＩＳ整備室で入り浸り、一機のＩＳの調整をしている女子がいた。彼女の名は［更識簪］。あの更識楯無の妹である。

「もう、今日はここまでにしよう。」

そういって彼女は空中に投影していたディスプレイを消すとＩＳ整備室を出ていこうとした。

「あれ？ドアが？」

閉めた筈のドアが空いている事に気づき、彼女は思わず部屋を見渡した。だが、人の気配は無い。

「気のせい？」

再び整備室を出ていこうとした彼女の耳に声が響く。

「ほへ～、これが［打鉄・弐式］か～！キラはどう思う？」

「この「打鉄・弐式」は防御型の［打鉄］に比べて機動型の設計

だね。」

簪が驚いて後ろを振り向くと二人の男性が彼女の専用ＩＳ［打鉄・弐式］を見上げていた。

「あっ、あなた達は！？」

「驚かせてすまない。だけど一応は声をかけたぜ。」

「えっ？」

「よほど集中してたんだね。」

二人が声をかけていたのに自分が気付かなかった事に簪は深く反省した。でも、本当はキラとユウイチが気配を消して近づいていたので気付けなくて当然である。

「それで貴方達は誰？」

「おれはユウイチ・Ｓ・レイブンってんだ。」

「僕はキラ・ヤマト。よろしくね。」

「貴方達が別世界から来たって言う・・・。」

実はキラ達が別世界から来たということが生徒達にバレていたのだ。たぶん、本音かそこらあたりだろう。流石は女子校である、情報や噂の伝達が異常に速い。でも、直ぐに千冬に外部に洩らすなと釘をさされてしまった。

「なんの用？」

「いや、このＩＳの完成を手伝ってやろうと思ってな。」

「いい！一人でやれる・・・」

「でも、このディスプレイを見るとまだまだだよ。荷電粒子砲の出力や各駆動部の反応も悪いし。」

いつの間にかキラは［打鉄・弐式］のデータが入っているディスプレイを呼び出してスペックや火器などのデータを次々と確認していた。

「勝手に・・・」

「君が一人でやるより僕達が手伝ったほうが早いと思うけど？」

「ダメ・・・これは私一人でやらなきゃ意味がないの。」

ユウイチとキラはこの意味を直感的に理解した。たぶん、簪は姉である楯無に追い付こうとしているのだろう。この［打鉄・弐式］を一人で完成させようとしているのもそれである。かつて楯無が［ミステリアス・レイディ］を一人で完成させたように。だが、実行してみると姉と自分の差を思い知り、やがてそれがコンプレックスとなって二人をギクシャクさせているのだろう。

「だけどよ、君は今までの行事は全て休んでるだろ？これじゃ成績が落ちるぞ。」

「・・・・」

「ユウイチ、今はこれぐらいにしようよ。更識さん、今日は僕達は帰るけど考えておいてね。」

そう言い残しキラとユウイチはＩＳ整備室を出ていった。

「キラ、いいのか？会長に彼女の事を手伝ってくれって言われたんだぜ？」

「うん、でも今はこれぐらいで大丈夫だよ。あんまりしつこいと怪しいまれるし。」

「そういう事か・・・。」

二人がＩＳ整備室に繋がる廊下を抜けて第３アリーナを通過しようとした瞬間、爆音が響いた。

「なんだ？」

「そう言えばこの時間は一夏達の特訓時間だ。」

現在の時刻は６時過ぎ、一夏達は特訓の真っ最中の時刻だ。

「なるほど、会長と一夏達が特訓してんのね。」

「見てみる？」

「そうだな。戻ってもやること無いし。」

二人は第３アリーナに入り、観客席を目指した。

「おーおー！やってるやってる！」

見ると今は一夏と楯無の模擬戦のようだ。他の面々はアリーナの端のほうで待機していた。

「あれ？あれってラクス？」

「おっ？本当だ。ラクスも特訓を受けてたのか。」

見ると確かにアリーナの端の方で鈴と楽しげに話すラクスがいる。

「知らなかった。でも、今の状況じゃ仕方ないよね。」

確かに今はリボンズ達に狙われている事でも大変だったのにクルーゼまで生き返ったのだ。彼なら平気で彼女を殺す事をキラは重々に理解している。だから今は特訓をしたほうがいいのだ。

「俺も参加するか・・・」

「えっ？」

するとユウイチは観客席を降りて一夏達の所へ歩いていってしまった。

「まぁ、ユウイチも最近はストレスを溜め込んでた様だしね。」

連日続きの懲罰室と取り調べは流石のキラも堪えたのだ。だが、キラとラクスはかなり優しいほうでユウイチはもっとキツかったらしい。

「あれ？ユウイチ、どうしたんだ？」

「キミも特訓に参加する？」

丁度、模擬戦が終わり、全員で良いところとか悪い所を出しあっているらしい。

「いやぁね。久しぶりに俺と模擬戦してくんねぇかなって。ちょうど新装備も完成した所だし。」

「新装備？」

「別にいいけど誰と模擬戦するのですか？」

次の瞬間、ユウイチはとんでもない事を言い出した。

「全員だ。」

「「「「「はい？」」」」」

当然の反応だ。ユウイチ一人で七人を相手するのは流石に無理があるというもの。

「えっ？全員？正気なの？」

「そうですわ！ラクスさんと一夏さんと箒さんを除いて全員、国家代表と国家代表候補生なのですわよ。」

シャルロットとセシリアが言うように皆それなりの実力があるの

だ。しかも一人は学園最強の楯無だ。とても正気とは思えない。

「大丈夫だ。俺は数々の戦場を生き抜いたんだぞ？ラクスはともかく、本物の戦場を知らないお前等に負けねぇよ。」

この言葉に鈴やセシリア、特にラウラのプライドに火をつけたようでムッとした顔になる。

「私が本物の戦場を知らないだと？いいだろう！この［シュヴァルツェ・ハーゼ］の隊長、ラウラ・ボーデヴィッヒが相手になってやる！」

鈴とセシリアとラウラはＩＳを展開し、残りの四人もＩＳを展開した。

「本当に大丈夫ですの？」

「ああ、大丈夫だ。それよりいくらラクスといえど手加減しないぜ。」

「分かってますわ。」

八人は向かい合い、数分間の間、緊張した空気が回りを包んでいた。

「はっ！」

「くっ！」

先手を取ったのはラウラ、レールカノンを発射し、プラズマ手刀

で斬りかかる。

「この程度っ！」

「僕もいるよ！」

［エクスカリバー］でラウラのプラズマ手刀を捌いていると後ろからシャルロットがパイルバンカー［盾殺し］で突進してきた。

「ふん！」

「くっ！」

ユウイチはもう一本の［エクスカリバー］でソレを防いだ。だが両手が使えなくなった隙をついて鈴が［双天牙月］を振りかざしてきた。

「これで終わりね！」

「冗談っ！」

「嘘？」

なんと、もの凄いスピードで迫る刃を足の［グリフォン2・ビームブレイド］で止めたのだ。

「ですが、これで動きは本当に止まりましたわ！」

「なわけねぇだろぉ！」

レーザーを避わしたユウイチはブースターを噴射し、上空へと逃げた。

「はあああっ！」

「一夏！？」

一夏が後ろから斬りかかって来たのだ。だが、次の瞬間、一夏は凄いものを見る。

「なに！？」

なんと［ストレイド］の右肩部分からネクスト粒子が散布されたと思ったら右にかなりの速度で移動したのだ。

「今のは？」

「教えてやるよ。束ちゃんが作った新装備、［クイック・トリガー］だ。まぁ、作ったというよりは、どっかのコンピュータからパクったらしいんだがな。」

この［クイック・トリガー］はネクスト粒子で瞬発的な加速を入れてやり、横への急加速を実現させてるのだ。

「姉さんが作ったのか！？」

箒が斬りかかるが［クイック・トリガー］の加速速度は時速１００ｋｍ以上になる為、ほとんど消えたようにしかみえないのだ。

「くっ！当たらない。」

「箒さん！」

今度はラクスがジグザグに移動しているユウイチにハイマット・フルバーストをクリンヒットさせた。

「やったか？」

「いえ、まだですわ。」

「え？・・・」

黒煙の中から現れたのは傷一つない［ストレイド］とユウイチだった。しかも［ストレイド］を包み込むように光の膜が張られている。

「あれは！［ネクスト・アーマー］！？」

そうラクスの［姫桜］にも搭載されている［ネクスト・アーマー］を今回、［ストレイド］と［ストライク・フリーダム］にも搭載したのだ。因みに［クイック・トリガー］もだ。

「くっ！皆！一斉攻撃だ！」

「了解！」

「皆さん！待ってください！」

一夏達は一つ忘れている事があった。［ネクスト・アーマー］にはもう一つの使い方がある事を。

「なっ！？」

「「「「きゃあああああ」」」」

案の定、大爆発。［ネクスト・アーマー］は爆発させる事でソレを攻性に使う事ができるのだ。因みにいまので一夏達のシールドエネルギーが０になってしまった。

「くっ！ラクスはやっぱりやりづらい。」

ユウイチは［姫桜］に銃口を向けたが思わず引っ込めてしまう。

「隙あり！」

当然、傍観していた楯無が襲いかかってきた。

「危なっ！？」

「ラクスちゃん！援護して！」

「わかりましたわ！。」

ラクスは楯無を援護する為、スナイパービームライフルを放った。

「おりゃ！」

「えっ？」

なんとユウイチは斬り合っている楯無を掴むと前にかざしたのだ。

それはまるで盾を使うように。

「きゃあ！」

「楯無さん！」

ビームが直撃し、よろけた楯無に向かってユウイチがハイマット・フルバーストを放つ、楯無は至近距離で全弾が直撃してしまった為、シールドエネルギーが０になってしまった。

「そんなっ！」

ラクスは必死にビームを撃つが［クイック・トリガー］で避けられてしまう。

「くっ！」

「ゴメン、ラクス・・・」

ラクスはビームサーベルを振るが避けられてユウイチの接近を許してしまった。

「これでっ！！」

ユウイチは［エクスカリバー］を持ち上げ、ソレを振り下ろす。

ガキィィィン

「なっ！？

「キラ！？」

なんとビーム刃がラクスに到達する直前にキラがソレを止めたのだ。

「キラ!?」

「ゴメン!でもやっぱり見てられなかった。」

「いいさ。俺はこれを待ってたんだ。」

「え?」

つまり、ユウイチはクルーゼが現れてからキラが元気がないのを見ぬいていて、同様に見ぬいていた一夏達に協力してもらって今回の模擬戦をしたのだ。

「じゃあ、今までのは芝居?」

キラが一夏達を見るとピンピンしていた。どうやらユウイチは全ての火器の威力を低に変更していたようだ。

「とにかく、今は俺をクルーゼだと思って全力でぶつかって来い。そして全部のモヤモヤとかそういうのを出しちまえ!。」

「ええっ?、でも!」

キラは思わずラクスを見ると彼女はいつも通りに微笑んでいた。

「キラ、前にも言った通り、お一人で頑張らないでくださいな。もっとわたくし達を頼ってくださいな。それにキラが元気じゃない

とわたくし達は悲しいですわ。」

「ラクス・・・」

キラは暖かく、優しく接してくれる彼女や一夏達に思わず申し訳ない気持ちになりながらも胸が熱くなるのを感じた。

「ありがとう。皆。」

「よおし、これが終わったら、食堂でパーティーでその後はお前等四人でお楽しみだな。」

「ユウイチ・・・ありがとう。」

「お礼なんてよせよ。まずは全力で来い。」

こうして、最強の大天使と最強のカラスの戦いが始まろうとしていた。

一方、簪は密かに第3アリーナに来ていてこの事を見ていたのだ。

「・・・」

無表情だが彼女は今、興奮に包まれている。その事を本人が気付いているかどうかはわからない。だけどヒーロー物のアニメが好きな彼女にとってこの展開は燃える展開だということは間違いないだろう。

更識簪とユウイチの茶番（後書き）

ネクスト・アーマーとクイック・トリガーの元ネタはアーマード・コア４とｆａをやっている方なら分かると思います。

フリーダムの進化（前書き）

申し訳ありません。受験が忙しく更新できませんでした。

フリーダムの進化

ＩＳ学園の第３アリーナ、時刻は既に夜で少し肌寒いがそこは確かな熱気に包まれていた。原因は第３アリーナで戦っている二人だった。

「くっ！！」

「はぁぁっ！！」

キラとユウイチはビームサーベルと対艦刀で斬り合いながらアリーナを駆け巡っていた。しかも一夏達にはその姿を捉えられないほどのスピードだ。

「すげ～・・・全然見えね～。」

「本当だよ。ぶつかり合っているのは分かるけど。」

彼等には二つの青い軌跡がぶつかり合い、離れてはまたぶつかるようにしか見えないのだ。

「くっ！何故だ？」

「はぁっ！！」

他からは一見、互角のように見えるがユウイチは内心焦っていた。何故ならユウイチが右に移動すればキラは塞ぐように右に移動する

し、左に移動すれば同じ様に左に移動する。更には移動先と停止点を見透かす様にビームを放ってくるのだ。

「まさか・・・見えているのか?」

「どうしたの?集中しないと危ないよ?」

「あ・・・」

焦っていたユウイチはキラのビームを避けられず直撃してしまう。おかげで１０００近くあったシールドエネルギーが７００近くまで下がってしまった。

「ユウイチ、ありがとう。ようやく分かったよ。僕の想いが。」

「想い?」

ユウイチは分からず首を傾げた。

「うん、ラウ・ル・クルーゼやリボンズは何か企んでるのは分かってる。それは止めたいのは当然だけどその前に僕はラクスや一夏達と今日を明日を生きたい。」

「一夏達とって・・・C．Eには戻らないのか?」

「C．Eに戻るのを諦めた訳じゃないよ。でも一夏達とこの世界で過ごす事も今の僕にとって大切なんだ!」

今のキラの瞳にはユウイチが今まで見たことの無いような決意と自信が見えていた。

「なるほど、言いたい事は分かった。尚更、俺は全力で行かないといけないな。この戦い・・負けられねぇ、［ストレイド］！」

ユウイチの呼び掛けに呼応する様に［ストレイド］のカメラアイが青い光を灯す。

「キラ！俺はこの時だけ傭兵レイヴンに戻る。レイヴンの力と誇りをお前に見せてやるよ。」

「分かった。行くよ！」

二機は凄まじいスピードで激突し、激しい銃撃戦を繰り広げた。

「この感覚・・・面白い！」

「はぁ！」

ユウイチは腰からドラグーンを射出、粒子で複製して３０基のドラグーンを差し向け自身も［エクスカリバー］を抜いて突撃を掛けた。

「この程度の数！」

キラもスーパードラグーンを射出、複製して同じく３０で放つ。二機はいくつものビームを放ち、緑色のドームを作りあげ、その中で接近戦を繰り広げた。

「右腕、貰った！」

「くっ！」

ユウイチが左腕の［ムーンライトビームブレイド］で［ストライクフリーダム］の右腕を斬ろうとするがキラは右足で蹴り上げてソレを弾く。今度は逆にキラがビームサーベルで左腕を斬ろうとするがユウイチはビームシールドで受け止めた。

「僕は・・・」

キラはいくつものドラグーンを駆使しながら自分に猛襲してくる［ストレイド］を睨みつける。

「はぁ！」

ユウイチは僅かな隙が出来ていた右胸に向けて［エクスカリバー］を降り下ろすが［ストライクフリーダム］はとんぼ返りをし、逆にレールガンを放ち、ユウイチにダメージを与えた。

「何だ？」

ユウイチはあることに気付く。この第３アリーナにいつの間にか緑色の粒子が浮遊しているのだ。どうやら第３アリーナだけでは無くＩＳ学園全体に浮遊しているようだ。何故なら空から寮の方を見ると生徒達が続々と外に出てくるのが見えたからだ。

「なんですの？この光は？」

「綺麗～！」

「暖かい感じがするぞ。」

「緑色・・・ネクスト粒子は青色ですから違いますわね。」

不思議な事が起こると更に不思議な現象が起こり易いもので案の定、それは起きた。

「何だ?これは?」

「僕は・・・ラクスを・・・セシリアを・・」

「声!?」

なんと頭の中にキラの声が直接聞こえるのだ。しかもキラの感情、いや、願いまで伝わってくる。

「シャルを・・・一夏を・・・みんなを・・・」

「キラ・・・」

「守るんだぁ!!!!」

キラが絶叫した瞬間、キラの意識は違う所に飛ばされていた。

「ここは?僕は第3アリーナでユウイチと戦っていた筈。」

いきなりの事で少し動揺したが直ぐに冷静になり、まず辺りを見回すことにした。廃墟と化した建物がいくつもある。どうやらキラは廃墟と化した町にいるようだ。

「建物の形からして中東かな?」

キラはしばらく歩いていると一人の男を見つけた。その男は黒髪のボサボサ頭で、少し虚ろな目をしている。だが、その目には確かな決意が見える。着ているのはパイロットスーツだろうか？だが、見たことの無いパイロットスーツだ。

「お前は誰だ？」

「えっ？僕？僕はキラ・ヤマト。キミは何処から来たの？見たところパイロットのようだけど？」

「まぁ、そんなところだ。ここは俺の夢の中だ。」

「夢・・・？」

キラは分からず首を傾げた。

「多分、お前をここに連れてきたのはそのガンダムだろう。」

「えっ？」

彼は視線をキラの後ろに向けたのでキラも後ろを振り向く。

「［フリーダム］！どうして？」

なんとそこにはモビルスーツの［ストライクフリーダム］が屹立していたのだ。

「これがお前のガンダムか？」

「キミ・・・ガンダムを知ってるの？」

「俺の機体もガンダムだ。」

見るといつの間にか彼の後ろにもガンダムが現れていた。彼のガンダムは「ストライクフリーダム」よりも細身で一段と目を引くのは肩の所についている二つのドライブらしき装置だ。

「おれはガンダムと共に世界を変える。」

「世界を？」

「ああ、お前は何がしたい？」

「僕は友達を恋人を守りたい。そして一緒に今日を明日を戦う。」

キラはまっすぐに彼を見つめた。彼もまっすぐに見つめ返した。

「なら、お前のガンダムはそれに応えてくれる筈だ。こいつが俺に応えてくれたように。」

そう言って彼は自分のガンダムを見つめる。その顔には信頼か憧れか分からないがそう言ったものが含まれている。

「あ・・・」

廃墟の町が消え失せようとしている、彼の夢が終わるのだろうか。

「またいつか会おう。キラ・ヤマト。」

「待って！キミの名前は！？」

「俺の名は刹那・Ｆ・セイエイ。ソレスタル・ビーイングのガンダムマイスターだ。」

そう言って廃墟の町と彼と彼のガンダムは闇に消えた。替わりにすぐ一つの光が現れ、爆発したかと思うとキラと［ストライクフリーダム］は青空の中に立っていた。上も下もない青空が広がっている世界で彼等は向き合う。

「ゴメン、ラクス達を守るって言っても君がいなきゃ僕はなにもできないよね。」

キラは［ストライクフリーダム］に触り、彼にささやく。

「［フリーダム］、僕はラクスを一夏達を彼等の世界を守りたい、そして彼等と共に歩んで行きたい。だから力を貸して。」

キラが優しく問いかけると膝をついて座っている［ストライクフリーダム］のカメラアイに光が灯る。たぶんＯＫという意味だろう。

「ありがとう。」

するとキラの頭に声が響いた。

「君の名前？もう一つの名前？」

答えは直ぐに返って来た。

「分かった。」

途端に光が弾け視界が戻るとそこは第3アリーナだった。

「行こう・・・［フリーダム］。いや、［アブソリュートフリーダム］！」

「何！」

キラが叫ぶと［フリーダム］から青い光が拡散、第3アリーナから溢れ、IS学園全体を包み込みんだ。

「なんだこりゃ！？」

「まさか、［フリーダム］の第二形態移行［セカンドシフト］！？」

「これはキラの色ですわ！」

「さっきより綺麗だな！」

一方IS学園では残業していた真耶が驚きの声をあげていた。

「なっ！なんなんですか？この光は？」

真耶は半泣きになりながら千冬を見ると千冬は深刻そうな顔をしていた。

「山田先生！束を連れて第3アリーナの管制室に！私も後で行きます！」

「あっ！？はい！」

「「キラ、もしかしてこの色はまさかお前か？」」

対戦相手であるユウイチもまた茫然自失していた。そりゃそうだろう。対戦相手がいきなり第二形態移行［セカンドシフト］をしたんだ。しかもよりによってキラがである。

「行くよ！ユウイチ！」

「うっ！！」

光の中から現れた［ストライクフリーダム］は機体本体はあまり変わってないが翼の形が［デスティニー］と［フリーダム］を混ぜたような形になりそれが四枚になっている。ますます大天使のイメージが強くなった。そして装甲には繋ぎ目の所々に溝があり、そこを青い光が灯っていた。そのおかげでかなりのハイテク感を感じる。そして手の指には［白式］のクローのような追加装備がなされている。しかもどうやら［パルマフィオキーナ］まで装備されているようだ。足にもジャスティスの［グリフォンビームブレイド］があるようだ。

「まさか、その［フリーダム］って・・・」

「うん、この機体には今まで一緒に戦った機体のデータが組み込まれてるんだ。」

「まじかよ！」

「じゃあ行くよ！［アブソリュートフリーダム］！」

次の瞬間、キラが消えた。いや、ユウイチにはそう見えたのだ。つまりキラと［アブソリュートフリーダム］はユウイチにも捉えられないスピードを出しているのだ。

「速っ！無理だろう？こんなの！」

「後ろだよ！」

「えっ？」

キラは大出力のビームサーベルを一閃、［ストレイド］の腕の装甲が吹っ飛ぶ。

「腕が無くなった訳じゃねぇ！」

ユウイチは翼からビームを雨の様に撃ちながら突撃した。するとキラは手のひらを前に突きだしたと思ったらビームが何かに当たってかき消されたのだ。

「あれは！？」

「雪羅のシールド？」

今度はハイパードラグーンを射出、二基を差し向けた。

「たった二基？」

するとドラグーンは見当違いの所にビームを放ったのだ。

「どういうつもりだ？」

ユウイチが疑問に思っているとなんとユウイチの後ろからビームが飛んで来て直撃したのだ。

「これは！？」

「まさか偏向射撃［フレキシブル］ですって！まさかそんな！」

そうセシリアが今、苦労して練習しているのが偏向射撃［フレキシブル］だ。それをキラはあっという間にものにしたのだ。

「くそ！」

やけくそになったユウイチは蹴りを放ったがその蹴りはいつまでたってもキラに到達しないのだ。

「まさか・・・」

「ＡＩＣか！」

「これだけじゃないよ。」

ユウイチはもう戦意喪失といった感じで見ていると［アブソリュートフリーダム］が黄金色に輝きだしたのだ。

「［エンジェル・システム！］」

「ワンオフ・アビリティか・・・」

後ろの四枚の翼がエネルギー性の翼に変わっていったのだ。それはまるで本物の天使の翼。

「これで終わりだね。」

複製して６０近くのドラグーンと両手のビームライフルと腰のスーパーレールガン、腹部のカリドゥス２にエネルギー性の翼が一斉に火を吹いた。そのビームの数は１００を超えている。

「もう許して・・・」

ドカァァァァン

もの凄い爆発と光が起こり［ストレイド］のシールドエネルギーが０になった。

「勝者キラ・ヤマト。」

煙が晴れるとそこには気絶しているユウイチの姿があった。

「ユウイチ！大丈夫？」

「お～い！キラ！ユウイチ！大丈夫か～！」

一夏達が駆け寄って来た。

「スゲーなキラ！まさか第二形態移行するなんて。」

「まぁ、僕も正直驚いているよ。そんな事よりユウイチを早く保健室に！」

「おっおう！」

気絶しているユウイチを担いで一夏は走って行ってしまった。

「キラ、大丈夫ですか？」

「ユウイチはともかく大丈夫だよ。」

「良かったですわ。では、お部屋に戻りましょう。今はゆっくりお休みになりませんと。」

「そうだね。」

二人は手を繋いでアリーナを出ていった。この時、キラはこう思っていた。今日は取りあえずラクスの横で眠ろう。他の事は全部明日にとっておこう。嫌でも明日は来るのだから。

この戦いから数時間後、ユウイチは誰もいない保健室で目を覚ました。

「お目覚めだね。」

「お前か・・・もう少し普通に出てこれないのか。」

暗闇からリボンズが現れた。どうしてここにいるかは不明である。

「まさか、キラ・ヤマトが第二形態移行［セカンドシフト］するとは思ってもいなかったよ。」

「ん？じゃあ、あれはお前等の仕業じゃないのか？」

「どういう事だい？」

リボンズは珍しく首を傾げた。

「いやぁねぇ、［フリーダム］が第二形態移行［セカンドシフト］をする直前に緑色のたぶんＧＮ粒子かな？とにかく緑色の粒子が浮いてたんだよ。そしたらキラの声や願いが伝わってきたんだ。」

「そんな馬鹿な。」

ユウイチがリボンズの顔を見ると凄い苛立ちを込めた顔をしていた。

「どうした？」

「いや、なんでもないよ。今日は引き上げる事にするよ。」

そう言ってリボンズは再び闇に消えた。

「まったく・・・普通にできんのか、あいつは？いや、それより来るなよ。」

そう言ってユウイチは窓に目を向ける。そこには様々な色のネオンとかでライトアップされた街の夜景が見えた。それはまるで闇に浮かぶダイヤモンド。

フリーダムの進化（後書き）

進化したフリーダム、恐るべし。

アブソリュートフリーダム（前書き）

テストがヤバいです。

アブソリュートフリーダム

ＩＳ学園の地下五十ｍにある特別な空間、レベル４権限を持つ者しか入れない特別な所、今そこにユウイチは向かっていった。目的は無論、第二形態移行［セカンドシフト］を遂げた［フリーダム］である。

「まさか、こんな早く進化するとはな。名前は確か・・・［アブソリュートフリーダム］だっけ？前以上に強くなってどうすんだ？」

色々と考えていると目的の地下室にエレベーターが着いてドアが開いた。

奥にはキラ、ラクス、束、千冬、真耶が繁々とディスプレイを見ている。どうやら、昨日の［アブソリュートフリーダム］と［ストレイド］の映像のようだ。

「どうだ？［フリーダム］の分析の方は？」

「あっ！ユウ君！凄いんだよぉ、進化した［フリーダム］は！」

興奮気味の束が駆け寄って来た。まぁ、理由は分かっている。

「何が凄いんだ？」

「いやぁね、今回の［フリーダム］にはエンジェルドライブが二個も内蔵されていて、小型核融合炉の代わりにプラズマ核融合炉が

搭載されてるんだよぉ！」

「なるほど、エンジェルドライブが二個ねぇ～。だからあんなにネクスト粒子が放出されてたのか、しかも今回はプラズマ核融合炉だってぇ？またとんでもないものが搭載されてるなぁ」

簡単に言うと核融合時に核燃料を1億度以上に加熱、プラズマ状態にしてそのパワーを貰おうというもの。だが、そのプラズマに触れたものは瞬時に溶けてしまう。それを入れている容器も例外ではない。しかし、ここで活躍するのがネクスト粒子だ。その容器はネクスト粒子でコーティングされているので溶けるのを防いでいる。その原理はネクスト粒子の特性である。ネクスト粒子を密着させ、熱を加えると特殊な磁場が発生してプラズマから容器を守ることができるのだ。つまりはネクスト粒子を使いプラズマの熱でプラズマから守っているという事。

「武装は？」

「それはこっちで調べたよ。」

今度はキラがディスプレイを眺めながら答える。

「ほとんどは［ストライク・フリーダム］の武装の強化版だね。まず、［ＭＭＩ－ＧＡＵ２８Ｄ３１ミリビーム近接防御機関砲］、［ＭＧＸ－２２３６カリドゥス２複相ビーム砲］、［ＭＡ－ＭＯ３Ｇシュペールラケルタ２ビームサーベル］、［ＭＭＩ－Ｍ１６Ｅクスィフィアス４レール砲］、［ＥＱＦＵ－４Ｘハイパードラグーン］、［ＭＡ－８１Ｖビーム２突撃砲］、［ＭＸ２３００大出力ビームシールド］、［ＭＡ－Ｍ２２ＫＦ大出力ビームライフル］。」

「確かに前の強化版だな。」

「新しく追加されたのが、［Ｍ２００バラエーナ２プラズマ収束ビーム砲］、［ＧＫＤ－Ｋ４００ホワイトビームクロー］、［ＫＥ－Ｊ６０Ａ五十六口径ビーム機関銃ラゼル］、［ＷＰ－ＡＧ４００ビーム散弾銃ルドラ］、［ＭＭＩ－Ｘ３４０パルマフィオキーナ２］、［ＭＸＺ－４５２衝撃砲ガントレット２］、［ＭＲ－Ｑ１６Ｒグリフォン２ビームブレイド］。」

もはや化物並の武装である。だが、ユウイチはどうしても知りたいことがあった。

「やっぱり、特殊なやつとかあるのか？」

「うん、ラウラの［ＡＩＣ］、シャルの［ラピッドスイッチ］や、オリジナルで［プライアルアーマー］と［クイックブースト］かな、たぶんこの二つはユウイチとラクスの［ネクストアーマー］と［クイックトリガー］の強化版だね。あと［デバイスドライバ］の［デコイ］が使えるよ。」

「分かった！もういいよ、気持ち悪くなってきた。」

そう言いながらユウイチは口を手で塞ぐ。

「それでも聞いて。ワンオフアビリティに［エンジェルシステム］があるんだけど。」

「［エンジェルシステム］？」

するとキラはディスプレイの映像をエネルギー性の翼を羽ばたか

せている［フリーダム］に切り替えた。

「これの事だよ。この翼のおかげで［フリーダム］の速さは更に上がる。これならリボンズ達の［トランザム］に対抗できるよ。」

「げぇ！あれより速くなんのかよ。しかし、前に戦った［シルバリオ・ゴスペル］の第二形態の翼に似てるな。」

「まぁ、そこは置いといて。僕の報告は以上かな。」

今度は真耶が手を挙げた。まだ何かあるらしい。

「今度は私からの報告です。私が気になったの装甲なんですが。」

「装甲？」

真耶はディスプレイの映像を切り替え、設計図のようなものに切り替えた。

「なんだこりゃ？」

「まず、私が気になったのは、この［ネクスト・フレーム］という装甲です。前の機体は［ＶＰＳ装甲］だけでしたが、今回は［ネクスト・フレーム］が追加として内部装甲と外部装甲に装備されています。」

「そんなのどこにあんだ？」

今度は別のディスプレイの映像を［フリーダム］の静止画に切り替えた。

「ここですよ！装甲の所々が光ってる所。それが［ネクスト・フレーム］です。」

確かに全身の装甲の所々が青く光っている。

「それに前は金色だった関節とかが今は水色に光ってる。で？これがどうしたって？」

「調べてみたらこの光の正体はネクスト粒子でした。そのおかげでヤマト君の脳波をコクピッドのコンピュータが感知、ダイレクトに各駆動部に指令を送り、前より速い反応ができる仕組みになっています。しかもこの装甲はビームの威力を半減させることもできるようです。」

「つまりキラと［フリーダム］の一体化という事ですわね。」

「ああ、新しいＡＭＳのような物か・・・」

するとラクスは深刻そうな顔で考え込む。

「こうなった以上、私達は更に大変な事になりますわね。」

それはつまり、いずれは［アブソリュートフリーダム］の存在は各国の知るところになり各国は何としても機体を手に入れようとするだろう。合法か非合法かは問わず。それにリボンズ達もこれだけの強力な機体を無視するわけがない。そしてもう一つ気になる一派もある。

「企業連が何かしてこなきゃいいけどな。」

「どういう事ですの？」

「それはな、束が作ってくれた［ネクスト・アーマー］と［クイックトリガー］のデータは企業連傘下の企業のデータベースからとったものなんだ。」

「なっ！束さんなんていう事を！」

なんという事だろう。束は企業連のデータベースをハッキングし、重要データを盗んだのだ。盗まれた企業連は必ず取り返す為に乗り込んでくる筈だ。

「ええ～、だってぇ！あんなロックの緩いファイルにあったら誰だってもってちゃうよぉ～。だから束さんが先に拝借したんだよ。」

今度は千冬が頭を抱えて始めた。

「全く、お前はという奴は。ユウイチ・・企業連はこちらに来ると思うか？」

ユウイチは深く頭を垂れて考え込んだ。数秒後、閃いたように頭を上げた。

「いや、来ないな。考えて見ろ！束はセキュリティの緩いファイルから盗んだんだろ？という事はそれは既に用済みの筈だ。」

「なるほど。」

だか、安心はしてられない。用済みという事は既に機体に組み込

まれているという事だ。

「まぁいい、今回はこれで終わりにしよう。続きは明日だ。解散！」

千冬が解散と言ったので三人は仕方なくエレベーターに乗り地上を目指した。

「しかし、あれだな。キラはこれ以上強くなってどうすんだ？」

「分からないけど皆を守れるなら。」

するとラクスがそっと優しく腕を抱いてきた。

「でも、無理はしないでくださいね。貴方は一人ではないのですから。」

「分かってる。ありがとうラクス。」

微笑みあう二人を見ていたユウイチは思わず笑いが出てしまった。

「はは、羨ましいよ。お前は、ラクスの他に美人の二人がいるんだからなぁ。」

あと少しで地上という所でラクスがある事を言い出した。

「そうですわ！お二人に会いたいという方がいらっしゃいましたわよ。」

「会いたい人？」

「誰なの？」

すると丁度良く地上に着き、エレベーターが開いた。

「あっ！」

「キミは！」

エレベーターが開き、そこにいたのは簪だった。

「どうしたんだ？」

「あの・・・昨日の申し出を受けようと思って。」

「本当か！」

「でも、なんで急に？」

すると簪はうつ向きながら答えた。

「昨日の戦いをみてて・・・正直凄かった・・・だから知りたい・・・二人の強さを・・・だからラクスさんに。」

つまり簪は機体の完成という名目で二人と一緒にいればそれが何か分かるだろうと考えたようだ。

「なるほどね～。じゃあ、お近づきの印に俺の事はユウイチでいいぜ。」

「僕もキラでいいよ。」

そう言って二人は手を差しのべた。

「じゃあ・・・私も簪でいい。」

簪も二人の手を握る。するとユウイチは嬉しそうに叫んだ。

「よっしゃー！じゃあ、早速簪のＩＳの所に行こうぜ。なっ？キラ。」

「うん！」

そういって二人は半ば簪を引きずるようにＩＳ整備室へと向かっていった。

「あらあら。」

ラクスは遠ざかって行く三人をいつまでも眺めていた。そしてしばらくしてラクスは唐突に口を開く。

「いつまで隠れておられるおつもりですの？」

すると廊下の曲がり角から赤髪の男が出てきた。

「これはラクス嬢、まさか気付いておられたとは・・・少々侮っていました。」

「企業連の方ですわね。」

男がサングラスを外すと髪と同じ色の瞳でラクスを見つめる。

「まぁ、確かに簡単に言えばそうですね。私の名はレッドバレル。アリーナのトッププランカーです。」

「なっ！」

それは現在のレイヴンの中で最強という事だ。

「何の用ですの？ユウイチなら今はいませんわよ。」

「いやいや、今回はラクス嬢にお話があるんです。」

「わたくしに？」

するといきなり冷たい秋の風が二人の間を吹き抜けていった。それはまるで警告のように・・・。

アブソリュートフリーダム（後書き）

ネクスト・フレームはユニコーン・ガンダムのＮＤ－Ｔシステムがフリーダムに装備された感じです。

赤と紅（前書き）

機体名に着けていた□はやめました。

冷たい風が吹き付けるＩＳ学園の廊下でラクスはある男と対峙していた。男の名はレッドバレル、彼が言うにはレイヴンアリーナのトップランカーらしい。

「アリーナのトップランカーの貴方が一体わたくしに何の用ですの？」

「嫌々、貴方にある事をお話する為にね。」

いつも温厚なラクスにしては珍しく警戒心を表に出してレッドバレルを見つめた。

「こんな所で話すよりどこか行きましょう。」

「え・・・？」

レッドバレルがラクスの肩に触れた途端、周囲が光り気付くとなんとショッピングモール『レゾナンス』の中にあるカフェ『イースター』の前にいたのだ。

「これは！」

「ふふ、これも企業の技術力ですよ。」

驚いているラクスを見ながらレッドバレルはカフェの中に入っていった。

「それで一体何の用ですの？」

二人は一番奥の席に座りラクスはレモンティーを、レッドバレルはモカを頼んだ。

「それでですね。今回の話はあるお知らせがあるんですよ。」

「お知らせですの？」

レッドバレルはモカを見つめながら口を開く。

「いつかは分からないけど、企業連はそろそろやるつもりだよ。」

「やるって・・・なにをですの？」

するとレッドバレルの目がキラリと光る。

「国家解体戦争を・・・」

「国家解体戦争？」

「それはですね・・・」

そう言って彼は話し始めた。彼が言うには企業連はこの世界にもその魔の手を伸ばし裏で政治や様々な業界を操っていたが遂に企業連は国家を倒し新たなる統治体制を確立させる為に準備しているとの事。

「この世界だけではなく、Ｃ．Ｅにも仕掛ける気のようですよ。でも、それをいつ宣戦布告するかは分からないですが。」

「まさかこの世界にも企業連が・・・」

「色んな並行世界を支配下にしていますからね。」

「この世界は並行世界なんですの？」

「そうですよ。あの男から聞いた様に企業連は火星で見つけたテクノロジーで様々な物を作ったんですよ。並行世界を行き来する為のポーターもその一つなんです。」

「・・・」

企業連が様々な並行世界を支配下にしているという事はかなり驚いたが彼女はある事が気になっていたのでその質問をする事にした。

「それで、レイヴンである貴方がなんで私にそれを教えてくれるのですか？」

すると彼は驚いた様にラクスを見つる。

「レイヴン？私が？ああ！言い忘れてましたね。私はレイヴンじゃありませんよ。」

「えっ？でも、アリーナのトップランカーだって。」

「ああ、その事も話しておきますか。今の戦場を支配しているのはレイヴンじゃありません。我々『リンクス』です。」

「リンクス？」

「ええ、我らのネクストＭＳに搭載されている新型のＡＭＳによって機体と一体化、そしてリンクス全員が体内の筋肉、骨、内蔵、血管などを全て人口の物に置き換えあらゆる負担に対応可能で、レイヴン達より遥かに高い戦闘性能を実現。よって戦場の主役になったという事になった訳ですよ。つまり私はリンクスのトップランカーなんですよ。」

「リンクス・・・レイヴンは一体どうなったんですの？」

「ああ、今のレイヴンは施設の警備、要人の護衛などをやってるらしいね。」

まさに天と地がひっくり返ったような状態である。だが、彼はラクスの質問の答えは言っていない。

「貴方の事は分かりました。ですがさっきの質問にお答えしてもらってませんわ。」

その瞬間、彼の目が確かに光るのをラクスは見逃さなかった。

「面白くないじゃないですか。そんな不意打ちをするくらいなら、事前に教えておいてお互い万全の状態で殺し合ったほうが楽しいと思いますけど？」

ラクスはゾクッとして思わず立ち上がってしまった。

「貴方！人殺しが楽しいとお思いなのですか！？」

レッドバレルは怖がる彼女を楽しそうに見ながらこう告げる。

「勿論じゃないですか。その為に創られたのですから。我々と貴方達と一緒にいる元レイヴンは・・・」

「っ！ユウイチが？」

「まぁ、お話はこれぐらいにして私は戻らせてもらいますよ。」

「えっ！？待ってください！」

ラクスは彼を追いかけようとしたが肩に彼の手が触れ、気付いたらＩＳ学園の廊下に戻っていた。

「あっ！ここはＩＳ学園・・・っ！キラとユウイチに教えないと。」

彼女はキラ達にレッドバレルとの事を伝えようと彼等の元に走って行った。

一方、レッドバレルはラクスと自分の支払いを済ませてレゾナンスを出た後、街の中を歩いていた。

「やれやれ、紅い鼠が付いてきているようだね。」

レッドバレルは人混みの中に一人だけ自分を尾行している事に気付き、どうしようか考え始めた。

「銃は持ってないし、街中でＩＳを起動させる訳にもいかないし。」

しょうがなくレッドバレルは路地に入り尾行者を待つことにした。
そうしたら案の定、赤髪の男が路地に入って来た。

「君か・・・アリー・アル・サーシェス。」

「よぉ！俺の事は知ってるみたいだな。」

「ああ、リボンズ・アルマークの手駒で傭兵でもある。」

「そのリボンズの大将から伝言だ。これ以上は邪魔するなってさ。」

「そう、答えはこうだよ。」

するとレッドバレルは２ｍはある距離を一瞬で移動し、サーシェスの額に手を当てた瞬間、二人は何処か南国の無人島に移動していた。

「なっ・・・！？」

「さぁ、ここなら気兼ね無くやれるさ！」

彼は愛機『ルキフェル』を展開すると相手の出方を待った。

「はっはー、あんたも話が分かるねぇ！」

サーシェスも『アルケーガンダム』を起動しルキフェルと対峙する。

「いくぜ！」

サーシェスはGNバスターソードを引き抜きレッドバレルに斬り掛かる。するとレッドバレルは後ろに下がり化物じみたレーザーライフルを連射した。

「危ねぇ～、なんて威力だ。」

「ハイレーザーライフルの傑作、カラサワMk?だからな。」

彼は笑いながらカラサワを連射し、サーシェスを追い詰める。

「これだけじゃねぇよ！」

悪あがきの様にファングを放つ。だが、肩からネクスト粒子を噴射し横に高速移動しながら回避していく。

「なんだ?」

「これはクイックブースト。篠ノ之束博士が企業連のコンピュータをハックし、真似してクイックトリガーを作ったようだが正式名称はクイックブーストだ。でも、まさかキラ・ヤマトの新しいフリーダムに搭載されるとは思わなかったけど。」

レッドバレルはうわ言の様に言いながら今度は左肩の四連装ミサイルポッドを放つ。

「クソが！」

バスターソードを振り回しながら近づくがレッドバレルは左腕のビームブレイドで斬撃を避けていく。因みに彼の赤と黒でカラーリ

ングされたネクストＭＳルキフェルは高速機動戦闘の為に設計された機体のため、長距離航行のできないアルケーガンダムでは不利である。

「隙アリ！」

「ところがギッチョン！」

アルケーガンダムは左足に取り付けられているビームサーベルで斬りつけた。

「ところがギッチョンチョン！」

ところがルキフェルはヒラリと避けて右肩のビームグレネードランチャーを撃つ。

「ぐあ！」

「甘い！」

一撃で超弩級戦艦をも落とすほどのビームランチャーを至近距離で撃たれたのだ。ダメージも半端ない。

「やべぇ～！威力半端ねぇ～！」

今のでシールドエネルギーが2まで下がったので仕方なく撤退を余儀なくされる。

「くそ！なんか俺、この世界に来てから負けてばっかだな。」

「ふっ！それは井の中の蛙って事だよ。オッサン・・・」

レッドバレルはアルケーガンダムが見えなくなるまで見つめていると一機のネクストＭＳが近づいてきた。

「ナインボールか、何の用だ。」

無人機であるナインボールは無機質な機械音声で喋り始めた。

「勝手な行動をされると困る。今回は目を瞑るが次は君の存在を消去する。」

「はいはい、恐いねぇ～！」

「あの準備が始まる、君も来い。」

「へいへい！」

レッドバレルはルキフェルを飛び去るナインボールの後ろに着け、綺麗な一本線の様に飛んだ。

「くそっ！人形風情がっ」

綺麗な顔立ちと上品な雰囲気の彼には似合わない言葉を吐き捨てると彼は眩しい太陽を見つめ目を細めた。

「さて・・・どうするかな？ラクス・クライン、キラ・ヤマト。そしてレイヴンの英雄。」

キラ達と一夏達、リボンズ達や企業連が交差するこの世界が一体ど

うなるかは神にも分からない。

赤と紅（後書き）

今作の国家解体戦争はアーマードコア４の国家解体戦争とは関係ありません。

打鉄弐式（前書き）

ユウイチが開発した新しいアイテムが登場します。

打鉄弐式

ＩＳ学園の整備室、そこでキラ達は『打鉄弐式』の整備及び開発を行っていた。

「各駆動部の調整はあーして、こーして。」

「両足の反動数をＯＳに入力してパラメータ数は３０に設定して。」

的確に『打鉄弐式』の整備をしていく二人に簪はしばし見とれてしまっていた。

「凄い・・・」

「キラ、ブースターの調整は？」

「大丈夫。最初は少し問題があったけど解決したよ。」

「じゃあ、後は武装かな。」

簪があれだけ時間をかけたのにも関わらずこの二人はこの短時間で簪が悩んでた箇所を的確に処理していく。

「この荷電粒子砲のエネルギー電圧はこれぐらいにしてっと。」

すると部屋に息を荒くしてある人物が入って来た。

「ラクス！どうしたの？」

「キラ！実はですね。」

ラクスの話によると三人が別れた直後にレッドバレルという傭兵が現れて企業連がやろうとしている事、リンクスやレイヴンの事を話したとの事。

「リンクスねぇ～、そういえばそんな話を聞いた事があったな。レイヴンを超える強化人間・・・」

ユウイチは超振動薙刀『夢現』をいじりながら深刻そうに言う。

「国家解体戦争か・・・まさか企業連がついに動くとはね・・・」

「企業連ならやりそうなこったな。」

事情が掴めない簪は頭に？のマークを浮かべながら三人の話を聞いていた。いや、聞くしかなかった。

「あの・・・なんの話？」

「ああ、そう言えば言ってなかったね。実は・・・」

そう言ってキラは全てを話した。

「そんなっ！全ての国家を倒すなんて！」

大人しい彼女には珍しく結構驚いていた。まぁ、無理もないだろう。１００を超える数の国家を全て解体するというのだから普通の反応だ。

「そう、正気じゃないよな・・・だが、やるという事はなにか隠し玉があるって事だ。」

「リンクス？」

確かにレイヴンを超える力を持つリンクスが隠し玉というなら納得がいく。

「それもあるが、真の隠し玉はそいつ等の機体だろう。クイック・トリガーやネクストアーマーの元となったクイックブーストやプライアルアーマーかな？」

「ですが、それは『アブソリュートフリーダム』のオリジナルではなくて？」

確かにそれは『アブソリュートフリーダム』のオリジナルの特殊兵装のはずである。

「いや、それは束が勝手に名前を変えただけ、『フリーダム』が自己解析して元の名前に戻しただけだろう。」

次元の違う話に付いて行けない簪がオロオロとし始めた。

「それにC・Eにも仕掛けるって？まぁ、そっちはアスラン達がいるから大丈夫だね。」

「そうですわね。」

「とにかく、この話は後でしよう今はこいつに集中したい。」

そういって話を中断させたユウイチはなにか考え込んでいるようにも見えた。

「どうしたんですの？」

「いや、少し面白い事を思いついてさ。」

「面白い事ですか？」

キラも気になったが構わず打鉄弐式の武装の一つ、マルチ・ロックオン・システムに注目した。

「基本は『フリーダム』と同じなのかな？いや、全てのミサイルを独立で稼働させるのが中心なんだね。なら、もっと簡単に動かす為にこうすれば。」

キラがなにやら高速で何かを打ち込んで行く。それを見た簪はまたも驚く。

「凄い、速い・・・」

「キラは天才ですからね。」

奥の方でユウイチが自分を何度も指差していたが二人の目には映らなかったようだ。

「時間も時間だから今日はこれぐらいにしようよ。三人は休んで。」

「キラさんは？」

「僕はまだやることがあるから」

そう言ってキラは再びディスプレイとにらめっこを始める。

「行きましょう、簪さん。」

「はっ、はい・・・」

「じゃあ、お疲れさ～ん」

その日の夜、何故かユウイチの部屋から騒音が響いていて何度も千冬が部屋に乗り込んでいたらしい。

そして翌日、キラ達は第3アリーナに集まっていた。

「あの、なんで織斑先生が」

確かにキラや簪やラクスがいる事は普通なのだが何故か真耶や千冬もいるのである。

「レイブンが何やら変な物を作ったらしいからな。一応、監視しとかないと何かあった時、面倒だ。」

「へっ、変な物!?駄目ですよ!レイヴン君、そんなの作っちゃぁ！」

「ちげぇって！」

どうやら昨日の夜の騒音はその変な物を作る音だったらしい。

「とにかく始めるよ。簪、打鉄弐式を起動して。」

「分かりました。」

簪が光に包まれ打鉄弐式が現れる。

「まず、最初にマルチ・ロックオン・システムの説明だね。このマルチ・ロックオンの核になるのが四十八基全てのミサイルを独立で稼働させるというものだけど、より簡単に動かす事ができる様にドラグーンの技術を使ってみたんだ。」

「ドラグーン？」

するとキラはアブソリュートフリーダムを起動し、翼に付いているドラグーンを指差した。

「かつて僕が戦った機体『レジェンド』に組み込まれていた使用者を選ばない次世代のドラグーンの技術を組み込んだんだ。これなら軽く想像するだけで全てのミサイルを動かす事ができるよ。」

「凄い・・・」

するとユウイチがこの時を待っていた的な感じで口を開く

「とにかく先ずは体で覚える方がいい。」

「でも、どうするんですの？」

直後、ユウイチの目にキランと輝く。

「ジャジャーン！そこでこれが活躍する訳よ！」

何処に持っていたのか片手で持てる程の小さいアンテナの様な物を上に掲げる。

「それが昨夜作っていたものか？くだらん物だったら没収するからな。」

「ユウイチ・・・大丈夫？それ？」

「まぁまぁ、見てろって。」

ユウイチは備え付けの小さなキーボードを叩く。するとアンテナの様な部分から黒い球体が生まれキラ達を飲み込んだ。

「うわぁっ！」

「きゃぁっ！」

「レイブン！なんだこれは！」

「落ち着け！目を開けてよく見ろよ。」

そう言われて思わず目を瞑ってしまっていた五人は目を開いた。するとそこには何処かの市街地が広がっていた。

「これは！？」

「凄いです！！」

千冬達は見覚えの無い街に驚いていたがキラとラクスは見覚えがあるらしい。

「ユウイチ！まさか、ここはオーブ？」

「オーブって、前に二人がいた国？」

確かにかつて二人がいた国の街中にそっくりである。

「そう！詳しい説明は省くが俺が作ったのは『仮想空間演習装置』。その名の通り仮想空間で練習が出来るというもの。因みに外からは黒い球体があるように見えるんだ。」

そういって建物を触りだした。

「様々なマップを完備、シチュエーションも充実、難易度もアマチュア、イージー、ノーマル、ハード、ベリーハード、エキストラと設定できるぜ。」

「凄い。」

自分の作品に満足と言った感じでユウイチはストレイドを起動させる。

「じゃあ、演習を始めるぞ。キラ達は観戦席に移動してくれ。」

すると目の前に光が現れた。

「中に入ればいいの？」

「ああ、一応通信もできるから。」

そういって四人は光の中に入っていった。

「じゃあ簪、手始めにイージーで行くぞ。」

「了解・・・」

ユウイチはキーボードを叩き始め設定を入れていく。

「因みに敵は俺達の世界のＭＳだ。だが大きさはＩＳと同じだから安心してくれ。」

「分かりました。」

そしてユウイチは作戦の説明をしていく。

「ミッションは簡単、この区画にいる敵部隊を排除してくれ。言っておくが実戦形式の為にダメージを受ければ痛みも感じるから気をつけておけ。それと建物は無人だから障害物として使っていい。」

「了解・・・。」

「あと、俺は手助けは一切しない。そのつもりで。」

「実戦・・・。」

直後、ハイパーセンサーに敵が近づいていると警告が入る。

「来たな・・・さぁ、君の腕を見せて貰おう。」

「行きますっ！」

簪は勢い良くウイングスラスターを全開にして滑る様に直進する。

しばらくして、交差点の所に一機の機体がいることを確認した。

するとハイパーセンサーが自動的に機種を特定する。

「ＺＧＭＦ－１０１７　『ジン』・・・このデータ、ユウイチさんが入れといてくれたのかな？」

頭部のトサカの様なアンテナが特徴の『ジン』はＺＡＦＴの初期の主力機と様々な情報も入ってくる。

「やるしかない・・・」

こちらに気付いた『ジン』はマシンガンを連射してくるが簪は構わず懐に入り『夢現』をつき入れた。

「はぁぁぁぁ！！」

胸部のど真ん中に風穴を空けられたジンは炎を上げながら倒れ、爆発。

「っ！？」

爆発の余波でシールドエネルギーが若干減少してしまった。

「「気をつけろ！ＭＳはＩＳとは違って撃墜されたら爆発する。接近戦で倒したら離れろ。」」

「は、はいっ！」

「「よし、そのまま道なりに直進！敵を撃破しろ！」」

「了解です・・・」

その交差点から２０ｍぐらい直進すると今度は二機の『ジン』がバズーカと大型ミサイルを構えてこちらを狙っているのが見えた。

「あれはデータによると・・・拠点攻撃用のＤ装備！」

案の定、二機はミサイルを放ちミサイルが簪を追撃し始める。

「くっ！このくらい・・・」

簪は直ぐ様空中へと逃れるが、ミサイルは蛇の様に追って来る。

「これなら。」

ミサイルが当たる直前に打鉄弐式をミサイルが飛んで来た方向へと進ませる。すると案の定二基のミサイルは簪を追撃しようとして互いにぶつかり爆発した。そして残ったミサイルは全て荷電粒子砲『春雷』で叩き落す。

「当たって！」

そしてそのまま二機の『ジン』に『春雷』を向けて発射、熱線は見事二機の『ジン』に命中して派手な爆発を起こす。

「ルートはこのまま真っ直ぐ。」

地上に降りて再びバーニアを吹かして進んで行くと今度は空から攻撃を受けた。

「何！？」

視線を空に向けると今度はＭＳ支援空中機動飛翔体『グゥル』に乗って攻撃してくる『ジン』がいた。しかもその数２０機。

「数が多いっ！」

すると丁度ユウイチから通信が入って来た。

「「丁度いい。マルチ・ロックオン・システムを使ってみろ。」」

言われて簪は空中に上がりマルチ・ロックオン・システムを立ち上げる。

「『山嵐』起動！」

すると肩部のウイングスラスターに取り付けられた六枚の板がスライドして開き八連装ミサイルが六ヶ所、計四十八発が顔を出した。

「力を貸して『打鉄弐式』」

そしてミサイルが凄まじい音と共に発射された。簪はミサイルを操る為に目を閉じイメージをする。

「当たって！」

すると全てのミサイルが簪のイメージ通りに動き、全ての『ジン』に命中し、炎に変えていく。

「やった・・・成功した！」

簪が素直に喜んでいるとまた、ユウイチから通信が入った。

「リーダー格の機体がそっちに行った！頼めるか？」

「了解です・・・。」

再び地上に戻ると直ぐに正面から白い『ジン』とは違う機体が現れた。

「あれは・・・『シグー』指揮官クラスの・・・」

簪の姿を見ると直ぐ様、『シグー』は重斬刀を抜刀し、シールドについているガトリングを連射しながら突撃してくる。

「はぁぁぁぁ！」

簪は『春雷』で牽制、そして『夢現』で斬りかかった。

ガキィィィィン。

実剣と超振動の刃がつばぜり合いに入る。そうすると当然、超振動の方が強力で実剣をも斬り裂いていく。

「はぁぁぁぁぁっ！」

そして最後には『シグー』に到達、真っ二つに斬り裂いた。

「っ！！」

後ろに飛びず去ると『シグー』が推進剤を誘爆させ大爆発を引き起こした。

「はぁ、はぁ、はぁ。」

「「よくやった。成績も良かったぞ」」

すると景色が崩れ元のアリーナに戻っていた。

「おめでとう。簪。」

「凄かったですわ。」

直ぐにキラとラクスが駆け寄って来てスポーツドリンクとタオルを渡してくる。

「ありがとう。」

簪は『打鉄弐式』を待機状態にしてスポーツドリンクとタオルを受け取った。簪にとってこれだけ汗を流したのは初めてだろう。

「キラ、ユウイチ、ラクス。手伝ってくれてありがとう。」

簪にとって全力のスマイルで二人にお礼を言った。たぶん彼女がＩＳ学園に入学してから一番いい笑顔に違いない。

「おお！」

「どういたしまして。」

「頑張ってくださいね。」

そしてその日の夜の事、ユウイチは何気なく廊下に出て一夏の部屋の前を通ろうという時、声が聞こえたのだ。中を覗くとどうやら楯無が一夏にマッサージを受けているようだった。

「・・・ってないわねー。大事だから、特別だから、厳しくしているんじゃない。」

―死なない様に―

「・・・っ！」

その言葉に一夏は明らかな動揺を見せる。見ると震える手を必死に抑えている。どうやらリボンズ達の事を思い出したようだ。

「あいつ・・・。」

無理もない。今まで平凡な人生を過ごしていた者があんな戦いに巻き込まれば誰だって手が震える。

「まぁ、戦争でも起きたらの話よね。」

「・・・っ！」

その言葉にユウイチは胸を締め付けられるような気がした。彼女は・・・いや、事情を知っているキラ、ラクス、ユウイチ、簪の四人以外は誰も知らないのだ。この世界の水面下でとてつもなく大きな、そして凄惨な戦争のカウントダウンが始まっている事を。

「ゴメン・・・」

ユウイチはその場から逃げるように立ち去る。まるで影に怯える子供のように・・・。

打鉄弐式（後書き）

仮想空間演習装置・・・自分も欲しいっす。

その名は『暮桜・真極』（前書き）

暮桜の名前を考えるのは苦労しました。

簪の『打鉄弐式』が完成した翌日の事、一夏達は特別授業という事でグラウンドに出ていた。因みに一年生全員合同授業である。

「織斑先生！急遽、特別授業にするって何するんですか？」

二組の一人の女子が手を挙げて千冬に質問した。

「それはこれから話す。レイブン頼むぞ。」

そう言って千冬はユウイチを見たのだが当のユウイチは何かの装置をいじっていた。

「あいよ。これから皆にはこの『仮想空間演習装置』を使って実戦形式の模擬戦をしてもらう。因みに今回は先生方全員も参加するから。」

するとみんなザワザワとし始めた。仕方のない事だ。いきなり模擬戦をしろなんて言われれば誰だってザワザワとする。

「心配するな。安全は作ったの本人が実証済みだ。」

そう言って千冬はユウイチを指差した。その直後、一夏が驚愕する。

「なにっ！ユウイチが作ったのか！？束さんじゃなくて？」

「なに、お前は驚いてんだよ。」

このままでは授業が進まないので千冬が一喝＆出席簿アタックを二人にかまして授業を再開した。

「では全員、ＩＳを起動させろ！」

そう言うと先生と生徒達が『打鉄』、『ラファール・リヴァイヴ』を纏って行き、一夏達も自分のＩＳを起動させ身に纏う。

「ところで織斑先生のＩＳは？」

「ああ・・・それなら。」

その直後、前の臨海学校と同じ様に何かがこちらに全力疾走して来て大ジャンプ。案の定束だった。

「やぁやぁ、出来たよ！ちーちゃんの専用ＩＳ。」

それを聞いた瞬間、その場にいた全員が大声を上げて驚愕した。キラとラクスとユウイチを除いては。

「専用ＩＳって千冬様が再び現役に戻られるのですか！？」

「織斑先生のＩＳ・・・凄い気になる～。」

「まぁ、これからの事を考えるとな。」

因みにその専用ＩＳというのは千冬をモンドグロッゾの優勝まで

導いた『暮桜』の発展型である。まぁ、最初の機体の『白騎士』のコアは『白式』に使っているので自然とそうなる。

『また、お前と戦えるな。『暮桜』」

「正式名称は『暮桜・真極』ね。」

それを聞いた千冬は新しくなった『暮桜』を起動させる。そして現れたのは。『白式』に共通するフォルムはあるもののそれよりスマートな機体だった。そして右肩に塗装されている桜が綺麗で一段と目を引く。

「へぇ、『姫桜』と同じくGネクスト粒子とはな。」

「こっちの方が効率のいいエネルギー補給ができるからね。」

「ところで、キラ・・・さっきから気になってたんだけどなんて楯無がいんの？」

確かに良く見ると一夏の隣で『ミステリアス・レイディ』を身に纏っている楯無がいる。

「バレちゃった？いやぁね、ユウイチ君が何か開発したって言うからその調査で参加するんだよ。」

その時、簪が怯える目で楯無を見ていたが触れないでおこう。

「まぁ、仕方がない。今回だけだぞ。」

「は～い。」

千冬がユウイチに目で合図するとユウイチがキーボードを叩くとアンテナから黒い球体が出現、生徒及び先生達を飲み込んでいった。

「これがゆう君の開発したやつ？」

「まぁな・・・」

他人の開発した者には興味を示さない筈なのに珍しく束は興味を示した様だ。

「キラ、モニタリング頼む。」

「了解。」

一方、一夏達は月面にいた。

「すげ～、地球が見える～。」

「綺麗～。」

以外と生徒達には好評のようでシャルロットなんか大ハシャギだ。

「なかなかだな。」

「ああ、団子あったら尚更いいな。」

「一夏、お前はそんなことしか考えられないのか！」

ラウラに呆れられたが一夏はなぜ呆れられたのか分からない様子

だった。

「「あ～、聞こえるか？こちらユウイチ、こちらユウイチ。」」

何処からともなくユウイチの声が聞こえ、全員それに耳を傾ける。

「「今回は集団戦の演習を行う。いいか、模擬戦だからって気を抜くなよ。一応痛みはあるんだからな。」」

次の瞬間、風景が代わり何処かの海の上にいた。しかも前方にはなにかの基地が見える。

「ユウイチ、あれは一体なんだ？」

「「だからその説明するから聞け。」」

因みに雪が降っているのだが寒くは無い。

「「ここはC．Eのアイスランド沖、目の前の基地は地球連合軍のヘブンズベースだ。」」

一夏も話に聞いていたので一応は分かる。ブルーコスモスの母体、ロゴスがここへ逃げ込み追ってきたザフト軍と激しい激戦をした所だ。

「あれ？キラがいないけど参加しないのか？」

ラクスを見た時、いつもは一緒にいるキラがいない事に気付いた一夏は不思議に思った。

「「キラならこっちでモニタリングしてる。ラクス達三人共頑張ってだってさ。」」

その瞬間、三人の表情が劇的にプラスの方向へ行ったのがはっきりと分かった。

「「難易度はノーマルのレベル5だ。最大は9だからな。因みに撃墜されると観客席に強制送還だ。それと、お前等のサイズはＭＳと同じ大きさに設定したから。では、作戦の説明をする。」」

次の瞬間、全員の顔に緊張が浮かぶ。そして空中にディスプレイが浮かびマップが示される。

「「作戦内容は敵の大部隊を突破し、ヘブンズベースの奥にある司令部を破壊する事だ。頑張ってな。」」

「何よ！簡単じゃない！そんなの！」

鈴がいきり立つと周りの皆の顔にも笑顔が浮かんだ。

「じゃあ、空気も和んだところで、作戦開始！」

皆が一斉にスラスターを吹かして飛び立つ。すると、ヘブンズベースからも大量のＭＳが発進し、空を埋め尽くした。

「来るぞ！散開！」

千冬が合図を送ると広範囲に広がり迎撃の準備に入った。

「はぁぁぁ！！」

一夏は『雪片弐型』を振り回して敵陣に突っ込む。すると地球軍のＭＳ、ＧＡＴ－０４『ウィンダム』は蠅の様に一夏に群がった。

「こんな事でっ！！」

一夏は目の前の『ウィンダム』に狙いを定めて『雪片弐型』のレーザー刃を振り下ろす。するとウィンダムは熱を帯びたナイフで切られるバターの様に真っ二つになり爆発した。

「これなら行ける！」

立て続けに『雪羅』の荷電粒子砲を連射し、数機の『ウィンダム』を爆発の花に変える。

「数だけいたって！」

シャルロットは『高速切替』を使いながらショットガン、アサルトライフルを乱射し、周囲の『ウィンダム』を蹴散らしていた。

「この距離なら外さない！」

一機の『ウィンダム』がビームサーベルを振りかざして突っ込んで来た。だが逆にシールドで弾くとシャルロットの必殺兵器『シールドピアス』通称、盾殺しを食らわす。胸に風穴が開いた『ウィンダム』は海に落下した直後、派手な炎を立ち上がらせて爆発した。

「はっ！」

箒も『空裂』を使って順調に『ウィンダム』を撃破していた。

「この程度・・・」

「これは不味いかもね～。」

声がした方角を見るとのほほんさんが二機の『ウィンダム』に囲まれていた。やはりスピードで劣る『打鉄』では分が悪い様だ。

「はァァァァ！！」

まず、のほほんさんの真っ正面の『ウィンダム』の後ろに移動し、『雨月』をつき入れる。そして、そのまま左にいる『ウィンダム』に『空裂』を一閃、二機とも激しく爆発し、落ちていった。

「大丈夫か？」

「ありがとう～。」

一方、ユウイチはこの戦果を見て正直驚いていた。

「へぇ～、結構やるんだな。『ウィンダム』の残存数があと少しで半分を切るぞ。」

「以外？」

キラが聞くとユウイチは全くだという感じで頷き、そしてラクスのモニタリングディスプレイを開く。

「最初は千冬がほとんどやるかと思ったがラクスも頑張ってるじゃないか。撃破数がランキング2位だぞ。」

映像を見るとセシリアと共に正確な射撃を披露している。そのおかげでほとんど近づかれてはいないようだ。

「ところでさ～、こんな事をやるなんて、まさか準備？国家解体戦争に備えて。」

珍しく大人しく座っていた束が口を開き、こんな事を言って来た。

「ああ、こうでもしなければあいつ等は確実に死ぬ。今までスポーツでしか戦いを知らないあいつ等は確実に・・・」

「でもさ・・・本当にいいのかな。これで・・・。」

「どうゆう意味だ？」

「今まで平和の中で生きて来た一夏達を無理矢理こっちの世界、戦争に引きずり込もうとして本当にいいのかなって。」

「仕方ないさ。例え俺達がこの世界に来なかったとしても戦争は起きたろうな。」

「・・・」

だがこの時、キラの胸の中は不安が満ち溢れていた。

「あっ！織斑先生達がヘブンズベースの中央を突破したみたいだよ。」

確かに画面を見ると千冬が専用機持ち達と共に中央の部隊を撃破し

て突破しているのが分かる。こうなったら司令部とは目と鼻の位置だ。

「お前等、あともう少しだ。」

千冬は迫り来る敵部隊を蹴散らしながら専用機持ち達を勇気付けていた。でなければラクスはともかく一夏達の気力が持たない。

「先生、あれを！」

ラクスが指を差した方向を見ると一段と多く砲台が置かれている建物があった。

「あれが司令部か・・・なかなかの数の砲台だな。」

千冬は『雪片』で砲台を潰していきながら鼻で笑った。

「織斑先生、私達は左から。」

「分かった・・・」

「じゃあ、俺達は右からだな。」

ラクス、シャルロット、セシリア、簪が左。一夏、箒、ラウラ、鈴、楯無が右から攻める為、移動していく。

「山田先生、私達は正面から」

「はっ、はい！」

まず、山田先生が的確な射撃で砲台を潰して行き、千冬が司令部に近づいていった。

「くそっ！？」

千冬は正直焦っていた。近づこうにも砲台の弾幕により、近づけずこうしている間にも後ろからかなりの数の『ウィンダム』が迫っていた。

「はぁぁぁ！」

遂に司令部の建物にたどり着くがその建物にも耐久力があるらしく攻撃してもなかなか壊れない。

すると一機の『ウィンダム』がいつの間にか真耶の近くまで来ていたらしくビームサーベルを振りかざして真耶に迫っていた。

「山田先生っ！！」

「あっ！？」

『ウィンダム』は無防備だった山田先生に容赦なくビームサーベルを振り下ろした。だが、ビーム刃があともう少しという所で『ラファールリヴァイヴ』を斬り裂く筈だったが何者かが放ったビームにより『ウィンダム』が吹っ飛ばされる。

「なんだ！？」

真耶も分からない様子でキョロキョロしている。すると上から尋常ではない気配を感じ、視線を上に向けるとそこには青い粒子、青

い四枚の翼を煌めかせている『アブソリュートフリーダム』が神の如く見下ろしていた。

「キラ！どうして！？」

「いや、それが・・・。」

するとユウイチが通信を入れて来る。

「「ああ、こちらの手違いで難易度がハードのレベル５になっていた。申し訳ない。お助けキャラとしてキラが参戦するから。」」

「本当か？」

「はい、束さんがいつの間にか。」

「また、あいつか。」

千冬はうんざりとした感じで頭を抱える。

「織斑先生、後ろの部隊は僕が引き受けますから司令部を。」

「分かった。」

するとキラはドラグーンを全てパージし、その場を離れていった。そして、その青い軌跡が通った後には爆発と残骸しか残らなかった。

「千冬姉ぇ、今の本当か？」

専用機持ち達が事実確認をするために戻って来きたようだ。

「ああ、そうらしいな。とにかく今はこいつを落とすぞ。」

「「「「了解！」」」」

すると千冬以外の全員は一列に並び火器を構える。

「一斉射撃だ。外すなよ。撃てっ！！」

その瞬間、いくつもの砲口が火を吹き、その光は司令部に吸い込まれ、爆発した。

「やったのか・・・？」

すると空中にミッションコンプリートの字が浮かび刹那、風景が崩れ、元のグラウンドに戻っていた。

「お前等やるなぁ、今の成績はSだったぞ。」

ユウイチが喜んで報告してきたが誰もが疲れ果てて聞いちゃいなかった。

「ユウイチ、ちょっと・・・」

「どした？。」

見るとキラの顔は何処か深刻そうだった。

「どう思う？今回の事で。」

「どう思うと言われても、未知数だな。束のイタズラで知らずにハードのレベル5になっていたとはいえ、それと対等に戦うとはな。それか束が何か細工したのか？」

通常、難易度の難しさはアマチュアは素人と低コスト機、イージーは一般兵と低コスト機、ノーマルは一般兵と中コスト機、ハードはエリートと中コスト機、ベリーハードはエリートとハイスペック機、エキストラはプロと超ハイスペック機という具合で設定されている。それを一年生達はハード、つまり軍のエリート部隊と互角に戦ったという事になるのだ。教師達はともかく一年生は入学してから半年ぐらいにはなるがそこまでの実力がつくだろうか。二人が考えるには束がなにか仕組んだと考えている。

「まぁ、とにかく千冬には勘を取り戻すいい機会だったんじゃないか？」

「そうだね。千冬さんがいてくれれば心強いし。」

そう言って二人は束をとっちめている『ブリュンヒルデ』を見つめる。そしてその腕には太陽の光が当たって待機状態の『暮桜』が輝いてた。

その名は『暮桜・真極』（後書き）

次回は皆でお買い物。

買い物と新たな仲間（前書き）

眠いです・・・?でも頑張って書きました。どうぞご覧ください。

買い物と新たな仲間

ある週末の事、もうすぐ一夏の誕生日だというので皆で何かプレゼントしようと言うことで一夏、キラ、ラクス、ユウイチ、シャルロット、セシリアの六人で買い物に出掛けていた。因みに残りの鈴達三人は何か用事があるという事で来てはいない。

「でっ、一夏は何が欲しいんだ?。」

「別に今は何が欲しいとかはないんだよな~。」

一応、女の子を待たせるのはマズイというキラの提案で男子三人組は待ち合わせ時間の四十分前に待ち合わせ場所に向かっていた。

「ねぇ、ちょっと二人共、あれマズイんじゃない?」

「「えっ?」」

キラが指差した方向を見ると女子三人組がチャラ男二人にナンパされている。

「ありゃあ、確かにまずいな・・・」

「早く行こうぜっ!」

しかも見ていると手を出したチャラ男Aの腕をシャルロットがひねあげた。

「行くぞキラッ！！」

「うんっ！！」

もう一人のチャラ男Ｂが相方を助けようと動いた瞬間、二人は物凄い速さで走りだしてチャラ男Ｂに二人でダブルパンチを決める。

「キラっ！！」

「キラさん、それにユウイチさん！」

「来てくださいましたのねっ！」

「三人共、大丈夫？」

「何だ？テメェ等は！？。いててててっ！？」

キラが来てくれたのがよっぽど嬉しかったのか、三人共目をキラキラさせる。だが、シャルロットが無意識に手を胸の前に持ってきてしまった為にチャラ男Ａからカキョっという小気味のいい音が聞こえて来た。

「ぎゃぁぁぁぁぁっ！！」

「「「「あ・・・。」」」」

この後、ユウイチが二人のチャラ男を引きずって交番に持っていってこの騒ぎは幕を下ろした。

「三人共、ゴメン！俺達が遅れたせいで。」

何を思ったのか一夏が三人に向かって謝っていた。

「ううん、まだ時間前だし、助けてくれたし。ありがとね。」

仲間を助けようとするのは当たり前であるが謙虚なシャルロットは必要以上に恩義を感じでしまっていた。

「まぁ、色々あったけど行こうか。」

「そうですわね。」

気を取り直して六人は目的地である大手ショッピングモール『レゾナンス』に向かった。

「キラさん、何か食べたいものでもありまして？」

「キラの誕生日っていつ？」

「キラ、このお店は美味しいらしくてよ。」

『レゾナンス』に入ってからキラは三人からの質問に冷静に応えている様に見えるのだが実は内心はかなり怯えていた。それは何故か？その答えは周りの男性達である。それどころかすれ違った全ての男性に敵意が溜まりに溜まった視線を投げ掛けられているからであった。

「けっ！？何だあいつ？三股か？ハーレムか？」

「男の敵・・・いやっ、人類の敵だな。」

キラは震える視線で後ろについてきている一夏とユウイチを見たが二人は歩きながら笑いを堪えている状態だった。

「ぷくくっ、人類の敵だってよ。どうする隊長さんよ?。」

「まぁ、キラなら襲われても大丈夫だろうけどね。」

「そんな、助けてよ。」

「キラ、聞いてますの?」

ラクスに呼ばれて再び会話に戻るキラに二人は一応合掌だけしておいた。

「それにしても凄いなキラは、これが噂に聞く主人公属性か?」

「お前もだろ?」

「何が?」

「ダメだこりゃ。」

一夏の唐変木っぷりに呆れたユウイチはしばらく黙っていたのだが、一夏が何か発見したようでいきなり立ち止まってしまった。

「どした?あっ!四人共、ちょっと待って。」

「どうしたの?」

立ち止まっている一夏が見ているのは女性用下着売り場だった。

「お～い、蘭～！」

どうやら知り合いがいたらしく一夏は元気良く下着売り場に走っていってしまった。

「あっ！どうしようユウイチ？」

「どうしようたってキラと俺は男だぜ？シャルロット達が連れ戻して来てよ。」

「しょうがないですわね。行きましょう二人共。」

「えっ？ちょっ！？」

流石は元議長のラクスである。二人を引っ張って行ってしまった。

「ん～、どうしよう。」

一夏のプレゼントの下見の為に来た五反田蘭はついでに自分の衣服や雑貨を買おうという事で今はパンツを選んでいた。

「お～い、蘭～！」

「えっ？」

いきなり大声で呼ばれた蘭は、びくんっと背筋を伸ばして驚いた。

「え！？い、一夏さん！？」

手に取っている下着を後ろに隠し、どうしたものかと数秒固まる。

「どうしたんだ？こんな所で？」

「い、いえ・・・その。」

背中で隠しながらも白と黒の縞パンを元の棚に隠す蘭。機能性に優れながらも三枚千円というお値打ち価格だったのだが、好きな相手に見られて嬉しい光景ではない。そして更に、蘭にとんでもない光景が飛び込んできた。

「一夏さ～ん、一体どうしましたの～。」

どうやら一夏の知り合いが三人入ってきた。しかも三人とも女性で超絶美形なのだ。

（一夏さん、女の子連れてる？しかも三人も・・・。）

鈴でも、箒でもない、蘭にとっては知らない女の子達であった。

（二人は綺麗な金髪・・・もう一人は見事な桃色、それにスタイルもいいし。）

蘭は思わず自分の茶毛と比べてしまう。五反田兄妹は遺伝で髪が茶色なのだが彼女にとっては一大事、一回本気で黒一色に染めようとしたとか。

（いいもん！大丈夫だもん！私は年下属性で攻めるもん！）

そうだそうだ！脳内で小さな蘭×5がエールを送る。

（そうよ、そう。大体、あの馬鹿兄のせいで、学園祭には行き損ねちゃうし。これくらいは当然の権利なのよ。・・・たぶん）

あとで女子特有情報網で得た情報によると執事服の一夏が接客しているという一大イベントだったらしい。因みにあと二人いたらしいが蘭は聞いてはいなかった。

（うん！大丈夫！）

ぎゅっと手を握りしめ、規則正しい歩調で一夏のもとへ向かう蘭。その姿は私立聖マリアンヌ女学園中等部生徒会長・五反田蘭たる堂々としたものだった。

「こんにちは、一夏さん」

「おっす。今日は一人？」

「あ、はい。ぶらっと買い物に」

「そっか。あっ、この間の件、ごめんな。学園祭、見たかったよな？来年入学するんだし。」

「そ、そうですね。できれば次からは優先的にチケットを譲っていただけると・・・」

そんな談笑が始まって訳が分からない三人の中の一人のラクスが尋ねた。

「あの・・・一夏さん？」

「ああ！ワリぃ、紹介しなきゃな。」

そう言って蘭との会話をベストなタイミングで切り上げる一夏。

「左からラクス、シャルロット、セシリア。因みにシャルロットはフランスの代表候補生。セシリアはイギリスの代表候補生だ。」

「ラクス・クラインですわ、よろしくお願いしますわ。」

「シャルロット・デュノアです。よろしく。」

「セシリア・オルコットですわ。よろしくですわ。」

「ご、五反田蘭です。よろしくお願いします。」

「蘭は来年ＩＳ学園を受けるんだってさ。俺達の後輩になる予定なんだよな。」

「は、はい！そうです！ぜひご教授のほどお願いします。」

びしっと九〇度のお辞儀をして、蘭はわずかに上気している顔を上げる。その姿が妙に可愛くて三人の心の中で何かが込み上げていた。

「そうだ。あのチケットまだいけたはず。蘭、ケータイ持ってる？」

「は、はひっ！」

緊張していたのか声が裏返ってしまった。そんな蘭にも気づいていない一夏は携帯電話をダイレクト接続に切り替え、チケットデータの転送を行なった。

「これって・・・」

「今月行われる『キャノンボール・ファスト』の特別指定席。見たいだろ？」

「あっ、はい！ぜひぜひ！」

「でも、学園祭の時と同じで一人一枚なんだよなぁ。招待券。友達の分まどあげれなくてゴメンな。」

「それならわたくし達の招待券を差し上げますわ。」

「ほんとですか！？」

三人ともケータイを取り出して招待券を送ってきてくれた。優しい三人に蘭の目が霞んでくる。そして勢いに乗ってこんなことを言ってしまった。

「あ、あの！今日一緒にまわってもいいですか！？」

「うん」

あっさりＯＫ。拍子抜けと脱力が重なって、よろっと体制を崩した蘭を、素早くシャルロットが支える。

「どうしたの？大丈夫？」

「は、はひ・・・」

（うわぁぁぁ、この人すごい！貴公子みたい！綺麗で可愛くてかっこいいなんて、ずるい！神様なんかいないじゃない！ばか～！）

「じゃ、色々と見て回るかー」

だが下着売り場を出た所で蘭はもっと驚愕することになった。原因は下着売り場の前で待っている二人組だった。

（あれ？あの人達、手を振ってる・・・知り合いかな？わわっ、しかも超美形だよ～。）

手を振ってる男性は髪型はショートシャギーで瞳の色は淡いアメジスト。優しいそうな印象が強い。もう一人は金髪のオールバックで瞳の色は明るいブルー。こちらも優しいそうな印象がある。

（男の子が三人、そして女の子も三人。もしかしてトリプルデートの最中だったのかな？）

「一夏どうしたんだよ？いきなりいっちまってー。あれ？この子は？」

「あっ！？五反田蘭です！どうぞよろしくお願いします。」

「こちらこそ、俺はユウイチ・S・レイブンだ。」

「僕はキラ・ヤマト。よろしくね。」

一夏とも弾とも違うタイプのキラとユウイチに蘭の緊張はＭＡＸに達しようとしていた。

「二人共悪いけど蘭も連れてっていいかな？」

「僕はいいけど？」

「以下同文。」

こうして七人にはなったが一同はショッピングを再開した。

「気に入ったのあった？」

「う～ん・・・」

一同は時計店に入り、腕時計を買う事にしたのだが一夏がなかなか決められず、さっきからディスプレイを見ながら唸っていた。

「なぁ、ところでキラさ・・・その私服Ｃ．Ｅでも着てたやつだよな？作ったのか？」

「うん、特注だよ。」

因みにユウイチの私服はジーパンに白Ｔシャツに革ジャン。前はもっと違う服装だったが今はこうである。

「まぁ、着なれた方がいいじゃない？」

「そうだなぁ、俺も作るかな？」

「一夏もそんな事言ってたよ。」

二人が会話をしていると蘭が話し掛けてきた。

「あの、ちょっといいですか？」

「なに？」

すると真っ赤な顔になりながらも意を決した様に聞いてきた。

「あの、ヤマトさん達ってクラインさん達三人と付き合ってるんですか？」

思わずズッコけたユウイチとキラは笑いながら一部分だけを否定した。

「チャウチャウ、あの三人と付き合ってんのはキラだけだよ。俺と一夏はフリーさ。」

「えっ？ヤマトさんて三人と付き合ってるんですか？」

「まぁ、色々とあって・・・ていうか僕達の事は名前で呼んでいいよ。」

「そうですか？じゃあ、私も蘭でいいです。」

ビックリした蘭はガッツポーズした後、一夏達の所へ戻って行ってしまった。結局、一夏はシャルロットの提案でシルバーホワイトの時計を買った。そして時計店を出た後の事。

「そろそろ12時だからお昼にしない？」

「そうですわね。確かにそろそろお腹が・・・」

そう言って時計をみるセシリア。

「じゃあ、あそこにする？」

シャルロットが指差したのはちょっと高級そうな洋食店だった。

「じゃあ、あそこにすっか・・・」

「お金足りなかったらどうしよう。」

心配する蘭に一夏が微笑み掛けた。

「大丈夫だって、もし足りなかったらユウイチが奢ってくれるらしいから？」

「なんで俺が？」

すると一夏の目がキラリと光った。

「この前見たぜ！ユウイチのサイフの中が1万円で一杯だったのを！」

「本当っ！？それ本当なの？」

「これを逃す訳にはいきませんわね。」

「だぁぁぁぁっ！！これは政府からの支給金だっての！」

政府は様々なデータを取るため男子三人に学費やら何やら色々な支援をしているのだがユウイチの中のサイフはその支給金と言うわけである。

「ていうか早く入ろうぜ！」

「そうだね。お腹がペコペコだよ。」

七人が入るとそこの洋食店はかなりの雰囲気を放っていてかなり期待できそうである。

「ご注文は・・・。」

「じゃあ、タラコスパゲッティとコーラを・・・皆は？」

「僕はトマトリゾットを。」

「僕もそれで！」

「俺も！」

「私も。」

「わたくしも」

「わたくしも。」

「かしこまりました。タラコスパゲッティがお一人、トマトリゾットが六名様、コーラがお一人で・・・」

「なんでい、みんな一緒かよ。」

品物がくるまでどうしようかと考えているとユウイチが蘭に質問した。

「そう言えば蘭てＩＳ適正試験てしたの？」

「あっ、はい！Ａでした。」

「ほ～、大したもんだな。」

感心するユウイチ。確かにＡなら国家代表候補生も夢じゃないだろう。

「因みに皆さんは？」

「僕はＡ。」

「わたくしもＡですわ。」

「同じくＡですわ。」

「お、おれはＢ・・・」

「俺はＳ。」

「僕もS。」

すると蘭は驚いた様に二人を見る。確かに気持ちは分かる。Sなんて『ブリュンヒルデ』と『ヴァルキリー』と同じレベルなのだから。

「お二人と同じ学園に入学できるなんて光栄ですっ！」

「落ち着けって、皆が見てるよ。」

すると蘭は真っ赤になりながら席に座り直し、辺りをキョロキョロした。

「まぁ、入学試験頑張ってね。」

「あっ、はいっ！」

そうこうしている内に料理が運び込まれて来る。そしてカップルでお決まりというのが・・・。

「キラ、あ～んですわ。」

「あ～ん。」

そう！はい、あ～んだ。因みにラクスとキラはC．Eにいたころからこれをやっている。

「ラクスさん！ズルいですわ！。」

「ぼくも！キラ、あ～ん。」

セシリアとシャルロットが我先にキラの口にユウイチのスパゲッティを運び込む。これじゃちょっと可哀想だ。

「蘭、口に付いてるぞ。」

「えっ！？」

一夏も一夏でお得意の不意打ちアタックで蘭を真っ赤にさせていた。

「やれやれ。」

ユウイチはそんな仲間をいとおしそうに見るのであった。

「今日は楽しかったですわぁ。」

「そうだね。」

昼食を食べた後は『レゾナンス』の中を色々と見て回り、そして蘭を家まで届け、一夏達と共にＩＳ学園に帰ってきた後、ゴロゴロしていたら千冬に呼び出されて行ってみたら、会いたい人がいて今は応接室にいるから行って来いと言われ、今向かっている所だった。

「ていうか何なんだ？会いたい人って。」

「さぁね。」

三人は応接室にたどり着き当然のマナーだがノックしてから入った。

「失礼します。」

三人が中に入ると二人の男が立っていた。一人は長身で茶髪、アイルランド系だろうか。白い肌をしていた。もう一人は帽子を被ってはいるが金髪であることは分かった。

（あれ？この金髪の人ってどこかで？）

キラが考えていると茶髪の男が話し掛けて来た。

「よぉ、お前等がキラ・ヤマトとラクス・クラインにユウイチ・S・レイブンか？俺はロックオン・ストラトス。よろしくな。でっ、こっちが・・・」

「久しぶりだな。キラ・・・」

「えっ・・・」

「おいおい、忘れちまったのか？」

彼は帽子を外してこっちに向き直った。見事な金髪、顔を横切る程の大きな傷、あの男と同じ青い瞳。そしてその顔は三人には見覚えがある顔だった。

「まさか・・・ムウさん？」

「そうだよ！まさか俺の顔を忘れてましたなんて言うんじゃねぇよな。」

彼の名はムウ・ラ・フラガ。キラの兄貴分であり、いつも支えてくれた大切な仲間であり、男の中の男であり、そして誰もが認めているのが、彼は不可能を可能にする男だということである。

買い物と新たな仲間（後書き）

次回は『キャノンボールファスト』の授業かな。

弾丸のように速く。（前書き）

ロックオンの口調が薄ら覚えです。違和感を感じた方、ご免なさい。

弾丸のように速く。

ＩＳ学園の応接室でキラはまさかかつての仲間と再開できるとは恐らく少しも予想してはいなかったであろう。

「なんでムウさんがこの世界に？」

「いやぁな、Ｃ．Ｅでこの世界に来る為の装置が見つかったんだよ。」

「装置・・・？」

それを聞いた瞬間、ラクスはあることを思い出す。前にレッドバレルが言っていたポーターという装置の事を。企業連が開発した移動装置。ＩＳ学園から『レゾナンス』まで一瞬で移動を可能とする装置。それを開発した企業連は一体何処までの技術力を持っているのが考えると寒気すら感じられるのだ。

「ほんとは違う奴が来る筈だったんだがそのポーターをいじった技術員がミスって、俺達を送っちまったんだよ。」

「じゃあ、帰れるんですの？」

ラクスが聞くとムウの顔が暗い表情になる。

「そこらへんも含めて全て話すか・・・お前等が消えた後、Ｃ．Ｅで何が起きたのか。」

「わかりました。」

そう言って彼は様々な事を話してくれた。まず、キラ達が消えた後、ザフトとオーブは急いで捜索を行ったが、結局見つからず捜索は打ち切られたのだ。

「まぁ、あの坊主は諦めてなかったがな。」

「アスラン・・・」

そして数週間が過ぎた頃、ある事件が起きたという。ここにいるロックオンはC．Eとはまた別の世界の人間で、その世界の人々がC．Eに来たというのだ。

「あれはすげぇ騒ぎになったよな。ロックオン？」

「確かにな・・・」

色々とあったが結局、同盟を結んで『世界連合』を立ち上げたという。

「そこである一つの疑問が浮かんできたんだ。」

「疑問？」

「俺達は別の世界からポーターを使ってC．Eにやってきたんだ。という事はアンタ達も何処か別の世界に飛ばされたんじゃないかってな。」

そして『世界連合』はC．Eにも同じ装置があるんじゃないかと捜索した結果、案の定、小惑星帯の隕石に擬態した施設が見つかり中を捜索した結果、ポーターが見つかったとの事。

「で、後は説明した通りだな。」

「それで帰れるんですの。」

「それがな・・・」

「まさか来たのはいいが帰り道が分からないとか言うなよな。」

「・・・」

「マジで？」

するとキラは深く考え込み、そして直ぐに顔を上げた。

「たぶんだけど、その装置は誰かが使ってたなら当然、戻る為のポーターもこの世界にある筈だよ。」

「なるほど戻る為にはまず、その装置を探さなきゃいけないって事か・・・」

「それを知ってるのはたぶん、リボンズ達か持ち主の企業連かだね。」

「リボンズ！？まさかリボンズ・アルマークか！」

リボンズの名を聞いた瞬間、ロックオンが反応した。どうやら彼

等と何かしらの縁があるらしい。

「そうだ俺達はこの世界に来てからあいつ等と何度も戦ったけど知ってんのか？」

「ああ！あいつ等は俺達の世界で人類を管理しようとしたんだ。あいつだけは許せねぇ。」

「なるほどね～、まぁ、詳しい事はあとで聞くよ。それよりキラ、ムウに報告があるんじゃねぇか？」

「え・・・？」

キラは最初は分からないという感じだったが直ぐにその理由が分かった様でムウに深刻そうな顔つきで詰め寄った。

「なんだよ・・・。」

「ムウさん・・・実はラウ・ル・クルーゼが戻ってきたんだ。」

「なんだって！！」

その瞬間、ムウが持っていたコップが物凄い音を立てて割れた。それは物凄い握力で握り潰されたからである。

「あいつが？そんな筈はない。前に話に聞いたがお前が倒したって。」

今でもキラはありありと思い出す事ができる様だ。あのコクピッドを貫いた瞬間を。

「うん、どうやらネクスト粒子の技術で生き返ったらしいんだ。」

しばらく重々しい空気が続いた時、真耶が入ってきた。

「お話の途中スミマセン。あのお二人を理事長がお呼びですので・・・」

「ああ、なるほどね。じゃあキラ、後でっ！！」

ムウとロックオンは三人に手を振った後、真耶に連れられて理事長室に向かっていった。そして数分後に戻って来て様々な事を話し合った。リボンズ達の事、企業連の事、この世界の事、これからの事、そして最後にムウがこんなことを言ってきた。

「ああ、そうだ。最後にもう一つ。実は見つけた施設にとんでもないものがあったんだ。」

「とんでもないもの？」

「そのとんでもないものというのは、過去に戦死した人物が生きたままにして保管されてたんだ。」

「ええっ！？それってどういう事ですか？」

「さぁな。たぶん企業連が何かしらの目的で生き返らしたんだと思うが今は世界連合が保護してるよ。」

「まさかクルーゼと同じ・・・」

「それも分からねぇよ。とにかく今日はお開きだ。眠くてしょうがねぇよ。」

そう言いながらムウはロックオンと共に応接室を出ていった。因みにキラはその日はその生き返った人物達の事が気になってなかなか眠れなかったらしい。

そして次の日。第六アリーナで副担任の山田真耶先生の声が響いていた。

「はい、それでは皆さーん。今日は高速機動について授業をしますよー。」

今日も元気に胸が揺れている。

「この第六アリーナでは中央タワーと繋がっていて、高速機動実習が可能であることは先週言いましたね。それじゃあ、まずは専用機持ちの皆さんに実演してもらいましょう！」

真耶がそう言ってばっと手を向ける先には、セシリアと一夏とユウイチとキラがいた。

「まずは高速機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備したオルコットさん！」

通常時はサイド・バインダーに装備している四基の射撃ビット、それに腰部に連結したミサイルビット、それら計六基を全て推進力に回しているのがこのパッケージの特徴らしい。それぞれの砲口を封印して腰部に連結することでハイスピード＆ハイモビリティを実現しているとのこと。

「それと、通常装備ですが、スラスターに全出力を調整して仮想高速機動装備にした織斑くん。それと通常装備で既に高速機動のヤマト君。篠ノ之博士に高速機動改良してもらったレイブン君。この四人に一周してきて貰いましょう。」

がんばれーと応援の声が聞こえるなか四人はＩＳに意識を集中させる。すると一人の女子が手を挙げて質問をする。

「先生、あのレイブン君とヤマト君は補助バイザーはつけないんですか？」

確かにセシリアと一夏はバイザーのモードを変えているのに二人は変えてはいないようだ。

「それはですね・・・二人の機体のスピードは既に高速機動の領域に入っている為、二人は大丈夫なんです。皆はちゃんとつけなきゃ駄目ですよ。二人みたいに慣れてないでいきなりやるととんでもない事になっちゃいますから。」

は～いと元気良く返事をする生徒達。やはり学校はこうでなくては。

「キラ～、頑張ってですわ～。」

「キラ～、頑張って～。」

二人の恋人の声援を受けながらキラはＩＳに意識を集中させる

「では・・・３・２・１・ゴー！」

真耶が叫んだ瞬間、四機は飛び立った。特に注目を集めたのが『ストレイド』だった。何故なら飛び立つ時、後ろのブースターに光が収束し始めたかと思うとその光が爆発し『ストレイド』は物凄いスピードで飛行したのだ。飛行中のスピードは『アブソリュートフリーダム』に匹敵するほどである。

「速っ！？」

「相変わらず出鱈目なスピードですわ！」

セシリアと一夏が驚いている間にも二機は瞬く間に中央タワー外周へと進んでいく。

（ここらへんかな？）

タワーの外周にあるカーブルート。普通ならばスピードは落とさないといけない場所である。何故ならばスピードを落とさなければカーブを曲がりきれず大変な事になるからである。だがこの二人にはそんな常識はいらない様だ。

（これぐらいなら・・・）

なんと二人はスピードを落とすどころか遠心力を利用して曲がりきったのだ。

「スピードを落とさず曲がったぞ！あの二人！」

その後に来た二人はちゃんと減速して曲がった。その頃には二機はスピードを落とさずに第六アリーナに突っ込んで着地する瞬間にスピードを殺して静かに着地した。

「は、はい。お疲れ様でした。二人とも優秀でしたよ～。」

一応、褒める真耶だったがその声は何処か上ずっている。

「やっぱり速いぜ。二人とも。」

「本当ですわ。」

ようやく残りの二人も戻ってきた。するとやはり一夏はさっきのあれが気になってた様でユウイチに質問した。

「なぁ、あれって一体なんだったんだ?」

「あれ?」

「だから最初の爆発みたいなのだよ。」

「あ～、あれねぇ。あれは・・・」

あれはさっき真耶が説明した通り束が新しく『ストレイド』に搭載した新機能『オーバードブースト』である。ブースター内でネクスト粒子を超圧縮、解放する事で驚異的のスピードを得られるという寸法だ。まぁ、また束が企業連のコンピュータから戴いたものなんだが。

「『オーバードブースト』か・・・すげぇな。俺も欲しいな。」

「『白式』はネクスト粒子を搭載してないから無理じゃね?。」

「ああ、そうか～。」

落胆する一夏にユウイチはちょっぴり申し訳ない様な気分になる。

「ほら！授業は終わった訳じゃない！次は訓練機組の選出を行うぞ！」

そう、千冬の言う通り授業は、まだ始まったばかりだ・・・。

弾丸のように速く。（後書き）

次回はムウとロックオンが授業に参加？

『キャノンボール・ファスト』の準備（前書き）

更新です？

『キャノンボール・ファスト』の準備

「・・・機体に乗り込め。ボヤボヤするな。開始！」

毎年の恒例行事である『キャノンボール・ファスト』は本来、整備課が登場する二年生からのイベントだ。しかし、今年は予期せぬ出来事に加えて専用機持ちが多いことから、一年生時点で参加することになったらしい。

「その前に・・・今日は臨時講師を紹介する。」

「え・・・？」

何も知らされていない生徒達が騒ぎ出す。

「臨時講師？なんでこんな時期に？キラ、知ってるか？」

「いや？知らないよ・・・」

だが、キラは何処か笑いを堪えている気がする。

「知らない訳ないだろ？キラ？」

「本当に女しかいないんだな～。」

そう言って現れたのは何故かジャージ姿のムウとロックオンだった。実は轡木十蔵がさすがに生徒は無理だからと臨時講師という形をとってくれて、それで学園に居させて貰っているのだ。

「なんでジャージなんだ?」

ユウイチの言うとおり千冬もスーツなのだからスーツでいいと思うが・・・。

「え?そりゃあ、お前、体育系の教師って言ったらやっぱりジャージ姿だろ?なぁ、ムウ?」

「だよなぁ〜。」

ちゃっかりこの二人は意気投合しているようだ。

「ゴホンっ!お二人共、そろそろ生徒達に説明したいんですが。」

「あっ!そうだな。じゃあ、まず俺から。俺の名はムウ・ラ・フラガ、臨時講師みたいなもんだがよろしくな!」

笑いながら親指をグッと立ててウインクするムウ。その瞬間、真耶を含めた数人の女子が顔を赤くした。確かにムウも結構なハンサム・・・いや、ダンディなので男子に免疫がない女子達には刺激が強いだろう。

「次は俺だな・・俺はロックオン・ストラトス。ムウと同じく臨時講師だ。よろしく頼むぜ!。」

そう言って手で作ったピストルをバーンと言いながら撃つ真似をするロックオン。その瞬間、数人の女子が倒れた。

「二人はヤマトとクラインとレイブンと同じく違う世界からやっ

てこられた。その為、ＩＳは使えるから分からない事があったら何でも聞くように。」

「「「「「は～い！」」」」」

因みにＩＳ学園の女子達はキラ達が他の世界から来たことは女子特有情報網で既に知っている。

「お～い！キラ～！」

キラは特に何もする事が無いので見回っているとムウに呼び止められた。

「ムウさん！なんですか？」

「聞いたぞぉ～、お前、お姫様の他に二人も女を作ったんだってぇ？憎いねぇ～、このっ、このぉ～。」

そう言って腹を肘で小突いて来る。キラとしてはムウに知られたくなかった様だ。

「何で知ってるんですか？一体誰が？」

「俺だよ。」

そう言ったのは同じくやることがなく見回っていたユウイチだった。

「なんでっ！？」

「いいじゃん！いつかはバレるんだし。」

「でもっ！」

するとムウがキラの頭を脇と二の腕で挟み込み、左手で髪をくしゃくしゃになるまで触る。

「もがっ！？やべてくださ～い！。」

「でっ！誰なんだよ？その二人はよっ！」

「あの金髪の青いＩＳを装着している子と金髪のオレンジ色のＩＳを装着してる子ですよ～。」

キラがもがきながら指差した方向へと顔を向けるムウ。すると直ぐに分かった様で、ニンマリとする。

「むっ！二人共巨乳だな。ラクスも巨乳だし・・最初のあの子だってそうだったし、まさかお前ぇ、おっぱい好きか？」

瞬間、キラの顔がボッと赤くなる。

「ムウさん！」

「冗談だって！おっ、呼ばれたから行ってくるな。」

そう言うと助けを求めてる女子の所へと走って行ってしまった。

「へぇ～、キラっておっぱい好きなんだ！」

現れたのは顔を赤くしたシャルロットだった。

「シャル!?いや、今のはその・・・」

あわふためくキラにシャルロットは胸を隠す動作をしながら見つめながら一撃の言葉を投げ掛けた。

「キラのエッチ・・・。」

「えええ～～～っ!」

「ふふっ、嘘だよ。実は今ちょうどラウラと増設スラスターのインストールが終わったところなんだ。それでラウラと一周してくるから映像を見て欲しくて。」

「そういう事ならいいよ。」

ラウラを呼んでキラは二人の直視映像を見るためチャンネルを合わせる。

「僕は３０４ね。」

「私は３０５だ。」

キラが合わせると二人の視点の映像のディスプレイが現れた。

「じゃあ、行こうか。」

「了解だ。」

二人は『ラファール・リヴァイヴ・カスタム?』と『シュヴァル

ツェア・レーゲン』を素早く展開し、浮く。二人は危なげない機体制御で第六アリーナのコースを駆け、中央タワー外周へと上昇していった。

（二人とも減速のタイミングは一緒だ。ラウラは曲がる時に少し力み過ぎてる。シャルは加速するときに無意識に左に寄っちゃう癖があるな。）

さすがは歴戦のパイロットである。的確に二人の問題点を見極めた。

「どうだった？」

少ししてシャルロット達が戻って来た。

「二人とも良かったよ。でもシャルは加速するときに左に寄っちゃう癖を直すともっといいよ。ラウラも曲がる時の力みを直すとパーフェクトだね。」

「左に寄っちゃってたんだ～、気づかなかった。」

「何故かは知らないが自然と力んでしまうんだが・・・」

一方、箒はユウイチのレクチャーを受けていた。

「簡単に言えば『紅椿』は『絢爛舞踏』によるエネルギー供給をすることを前提としてるから使えないと直ぐにエネルギー切れを起こすぜ。」

「確かに・・・だが、臨海学校以来一度も発動できていないんだ

が・・・」

それを聞いたユウイチは頭を抱える。要である『絢爛舞踏』が使えない以上、色々とカスタマイズしてスピードをあげなきゃいけなくなるからだ。

「箒・・・臨海学校の時の事を思い出せ！あの時、お前は何を感じた？どうしたいと思った？」

「あっ！あの時はそのだな・・・」

何故かゴニョゴニョと言いながら赤くなる箒。

「あっ？まぁいいや。使えないなら、展開装甲をこーして」

その後は何事もなく授業は終了した。そしてクラスに戻る途中、事件は起きた。

「キラ～！」

「キラさ～ん！」

キラは自分を呼ぶ声がしたので後ろを振り返るとラクスとセシリアが手を振りながら走ってきた。

「どうしたの？二人とも？」

「キラ、シャルさんから聞きましたわよ。」

「え？」

キラは訳が分からず首を傾げる。

「その・・・キラさんて巨乳がお好きなのでしょ？」

すると再びキラの顔が赤くなった。

「なっ！なんでそんなっ・・・」

よくみるとセシリアとラクスも顔が赤くなっているようだ。

「あっ、あの・・・」

「私達なら・・・」

「えっ・・・？」

「「私達ならいいですわよ」」

見事に声をハモらせながら胸をズイッと前に差し出す二人。その魅惑的な大きな二つの胸に流石のキラもゴクッと喉を鳴らす。

「な～て、冗談ですわよ。キラさん。」

「ムウさんとロックオンさんがこれなら絶対引っかかると言ってました。」

二人が聞き返すとキラは少し残念そうな顔をしてため息をついた。

「何だ・・・やっぱりムウさん達だったんだ。」

「キラさん・・・」

「え？・・・」

「鼻血、出てますわよ。」

確かにキラの鼻から結構な量の鼻血が流れ出ていた。

その日の夜、キラ達は十蔵と千冬と束と楯無と真耶に真実を話す為、理事長室で緊急会議を行っていた。

「ええ～～！！戦争ですかぁぁ！」

「ああ、そろそろ近い内に企業連がやらかす筈だ。」

真実を聞いた千冬達はまさか戦争が起こるはずがないと思っていたので唖然とする。

「じゃあ、あれか？リボンズ達は企業連の尖兵としてお前等と戦ってたのか？」

「いや、違うよロックオン。リボンズ達・・・いやっ、リボンズ達の協力者、沙藤美哉はキラとラクスを自分達の切札として手元に置いといておきたかったんだろう。」

「え？それはどうしてなの？ゆうくんの話によるとその沙藤美哉は企業連の手下じゃないの？」

「いや、企業連は『ジェネレイド』を兵器として様々な実験して

たからな。それで反逆したんだろう。」

彼は今でもありありと思い出す事ができた。幼い子供達にされる酷い実験を・・・あれを見て危機感を覚えずにいられない筈である。

「俺は元レイヴンだから始末しときたかったんだろう。とにかく、リボンズ達は企業連とは別の勢力と考えてくれ。」

「まぁ、とにかく後少しで『キャノンボール・ファスト』が始まるんです。この事は伏せていたほうがいいでしょう。」

「そうですね。ここで下手に動いてもしょうがないですから。」

「全ては『キャノン・ボールファスト』が終わった後に全部考えましょう。」

だがこの時、誰も予想はしてはいなかっただろう。まさか『キャノンボール・ファスト』が滅びへの第一歩になるとは・・・。

『キャノンボール・ファスト』の準備（後書き）

次回はいよいよ『キャノンボール・ファスト』

『キャノンボール・ファスト』（前書き）

更新です。

『キャノンボール・ファスト』

キャノンボール・ファスト当日。キラ達はキラの部屋である事を話していた。内容というのはリボンズ達の事だった。

「本当なの？リボンズ達が来るって？」

「ああ、確かな情報だ。」

実はユウイチは今まで何人もの様々な情報に詳しい人物を抱え込んでいて、その一人が今日、リボンズ達が襲撃してくると言うのだ。

「信用できるのか？その情報・・・？」

「大丈夫だって、ロックオン。」

確かに色々と不確定な所は色々とあるがユウイチには確かな自信があった。

「でも、もし本当でしたら・・・大変な事になりますわ。」

「一応、先生達や軍の人達、亡国機業の連中にも知らせておいたから。」

生徒達や一般の人達には秘密になっているがＩＳ学園ならびに街は今は警戒体制に入っている。その事もあり、ＩＳを身に纏った軍人達が巡回しているのだ。その事を生徒達や一般市民が不思議がっ

ていて、様々な問い合わせが殺到しているらしい。

「本当にリボンズ達が来るのでしたら、わたくし達はこの世界の人達を守らなければいけません。それがわたくし達の責任と義務です。例え、この命を散らすことになっても・・・」

「そうだね・・・、絶対に奪わせない。この一夏達の・・この世界の平和は。」

「ああ!クルーゼなんかにやらしゃしねぇよ!」

「そうだ!刹那達がいなくたって、俺はガンダムマイスターだ!守ってみせるさ。」

全員が右拳を上に挙げ、堅い意思を示した。その後、一年のレースまで時間があるので各人は自由行動をとることにし、ユウイチはというと自室に戻りのんびりくつろいでいた。

「誰かと思えばお前か・・・」

ドアが開き、一人のある人物が入ってきた。その人物は幼い感じはあるが、何処か大人びていて尚且つ何か企んでいるような印象もある。

「送った情報、読んでくれた?」

「ああ、リボンズ達が今日、襲撃してくるって言う情報だろ?ガセじゃないよな?リジェネ・レジェッタ。」

「勿論さ。確かに今日、彼等はここに来るよ。」

彼はリジェネ・レジェッタ。リボンズ達と同じイノベイドだが、彼は彼なりの思惑がある為、ユウイチ達に協力しているのだ。

「そんなに欲しいのか？『ヴェーダ』が？」

「当たり前さ。イオリアの計画の根幹を成すシステム・・・それが手に入れば僕が計画の体現者になれる。もっともリボンズが違う場所に移動させたから場所は分からないけど。」

イオリアの計画・・・ユウイチもレイヴンだった頃に独自に調べていたが詳しい事は結局分からず仕舞いだった。分かった事はイオリアが創ったソレスタルビーイングという私設武装組織による戦争根絶という事だけだ。ロックオンにも聞いたが彼も詳しい事は知らないらしい。

「まぁ、いいか・・・お前も気をつけろよ。お前の思惑はバレてると思うぞ。」

「分かってるよ。」

不敵な笑みを浮かべているリジェネを部屋に残し、ユウイチは仲間達の所へと向かった。

わぁぁぁぁぁぁ！と、盛大な歓声がピッドの中にまで聞こえる。今は二年生のレースが行われていた。どうやら抜きつつ抜かれつつのデッドヒートの様で最後まで勝者が分からない大混戦らしい。

「という事で今回は簪も参加するから。」

「更識簪です。よろしくお願いします・・・。」

キラ達はというと簪が仲間に加わったという事でその紹介をしていた。

「俺は織斑一夏、よろしくな。一夏って呼んでくれよな！」

「私は箒、篠ノ之箒だ！よろしく頼む。」

「私は凰鈴音、鈴て呼んで。」

「僕はシャルロット・デュノア。よろしくね。」

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。」

自己紹介も終わり、ワイワイと話しているとユウイチがやって来た。

「ういっす！」

「遅いぜ、ユウイチ！」

「二年生がもうすぐ終わりますからＩＳを展開しといたほうがいいと思いますわよ？」

確かに見ると全員ＩＳを展開した状態で待機している。皆、やる気十分な様だ。

「それもそうだな。」

そう言ってユウイチは目を閉じて意識を集中させる。するとユウイチが光って、次の瞬間にはディアクティブ・モードの『ストレイド』が現れた。

『みなさ～ん、準備はいいですかー？スタートポイントまで移動しますよー』

どうやら二年生のレースが終わった様で真耶ののんびりとした声が響いてきた。キラ達はうなずくと、マーカー誘導に従ってスタート位置へと移動を開始した。

『それでは皆さん、一年生の専用機持ち組のレースを開催します！』

大きなアナウンスを聞きながらキラ達は各自位置に着いた状態で、スラスターを点火した。超満員の観客が見守る中、シグナルランプが点灯し始める。

3・・・2・・・1・・・ゴー！

皆一斉に飛び出す。列はキラ、ユウイチ、ラクス、鈴、セシリア、ラウラ、箒、簪、一夏、シャルロット、の順だったが驚いた事にラウラと鈴が三人に追い付こうとしていた。

「あれは『風』を装備した『甲龍』！？」

「それに、ラウラの『シュヴァルツェア・レーゲン』か！」

「今回の私達は一味違うんだからね！」

「勝たせてもらう！」

なんとラクスの『姫桜』を抜いて二機にぐんぐんと近づいてくる二機に二人は焦った。

「あらあら・・・」

「やる気満々だな、あの二人。」

よく見ると二人の目の奥が燃えている。

「悪いと思うけど。」

するとキラは二枚の翼からドラグーンを８基展開し、振り向き様にハイマットフルバーストを放つ。

「え・・・」

「なんだと・・・」

放たれた攻撃は二機には当たらず地面に直撃、派手な爆炎と煙で視界を塞がれる。そして煙の奥からユウイチが放った衝撃砲ガントレットの実弾が直撃、二人は最後尾まで吹っ飛ばされてしまった。

「やっぱり1位と2位はあの二人か・・・」

一夏は前方から吹っ飛んで来た鈴とラウラが後ろに流れて行くのを見送りながらため息をついた。

「それより、シャルロットがなんでこんなに後ろにいるんだ？」

確かにシャルロットと増設されたブースターがある『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』が後ろにいるのはおかしい。

「何故って、一夏それは、やっぱりレースといったら最初は温存しないとね。」

「そういうものなのか？」

ふ～んと言いながら納得した瞬間、先頭である異変が起きた様だ。一夏達は驚いて前を見るとそこにはキラとユウイチに銃口を向ける『リボーンズガンダム』が滞空していた。

「あれは確か、『リボーンズガンダム』・・・あいつまた！」

赤い機体を見つめる一夏はその体を怒りで奮わしていた。

「きゃあああ！」

誰かの悲鳴が聞こえる。突然の事態に大会主催者側もどうしていいか分からず、パニックは客席に広がっていた。

「久しぶりだね。二人共・・・」

「リボンズ・アルマーク・・・」

「新しくなった君の機体の力、興味が湧くよ。」

するとリボンズの後ろから『ネクスト・プロヴィデンス』を身に

纏ったラウ・ル・クルーゼが降りて来た。

「また、新たな力を手に入れたのか・・・本当に恐ろしいな、君は・・・」

クルーゼを見たキラは何故かその顔に笑みを浮かべていた。意図が分からないリボンズとクルーゼは首を傾げる。

「何を・・・」

「今日は貴方達に会わせたい人達がいるんです。」

すると遠くから何本ものビームがクルーゼとリボンズに襲い掛かる。

「なにっ！」

「この感覚・・・まさかっ！」

二人が驚いていると黄金のＩＳ『アカツキ』が現れ、クルーゼに襲いかかった。

「貴様・・・ムウ！」

「久しぶりだな！クルーゼっ！！」

二人は世界を越えて再び刃を交えた。あの時と同じ様に・・・

「生きていたとはな・・・嬉しいよ。ムウ・・・」

「今度は俺がお前を地獄に送ってやる！」

彼等は今度こそ決着を着ける為に戦う。今度こそ、この血の呪いを断ち切る為に・・・。

「あれが・・・ムウ・ラ・フラガ・・・」

一応、クルーゼから話を聞いていたリボンズはムウをクルーゼに任せ、自分はキラと戦おうと向き直った瞬間、ある一機のガンダムが目の前に立っていた。

「緑色のＧＮ粒子・・・ソレスタルビーイングか！」

「『ケルディムガンダム』、ロックオン・ストラトス、目標を狙い撃つ。」

ロックオンがリボンズに『ＧＮビームピストル？』を向けた瞬間、リボンズは不敵な笑みを浮かべた。

「君はライル・ディランディだね。君の相手は彼女に任せるよ。」

「何？・・・」

するといきなり青い『ガデッサ』つまり『ガッデス』が現れ、ロックオンに襲い掛かる。

「そんな・・・まさか、あなたライル？何故貴方がこの世界に！？・・・」

「なっ！アニュー！？何で？？そうかっ、ネクスト粒子！」

二機が戦いあうのを楽しむ様に笑みを浮かべた後、リボンズはキラ達に向き直った。

「キラ・ヤマト。君の相手は僕だよ。」

「くっ・・・」

後ろを見るといつの間にか一夏達と先生達、軍と亡国機業は『アヘッド』や『ガデッサ』などと戦闘に入っていた。

「いつの間に・・・」

「知っているだろう?ポーターさ。企業連が開発した物だよ。」

このままでは不利だと感じたキラはユウイチに一夏達の支援を指示しようとするがリボンズは許さない。ビームを放って来たのだ。

「おっと!ユウイチ・S・レイブンに会いたい人がいるからそれは許さないよ。」

「会いたい人?」

するとリボンズは上を仰ぎ見た。二人も同じように見る。するとそこには白いウイングスラスターが二つ装着された白い騎士のようなISが浮かんでいた。

「『ガンダム・ナイトアーク』!」

「貴方に会いたいというのはわたくしです。ユウイチ・S・レイブ

ン・・・」

通信から聞こえてきたのは若い女性の声、だが、どこか落ち着きのある声でもあった。キラは声の主も機体も知らないが、機体を見た瞬間のユウイチの反応からして知っている様だ。

「へっ！まさか大将がお出ましとはな。沙藤美哉・・・」

「えっ！？あの人が沙藤美哉、僕達をこの世界に飛ばした張本人。」

そう彼女がキラ達をこの世界に飛ばした張本人であり、リボンズ達の黒幕でもある。だが、その彼女が今、現れたのは何かしらの意味があるのだろうか。

「キラ・ヤマト、わたくし達は貴方とラクス・クラインを連れて行きます。」

そう言って彼女は『レグナント』と射撃戦闘をしているラクスを指差した。

「何で・・・貴方は僕達を？」

「貴方は自分の価値に気付いておられないようですね。」

「価値・・・？」

だが、美哉はその質問には答えず今度はユウイチに向き直る。

「貴方にはここで果ててもらいます。理由はお分かりですね。」

「理由？分からんねっ！。」

ユウイチは言い終えた瞬間にビームを美哉に向けて放った。だが、彼女は軽やかに避けて向かって来る。

「キラ！話は後だ！今はこいつ等をやるぞ！」

「うん！」

リボンズもビームサーベルを抜いてこちらに斬り掛かって来る。どうやらこの事は予想済みだったようだ。

「はぁ！！」

「くっ！！」

キラの大出力ビームサーベル『シュペール・ラケルタ2』とリボンズの『GNビームサーベル』の刃がぶつかりあいスパークする。

「くそっ！こんな所で！」

「はぁ！」

キラは相手を蹴り飛ばし、『クスィフィアス4レール砲』を使う為に跳ね上げた。形は前と変わらないが砲身がスライドし、更に長くなったレールガンからネクスト粒子を身に纏った青い実弾が放たれる。

「くっ！」

とっさにリボンズはシールドで防ごうとしたが『アブソリュートフリーダム』の強力な一撃により後ろに大きく弾き飛ばされた。

「あの『フリーダム』、また新しくなったのか？あいつ、何処まで強くなるんだ？」

クルーゼと戦闘中のムウは戦闘しながらも新しくなった『フリーダム』に興味が引かれていた。

「余裕そうだな。ムウ・ラ・フラガ。」

ネクスト粒子で複製されたドラグーン５０基がビームを射掛けるが『アカツキ』の最大の特徴、対ビーム防御・反射システム『ヤタノカガミ』によって全て反射されて、逆に放ったドラグーンが全て撃墜される。

「その機体・・・案外と厄介だな。」

ならばと『ビームジャベリン』を抜き放ち襲い掛かる。『アカツキ』も双刃のビームサーベルを抜いて斬り掛かってきた。二機は激しい火花を散らし、駆け抜けていった。

一方、一夏達も『アヘッド』や『ガデッサ』つまり、アロウズの部隊に苦戦していた。

「キラが調べてくれた。こいつ等は元々、アロウズって言うエリート部隊。」

荷電粒子砲を『ガロッゾ』に向けて掃射するが避けられ逆に爪からのビームサーベルで斬りかかられた。

「私の名はブリング・スタビティ。君を倒させてもらう！」

「イノベイド！！」

一夏も負けじと『零落白夜』を使って応戦した。彼は負けられないのだ。自分の為にも、仲間の為にも。

「苦しいですわね。でも、負けられませんわ。」

ラクスは『レグナント』と戦闘をしながらも辺りを見回した。もはやもの凄い、大混戦である。これでは救援は望めないし、誰が味方かさえ分からない状況だ。

「もう一機！？」

上から『レグナント』と同タイプらしき機体が急襲してくる。牽制の為に『姫桜』のビームライフルを連射するが『ＧＮフィールド』を張られて直撃する前にビームが霧散してしまった。

「貴方もイノベイド・・・」

「そう、私はデヴァイン・ノヴァ。覚悟。」

放たれた極太のビームを避けながら彼女は必死に祈った。愛する者が死なぬ様に。

「まさか、前にモルゲンレーテから強奪された機体と出会うとはな。」

一方、ユウイチは美哉が操る『ガンダム・ナイトアーク』と高速機動戦闘を繰り広げ、市街地に出てしまっていた。だが、よくみると下でＩＳ部隊とアロウズ部隊が激しく戦闘しているのが分かる。

「くそっ！速い。」

巧みな操縦で視界外に移動する彼女に苛立ちを感じ始めるユウイチ。正直、戦闘中にここまで苛立ちを感じたのは初めてであった。

「くそっ！またか！」

彼女の機体、ＮＥＸＴ－Ｘ０５Ｎ『ガンダム・ナイトアーク』は元々は試験機としてモルゲンレーテが開発したものなのだが、数ヶ月前に実験場から強奪されていたのだ。何せ極秘に作られた機体なのでキラとラクスはこの機体の事は知らない。因みにユウイチの機体、『ストレイド』はその『ガンダム・ナイトアーク』から得られた情報を用いられて作られたのだ。

「くっ！まずいな。戦場をこれ以上広げる訳には・・・」

その瞬間、『ガンダム・ナイトアーク』が建物を踏み台にしてジャンプ、追いかけていたユウイチに斬りかかった。この様に相手を翻弄する様な戦いかたから彼女はこう呼ばれている。『戦場の白い魔術師』と・・・。

「ユウイチ、まさか苦戦している？」

キラは美哉とユウイチの戦いを見て不安に駆られていた。

「甘い！」

リボンズが『フィン・ファング』を放ち、巧みにキラの退路を断つ。

「やらせない！」

キラはビームサーベルで『フィン・ファング』を落としながら近づいていく。だが、キラはまたもあの嫌な感覚を感じ、後ろに下がった。すると案の定、いくつもの光線が通り過ぎていった。

「今度は何・・・？」

「今のは一体？」

リボンズも分からない様子でビームが飛んできた方向を見る。そしてそこにあったのは。

「なんだ！？あれは？」

「軍隊・・・？」

二人が見たのは無数の戦闘ヘリ、戦闘機、ＩＳだった。最初は軍の増援かと思ったが、それにしては何かが違う。だが、何処かの特殊部隊というわけでもなさそうだ。何せ数が多すぎる。しばらくしてユウイチから通信が入ってきた。しかもどうやらアロウズやＩＳ学園側全てに通信をしている様だ。しかもその声は何処か焦っている。

『アロウズ、ＩＳ学園、軍、亡国機業のＩＳ全機聞こえるか？今、海から進行してきている大部隊が見えるか？あれは企業連の軍、つまり企業軍だ！！』

「そんなっ！？企業軍？」

『始まったぞ！！国家解体戦争がっ！！」

その数分後、世界中でサイレンが鳴り始めた。

『キャノンボール・ファスト』（後書き）

次回はＩＳ学園ＶＳ企業連

国家解体戦争（前書き）

今回の話の趣旨はリンクスの紹介ですので戦闘はあまり・・・

ＩＳ操縦者を育成する為の学園、ＩＳ学園。その学園に隣接している市街地は普段なら多くの人々が行き交い、活気に満ち溢れている。しかし、今は銃声が鳴り響き、あちこちで火が燃え盛っていた。理由は今から数分前に企業の軍隊、すなわち企業軍が侵攻してきたのである。その硝煙の匂いと爆風の熱気が充満する戦場の中をキラは新しい愛機『アブソリュートフリーダム』と共に駆け巡っていた。

「そんな・・・なんで・・・。」

今日は『キャノンボール・ファスト』の当日だった。しかもつい先程、仲間達と共にこの世界の平和を守ると誓ったばかりであった。それが余計にキラの胸を締め付ける

「はっ！」

ハイパーセンサーから敵機の接近を知らせるアラートが鳴り響く。キラが上を見ると三機のＩＳが猛スピードで襲来してきた。

「あれはっ！」

三機の内の二機は企業軍の量産機ＲＧＴ－１１『Ｄ－２』である。『Ｄ－２』はＣ．Ｅの地球連合のダガー系列の機体であり、機体の所々に似たような箇所がある。だが、最大の特徴は右腕をすっぽり覆うように装着されているプラズマライフルである。そして三機目は企業軍の特殊部隊『フライトナーズ』に支給されている高速機Ｒ

ＧＴ－１３『Ｍ－９』である。『Ｍ－９』の特徴は背中に大型のバックパックを装備している所と機体の所々に追加装甲を取り付けている所である。この二つにより『Ｍ－９』はスピードと防御力に高い性能を実現している。因みに『Ｍ－９』は『ウィンダム』に似ている。それと『Ｍ－９』と『Ｄ－２』の基本カラーは青と白である。

「どうして貴方達は・・・。」

三機はキラの問いには答えず攻撃を仕掛けてきた。

「くっ・・・！」

キラは仕方なく『ハイパードラグーン』をパージし、５基で攻撃を仕掛けた。量産機である二機の『Ｄ－２』は複雑に動く『ハイパードラグーン』に翻弄され、あっという間に放たれたビームに撃ち落とされてしまった。すると、絶対防御が取り付けられていなかったのかそれとも機密保持の為なのかは分からないが二機が爆散したのだ。

「なっ・・・まさか、機密保持？」

けれどキラは直ぐに残った『Ｍ－９』に注意を戻す。『Ｍ－９』のパイロットは特殊部隊所属なだけあって無数に放たれるビームを巧みに避けていた。直後、機体をこちらの向け、背中に取り付けられているブースターに装着されているミサイルを放ってくる。更に右手に持っているプラズマライフルをも連射させてきた。

「なっ！」

キラがミサイルを撃ち落とそうとビームライフルを向けた瞬間、

ミサイルが種が割れる様に割れ、中から小型のミサイルが8基も飛び出した。

「クラスターミサイル！」

一つのミサイルの中にいくつものミサイルが仕組んであるミサイルをクラスターミサイルと言うのだが、結構厄介な代物でうっかりすると小型ミサイルが全弾当たり、お陀仏になってしまうのだ。

「だったら・・・」

ビームライフルでミサイルを全基叩き落とし、ドラグーンで攻撃を仕掛ける。だが、『Ｍ－９』は四方八方から迫り来るビームを前進することで避けるとビームサーベルを抜いて襲い掛かって来た。

「はぁっ！！」

キラも負けじとビームサーベルを振る。二機はつばぜり合いに入り、ぶつかり合った衝撃で二機は回転し、また離れていった。だが、『Ｍ－９』は食い付いてくる犬の様に追撃をしてくる。しかし、キラは『Ｍ－９』を蹴り飛ばした。更に体制を崩している所をドラグーンで穴だらけにする。貫かれた『Ｍ－９』は重力に引っ張られ地面に火を吹きながらまっ逆さまに落ちていった。

「はぁ、はぁ、皆は何処に・・・？」

企業軍のジャミングによってレーダーはおろか、通信も繋がらない状態だった。因みにリボンズ達も企業軍に襲撃を受けて散り散りになっている。

「急がないとっ！」

キラは市街地から急いでＩＳ学園に戻ろうと必死に機体を駆った。

一方、ユウイチは美哉と共に企業軍の攻撃に耐えていた。

「くそっ！！なんでお前等なんかと手を組まなきゃいけねぇんだ！？」

「つべこべ言わず敵を倒したらどうですの？」

二人は背中合わせになり、次々と企業軍の『Ｄ－２』を落としていった。すると重量級の機体が二機、ＯＢでこちらに接近してきた。

「あれは！？まさかネクストか・・・。」

重量級の筈なのにかなりの機動性を持っている二機は急停止してユウイチに通信を入れて来た。

「貴様がＩＳ学園のレイヴンか・・・？」

「時代遅れがこんな所で何をやっている？。」

基本カラーが茶色のネクストのパイロット、つまりリンクスは中年らしく声は深くそして渋い声であった。もう一人のリンクスは若い声で、歳は２０前後のようだ。

「あんたらがリンクスか？お手並み拝見と行こうか。」

「レイヴン風情がいい気なもんだ。古臭いんだよ。消えろ！」

言うなり灰色のネクストがレーザーライフルを撃ってきた。ユウイチは余裕をもって避けたが茶色のネクストからの化物じみたレーザーライフルの一撃が直撃、かなりのダメージを受けた。

「無様な動きだなレイヴン。なぜ出てきた？もう、お前の時代ではない。」

よろける機体を制御し、体制を立て直してユウイチは反撃に出た。ぐずぐずしているとあの化物じみたレーザーライフルの餌食になってしまうからだ。

「レイヴン、わたくしの支援者から企業軍についての情報が送られてきました。そちらに転送します。」

「分かった。頼む。」

どうやら企業軍の情報が送られてきたようで美哉は直ぐ様それをユウイチに転送した。

「よっしゃ来たぜ。レーダーと通信は駄目だが、送るくらいなら。」

二機と戦いながらも情報をチェック、味方およびアロウズ部隊に転送した。その情報によると今戦っているネクストは茶色の方が『クリティーク』。リンクスはＮｏ．１４シェリング。かなりの老兵の様だ。灰色の方はリンクス名はＮｏ．３９マモーズ。ネクスト名は『アックス』。どちらも新興企業アルドラ社の所属ネクストでＥＮ負荷の低い機体構成が特徴である。

「アルドラ社？聞いた事がないぞ。」

「当たり前だ。数ヶ月前に企業連の大企業は全てが変更された。貴様の知る企業はもう存在しない。」

四機は激しく撃ち合い、放たれた閃光が空を彩った。

一夏達はというとＩＳ学園の近くで先ほどまで戦っていたアロウズ部隊と共に企業軍を抑えていた。

「こいつ等が企業連・・・許さねぇ！」

ついさっきユウイチから企業連の情報と敵機体情報が送られてきた。どうやらこの戦いに数機のネクストが投入されている様だ。

「皆！大丈夫か！？」

「当たり前よ！」

「一夏は大丈夫？」

「ああっ！」

鈴とシャルロットがアサルトライフルと衝撃砲を連射する。高速で飛来する弾と見えない弾に当たり、次々と『Ｄ－２』が撃墜されていく。

「一夏！アレを！」

何かを発見したようで箒が声を上げる。それを聞いた一夏が箒が

指差した方向を見ると海から一機の機体がこちらに飛来してくるのが見えた。赤と黒にカラーリングされた機体、彼には見覚えがあった。

「『ナインボール』・・・」

『ナインボール』を見た瞬間、一夏の体を嫌な悪寒が走った。たった一機で『ジンクス』部隊とアメリカ軍基地を壊滅させた機体。そんな機体が加われば一夏達は瞬時に落とされてしまう。まして今はユウイチとキラがいないのだ。

「くそっ！やるしかないのか！」

一夏が荷電粒子砲を放とうとした時、さっきまで刃を交えていたアロウズのＩＳ『ガロッゾ』が『ナインボール』へ向かっていった。

「この機体は！？」

手からのビーム刃を振り上げ、『ナインボール』を両断しようとする。更に緑色の『ガデッサ』がＧＮメガランチャーで援護射撃の為に太いビームを放つ。だが、『ナインボール』はヒラリと避けて逆に『ガロッゾ』を切り裂いた。

「なに？」

絶対防御やシールドエネルギーがあるにも関わらず一撃で撃破したのだ。それだけ攻撃力が高いのだろう。

「パイロットは大丈夫なのか？」

どうやら脱出した様だ。海に人の様なものが落下したのが見えたのだ。

「一夏さん！大丈夫ですの！？」

戦場で立ち止まっている一夏を心配したラクスがやってきた。だが、ラクスを見た『ナインボール』はこちらに銃を向けてくる。

『第一ターゲット、ラクス・クラインを確認。排除開始。』

無機質な機械音声、それがやたらと一夏とラクスの恐怖を煽った。

「皆！ラクスを守るぞっ！」

「えっ！？」

「あの機体は！」

『ナインボール』に気付いた箒達が集合して来た。一夏達はラクスを中心にして円陣の様な防御陣営を組む。

「悪い！遅くなったな。」

「大丈夫か！？」

しばらくしてロックオンとアニューとムウと更にクルーゼが一夏達と合流しに来た。やはり、この状況では四人とも協力するしかないようだ。

「フラガ先生！なんでクルーゼが？」

「仕方なかろう。この状況では協力するしかあるまい。」

「この戦いが終わったら今度こそ決着を着けるがな。」

会話を遮る様に『ナインボール』が攻撃を仕掛けてきた。やはりそんな余裕は与えてはくれない様だ。

「おい、お前！たった一機で俺達と戦う気か？」

ムウが叫んだ瞬間、いくつものマイクロミサイルが横から飛んでくる。間一髪で避けたムウは飛んきた方向を見ると一機の赤い逆間接の機体がＯＢを使って飛んでくるのが見えた。

「なんだ？」

「あいつは？」

逆間接という奇妙な機体に一夏達が驚いていると通信が入る。

「織斑一夏か・・・面白い素材と聞いている・・・期待するぞ。」

「何っ？」

すると『白式』のハイパーセンサーが敵機の情報を開示した。ネクスト名は『アートマン』。リンクス名はＮｏ．２サーダナ。企業連の新興企業イクバール社の所属リンクスでイクバールの魔術師という異名まで持っているとの事。

「Ｎｏ．２・・・」

『ナインボール』とサーダナ。二つの強者が一夏達に襲い掛かった。

一方、一夏達とはぐれてしまった簪は一人で戦場をさまよっていた。

「はぁ、はぁ、皆は一体どこに？」

しばらく移動しているとあるものが彼女の目に入った。

「あれは・・・」

人が三人倒れていた。戦場なのだから珍しくはないが、その内の一人の顔が分かった瞬間、簪は思わず駆け寄る。倒れていたのは自分の姉、更識楯無だった。彼女のＩＳの装甲は破壊されほとんどが残っていない。しかも他二人はセシリアとラウラだった。二人もＩＳを無惨にやられている。一応三人共意識はあるみたいだ。

「お姉ちゃん！オルコットさん！ボーデヴィッヒさん！」

簪の叫びに応える様に三人は頭を上げる。そしてうわ言の様に簪に警告を告げた。

「簪ちゃん・・・逃げて・・・」

「えっ！？」

「逃げろ・・・。」

「そうですわ・・・あの機体は・・・」

三人の言っている意味が分からない簪はオロオロとする。すると後ろからとてつもない殺気を感じた。

「あいつだ・・・」

「逃げて・・・」

簪が後ろを見ると黒いＩＳがネクスト粒子を撒き散らして滞空していた。突起が中央から伸びている特徴的な胸部、左手に装備されているマシンガン。そして頭部の紅い複眼。全てが未知の機体だった。

「貴方が・・・！」

怒りと憎悪を込めた眼差しを向けているとハイパーセンサーに情報が送られてきた。敵ネクスト名は『オルレア』。リンクス名はＮｏ．３アンジェ、企業連の新興企業レイレナードの所属リンクスで、鳥殺しの異名を持つ数少ない女性リンクスとの事。最大の特徴としては右手に装備された大型ブレードである。

「まだ残っていたか。楽しませて貰おう。」

「許さない！」

簪は『山嵐』と荷電粒子砲『春雷』を全力で連射する。しかし、アンジェはクイックブーストを駆使して全てを避けていき、大型ブレード『ＬＲムーンライト』を横振りで斬りつけた。

「はぁぁぁっ！！」

超振動薙刀『夢現』を負けじと振るが相手のブレードの出力と攻撃力が以上に高く、刃がぶつかった瞬間、簪は後ろに吹っ飛ばされてしまった。

「きゃあっ！」

瓦礫にぶつかった簪にアンジェは呆れた様に言った。

「どうした？その程度では勝利は無い。」

「この！！」

よろけている簪にアンジェはマシンガンを向けた。その時、上空から四本のビームが射掛けられる。彼女が回避運動をとりながら上空を仰ぎ見るとそこにいたのはライフルを彼女に向けている『リボーンズガンダム』だった。

「困るよ。彼女達はキラ・ヤマトの仲間。つまり僕の獲物だよ。」

「リボンズ・アルマークか。できると聞いている。」

赤と黒は自らの得物をもって激しくぶつかり合った。

キラはというとようやくＩＳ学園の近くまでやって来ていた。

「ちょっと時間がかかっちゃったな。皆は・・・」

キラが辺りを見回しているとあるものが目に入った。それは『暮

桜・真極』と『ラファール・リヴァイヴ』を身に纏った千冬と真耶だった。

「織斑先生！山田先生！」

「ヤマト君！」

「ヤマトか！いいところに来たな！」

どうやら二人が相手にしているのは前方に見える紫色のネクストの様だ。

「気をつけろよ。かなりの腕で近づけん！」

「どうやらスナイパーのようですね。」

確かに真耶と千冬のＩＳのシールドエネルギーは結構減っている。あの千冬をこうまで手こずらせるとはかなりの腕に間違いない。

「情報は・・・」

すると直ぐに『フリーダム』のハイパーセンサーが情報を開示してくれた。情報によると敵ネクスト名は『プロメシュース』リンクスはメアリー・シェリー。企業連の新興企業ＢＦＦの軍部に君臨する女傑で彼女の戦闘スタイルがＢＦＦの兵器設計思想を決めたとも言われる凄腕のスナイパーだという。

「殺されにノコノコと現れたの？キラ・ヤマト。」

Ｓの女王を連想させる彼女はいつも自分の優位性に絶対の自信が

あるようでその証拠に様々な相手が彼女より優位に立った事は無い。

「何故、こんな事を・・・」

「これから死ぬ貴方に教える義務があるの？」

すると彼女に通信が入った様でメアリーは会話を中断、つまらなさそうな顔になる。

「良かったわね。撤退命令よ。今回はこれで退くけど次は必ず殺すわ。貴方は勿論。貴方のお姫様達や仲間、それにあの野良犬もね。」

「野良犬？」

「あの元レイヴンよ。」

彼女はキラにそう言い残し、海に向かって撤退していった。その直後、海に巡洋艦が停泊しているのか海の方角から信号弾が上がる。それを見た企業軍の部隊が次々と撤退していった。

「キラ、大丈夫か？」

「織斑先生も山田先生も大丈夫ですか？」

「はい・・・」

「今は千冬でいいぞ。キラ。」

二人の無事を確認したキラは辺りを見回した。よく知る街には悲惨

な戦場の爪跡がくっきりと残されていて、それはC．Eの破壊されたベルリンやオーブに何処か似ていた。

この戦いの直後、企業連から全ての国家に対し声明が発表された。その声明の中にこんな一言があった。

―『成長と野心と新しい戦争の時代だ。』―

それは平和と平等を重んじる全ての国に対して明確な宣戦布告である。

国家解体戦争（後書き）

今回出てきたシェリング、サーダナ、アンジェ、メアリー・シェリーはアーマードコア４に実在するリンクスです。

戦いが終わって（前書き）

今回は一夏の誕生日パーティーと彼女の登場！

戦いが終わって

企業連からの攻撃を受けたその日は実は一夏の誕生日で、キラ達は一夏の家で誕生日パーティーを開いていた。

「なんだと！あれだけの戦闘で死者が出なかっただと！？」

玄関先で真耶と千冬から被害報告を聞いていたユウイチとキラが驚愕する。何故ならば、戦闘被害報告の中に死人が０と記載されていたからだ。

「ええ、そうです。怪我などの被害者はいますが驚く事に死者が出なかったんです。一般市民やＩＳ学園教師ならびに生徒、更に軍にもです。」

「おかしいじゃないか！あれだけの戦闘だぞ！！死者が出ない訳が無い！」

「ゆ、ユウイチ落ち着いて。」

確かに今回行われた戦闘は戦争の戦闘となんら変わりない大規模だった。普通ならば死体がゴロゴロしている筈である。

「更には同時刻、世界の主要都市にも攻撃が行われましたが、どこも死亡者がいないと報告を受けています。」

死者がいないのは喜ばしい事だが、企業軍及びあの戦闘のエキス

パートのリンクスが一人も殺さないで撤退したのは何処か薄気味悪いものを感じる。

「どうゆうつもりだ・・・」

「あと、怪我人の方々はお二人が提供してくれたネクスト粒子技術でもう殆どが完治されています。」

「そう、良かった・・・」

死者が出なかったのは不思議だが、ここで考えていても何もならない。そう感じた千冬は三人に話しかけた。

「三人とも、分からない事を考えてもしょうがない。今日は一夏の誕生日だ。今は楽しむとしよう。」

「そうですね。」

「たくっ！リボンズや沙藤美哉にも逃げられるし、散々だぜ！。」

仕方なく家の中に入り、リビングに行くとそこは既に結構な人数で埋まっていた。

「おわ！結構な数だな。」

「凄いね・・・」

キラとユウイチが驚いているとシャルロットとセシリアとラクスが駆けよって来た。

「二人とも遅いですわ！。」

「そうですわ！もう一夏さんにプレゼントを渡し終えた所でしてよ。」

「そうそう！二人もなんか持ってきたんでしょ？」

言われなくても二人はちゃんと持ってきている。なにせ、前のショッピングに一夏には秘密で買ったのだから。

「もちろんだ。」

「所で、セシリア大丈夫？結構ひどかったらしいけど。」

ラウラ、セシリア、楯無の三人はかなりの重症だったと聞いていたキラは心配していたのだが、見る限りいつもと変わらない、そればかりかいつもよりピンピンしている気がする。

「大丈夫ですわ！ネクスト粒子の再生治療のおかげで完全復活ですわ！」

確かに腕や首や足を見る限り傷一つもない様だ。ネクスト技術の賜物である。

「良かった・・・ゴメン、守ってあげれなくて。」

「大丈夫ですわ、まさかあのタイミングで開戦されるとは誰も思っていませんでしたし。」

確かに誰も予想はしていなかった。しかし、キラは新しい力を手

に入れたにも関わらず恋人を傷つけられた事が本当に腹立たしく思っているのだ。

「よぉ、二人共、やっと来たな。」

今回のパーティーの主役、織斑一夏がやって来た。しかも両手はプレゼントで塞がっている。見たところ・・・ティーセット二つに、腕時計、ナイフＥｔｃ．。

「それナイフ？誰だ、そんなもんあげた奴？」

「まぁ、大抵予想はつくけどね。」

そう言ってラウラをチラッと見るキラ。それを見たユウイチも納得した様な顔になる。

「それで、二人が持ってきたプレゼントって？」

どうやらシャルロットはプレゼントが気になるらしく二人を急かす。急かされた二人は包み紙を開けて中身を差し出した。

「はい、一夏誕生日おめでとう。」

キラが差し出したのは高そうな大きな皿だった。それを見た一夏は目を輝かす。

「おお！イギリスの貴族御用達の高級皿だ！」

「へぇ～！結構高かったんじゃない？」

イギリスの代表候補生なだけあってシャルロットも知っているようだ。

「俺はこれかな。」

ユウイチが出したのは大小と様々な大きさがある包丁セットだった。しかも同じく高そうである。

「こっちもすげぇ～、貴族専用のダイヤモンド包丁だ！」

確かに高かった。二つに合わせて〇〇万である。ところで二人は一体いつそれだけの金を手に入れているのだろう。政府からの支給金だけでは足りない気がする。

「ありがとな、二人とも。大切にするよ。」

そう言って一夏は大量のプレゼントを置きにいった。一夏を見送ったユウイチは千冬、束、真耶、ムウに盃に付き合わされキラはラクスとシャルロットとセシリアと周りは騒がしいが静かな時間を過ごした。そしてしばらくしてからの事。ロックオンがキラ達の所へとやって来た。

「よぉ！噂に聞いてはいたけどホントに付き合ってるんだな。」

ハーレム状態のキラを見たロックオンは羨ましそうに呟きながら水を飲み込んだ。しばらく五人で話しているとラクスが唐突に口を開いた。

「ところでロックオンさん。一つ質問があるんですの。」

「なんだ?言ってみろよ。」

「あの青い機体のパイロットとはお知り合いで?」

「っ!!」

やはりラクスも見ていたのだ。『ガッデス』のパイロット、アニューとのやり取りを。

「とても浅いご関係ではなさそうでしたけど・・・」

「ああ、恋人だったよ。」

そう言って彼は語りだした。最初は彼女はソレスタルビーイングのサポートとしてロックオンの元へとやって来たのだが、戦いの中で二人は恋に落ち、互いを愛し合う程の関係になったと。しかし彼女がイノベイドだった為にリボンズの策略で彼女は敵対関係となり、ロックオンもアニューを取り戻そうと頑張ったが結果的にアニューは命を散らしてしまったと・・・。

「敵対しても最後はちゃんと分かり合えた。だから今度こそあいつを・・・」

「大体の事情はわかったよ。僕達も協力するから、彼女を取り戻そう!」

キラやラクスもC.Eの世界で似たような経験がある。だからこそロックオンの気持ちが分かるのだろう。分かり合えたのに失ってしまったあの瞬間の気持ちを。

「でも、どうやって・・・」

「任せて、僕に考えがある。」

そう言ったキラの目は自信に満ち溢れている。何か策があるのだろう。因みに事情を知らないセシリアとシャルロットは訳が分からずオロオロとしていた。

一方、一夏は皆のジュースを買うために近くの自動販売機でジュースを買っていた所だった。

（こんなもんか。さて、戻ろう。）

一夏が歩きだした所で彼は人影を見つけた。自販機の明かりが届かないギリギリの所にいる人影、それがこっちにゆっくりと歩いてくる。自販機の明かり入り、その顔が照らしだされる。

「え・・・」

人影は少女だった。しかもその顔は一夏のよく知る人物に似ている。

「ち、千冬姉・・・？」

歳は１５、６ぐらいだが、その顔は異常に千冬に似ている。

「いや、私はお前だ、織斑一夏。」

「な、何・・・？」

一歩一歩、近づいてくる少女。

「私の名前は織斑マドカだ。」

あまりの事に身動きがとれない一夏にその手に持っていたハンドガンを向ける。

「私が私たるために・・・お前の命をもらう」

「くっ・・・」

だが、その銃の引き金が引かれる事はなかったら。なぜなら自動販売機の後ろから何者かが現れ、マドカを柔道の様なもので地面に叩き伏せたのだ。

「ユウイチ!?どうして!!」

「いや、念のためについてきてたんだ。情勢が情勢だからな・・・それにしても来てよかったぜ。どういうつもりだ?亡国機業。」

「亡国機業!?」

まさか、今は味方である筈の亡国機業の人間に襲われるとは考えてもいなかった一夏は豆鉄砲を食らった鳩のような顔になる。

「貴様・・・ユウイチ・S・レイブン!」

どうやらまだ戦う気のようでその目に闘志をたぎらせていた。

「止めておけ。だが、どうしても戦いたいんならCQCで勝負だ。

前に伝説の傭兵も言ってたぞ『接近戦は銃よりもCQCだ！』ってな。」

「くっ！！」

二人が睨みあっていると後ろから『シュヴァルツェア・レーゲン』を身に纏ったラウラがやって来た。

「一夏！大丈夫か？」

「ラウラ！何で！？」

「いや・・・それは・・・」

ラウラが現れた事で完全に不利と考えた織斑マドカは静かにその身を闇の中へと消えていった。

「まっ！待て！」

「ラウラ、やめろ！追撃はしなくていい。」

ラウラを止めながらユウイチは地面に腰を落としている一夏を引っ張りあげた。

「帰るぞ。遅いと心配されるしな。」

「おっ、おう。」

「仕方ない・・・」

しかし、一夏は姉と同じ顔を持っていた織斑マドカが気になってパーティーには一向に集中できなかった。

戦いが終わって（後書き）

次回はアニュー奪還作戦（仮）です。

アニュー&

アニュー&ルイス・リターン

一夏の誕生日パーティーから数日後、キラ達は太平洋の無人島群で、作戦の準備をしていた。

「じゃあ、一夏と箒は準備ができたら指定の場所で待機しててね。」

「おう！」

「分かった。」

そう言って二人は何処かへと飛び立っていった。

「キラ！このロックオン先生の恋人奪還作戦て大丈夫なの？。」

流石に二度目の実戦はかなり不安なのか鈴が落ち着かない様子で尋ねてきた。

「大丈夫だよ。敵部隊は僕とユウイチとムウさんと織斑先生で引き付けるから鈴達は後ろから援護を任せるよ。」

「ふ、ふん！私の『甲龍』は接近がメインだけど仕方ないわ。任せなさいよ！」

そう言いながら鈴は思いっきり右手を振り上げる。すると、後ろにちょうどユウイチがいて、彼の顎に拳がクリンヒットした。

「いてっ！気をつけろよ！」

「あっ！ゴメン・・・」

どうやらユウイチは作戦の準備が全員完了したと報告に来たようだ。

「キラ！全員準備完了したぜ。」

「分かった。じゃあ、全員配置につかせて。アロウズがもうそろそろ来るからね。」

「あいよ。」

それを聞いたユウイチは後ろでＩＳを展開して待っているラクス達に合図を送ると皆は素早く森の中へと姿を消していった。

「じゃあ、鈴、ユウイチ。僕達も。」

「分かったわ。」

「ＯＫ！」

三人も急いで浜辺の近くの茂みに隠れる。しばらくしてから鈴が唐突に口を開いた。

「ねぇ、二人共。信用できる？この情報？」

鈴が言っているのはユウイチが仕入れてきた情報で、アロウズの

部隊が今日、この地点を通過するというのだ。

「大丈夫だ！アロウズの情報に関してはあいつを置いて他にない。」

もちろん、その情報屋はあのリジェネ・レジェッタである。

「しかし、キラはすげぇ～よなぁ～！」

「えっ？何が？」

「何がって、前の誕生日パーティーの時にロックオンに任せろって言って、直ぐにここまでこぎ着けたんだろ？」

「まぁ、苦労はしたけどね。」

まず、理事長の許可をもらい、メンバー集め、武器の調達、情報収集とこの数日は苦労した様だ。因みにメンバーはキラ、ラクス、ユウイチ、ムウ、ロックオン、千冬、真耶、一夏、箒、鈴、シャルロット、ラウラ、簪、楯無である。

「それにしても、あの更識姉妹は仲が回復したんだって？」

「そうみたいだね。」

どうやら、企業連との戦いを境に仲が回復したようだ。一夏の誕生日パーティーやこの数日はよく二人が会話しているのが視界の隅にチラホラと見えていた。

「怪我の何とかってやつね。」

「んだんだ！」

「ユウイチ、なんで方言？」

三人が楽しく会話していると千冬から通信が入る。どうやら敵が来たようだ。

『三人共、３時の方角から敵部隊を確認したぞ。』

言われて三人は右の方角を見る。確かに『ジンクス』や『アヘッド』を引き連れた『ガッデス』と『レグナント』が飛行していた。三人は直ぐ様ハイパーセンサーで数を確かめる。

「『ジンクス』と『アヘッド』を合わして二十機近くか・・・」

「あの数なら僕とユウイチのハイマットフルバーストで一掃できるね。」

「じゃあ、それそろ始めるか・・・」

そう言いながらユウイチは他の待機チームに通信を入れる。

「こちらユウイチ、作戦を決行する。先ずは島の所々に配置してある固定兵器で先手を掛ける。その後は俺とキラで雑魚を一掃するから皆は『レグナント』の注意を引いてくれ。ロックオン、恋人は任したぞ。」

『オーライ！任せとけ！』

「じゃあ！作戦開始！」

キラが叫んだ瞬間、ユウイチは固定兵器のスイッチを入れる。その瞬間、固定ミサイル発射装着と固定重機関銃が火を吹いた。

「よし！全員行くぞ！」

キラ達は島から飛び立つと突然の攻撃で混乱しているアロウズ部隊に襲い掛かった。

「なっ！」

「あれは、ＩＳ学園の！」

キラとユウイチは『アヘッド』と『ジンクス』をマルチロックし、トリガーを引く。

「「当たれぇぇぇぇ！！」」

二機のハイマットフルバーストは恐るべき数の光りを放ち、全てが命中した。

「あれはガンダム・・・」

「あの数を一瞬で！」

いきなりの奇襲をうけて浮き足たっているときの二機の攻撃を受けて『ジンクス』と『アヘッド』は全滅、これでは明らかに不利だ。

「ハレヴィ准尉！これでは不利です。撤退を！」

「了解しました。」

二機が撤退しようと動いた瞬間、『ケルディムガンダム』が立ちはだかる。

「今回は逃がさねぇぞ。アニュー！」

「ライル！」

突然の事で動揺したアニューだったが直ぐに落ち着くと『ファング』を放ち牽制を掛ける。

「前にも言った筈よ！私はイノベイド、貴方は人間！所詮は相容れない存在よ！」

「違う！お前がイノベイドだろうが何だろうがアニューはアニューだ！お前は俺が愛した女、アニュー・リターナーだ！」

「言っても分からない様ね。なら！」

すると待機していた『ファング』が一斉にロックオンに襲い掛かった。

「くっ！アニュー・・・」

一方、ルイスは緑色のＧＮ粒子を放つガンダムを見た瞬間、その華奢な体を怒りで震わしていた。

「あれは！ＣＢ！」

怒りを力に変えて『ケルディムガンダム』に狂気をぶつけようと動いた瞬間、何処からかマシンガンの弾が飛来した。

「なっ！！」

弾が飛んできた方向を見ると、こちらにアサルトライフルを構えている『ラファール・リヴァイヴカスタム？』を身に纏ったシャルロットがいた。しかもその後方にＩＳを展開しているラクス達がじっとこちらを見つめている。

「君の相手は僕達だよ。」

「このっ！」

刹那、空に舞う天使達は凄い勢いで交錯した。

「順調だな。キラ・・・」

「そうですね。ムウさん。」

だが、キラはこれが何か仕組まれた様な感じがして落ち着かなかった。キラはもっと敵の数は多いと予想をしていたのだがユウイチとキラの攻撃であっという間に全滅できる程の数しかいない。するとここでキラはある考えに辿り着く。

「まさかっ！」

「っ！キラ！来るぞ！」

何故かムウが突然叫びながら『アカツキ』を捻らせる。直後、大量のビームが駆け抜けていった。

「っ！」

「おい！ムウ！キラ！大丈夫か？」

「やっぱり読まれていた・・・」

キラの視線の向こうには大量のアロウズ部隊と『リボーンズガンダム』と『ネクスト・プロヴィデンス』がこちらの向かって進軍していた。

「やはり、アニュー・リターナーを取り戻そうと動いたね。ロックオン・ストラトス。」

そう、全ては仕組まれていた事だった。わざとユウイチの情報提供者であるリジェネに情報を掴ませてアニュー達をこの場所に向かわせたのだ。全てはキラとラクスを手に入れる為のエサとして。

「あちらにロックオン・ストラトスがいるのなら必ず動くと思ったけど、こうも簡単に食い付くとはね。」

「どうやら、ムウもいるらしいな。なら、彼等に任せるとするか。」

そう言ったクルーゼの前にはかつて、アーモリー・ワンで強奪されたあの三機の発展型が飛んでいた。

「あれはアロウズ！まさか」

ロックオンもアロウズの部隊を確認した様でその意図に気付く。

「そう、全ては作戦だったのよ。貴方達を倒す為のね。」

注意が削がれたロックオンに数基の『ファング』が襲い掛かり爆発した。

「ぐあっ！」

頭部の左目部分と右肩部分にヒットし、その装甲が破壊される。

「くそっ！」

牽制の為に『ＧＮビームピストル?』を連射するがどうしても当たらない。

「まさか手加減をしてるつもり?」

「くそっ！」

一方、ルイスはラクスの説得に翻弄されていた。

「もう一度考えてください。今、ご自分が撃とうとしているものを・・・」

そう言われてルイスは考える。今、自分が撃とうとしている者は両親を殺したガンダム・・・ＣＢを助ける憎き敵。今の彼女にはそうとしか考えられなかった。

「お前達が平和を乱す。死ねぇぇぇぇ」

苦しむ様にエグナーウィップを射出するがラクスに到達する前に千冬が束によって改良された『雪片参型』で斬り落とす。

「なんで・・・」

一方、ムウはアロウズ部隊の中に『ガイア』、『アビス』、『カオス』の発展型がいるのに気付いて驚愕していた。

「『ガイア』・・・まさか！ステラか！」

思わず通信を入れたムウの耳に予想もしない声が響く。

「誰だ、お前は？・・・」

「なっ！」

確かにパイロットはかつて自分と共に戦ったステラ・ルーシェだった。たが、彼女は彼を知らない様だ。

「どういう事だ？」

ふと、ムウの頭の中にクルーゼの顔が浮かび上がる。

「まさか、あいつが！」

そんな事は無いと頭を振った瞬間、その答えが聞こえて来た。

「ステラ・・・それが恐いものだ。分かってるね？」

「うん、分かってる。恐いものは全部倒す。ラウは私が守る・・・」

その直後、ステラはムウへの攻撃を強めた。今、彼女はクルーゼによってかつての記憶を消され、新しい記憶が植え付けられ、その記憶が彼女を支配していた。勿論、アウルやスティングも同様である。

「貴様ぁぁぁぁっ!!」

ムウは『ガイア』の発展型『アース・ガイア』の攻撃を防ぎながらキラと戦っているクルーゼに叫ぶがクルーゼは笑い声を上げるばかりだった。

「貴方はなんて事を・・・」

キラはムウやシンからステラの事を聞いていたので彼女の事は知っていた。生まれもそして自分が殺めてしまった事も。

「やっぱり貴方だけは!」

キラは必ずこの男だけは殺さねばならないと固く心に誓った。わざわざステラ達を生き返らせ、再び兵器として扱うこの男だけは。

「貴方は必ず殺します!」

「ほう?殺れるかね?トランザム!!」

次の瞬間、『プロヴィデンス』が赤く光り視界から消えた。なん

とクルーゼはネクスト粒子版のトランザムを『プロヴィデンス』に実装したのだ。

「くっ！エンジェルシステム！！」

『フリーダム』が黄金色に光り、超高濃度圧縮されたネクスト粒子が翼へと集まって、翼を物理翼からエネルギー翼へと変えていく。

「逃がさない！」

同じにＳＥＥＤを発現させ、赤く光る機体を追った。

「こりぁ、アカンな。」

「勝機はあるの？」

ユウイチはというと楯無と背中合わせでユウイチがリボンズ、楯無は『アヘッド』を抑えていた。

「そこまでだよ。」

リボンズがビームサーベルで斬りかかる。ユウイチも対艦刀で応戦しようとしたが下から「エンド・カラミティ」が援護射撃を放ってくる。

「おわ！危なっ！」

見たところ残りの二機はこの戦場にはいない様だ。

「ふっ！余計な事を・・・」

ユウイチにリボンズが放った『フィン・ファング』が襲いかかりユウイチは超絶テクニックでそれらを避ける。

「そろそろかな・・・」

一方、キラはさっきからクルーゼを追いながら頻りに時間を気にしていた。その時間というのがこの作戦のタイムなのだが。

「よし！箒、一夏！今だ！」

叫びながらアニューとロックオンを見る。すると二人が戦っている上空の下に島があるのだが、そこから紅い閃光と白い閃光が飛び出した。

「何！？」

皆も驚いてその閃光に注目すると、閃光の正体はどうやら『白式』と『紅椿』のようだ。

「一体、何を！？」

ロックオンの攻撃でアニューが動きを止めている隙に『紅椿』を身に纏った箒が彼女の後ろに移動してアニューを羽交い攻めで拘束する。

「一夏！今だ！」

「おうっ！」

直後、『白式』を身に纏った一夏がアニューの目の前に舞い降りて来て。そして、『ガッデス』の胸部にあるものを押し当てた。

「これはまさか！」

「そうだぜアニュー、一夏が今お前に押し当てているのは亡国機業が持っていた剥離剤（リムーバー）だ。」

「なっ！」

逃れようと機体を動かすが剥離剤（リムーバー）によって固定されて動けない。

「我慢しろよ。」

直後、彼女に電流の様なエネルギーが流され、やがて解放された。

「そんな・・・」

一夏の手には『ガッデス』のコアが握られている。これで彼女は無力になった事になる。

「そんな・・・」

「悪いけど眠っててくれ。」

「え！？」

意図が分からず顔を上げた彼女に一夏が催眠スプレーを吹き掛ける。

「よっしゃ！ミッションコンプリートだぜ！」

「先生。貴方が彼女を運んであげてください。」

箒からアニューを手渡されたロックオンは安堵した表情で箒を見つめた。

「まさか、彼女を奪われるとは・・・」

それを見たリボンズは意外という表情でユウイチを睨み付ける。するとユウイチの表情は意外にも笑っていた。

「へへ、これだけじゃないぜ！織斑先生、たのんます！」

リボンズは驚いて『レグナント』と交戦している千冬達を見た。

「全機！援護しろ！」

「了解ですわっ！！」

「了解！」

セシリアや鈴達が援護射撃をしてその中を舞う様に『暮桜・真極』を動かす千冬。その姿は現役時と全く変わってはいなかった。

「クライン！エネミーゲイザーだ！やつの動きを止めろ！」

「分かりましたわ！」

彼女から広範囲に渡ってエネミーゲイザーが放たれる。その中の

数発が『レグナント』に当たり、動きを止めた。

「織斑先生！今です。」

「はぁぁぁぁ！！」

千冬は『レグナント』の胸部までくると隠し持っていた剥離剤（リムーバー）を押し当てる。

「まさか！？」

「お前にも来てもらうぞ。」

直後、剥離剤（リムーバー）が『レグナント』のコアを剥がす。

「この！」

「まぁ、寝てろ！」

怒りの表情をしているルイスの顔にアニュー同様、催眠スプレーを吹き掛けた。

「おっと！」

落ちそうになったルイスを寸前で受け止めるとセシリア達に指示を送る。

「作戦完了だ！全員直ちにこの領域から撤退する。」

「「「「了解！」」」」

そう言って彼女達は急いでブースターを吹かし撤退を始める。すると一機の『アヘッド』が追撃してきた。

「准尉は渡さん！」

『アヘッド』はビームを撃ちながら迫ってくるがセシリアが放ったレーザーに直撃、海に落下していった。

一方、ユウイチ達も退却しようとブースターを吹かすがリボンズ達がソレを許さない。

「逃げられるとでも思ってるのかい？」

「思ってるさ・・・」

直後、無数のミサイルがリボンズ達に飛来する。

「今度は一体・・・！」

リボンズが振り返るとなんと企業軍がコチラに攻撃してきていたのだ。

「企業軍・・・いつの間に。」

再び視線を戻すとユウイチ達は水平線の彼方に消えていた。

「どうやら僕達の負けの様だね。」

そう言ったリボンズの顔には悔しそうな表情がはっきりと浮かん

でいた。

一方、キラ達は２０ｋｍの地点で作戦成功の喜びを噛み締めていた。

「いや～、作戦成功だな。まさか、企業軍をけしかけるとは恐れ入ったぜ。」

「まぁ、リボンズ達をキングギドラと例えたら、企業連をぶつけたほうが言いかなって。」

「企業連はゴジラってか？」

キラにしては珍しい例えにムウが意外そうな表情になる。

「それにしても皆、良く頑張ったな。」

「そうですね。この作戦は皆がいないと成功しませんでしたよ。」

そう言ってキラは嬉しそうな表情で一夏達を見る。その時の一夏達の顔は、最初にＩＳ学園に来たときに見た時とは皆違う顔をしている。それがキラには堪らなく嬉しかった。

「とにかく今は帰りましょう。」

「そうだな。」

この先、色んな事があるだろう。しかし今は今回の作戦、アニューとルイス奪取作戦成功の喜びを胸に一同は今の自分達の家であるＩＳ学園を目指した。

アニュー&ルイス・リターン（後書き）

次回はまだ未定です。

新しい転校生（前書き）

更新です。

新しい転校生

今、キラとユウイチはＩＳ学園の懲罰室に向かっていた。何故ならばそこに昨日リボンズ達から奪取したあの二人がいるからだ。

「ねぇ、今日のあの二人はどうなの？」

「昨日から同じさ。下手に刺激しない方がいいな。」

懲罰室にはユウイチと千冬が連れていったのだが、途中でルイス・ハレヴィに抵抗されて結構手間取ったらしい。

「ああ、そういえばルイス・ハレヴィなんだが、どうやら昨日の抵抗はどうやら細胞異常が原因らしい。その為の薬も持ってたぜ。」

「細胞異常？」

「詳しい事はこれを見てくれ。」

そう言って彼はルイスの身体検査結果を渡してくる。それによるとルイスの左腕はどうやら義手である事と細胞異常の原因は擬似ＧＮ粒子が原因ということだった。

「擬似ＧＮ粒子ってアロウズの？」

「いや、今回奪取した『レグナント』と『ガッデス』のデータベースによるとどうやら初期の擬似ＧＮ粒子らしい。で、アロウズの

擬似ＧＮ粒子はいくらか改良されて毒性はないようだ。」

因みに前に改修した『ジンクス』と『アヘッド』のデータベースには記されていなかった。

「良かった・・・」

「だが安心できねぇぞ。リボンズ達の中にアリー・アル・サーシェスっていたろ?あいつが乗ってる『アルケーガンダム』は初期の擬似ＧＮ粒子が搭載されているらしい。」

ユウイチは更に詳しく調べていた。擬似ＧＮ粒子は『スローネ』と呼ばれる三機に初めて搭載され、武力介入に投入された結果、多大な戦果を上げているという事や３０機あまりの『ジンクス』が連邦軍に渡り『スローネ』及びロックオン達のＣＢを苦しめた事などが判明した。

「とにかく、ルイスにはネクスト粒子を注射して細胞異常の進行を止めているから、今の所は安心だ。」

「なるほど・・・」

だが、残っている問題はまだある。ロックオンの話によるとアニューは前にリボンズから脳量思波的介入を受けて暴走したのだと言う。だとすれば、またいつ何時リボンズからの脳量思波的介入を受けて暴走するか分かったものでは無い。

「脳量思波はどうするの?」

「それは既に解決済みだ。」

それを聞いたキラは昨日の夜、ユウイチと束が何か作っていたのを思い出した。

「なら、いいけど。」

「あとをロックオンの事も少し調べさせてもらったぜ。」

「ロックオンも？」

ユウイチによると今のロックオンは二代目で先代は彼の兄が務めていたという事や彼の前の世界の反連邦組織『カタロン』のメンバーだったという事もわかった。

「本名、ライル・ディランディ。兄は初代ロックオン・ストラトス、本名はニール・ディランディ。二人は幼い頃にテロで両親を亡くし、それが原因で兄はＣＢに入り、最初の武力介入の時に彼が死亡した事でライルがスカウトされたんだってさ。」

「よく調べたね。」

「ハッキングできるのはお前だけじゃねぇって事だ。」

本当は殆どは束がやったのだが彼は言わなかった。

その後、色々と話しているといつの間にか懲罰室の近くまで来ていた。すると前から真耶が歩いてくる。どうやら朝ご飯を届けた様だ。

「おはようございます。先生。」

「うぃっす。」

「おはようございます。二人に会いに行くんですか？」

二人は同時に頷く。すると真耶は心配そうな顔で呟いた。

「あの二人、昨日から何にも食べてないんです。大丈夫かしら？」

「まぁ、こっちに心を開いてくれないかぎり仕方ありませんよ。」

確かにキラの言う通り敵地で何かを食べようとしても喉を通らないだろう。

「じゃあ、また後で。」

「はい、分かりました。」

「教室でね。」

挨拶が済むと真耶は乳を揺らしながら去っていってしまった。するとキラはずっと真耶の後ろ姿を見つめているユウイチに気が付いた。

「何時まで先生の胸を見てるの？」

「えっ？仕方ないだろ。見とれちまうもんは見とれちまうんだから。それともあれか？お前はマリュー艦長の巨乳じゃなきゃ見とれないのか？」

「はいはい。そんな事言ってるとムウさんに怒られるよ。」

そんなこんなで二人はようやく懲罰室に辿り着いた。まずはユウイチがノックし、二人は入って行く。

「失礼するぜ。」

キラとユウイチが入るとアニューとルイスは警戒を込めた眼差しで二人を見詰める。

「なんの用ですか？」

「今日はある提案をしに来たんだ。」

「提案？」

提案と聞いた瞬間、二人は何を馬鹿な事をと言った感じでそっぽを向く。

「仲間にならない？そうすればお互いの事が分かる気がするけど。」

その瞬間、ルイスが叫んだ。

「誰が貴方達の仲間になどっ！私達は貴方達の敵です。そして今は捕虜、捕虜には相応の態度で接したらどうです？」

するとユウイチが身を乗り出してきた。

「いいだろう。欲しいのはリボンズ達の情報だ。拷問して聞き出

すとしよう。」

「ユウイチ！拷問は駄目だよ！そんな事の為に連れて来たんじゃないよ！」

「わかってるって！とにかくキラは出てってくれ。」

ユウイチは急いでキラを懲罰室の外に出すと二人に向き直った。

「拷問しても無駄ですよ。絶対に喋りませんから。」

「ほう、それは楽しみだ。」

そう言ってユウイチがポケットから取り出したのは鞭・・・じゃなくて二つの腕時計だった。

「お前等にはこれを付けてもらう。」

ユウイチは嬉しそうに二人に腕時計を付ける。しかも彼の顔は何処かニヤニヤしている。因みにこの腕時計は昨日の夜に束と一緒に作った物だ。

「実はこの腕時計は脳量思波遮断装置だ。これでリボンズからの介入も受けないし。居場所も分からない。しかも、ＧＰＳ付きで俺達には居場所が分かるからな。」

「こんなもので私達を捕まえておけるとでも?」

「ああ、俺はスパルタだからな。その腕時計には超小型のＣ４が内蔵されている。逃げようとしたり、外そうとしたり、変な事をし

ようとすればドカンだぜ。」

「卑怯なっ・・・」

二人は怒りの籠った瞳でユウイチを睨み付けるが逆に彼はソレを楽しむ様に見詰め返す。

「良い目だ。そうこなくちゃな。」

その時、ユウイチの瞳が妖しく蒼白く光るのを二人は見逃さなかった。

「防水加工だから濡れても平気だから。シャワーの時も安心して入れるぜ。」

そう言いながらユウイチは持っていた紙袋をガサゴソと弄る。そして二人にある物を渡す。

「これは何？」

アニューが聞くとユウイチは自信たっぷりに言った。

「この学園の制服だ！今日からお前等は俺達のクラスメイトだぜ！」

「なっ！？」

「そんなっ！！」

明らかに動揺する二人を置いてユウイチは部屋を出て行こうとする。

「もう入学手続きは済ましてある。今日からだから遅刻すんなよ。」

ガッハッハッと笑いながらユウイチは出ていく。後に残された二人はどうしていいか分からず数分間フリーズしてしまった。

そして朝のＳＨＲ、彼女達は黒板の前に立たされていた。

「ええ、今日から皆さんと一緒に勉強する事になったハレヴィさんとリターナーさんです！」

パチパチパチパチィと手を叩く真耶、何故かは知らないがとっても嬉しそうだった。無論、他の生徒達も興味津々である。

「じゃあ、リターナーさんから自己紹介を。」

そう言われてアニューはゆっくりと前に出る。

「アニュー・リターナーです。まだ、分からない事だらけですがよろしくお願いします。」

次の瞬間、女子達が騒がしくなる。まぁ、当然だろう。この時期に転校とは珍しいのだから。

「じゃあ、次はハレヴィさん。」

「ルイス・ハレヴィです。よろしくお願いします。」

再び騒がしくなるクラスに千冬が一喝した。

「静かにしろ！少しは黙ってられんのか？」

静かになった所で真耶が説明を開始する。

「お二人はスペインの代表候補生で、専用機持ちですが。困った事があったら皆さん助けてあげてくださいね。」

は～いと息の合った返事をする女子達、戦いだったら見事なコンビネーションだろうに。

「じゃあ、お二人とも左列の一番後ろに座ってください。」

「「分かりました。」」

そう言って二人は自分達の席に移動する。それを見ていた一夏がキラに訊ねる。

「なぁ、あの二人、キラ達が説得したんだろ？どうやって説得したんだ。」

「まぁ、いろいろと。」

「なんだよ！教えろよ。」

そう言って笑うキラに詰め寄ろうとした一夏に千冬の出席簿が飛んできて、見事にクリンヒット。

「ぐあっ！！」

「進歩が無い奴だな。あとで特別実習をしてやる。」

「はい・・・。」

項垂れる一夏。笑うクラスメイト達。ルイスとアニューの二人が加わったが、一年一組は今日も賑やかに授業を始めるのだった。

新しい転校生（後書き）

次回はどうしよう・・・。

番外編　一夏達のＩＳスーツ大改造！（前書き）

番外編です。

番外編　一夏達のＩＳスーツ大改造！

ある日の事、ＩＳの実戦演習の時に一夏がこんな事を言ってきた。

「なぁ、前々から思ってたんだけどキラ達のＩＳスーツってやっぱり何処か特別なのか？」

確かにキラ達のＩＳスーツは前の世界のパイロットスーツを束が改良してくれたものだ。アニューとルイスのも同じく美哉が改良してくれたらしい。

「別に特別というわけじゃないよ。オーブのパイロットスーツを改良しただけだから。」

実はキラはザフトの白服の地位にいるがオーブの軍人としても登録されている為、パイロットスーツはオーブのを使っていたのだ。因みにユウイチもオーブのを使っている。彼曰く、ザフトのヘルメットは枝豆みたいだから嫌という事。

「じゃあ、ムウ先生のもオーブの？。」

「ああ、そうだ。」

今度はアニュー達のＩＳスーツが気になった様でそっちに視線を泳がせる。

「私達二人のはアロウズのを改良したものです。」

「へぇ～。」

二人が入学してから数日がたったのだがアニューとルイスは少しずつだが心を開き始めていた。それはそうだろう、あれだけキャラの濃い女子達に一日中喋りかけられていたら心でも何でも開かなければ精神的に疲れてしまう。

「じゃあ、ロックオン先生のは？」

そう言ってセシリアの偏向射撃『フレキシブル』の指導をしていたロックオンを呼び止めた。

「俺か？俺は前にいた組織のパイロットスーツを改良したやつだな。」

「組織？」

どうやらロックオンはＣＢの事は一夏達には話していないようだ。

「前々からいいなと思ってたんだよな。着やすそうだし。俺のは着にくいんだよ。」

すると、羨ましがる一夏にラクスがある提案を持ちかけた。

「でしたら、キラとユウイチがお作りになって差し上げたら？」

「え！？」

するとそれを聞いたセシリア達が駆けよってくる。

「それは本当ですの！？

「キラが作ってくれるの！？」

「面白そうね。」

「えっ、ちょっと待って！ラクス？」

ラクスの無茶振りに動揺するキラとユウイチ。確かに1からまた作るのはいささか骨が折れるというものだ。

「大丈夫ですわ。束さんに手伝って貰えば。」

「そうですわ。篠ノ之博士に手伝って貰えば楽勝ですわ。」

「えと・・・お前等？」

「そうですね。あの篠ノ之博士がいれば。」

「マジで？」

震える二人を無視して全員声を揃えて無慈悲に笑い掛けてきた。

「「「「「よろしくね！！」」」」」

「「はい・・・」」

かくして二人の大変なＩＳスーツの制作日々が始まったのである。

そしてその日の夜。二人はアニューとルイスを連れてユウイチの部屋でＩＳスーツの制作に取りかかった。

「なんで私達まで・・・」

「しょうがないだろ。俺達二人でＩＳスーツを作れなんて言っても何時できるか分かったものじゃない。」

「言い出しっぺのラクスはもう寝ちゃってるしね。」

仕方なくユウイチの部屋に入る四人。するとそこにはコーラやビールの缶が散乱していた。

「ユウイチ・・・片付けようよ。」

「なっはっはっ。勘弁。」

仕方なく四人は缶を全て片付けて作業を開始した。

「よし、先ずはノーマルタイプのＩＳスーツをベースに改良を加えようか。」

「あいこらえっさっさ～♪」

妙チクリンな掛け声を上げるユウイチにルイスが思わず声を掛ける。

「あなた、実はギャグキャラ？」

「ちげぇよ。」

なにもともあれ四人は作業を開始した。

「ルイス、そこはこうゆう風に・・・」

「ユウイチ。ビールは飲まないでください。」

一応、一夏達の希望としてはオーブのパイロットスーツみたいにしてくれたら嬉しいとの事だった。

「肌に密着させてドライ効果を上げるか・・・」

「こんな機能もいれたらいいかと。」

追加させる能力はドライ効果、保湿、生存率、脱ぎやすさだ。

「上下に分けた方が脱ぎやすいのかな。」

「それだとドライ効果が下がります。」

「じゃあ・・・」

そして時計の針が一時を過ぎた頃、一夏達がやって来た。

「よう！どんな感じ？」

「夜食を持って来ましたわ。」

「結構できてるじゃない。」

「流石だな。」

「これが私のか？」

ラクス達が持ってきたのは大小様々なおにぎりだった。

「なんだこりゃ？」

ユウイチはまず特大のおにぎりを手にして口に放り込む。

「あっ！ユウイチ、それは・・・」

何故かそれを見たシャルロットが青ざめるが次の瞬間、その理由が分かる。

「うぎゃぁぁぁ！！なんだこれ！？中身は生クリームとキムチか？作ったのはセシリアだな。」

「そうですわ！本を見て作ったのですが色が少し足りなくて。」

「その本持ってこ～い！！」

ギャーギャーと騒いでいる内に束も来て、遂に時間は3時を過ぎていた。

「うげ～、束さん、疲れたよ～キッ君～。」

確かに皆疲れて寝てしまったようだ。

「後、少しですよ。」

「ふぁい。」

と言いながらも次の瞬間には寝ってしまっていた。

「あれ？束さん？」

何度も揺さぶってみるが動かない。

「まぁいいか。鈴のスーツを縫えば完成するし。」

確かに他のＩＳスーツは完成している。

「よし！完成！」

腕の部分を縫ってようやく完成したようだ。

「お疲れ様ですわ。」

すると寝ていたと思っていたラクスが声をかけていた。

「あれ、寝てたんじゃないの？」

そう言いながらベットに座りながらラクスを抱き寄せるキラ。寄り添う二人は夜空に浮かぶ月を見る。

「綺麗ですわね。」

「そうだね。」

二人は前にもオーブでこんな風に月を見ていた。

「どの世界でも空と月は同じですわね。」

「違うのは僕達人間だけだね。」

「でも、愛があるという事だけは同じだよ。」

突然シャルロットとセシリアが起き上がってくる。

「ラクスさんだけ良い思いはさせませんわ。」

「じゃあ四人で月を見よう。」

「うん。」

「わたくし、キラさんの隣が良いですわ。」

その後も四人でしばらく静かに月を見続けていた。

そしてその日の放課後の事、一同は完成したＩＳスーツの具合を見ていた。

「調子はどう？」

「なんか締め付けられている感じがする。」

「我慢して。それはドライ効果があるから寒い所でも大丈夫なようになってるんだから。」

因みに皆、オーブのパイロットスーツをＩＳスーツにしたような感じで色は一夏が白、箒は赤、鈴がピンク、ラウラが黒、セシリアが青、シャルロットがオレンジである。

「ところで所々に青く光っている線みたいのがあるけどこれは何なの？」

鈴の言うとおり青く光っている線がある。するとキラは自信たっぷりに答えた。

「それは僕の『アブソリュートフリーダム』にも搭載されているネクストフレーム。それのおかげで前より速くＩＳを動かす事ができるはずだよ。」

「なるほど。良いじゃない！」

他にもさっきのドライ効果と同じくスーツと肌を密着させる事で出血した時の止血効果など特典は様々だ。

「じゃあ、先ずはＩＳを展開した後の具合を見ようぜ。」

ロックオンが言うと皆でＩＳを展開、飛び立っていった。

「凄いね、ＩＳの反応が速い。」

「本当に自分一体化した感じだな。」

結果は中々の様で、皆次々とターゲットを撃破していく。

「うん！これで完成かな。」

「まさか一日で完成させるとはやりますね。」

驚いているアニューにムウは微笑みかける。

「まぁ、キラだから出来た様なもんだからな。」

またキラの伝説に１ページが加えられた。これから、彼の伝説にあと何ページ加えられるかは誰にも分からない。それのおかげで前より速くＩＳを動かす事ができるはずだよ。」

「なるほど。良いじゃない！」

他にもさっきのドライ効果と同じくスーツと肌を密着させる事で出血した時の止血効果など特典は様々だ。

「じゃあ、先ずはＩＳを展開した後の具合を見ようぜ。」

ロックオンが言うと皆でＩＳを展開、飛び立っていった。

「凄いね、ＩＳの反応が速い。」

「本当に自分一体化した感じだな。」

結果は中々の様で、皆次々とターゲットを撃破していく。

「うん！これで完成かな。」

「まさか一日で完成させるとはやりますね。」

驚いているアニューにムウは微笑みかける。

「まぁ、キラだから出来た様なもんだからな。」

またキラの伝説に1ページが加えられた。この後、彼の伝説にあと何ページ加えられるかは誰にも分からない。

番外編　一夏達のＩＳスーツ大改造！（後書き）

正直、ＩＳスーツがどの様に作られるか分かりません。

インフィニット・ストライプス（前書き）

遅れましたが更新です。

一夏達の新しいＩＳスーツを作った次の日の一時間目に一夏がある事に気付いた。

「あれ、ユウイチは？」

「そう言えば居ないね。」

そう、ユウイチが居ないのだ。風邪を引いた訳でもないのに。そしてその疑問は千冬によって解消された。

「あ～、その事なんだが。レイブンは昨日の深夜からコスタリカに向かった。」

「コスタリカ？南米の？」

そこまで言ったキラはある一つの考えが浮かんだ。コスタリカは今、企業軍と国家軍の激戦区になっている。そこにユウイチが行っているという事は。

「まさか・・・」

「ああ、そのまさかだ。国家の依頼で軍の支援に行っている。」

するとクラス中から大ブーイングが巻き起こった。

「軍の支援て事は、戦争しに行ったんですか！？」

「なんで言ってくれなかったんですの！！」

「そうだぞ！千冬ねぇ！」

まさか大ブーイングが起こるとは思ってはいなかったのか、少し驚いた表情になる千冬だった。

「静かにしろ！レイブンの頼みなんだ。お前等には言うなとな。」

「でも、一言ぐらい仰ってくれれば。」

心配するラクスに真耶が優しく微笑み掛けた。

「大丈夫ですよ。情報によると彼の活躍で戦線は国家軍に傾いたようですから。」

たった一晩で戦局を変えるとは一体どんな暴れ方をしたのか不思議である。すると真耶が黒板に深夜にやったニュースを映し出した。

「これは深夜に放送したニュースです。」

どうやらコスタリカの激戦区の続報らしい。

『ええ、只今入って来た情報によりますと、ＩＳ学園から増援が送られたとの事です！！』

画面の向こうではリポーターが戦場の中で隠れるように様子を実況していた。

『今の戦況は非常に絶望的です！コスタリカの主要都市の最終絶対防衛ラインまで企業軍が侵攻して来ました！』

確かに戦況を伝えている間にも後ろでは国家軍のＩＳが次々と倒されていく。まぁ、絶対防御のおかげでパイロットは大丈夫なのだが。

『最終防衛ラインまで後・・・キャア！？』

すると何処からともなく耳をつんざくような炸裂音がしたかと思うと上空から重武装に身を固めた白い翼の鋼鉄天使が舞い降りる。その鋼鉄天使の名は『ストレイド』

「あっ！ユウイチだ。」

「なんか装備違くない？」

確かにニュースに映っている『ストレイド』は所々に追加装甲を付けて、両手にはビームライフルの代わりにガトリングが握られていた。しかも、対艦刀『エクスカリバー』が収められている所には『エクスカリバー』ではなく両手のガトリングの弾丸格納マガジンが取り付けられていた。

『あっ、あれはＩＳ学園の『ストレイド』！』

リポーターが驚いていると『ストレイド』は敵の海にダイブ。直後、ガトリングを振り回し敵を片っ端から吹き飛ばしていく。

『これは凄いです！近くにいる私達にも何がなんだか！』

そこまでは聞き取れたのだか後の実況はユウイチのガトリングの銃声によって全く聞き取れなかった。

「とまぁ、こんな感じでレイブン君は無事ですよ。では、授業を再開しま～す。」

画面を消した真耶は珍しく授業を再開させた。

その後、二時間目の後の休み時間に珍しい客が来た。

「やっほ～！織斑君、ヤマト君、篠ノ之さん、クラインさん。」

なんと久しぶりの二年の黛薫子だった。

「あれ、どうしたんですか？」

「実は五人に頼みがって、おや？レイブン君は？」

ユウイチがいないのに気付いた薫子がキョロキョロとする。

「彼は今、用事があって不在ですの。」

「そうなんだ～、残念。」

しょんぼりする薫子。だが、直ぐに立ち直って四人に向き直る。

「実は四人に頼みがあって来たの。私の姉って出版社で働いてるんだけど、専用機持ちとして四人に独占インタビューさせてくれないかな？あ、因みにこれが雑誌ね。」

そう言って薫子が取り出したのはティーンエイジャー向けのモデル雑誌だった。

「この雑誌ＩＳとは関係なくないですか？」

「ん？あれ？四人ってこういう仕事初めて？」

「はぁ」

なんとなく要点を理解していたラクスとキラ以外の一夏と箒が曖昧に頷く。

「えっとね、専用機持ちって普通は国家代表かその候補生のどちらだから、タレント的なこともするのよ。国家公認アイドルっていうか、主にモデルだけど。あ、国によっては俳優業とかもするみたいだけど。」

「そうなのか？キラ。」

「そうみたいだね。別に僕はやっても良いけど。」

「わたくしもキラがいいと言うなら良いですわ。」

と言っても二人はＣ．Ｅでは超絶有名人でテレビや雑誌には引っ張りだこだったのだから大丈夫だろう。実質、ラクスはプラントの歌姫と呼ばれていたのだから、尚更だ。

「本当？ありがとう～。」

そう言って嬉しそうに二人の手を握る薫子は二人にホテルのパンフレットを渡した。

「じゃん！この豪華一流ホテルのディナー招待券が報酬よ。もちろん、ペアで」

それを聞いた箒が物凄いスピードで薫子に迫り、手を握る。

「受けましょう。」

「えっ！？」

「え、ホントに？篠ノ之さん、こういうのイヤかなーって思ってたのに」

「いえ、何事にも経験ですので」

「そっかぁ、じゃあ決まりね。織斑君もそれでいいよね？じゃあ、明後日の日曜日に取材だから、このお昼の二時までに来てね。」

颯爽と去っていく後ろ姿はとても眩しかった。

そして、日付は指定された日曜日になり四人は編集部にいた。

「どうも、私は雑誌『インフィニット・ストライプス』の副編集長をやっている黛渚子よ。今日はよろしく」

「どうも」

「どうもですわ。」

「織斑一夏です」

「篠ノ之箒です。」

取材の為に通された部屋は結構広く、トマトを半分切り取ったかのようなソファが三つ三角形状に並んでいた。

「え～と、それじゃあ先にインタビューから始めましょうか。その後は写真撮影ね」

そう言ってペン型のＩＣレコーダーをくるりんと回して見せる。

因みに渚子はツートーン・チェックのスーツ姿、タイトスカートから伸びた脚がスラッとしていてカッコイイ。

「それじゃあ、最初の質問いいかしら?織斑くん、ヤマトくん。女子校に入学した感想は?」

「いきなりそれですか・・・」

「だってぇ、気になるじゃない。読者アンケートでも君達への特集リクエスト、すっごく多いのよ。ほんと、この場にレイブン君が居ないのが残念。」

そう言ってしょんぼりする。

「でも、あえて言うなら・・・目のやり場に困ります。」

すると渚子は一瞬でキラに飛び付く。

「へぇ、意外ね。妹の話だと彼女が三人も居るって聞いてたからあんまりそういうのは大丈夫だと思ってたわ。」

ニヤニヤしている渚子の視線はラクスに移動して、再びキラに戻った。

「じゃあ、次は織斑君。」

「え～と・・・使えるトイレが少なくて困ります。」

「ぷっ！あは、あははは！妹の言ってたこと、本当なのね！異性に興味のないハーレム・キングって！」

ハーレム・キング、汝は織斑一夏。渚子は項垂れる一夏を微笑みながら一瞥した後、今度は箒とラクスに向き直った。

「ふふ、じゃあ次はクラインさんと篠ノ之さん。篠ノ之博士の話を」

ガタッと立ち上がる箒。やはり束の話はタブーの様だ。

「ディナー券あげないわよ？」

「うっ！」

すとん、とソファにかけなおす箒。

「いい子ね。素直な子って大好きよ。それで二人は篠ノ之博士から専用機を貰った感想は？どこかの国家代表候補生になる気はないの？日本は嫌い？」

「『紅椿』は、感謝しています。今のところ、代表候補生に興味はありません。勧誘は多いですが。日本は、まあ、生まれ育った国ですから、嫌いではないですけれど」

「わたくしも箒さんと同じですわ。『姫桜』をくださって感謝しています。代表候補生は時期が時期ですし・・・今の所は。日本は大好きですわ。奥があって、歴史も深くていいですわ。」

確かにラクスの言う通り、今は国家解体戦争の真っ最中である。だが、こんな時だからこそ代表候補生が必要ではないだろうか。まあ、それは人の解釈によるが。

「分かったわ。じゃあ、君達四人の中で一番強いのは誰？」

その瞬間、三人はハモりながら一人の名前を上げた。

「「「キラ！。」」」

「へぇ～、キラ君はそんなに強いの？」

すると一夏が誇らしげに説明をする。

「もちろん！あの千冬姉ぇでさえ勝てるか分からないって言ってるんですよ。」

「一夏、それは言い過ぎだよ。」

「千冬姉ぇって、あの千冬様よね？あの千冬様でさえ勝てるか分からないって凄いわね。」

「俺達の目標だな。キラは。」

それを聞いた瞬間、キラは恥ずかしくなりちょっとだけ顔を赤くする。因みにそれを見たラクスはキラに対する愛しさが更に倍増されて、とても堪らない気持ちになったそうだ。

「次は？」

「本当ならユウイチかな？」

「ああ、彼ならこの間のコスタリカのニュースに映ってたわね。確かに強かったわ。素人の私からでも分かる程に。」

言われて一夏は思い出す。２丁のガトリングだけで群がる敵を次々と倒していく彼はまさに一騎当千と言えるだろう。

「ユウイチもまた目標だ。でもこの場で言うならラクスだろう。」

それを聞いた薫子はビックリした様な顔で四人を見詰めた。

「嘘？クラインさんはそんなに強いの？」

確かに実力の順位を見るとシャルロットと同じかそれ以上である。まあ、薫子が驚くのは無理はない。他も同じだが、人形のような華奢な体をしているラクスの実力が戦場を三國志の呂布のごとき勢いで駆け巡るユウイチの一個下とは到底思えない。

「じゃあ、次は？」

「私です！」

「え？そうなの？」

確かに模擬戦の勝率は箒の方が上回っている。

「あー、それはマズイわね。女の子くらい守れないとヒーローにはなれないわよ！特に今は戦争中なんだから。」

ニヤニヤと微笑む渚子。一夏は照れ臭くて視線を逸らす。

「別にヒーローじゃなくて良いですよ・・・。俺は単なる一兵卒で」

「お、いいわね、その台詞。映画でも撮りましょうよ。」

指で作ったカメラに見立てて微笑む渚子の表情は、薫子さん同様物凄く生き生きとしていた。

「それじゃあ織斑隊長、戦場での心得をどうぞ」

「え、え～と」

ちらっと箒を見る一夏。そして赤くなりながらもこう告げた。

「仲間は俺が守る！」

「イエス！カッコイイわよ、男の子！」

はしゃぐ渚子はふと思い出したかの様に一夏に質問する。

「そういえば織斑君は生徒会に所属してるのよね？楯無ちゃん、イカすでしょ？」

「いやいや、普通に大変ですよ。ＩＳの特訓もあるのに、その上執行部の仕事で色々部活動に行ったりするんですから。」

するとキラは意外にも知らなかった様で驚きの声を上げた。

「あれ？一夏って、生徒会に入ってたんだ。知らなかった。」

「まぁ、色々とあって知らせてなかったからな。無理ないな。」

そんなこんなで時間が過ぎて行き、時間は遂にお楽しみ撮影会である。

「ぐえっ！？やっぱりキラってカッチョエ～。」

「そう？」

カジュアルスーツをカッコ良く着て、カッコイイアクセサリーをカッコ良く着けているキラに一夏はしばし見とれてしまった。

「一夏もカッコイイよ。だけどそろそろ行かないと二人に悪いよ。」

「おっ！そうだな。」

確かに少し遅れてしまっていた。二人は慌てて撮影ブースに入るとそこにはいつもとは違う箒とラクスがいた。

「二人とも可愛いね。」

キラはすんなりと言えたのだか一夏はいつもとは違う二人、時に箒に見とれていた。

（箒って化粧するとあんなに違うのか!?）

一夏が呆けている間にもキラとラクスは撮影を開始した。

「良いわね～。二人とも経験あるの？」

まず一枚目はキラがラクスにキスの瞬間のイメージだろうか、キラの左手はラクスのフリルのついたミニスカートの腰に右手はラクスの可愛く小さいアゴに添えられている。

「ぐっ!?やっぱりあの二人は上手いな。」

因みに箒もラクスと全く一緒なのだが色が違く、ラクスの方が露出度が高い。

「ほら!二人も混ざって!」

その後もキラとラクスは平気だったのだが一夏と箒にとっては中々、嬉し恥ずかしの写真を撮影し続けた。

「今日はありがとうね～。」

撮影も終わり、衣装の入った袋を下げて四人は編集部を出たのだが、外はすっかり夜になっていた。

「な、なんかあれだな。新鮮な体験だったな。」

まだ緊張しているのか、一夏の口調はたどたどしい。

「そうだな。これも一種の人生経験となるだろう。」

そんな他愛のない話をしながら地下鉄に下りた時、キラが唐突に口を開く。

「ごめん！これからラクスと用があるから二人で先に帰ってて。」

「用ってなんだ？」

頭の上に？を乗せている一夏にラクスが彼女にしては珍しくイタズラっぽい笑みを浮かべて答えを言った。

「これから二人っきりでデートですの？」

「うん！久しぶりのね。」

そう言って二人は寄り添いながら一夏達とは別の方向に歩いていく。その後ろ姿は誰もが見ても美しいと感じるだろう。

「久しぶりだね。二人っきりでデートって。」

「そうですわね。」

確かに近頃は色々とあってデートをしてる暇がなかったし。前のデートはセシリアとシャルロットがいた。

「楽しみだね。」

「ふふ、今日は寝かせませんわ。」

その時の微笑むラクスはとても美しく、いかなる宝石も地球の様々な美景も敵わないと思われる程だった。

インフィニット・ストライプス（後書き）

次回はキラとラクスオンリーにするつもりです。でも、少し蘭が出るかも。

Ｉ　Ｌｏｖｅ　ｙｏｕ（前書き）

期末試験に備えていたので大変遅くなりました。申し訳ありません。

I Love you

一夏達と別れたキラとラクスは二人で『レゾナンス』内のフランス料理店で夕食を取る事にした。

「ここのオススメは？」

「今ですと、この魚類のソテーでございます。」

キラの服装はいつもので、ラクスのは前にC．Eのコペルニクスで買った服を似せて作った服を着ていた。

「ねぇねぇ、あの男の子カッコ良くない～？」

「でも二人は付き合ってるっぽいよ？」

店内の客の視線は二人に釘付けである。確かに理由は分かる。キラとラクスはモデル顔負けの美形だ。キラは主に女性客、ラクスは男性客の視線を集めていた。

「なにか注目されてるね？」

「そうですわね。」

二人共慣れているのか、天然なのかは分からないが客達の視線を軽く受け流していた。

「お待たせ致しました。イカのソテーでございます。」

運ばれて来たのは珍しくも無いイカのソテーだった。しかし、そのソテーから香る匂いは然程しつこく無く、さっぱりとしていた。

「美味しそうですわね。」

「この匂いなんだろ?林檎かな?でもイカに林檎って・・・」

ナイフを入れるとイカとは思えない程柔らかくスンナリと切れた。

「柔らかい・・・何でででしょう?」

口に入れるとあのイカの独特な味では無く、微かに林檎の風味が広がるさっぱりと味が広がった。

「美味しいですわ~。」

「凄い・・・どうやってんだろ?」

すると近くにいた店員が歩み寄って来て、このイカのソテーについて説明をしてくれた。

「お客様、このイカのソテーはこの店自慢の林檎と共にじっくり煮込み、柔らかくしております。」

「林檎を煮込むんですか?」

普通、林檎を煮込んだら大変な事になりそうだが。

「当店のオリジナルの作法でございまして、詳しくは申し上げられません。」

「残念ですわ。でもこんな美味しいお料理を食べさせてもらってありがとうございますわ。」

「い、いえ・・・」

ラクスの笑顔を見た店員は何故か顔が赤くなった。

「で、ではごゆっくりどうぞ。」

顔を赤くした店員はそそくさと奥に戻っていってしまった。

「あらあら。」

その後、二人はイカのソテーを食べて林檎のジュースを飲んだ後、フランス料理店を出て行った。

「少しブラブラしてようか。」

「そうですわね。」

一夏にはデートとは言ったが、その場で思いついたものだから明確なプランなど用意してはいなかったのだ。

「じゃあ、服でも見に行く?」

「そうですわ!わたくし丁度欲しいお洋服がありまして。」

「はは・・・」

その瞬間、何故か知らないがキラは自分の財布の将来が心配になったという。

「さぁ、行きましょう。」

「ちょっ!?待って。」

キラは半場引きずられる様にラクスが目指す洋服店に向かった。

「キラ～、これなど如何でしょう?」

「うん、良いんじゃない?」

二人がその店に着くと彼女は直ぐにその目当ての服を見つけて買ったのだが、他の服もどうやら欲しくなってしまった様で気に入った服を見つけると試着室に入り、キラに披露していた。

「もう!キラったら、さっきと同じ事しか言ってませんわよ!」

「えっ!?そうかな?」

確かにキラの言う事は「良いんじゃない。」か「良いと思うよ。」だけである。彼としたら彼女が着たらなんでも似合っているという事なのだろうが、ラクスとしてはもっと違う意見が欲しいのだ。

「キラ・・・コペルニクスでも同じでしたわよね?」

「そうかな?」

次の瞬間、キラは何か殺気の様なものを感じ、直ぐに後ろを振り向いた。

「キラ、どうしましたの？」

「えっ！？イヤ、別に何でもないよ。」

（あれは確かに殺気だった。まさか、またリボンズが？それともリンクスか企業連？）

キラは軽くため息をついて、未だに服選びをしているラクスに声を掛けた。

「ラクス、そろそろ行こ。」

「あっ！？待ってくださいですわ。」

キラが荷物を持ち、店を出ていこうとするとラクスが小走りてキラに近寄り、腕を絡ませた。

「やっぱりいいですわね。」

「そうだね。」

因みにキラが感じた殺気の原因は二人の５０ｍ後ろで隠れている二人組だった。

「一夏さんから連絡を受けた時はもしやと思いましたが、二人っきりでデートとは・・・許せませんわ！」

「落ち着いてセシリア！そんなに殺気を出すとキラにバレちゃうよ！」

実はキラ達が編集部に向かう前に二人は一夏にキラとラクスの見張りを頼んでいたのだ。

「いいなぁ。あの二人、スッゴいお似合いって感じ。僕達も付き合ってるのに。」

「そうですわね。わたくし達も最初は出ていこうと思いましたけど、お二人の雰囲気に飲まれてこうやって・・・」

はぁ、と深いため息をつく二人。

「あっ、シャルロットさん！移動するみたいですわよ。」

家具の小物店で止まっていた二人だが、移動を開始してある地点で再び止まった。

「アクセサリーの店かな？」

「そうみたいですわね。」

看板の裏に隠れている女子二人組。他から見たらかなり怪しい。

「これ、凄くラクスに似合いそう。」

「そうですか？」

そう言ってキラが持ってきたのはハートのネックレスだった。彼女が着けるとこれまたお似合いで『姫桜』との相性も良い。

「ふふ、じゃあキラはこれですわね。」

そう言ってラクスが取ったのは蒼い花の形をしている指輪だった。花は百合だろうか。

「お似合いですわよ。」

「ありがとう。」

二人共、ニコニコである。そのせいか、二人の周囲がピンク色に染まっていた。

「ねぇ、そろそろ『レゾナンス』から出て違う所に行かない？」

「違う場所ですか？」

「うん。」

会計を済ませるとキラはラクスの手を取って歩き出した。そして『レゾナンス』から出て十分か二十分程でその目的地についた。

「ここは？」

そこは今は誰もいない住宅地の普通の公園だった。

「たまにはこういうありふれた場所も良いかなって思ったんだけど、駄目かな？」

「いえ、良いですわ。」

二人は公園のベンチに腰掛ける。日本の住宅地はオーブとは全く違く、戦時中なのに何故かＩＳ学園よりも平和を強く感じるような気がする風景だった。

「なんか平和を感じるよね。」

「そうですわね。」

微かに聴こえてくる食卓の笑い声。風に乗って匂ってくる夕飯の匂い。キラとラクスにとって戦争に身を投じてから初めての経験だった。

そしてしばらくして、何故かキラがいきなり立ち上がった。

「ゴメン！ちょっとトイレ。」

「もう！ムードが台無しですわよ。」

だが、この時ラクスは何故かもの凄く嬉しい気がしたのだという。そして、キラが公園の備え付けの公衆トイレに向かった直後、入れ違いである人物が公園に入ってきた。

「あなたは確か・・・蘭さん？」

「あっ！ラ、ラクスさん・・・」

駆け込んできた彼女の瞳は赤く、涙で濡れていた。

「どうしたのですか！？」

「いや、これは・・・ふぇ！？」

大粒の涙を流している彼女の顔をハンカチで拭いてあげるラクス。
いきなりの事だったので蘭もきょとんとしていた。

「話してくださいますか？」

「はい・・・」

しょんぼりしている蘭をベンチに座らせ、話を聞く体制をとる。

「実は・・・」

そう言って彼女は話し始めた。彼女によると実家である五反田食堂に一夏と箒が来て、一夏が蘭の目の前で注文した品を箒に食べさせ・・・つまりあ～んをして、それを見た蘭は二人は付き合ってると誤解して泣き出しながら五反田食堂を飛び出して来たとの事だ

「うぅ・・やっぱり一夏さんて箒さんと付き合ってたんだ。」

どうやら彼女は箒の事を知っていたらしい。

「私・・・うぶっ！？」

落ち込んでいる蘭をラクスがそっと抱き寄せる。

「辛かったですわね。」

その瞬間、再び蘭の瞳から涙が零れ落ち出した。

「泣いてもいいですわ。でも、本当にそれが真実だったのでしょうか？」

「え・・・？」

ラクスは蘭をまっすぐ見詰めながら話し始めた。そして、蘭はその瞳に吸い込まれそうになる。

「彼から聞いたのですか？箒さんと付き合ってると。」

蘭はラクスの胸の中で首を振る。だが、話の状況では誰もが付き合っていると誤解するものだが。

「一夏さんはとてもお優しい方ですわ。ですから一度はっきりとお話しされては如何でしょう？」

「はぁ・・・」

その時の彼女はかつてプラントを魅了した歌姫の顔をしていた。そして現に、今の蘭は彼女に魅了されている。

「もし、一夏さんが付き合ってると言ったら、わたくしを呼んでくださいな。」

「は、はい！」

すると丁度良く公園に一夏が入って来た。彼の顔は誰かに殴られた

のか腫れていた。

「はぁ、はぁ、ここにいたのか。あれ？なんでラクスがここに？」

「ふふ、偶然ですわ。」

「あのごめんなさい！私のせいで。」

「えっ！？何が？」

微妙に噛み合わない会話だが、一先ず置いておいて蘭はあの質問をしてみた。

「あの一夏さん、一夏さんて箒さんと付き合ってるんですか？」

すると一夏は呆気に取られた顔をする。

「えっ！？付き合ってないよ。」

次の瞬間、蘭の顔は笑顔と安心で満ち溢れる。

「本当ですか！？じゃあ、さっきのあれは？」

「さっきの？ああ、あれは箒にエビフライが美味いって教えたくって、それに箒からのは食べさせてやるって言われたから、断ったら悪いだろう？」

「そうだったんだ。良かったぁ。」

再び安心の一息を入れる蘭。

「とにかく家に戻ろうぜ？」

「は、はい！」

一際大きな声で返事をする蘭。そして二人が帰ろうとした時、蘭がラクスに話し掛けて来た。

「あの、ラクスさん。ありがとうございました。」

「どういたしましてですわ。」

そして二人が見えなくなると、キラが戻って来た。しかもその隣には何故かセシリアとシャルロットがいる。

「あらあら。」

「いや、偶然そこで二人に出会っちゃって。」

「そうそう偶然だよね。」

「偶然ですわ。」

何故かキラの顔がひきつっている。それを見たラクスは代々の事は予想がついたようだ。

「良いですわ。行きましょう」

そう言って歩き出す彼女の脚運びは軽やかで華麗だった。

「う、うん！行こう。シャル、セシリア。」

不思議に思いながらもラクスに着いていく三人。そして公園を出ると、ラクスはキラ達三人に向き直る。

「キラ、Ｉ　Ｌｏｖｅ　ｙｏｕですわ。」

時刻は夜、並んで歩く男女四人の頭上には満天の星空がいつまでも輝いていた。

Ｉ　Ｌｏｖｅ　ｙｏｕ（後書き）

次回は専用機タッグマッチにしようかなと・・・

過去と責任（前書き）

専用機持ちタッグマッチは次回にしました。

過去と責任

ＩＳ学園の理事長室、そこでコスタリカから帰還したユウイチは今回の戦闘についてを轡木十蔵に報告していた。

「今回は一応、防衛に成功したが企業連の特殊部隊『フライトナーズ』によってコスタリカはかなりの打撃を受けてしまった。また侵攻があったら完璧にコスタリカは駄目だろう。」

確かにあそこら一帯の国々は既に解体され始めている。再び侵攻があったらコスタリカは完全に落とされる事になる。

「そのフライトナーズとは？」

「フライトナーズとは・・・」

フライトナーズとは企業連のエリート部隊で、国家解体戦争が始まる前までは企業間の争いを鎮圧する為の独立治安維持部隊でもあった。そのメンバーは殆どが元レイヴンで構成されており、企業連が所有する部隊の中でネクスト機体を使っている部隊はフライトナーズのみである。

「まぁ、入隊して間もない奴は量産型機体『Ｍ－９』を与えられるがな。」

しかもフライトナーズの総隊長は元レイヴンアリーナのＮｏ．１ランカーだったと言われている。

「また厄介なのが現れましたね。リボンズ・アルマーク達もあの一件以来大人しくなった言うのに。」

そう言われてユウイチはルイスとアニューの二人を思い浮かべる。確かにあの二人を奪取してからリボンズ達の動きが全くと言っていいほど無いのだ。

「まさか奪還を計画しているなんて事は・・・」

「考えたく無いな。」

ただでさえ国家解体戦争で忙しいのリボンズ達にまた何かやられたら更に忙しくなってしまう。

「そう言えば、気になる情報があってな。」

「気になる情報ですか？」

するとユウイチはディスプレイを空中に浮かべて何か巨大な設計図の様な図面を出す。

「これなんだけど、企業軍が　何か新しい玩具を開発したらしい。これの名称は巨大兵器『アームズフォート（ＡＦ）』。しかもその全長は数ｋｍに及ぶらしい。」

流石の十蔵でもこの報告には声を荒げた。

「数ｋｍって、そんなの一体どうやって作るって言うんですか？」

「落ち着けって、情報によるとまだ一機だけらしい。それがこいつ、『ギガベース』だ。」

そう言って図面を指差すユウイチ。確かにこんなのが量産されたら国家側としてはたまったものではない。

「とにかく報告は以上だ。」

「分かりました。織斑先生やキラ君達にも報告しておいてください。」

ユウイチが外に出ると丁度よくそこに楯無とルイスが歩いてきた。

「お前等か。どうしたんだ。」

見ると楯無がルイスの腕に抱きついていて、ルイスは困った顔をしていた。つまりは楯無に何かしらの様があってルイスは強引に彼女に連れられて来たと言う事だろう。

「やぁ、無事に帰って来たんだね。」

「おう！ていうか、これからどっか行くのか？」

「何言ってんの？後少しで専用機持ちのタッグマッチがあるんだよ。キラ君に指導してもらわなきゃ。」

「ああそうか・・・」

すると楯無はユウイチをも引っ張ってアリーナの方へと歩きだす。そしてしばらくしてからルイスが唐突に話しかけてきた。

「あの、コスタリカの方はどうでした？」

「今回の防衛は成功したが、次は無理だな。」

「そうですか・・・」

悲しそうになるルイスにユウイチはそっと微笑みかけた。

「まっ、戦争に勝てば全て元通りだ。それまでの辛抱だな。」

ユウイチはルイスを元気付けようとしたのだが、何か気に入らない事があったらしく声を荒げて叫び始めた。

「貴方が沙藤美哉の言う通り、レイヴンアリーナに残っていればこんな事にはならなかったかも知れないのにっ！！なんでそんな笑っていられるんですかっ！！」

「お前・・・知ってたのか？」

実はユウイチがトップランカーの座から降りる時、美哉から止められていたのだ。だが、その時のユウイチはレイヴンを辞める事を決意していたのでそのまま辞めてしまったのだ。

「かもな・・・だが、そんなのは憶測だ。過去の事を考えてる暇があったら、今自分に出来る事をやる。それだけだ。」

「ユウイチ君・・・」

「確かにこの戦争をあの時に止められたかもしれない。だが、過去

は過去だ。もうどうにもできない事なんだからな。」

「でも・・・」

食い下がらないルイスにユウイチは更に言い聞かせる。

「責任は取るさ。この戦争が終わったらな。」

ルイスは彼の瞳を見て、ようやく気付く。彼は彼なりに後悔して、そして過去とのけじめを着けようとしている事を。

「分かりました。でも、私は貴方を許した訳ではありませんから。」

「おうよ！」

彼の笑顔を見た瞬間、ルイスは思い出す。自分にこういう風に笑い掛けてくれて、自分を愛してくれた人の事を。

「沙慈・・・」

その時・・・ルイスの左手の指輪が太陽の光に当たって輝いた。

三人がアリーナに着くと何故かキラとラクス以外のいつものメンバーが倒れていた。

「どうしたんだ？」

「おっ！？帰って来たのか！」

立っているのはキラ、ラクス、ムウ、ロックオン、アニューだった。ユウイチが何故一夏達が倒れているのかと聞くとその質問にアニューが答える。

「それが一夏さん達全員でキラさんの相手をしようという事になったのですが案の定・・・」

「無理だよな。俺にだって勝てないんだから。」

ロックオンの言う通り一夏達はロックオンやムウは勿論、楯無にも勝てないのだ。それなのにキラに挑むとは自殺行為である。

「まぁ、みんな疲れて動けないだけだけどね。」

「確かに無謀ね。そんなことより聞いたわよキラ君！昨日、ラクスちゃん達と夜遅くに帰ってきたんだってねぇ。デート？デートだったの？お姉さんに教えなさい！」

「やっ！そんな事はいいじゃないですか！」

ピョーンとキラに抱きつく楯無は何処か満足そうである。

「はいはいお熱いね～。そんなキラは放っておいてと。俺達は訓練を続けるぞ～。」

そう言ってユウイチとロックオンとムウがＩＳを起動して倒れている一夏達の前に仁王立ちで立つ。

「もう勘弁して・・・」

この後も一夏達の地獄は続き、終わる頃には一夏達の誰もが爪先から指先まで全く動かせないほどグロッキーな状態だった。

「やれやれ大変だな。彼等は・・・」

遥か上空でそんな一夏達を見詰めているＩＳを身に纏った人影が二つ。正体はクルーゼとリボンズだった。

「呑気なもんだね。戦争中だと言うのに。」

「しょうがないさ。人は所詮、己の知る事しか知らぬ。」

かつてキラに否定された言葉をリボンズに言い聞かせるクルーゼ。確かに認めたくはないが彼の言っている事は紛れもない真実だった。

「そんな事よりどうしようか？あの二人。」

リボンズが考えるとクルーゼは逆に邪悪な笑みを浮かべる。

「アニュー・リターナーの事はそちらに任せるがルイス・ハレヴィの事はこちらに任せて貰おう。」

「考えがあるのかい？」

するとクルーゼはディスプレイを浮かべてリボンズにある映像を見せる。

「兵法の基本は相手の隙を突く事だ。リボンズ・アルマーク。」

「なるほど、いい考えだね。」

その映像には若い三人の男女とかつてロックオンの世界を乱したあの赤い三機のガンダムが映っていた。

「さて、こちらも駒を進ませて貰おうか、キラ・ヤマト。」

その時、クルーゼはリボンズがこれまで見た事の無いような顔をしていたのだった。

過去と責任（後書き）

今回は少し大人しめに書きました。

専用機持ちタッグマッチトーナメント（前書き）

タッグマッチトーナメントの戦いは分けて書こうと思います。

専用機持ちタッグマッチトーナメント

専用機持ちタッグマッチトーナメントの大会当日の早朝。キラはまだ半覚醒状態で布団の中にいた。

「ん・・・。」

時刻は6時半、珍しくラクスも隣で静かな寝息を立てていた。

「んむ・・・」

キラが寝返りを打ったとき、キラの手が何かに触れた。

「ん・・・？」

明らかに枕やシーツとは別の柔かさである。だが、その時のキラは寝ぼけていて、枕だと勘違いしてしまっていた。

「あん！」

「えっ！？」

キラとしては枕を抱き寄せた気でいたのだが女性の声と思われるそれを聞いた瞬間、彼の意識は微睡みの彼方から一気に現実に引き戻される。

「まっ、まさか！」

キラは急いでガバッと布団をめくる。とそこには楯無がいた。しかも下着姿で。

「楯無さん!?なっ、何でここに!?しかも下着で!」

どうやら楯無も寝ていた様で彼女も寝惚け眼である。

「にっしっし、ようやくキラ君のその顔が見れたのだ~。」

そう言いながらキラに抱き付く楯無。流石のキラもこれには焦りを隠せない。

「わぁ!ちょっ、離れてください!こんなところを誰かに見られでもしたら。」

「したらどうなるんですの?」

「大変な事に・・・」

そこまで言い掛けたキラはあることに気付く。実は今の声は前からではなく後ろから聞こえてきたのだ。

「え・・・」

「大変な事とは一体なんですの?」

キラはゆっくりと後ろを振り向く。するとそこにはスターライトMk.?の銃口をキラに向けているセシリアがいたのだった。

「セ、セシリアさん・・・。」

「おはようございますわ。」

彼女は顔は笑っているのに目が笑っていなかった。実はキラは色々と百戦錬磨だが、実はこの世界に来るまではラクス一筋だったので修羅場の経験がなく、この時の切り抜け方を知らなかった。

「い、いや、セシリアこれは！」

「問答無用ですわ！」

銃口に光が集まっていく。今のキラの頭の中では今までの記憶が走馬灯の様に流れていた。

（ああ、一夏かアスラン、もしくはディアッカならこの時どうすればいいかわかるんだろうな。）

そして遂に銃口からレーザーが発射された。が、そのレーザーがキラに直撃する事はなかったのだ。何故なら楯無がレーザーが発射される直前にスターライトＭｋ．？を蹴り上げた為、レーザーは天井に直撃したのである。

「今、キラ君を殺されると、お姉さん困っちゃうな～。それしてもキラ君も今のは避けられたでしょ？何で避けなかったの？」

（貴方のせいです！）

キラはそう思った後、セシリアに振り向いた。

「あのセシリア？」

「・・・・」

バンッ

「あっ！！」

なんとセシリアが無言で部屋を飛び出して言ってしまった。しかもその目には大粒の涙を浮かべて。

「セっ、セシリア！？」

「キラ君の焦り顔、可愛い～。」

キラが部屋を出ていった後、彼女はようやく彼のそう言う表情を見れたので満足そうに微笑むと再びキラのベッドに戻るのだった。因みにキラはこの後、セシリアに1日二人っきりでデート＆一緒の部屋で1日過ごすという条件で、ようやくその怒りを鎮めてもらったのだった。

それから数時間後、遂に専用機持ちタッグマッチトーナメントの開会式が幕を上げた。

「今日は専用機持ちのタッグマッチトーナメントですが、試合内容は生徒の皆さんにとって、とても勉強になると思います。しっかりと見ていてください。」

今、話している美しい声の持ち主は朝の騒動の元凶、更織楯無である。

「はぁ・・・」

キラがため息をつくとユウイチが話し掛けてきた。

「どうした？」

「いや、いろいろとね。」

あの後、部屋に帰るとラクスは少しご機嫌斜めで。ラクスの機嫌を直そうと努力していると千冬が来て、天井の穴について色々とお説教を聞かされたのだからたまったものではない。

「なんで僕だけ・・・」

そんなキラを見たユウイチは少し安心した様な表情になる。

「なんか、お前等変わったな。」

「え・・・？」

「だって、前のお前等は世界の平和の為にちょ～頑張ってたじゃん。とても十代には思えない程にな。でも、今のお前等は平凡な普通の高校生カップルに見えるぜ。」

ユウイチに言われてキラは思い出す。確かにキラは戦場を駆け巡ったり、部隊の指揮を執ってもいた。ラクスに至っては政治という戦場で平和の為に日夜戦いに明け暮れていたのだ。

「確かにね。あの頃に比べれば変わったのかもね。」

「いい顔してるぜ。」

だが次の瞬間、キラは表情を硬くしながら口を開く。

「でもねユウイチ、僕達は・・・」

しかし、女子達の大きな歓声によりユウイチはその後のキラの言葉を聞き取れなかった。

「なんだ?」

「どうしたんだろう?。」

二人が前を見ると楯無の後ろに巨大な空中投影型のディスプレイが映し出されていた。どうやらタッグマッチの対戦表らしい。

「あっ!第一試合は一夏達だ!」

確かにディスプレイには　第一試合　織斑一夏&更織簪ｖｓ篠ノ之箒&更織楯無と書かれている。

「うわぁ～、いきなり大本命だな。あいつ等。」

因みにメンバーのペアはこうである。　一夏&簪、シャルロット&ラウラ、セシリア&鈴、箒&楯無、ルイス&アニュー、ユウイチ&ラクスである。キラはというと強さが異常なのでハンデとして一人で戦う事になったのだ。勿論、ユウイチも色々とリミッターを掛けた状態だ。

「後で一夏に声でも掛けとこうか？」

「その前に管制室に行かないと。束ちゃんが呼んでたぜ？」

「束さんが？」

ずっと地下室に籠りっきりだった束が呼んでいるとは一体どうゆう風の吹き回しだろうと思ったキラは眉を細める。

「とにかく言ってみようぜ！」

そうして二人は駆け足でピッド内の管制室に向かった。

数分後、二人が管制室に入るとそこには既に千冬、真耶、ムウ、ロックオン、ルイス、アニュー、束、それと何故かナターシャがいた。

「あれ？なんでナターシャさんが？」

「見物に来たのよ。あの白いナイト君がどれ程のものになったか気になるじゃない？。」

「なるほど・・・」

キラが頷いているといきなり束が抱きついてきた。

「うわ！なんですか？」

すると他の人達には知られたくないような内容なのか彼女は二人

にひそひそ話を始めた。

「実はね～、箒ちゃんとラクスちゃんと『姫桜』それに『紅椿』のパーソナルデータが欲しいから、あるサプライズを用意させて貰ったよ！」

「どんなサプライズ？」

その瞬間、束の目が輝く。

「むっふっふっ、実は『ゴーレム？』五機をこっちに向かわせたんだよ！」

「「えええええええっ！」」

「だから五機が来たら二人は手を出さないでね。二人が相手だと鉄屑になっちゃうから。」

確かにこれからの事を考えると二人と二機のパーソナルデータは確かに必要だ。だが、前の『ゴーレム？』の発展型『ゴーレム？』を五機と戦わせるなんてやり過ぎじゃないだろうか。

「どうした？」

不振に思った千冬が声を掛けてくる。キラは呆れながら千冬にそれを報告した。

「織斑先生、実は・・・」

ドゴォォォォォン。

だが、その瞬間、爆発と思われる揺れが襲ってきた。

「な、なんだ!?」

「お出ましみたいだね。」

直後、管制室の画面に『非常事態警報発令』の文字が浮かぶ。

『全生徒は地下シェルターへ避難!繰り返す、全生徒は―きゃあああっ!?』

緊急放送をしていた先生の声が突然途切れる。続けて、また大きな衝撃が管制室を揺らした。

「この感覚、まさか!?」

「おっ、おい、ムウ!」

どうしてかは分からないが突然ムウが管制室を飛び出していく。

「一体、なんなんだ?おい!ムウ!」

ロックオンもいきなり飛び出していったムウの後を追って管制室を出ていってしまった。

「これはまさか、またお前か?」

「ぐぅ、痛いよ。ちーちゃん。」

どうやら直ぐに理由が分かったようで千冬は束を締め上げる。ところが、ユウイチがそれを遮った。

「二人共、止めろって！どうやらこの襲撃は『ゴーレム？』じゃないみたいだぞ！」

「えっ！！」

「何！？」

直ぐ様、真耶が画面にアリーナを映し出す。そして、そこに映し出されていたのは。

「あれは『ゴーレム？』じゃねぇ！あれは・・・。」

映っていたのは『リボーンズガンダム』と『ネクスト・プロヴィデンス』と三機の赤いガンダムだった。

専用機持ちタッグマッチトーナメント（後書き）

次回は一夏＆簪ＶＳスローネ

赤と悪の連撃（前書き）

やはり、一夏達の戦いは分けずにこの一話にまとめる事にしました。
スミマセン。

赤と悪の連撃

アラートが響く管制室の中でキラ達はモニターの画面を見つめていた。画面の中では一夏達が赤い機体三機とあの悪の三兵器と戦っている。

「おっと！見入ってる場合じゃない。俺達も加勢に行こうぜ！」

「ええ！」

確かに一夏達が戦っているのは赤い機体やエクステンデットの三機だけではなく、あのリボンズとクルーゼがいるのだ。ムウとロックオンが抑えているが念には念をだ。

「束さんはここで待っててください！」

「ほいきた！」

キラ達が管制室を出ていこうとしたその時、真耶が叫ぶ。

「待ってください！海の方角から正体不明機が多数こちらに接近しています！」

「なんだと！」

真耶が急いで画面に映像を映し出す。かなりの砂嵐が入った映像だが見ると確かに数機の編隊がこちらに飛行してきている。しかもそ

の機体が厄介な機体である事は直ぐに分かった。

「あれって、ナインボール？なんで・・・」

「ナインボール・・・」

ナインボールは企業連の機体であるのに敵対勢力であるリボンズ達の襲撃と共に来たのは不可解だ。

「リボンズ達の襲撃を利用したという訳か・・・。」

「なるほど。ん？山田先生、ナインボール達の後ろで飛行している機体は？」

さっきまでは正面からナインボール達を捉えていた為にその後ろに隠れていた機体が見えなかったのだ。しかしその機体はＩＳ学園が近くなるとナインボール達を易々と追い越してこちらに飛行してくる。見たところその機体は超高性能の戦闘機のようにも見える。しかし、その機体を見た瞬間、ユウイチが驚きの声を上げる。

「まじかよ！ありゃあ、『アナザー・セラフ』じゃんかよ！」

「えっ！ユウイチ知ってるの？あの機体の事を。」

「ああ！あの黒い機体は『アナザー・セラフ』。前に話した『ナインボール・セラフ』の量産型だ。しかし、量産型とはいえども、その性能はかつての『フリーダム』と同等だ。」

前の２２人のレイヴンの戦いの時にも今回の様に一機が投入されレイヴン達を苦しめたが、最後には破壊されたという記述が残って

いる。

「『ナインボール』三機と『アナザーセラフ』が一機か・・・」

「今、一夏達の戦闘に介入されたらあいつ等は終わりだ。」

「そうね。私達が倒すしか。」

「行くしかね～な。」

そう言ってキラ達四人は管制室に真耶と束を残し、『ナインボール』達の迎撃に向かった。

一方、一夏達は正直な所、苦戦を強いられていた。今回投入された三機の赤い機体はかなりの性能を誇っている。

「くそっ！なんでお前等は・・・」

現在の状況としては通信が出来ない状況にある。原因としては上空で例のＧＮ粒子を広域散布をしている機体が原因だろう。

「君は何故、私達の邪魔をする？」

おもむろに刃を交えている肩部に大型のランチャーを携えている赤い機体が直に話しかけてきた。

「なに！？」

「私達は戦争根絶の為に戦っている。それを邪魔するというのか！？」

その瞬間、今までリボンズ達のやってきた事を見ていた一夏は頭に血が登った。

「今まであんな事をしておいてそんな事っ！？」

赤い機体・・・『スローネ・アイン』とつばぜり合いに入ってた一夏は相手を蹴り飛ばす。

「それにしても・・・」

一夏は先程、戦いに乱入してきたルイスが気になった。親の仇と言いながら乱入してきた彼女の形相はまさに鬼の如しだった。

「一夏、危ない！」

シャルロットの叫びに気付いた一夏は彼女の方へと顔を向ける。だが、彼の目に入ったのは赤い熱線だった。

「あ・・・」

顔に直撃を受けた一夏は吹っ飛ばされ、アリーナの壁に激突して止まる。

「いてっ！？」

いくら操縦者保護システムがあるとは言え、痛みまでは消してはくれない。

「一夏！」

箒が心配そうに叫ぶが、彼女も太剣を持った赤い機体に苦戦している様だ。

「行けよ、ファング！」

赤い機体・・・『スローネ・ツヴァイ』がそう叫ぶと腰部の格納パーツからファング６基が飛び出す。

「くっ！」

二つの刀を駆使し、ファングを次々と落としていく。だが、落とす事に夢中になっていた彼女は本体が迫っている事に気付かなかった。

「こちとらガンダムなんだよ！」

「ぐあっ・・・！」

重量のある斬撃をくらい、地面に激突した彼女は苦しそうに喘いだ。

「箒・・・くそっ！」

一夏は立ち上がり戦闘に急いで参加する。大切な仲間を守る為に。

「くっ！案外やっかいね。」

一方、楯無、ルイス、簪、アニュー、鈴、セシリア、ラウラ、ラクスは『エンド・カラミティ』、『グリフォン・レイダー』、『デス・フォビドゥン』と戦闘をしていた。三機は見事な連携を見せ、数で勝っている楯無達を圧倒する。

「きゃあ！」

『エンド・カラミティ』の放った極太の熱線に肩を焼かれた簪が小さい悲鳴を上げる。

「簪ちゃん！」

助けようと動いた楯無に『グリフォン・レイダー』が襲いかかる。どうしても助けに行かせてはもらえないようだ。

「しつこい！」

ランスに付属しているガトリングで牽制をかけるが、あっさりと避けられ、逆に、『ミョルニル？』をくらうはめになってしまった。

「ぐっ！」

腹に鉄球を受け、意識が飛びそうになる。すると、ルイスが叫びながら『レグナント』で『グリフォン・レイダー』に襲いかかった。

「パパとママの敵討ちの邪魔を・・・するなぁ！！！」

両手の爪状のファングで『グリフォン・レイダー』を切り裂こうとする。だが、下から『エンド・カラミティ』が背面に搭載している四門のビーム砲で狙い撃ち、『レグナント』の腕を吹き飛ばした。

「きゃあ！このっ！」

「ルイスさん！」

アニューが助けようと飛んで来るが、『デス・フォビドゥン』がそれを邪魔をする。

「キラ君達は・・・なんで来てくれないの・・・？」

何気なく視線を横に移動するとこちらに駆け付けてくる鈴とセシリアがムウと戦っているクルーゼが放ったドラグーンの集中砲火を受けて墜落していくのが見えた。

「なんで・・・」

通信が使えない今、彼女はキラ達が助けに来てくれない事に軽いショックを受けていた。だが、仕方ない。彼女は知らないのだから、キラ達は『ナインボール』達と戦っている事を。

「楯無さん！」

ラクスの叫びを聞いて我にかえる。どうしたのかと聞こうとしたがその理由が直ぐに分かった。なんと、クルーゼ達が全員、上空の遥か高くに上昇したのだ。

「何だ！？」

「撤退か？」

ロックオンとムウもこちらに集まってくる。しかし、それがいけなかった。

「まさか！」

訳が分かった楯無は仲間達に声のでる限りに叫んだ。

「皆ぁぁ！！逃げてぇぇぇぇ！！！」

「何だ！？どうゆう事だ！」

「楯無さん、一体？」

訳が分からない一夏達は逆に集まって来てしまった。ルイスにいたってはクルーゼ達に突進を仕掛けている。

「終わりだね。君達も！」

ノイズ混じりのリボンズの声が聞こえて来たと思ったらクルーゼの『ネクスト・プロヴィデンス』から次々とドラグーンが射出され始めた。

「まさか・・・」

「正気なの？」

一夏達にもこれから何が起こるか分かった様で顔を青ざめさせた。その間にも『ネクスト・プロヴィデンス』からドラグーンが射出され続けている。全てのドラグーンが射出し終わるとネクスト粒子で複製して更にその数を増やし続ける。

「くそっ！お前等、あいつを止めるぞっ！」

ロックオンの合図で全員が空に上がり、クルーゼ達を目指す。ルイスはというとリボンズ達の弾幕で近づけない様だ。

「これが私の限界、受けて見ろ！」

クルーゼが射出したドラグーンは空を埋め突くし、一夏達をロックオンする。

「死ねぇぇぇ！！」

刹那、空が光る。

「ぐぁぁぁぁぁぁ！！！」

異常な数のビームの絨毯爆撃をくらい一夏達は悲鳴を上げるが、ビームの発射音と爆音でそれを聞いたものはいなかった。

「ふはははは！！！」

一夏達がアリーナに激突してもビームの絨毯爆撃は止む事を知らない。そしてそれが十分間続き、終わる頃にはアリーナは完全に崩壊していた。

「うっ・・・」

一夏達のＩＳはシールドエネルギーは０になり、立っているものは誰もいない。『アカツキ』のヤタノカガミも許容範囲を超えた威力の前に敗れてしまったようだ。

「へぇ？まだ生きていたとはね。」

クルーゼ達が降りてくる。確かにあれだけの攻撃を受けて、誰も死ななかったのは奇跡だろう。いや、絶体防御が凄いと言うべきか。

「まぁ、君達は動けないのだからこっちの用をすませて貰おうか。」

そう言ってクルーゼはドラグーンを二十基近く射出し、大出力ビームライフルと共にＩＳが解除されて気絶しているルイスに向け、他のＩＳ達もそれに習う様に銃口を向ける。

「くっ・・・ルイス。」

奇跡的にも一夏だけが気絶していなく、彼は這って彼女の所へと移動し、彼女を守る様に覆い被さった。

「ほう？まだ動けるとはな。いいだろう。キミもルイス・ハレヴィと共に送ってあげよう。」

クルーゼが関心しながら言うと引金を引いた。無論、リボンズ達もそれに習う。

「くっ！！」

無数のビームが一夏とルイスに襲いかかる。しかし、それは一夏とルイスに到達することはなかった。

「？・・・」

目を瞑ってしまっていた一夏は訳が分からず目を開ける。そして、そこにあったのはビームシールドで無数のビームを受け止めているストレイドを身に纏ったユウイチだった。

「ユウイチ！！！」

「ふい～、キラ達に『ナインボール』達を任せて、こっちに来て正解だったな。」

「ユウイチ・・・」

一夏が顔を上げてしっかり彼を見ると彼はいつもの様に笑っていた。

「大丈夫だ！もうすぐキラ達が来る。」

そう言って一夏を安心させようとする彼の機体は所々の装甲が溶解しはじめている。

「やめ・・・ユウイチ。」

「こんな所で、俺がリタイアとはな・・・」

「そんな事言うなよ・・・ユウイチ。」

「後は任せたぜ！」

次の瞬間、ユウイチの『ストレイド』が爆散する。いくら『ストレイド』とはいえ、クルーゼ達の大出力ビームの一斉射撃を受け止め

るのは無理だった様だ。

「あ・・あぁ・・・・」

蒼い粒子を撒き散らして爆散する『ストレイド』を一夏は瞬きすらしないで見詰め続ける。今の一夏にはそれしかできないのだから。

「ユウイチぃぃぃぃ!!!」

蒼い粒子が一夏の手に落ちて消える。それはまるで冷たい雪の様であった。

赤と悪の連撃（後書き）

次回はキラ達ＶＳナインボール隊

9との死闘と鴉の死（前書き）

更新です。

9との死闘と鴉の死

ＩＳ学園の戦闘で崩壊したアリーナで一夏は茫然自失となっていた。今まで一緒に戦って来たユウイチ・Ｓ・レイブンが自分を庇ったからである。

「先生！医療班を！早くっ！」

一夏の耳には千冬に怒鳴って医療班を呼ぼうとしているキラの声が遠くに聞こえる。

「ユウイチ！キミがこんな所で・・・」

クルーゼ達はキラ達が到着すると撤退してしまって追撃は無理だった。

「そんな・・・」

「まさかあのユウイチが・・・」

今、セシリア達が見ているユウイチの姿はあまりにも無惨だった。裂けた全身の皮膚からおびただしい量の血を吐き出し、地面に溜まっている。

大量のビームを受け止めた左手は消しとんで二の腕から先が消滅している状態だ。しばらくして医療班がきて色々と処置をしたが、駄目な様だ。

「キラ・・・」

「駄目だ・・・これじゃもう・・・」

キラはユウイチの心臓が動いていないのを確認した後、一夏達に通告した。

「皆、ユウイチはもう・・・」

「嘘だぁ！ユウイチが死ぬなんて事は！」

一夏は叫びながらキラの襟元を掴む。今の彼は現実を受け止める余裕がないのだろう。

「ユウイチはまだ・・・」

「一夏・・・」

食い下がらない一夏に千冬が容赦のない現実を突きつける。

「諦めろ。ユウイチは死んだんだ。」

「ＩＳには絶体防御があるんだろう？なのに何で？」

確かにＩＳには絶体防御と言われる保護機能がある筈なのに、何故にユウイチは死んだのだろう。

「詳しい事は分からん。後で結果は教える。今は休め。」

そう言って千冬は医療班にユウイチをタンカに乗せるよう命ずると、医療班とユウイチの死体と共に何処へと消えてしまった。

「キラ・・・。」

「ラクス・・・僕がユウイチを一人で行かせなければ！」

短い間だったが部下として、友人として隣にいてくれた男の死を悲しんでるキラに対して恋人達は優しく微笑み掛ける。

「ご自分を責めないでくださいな。」

「そうだよ。キラは何も悪くないよ！」

「悪いのはあのクルーゼ達ですわ！」

こんな時でも優しく自分を包み込んでくれる彼女達にキラは素直に感謝した。

「ありがとう。」

キラはふと上を見上げる。すると空は夕焼けに包まれていた。

「皆、一旦戻ろう。今日はもう・・・」

キラの提案に一同は頷き、寮にもどる事にした。しかし、正直な所、キラは寮に戻りたくなかった。その理由としては、クラスメイト達にユウイチの死をなんて報告すればいいか分からないからだ。

「一夏、どうした？」

アリーナから一歩も動かない一夏にラウラが尋ねる。すると一夏は涙声で応える。

「ゴメン、しばらく一人にしておいてくれ。」

「わかった。」

その後、数時間が経っても一夏はその場を動く事は無かったという。

そもそも、何故ユウイチがあの時に一人で一夏達を助けに行ったかと言うと、それはキラ達が管制室を出ていった所まで遡る。

「ナターシャ、大丈夫か?」

「ええ、勿論よ!」

管制室を出た後、四人は各々のＩＳを起動し身に纏って空に舞い上がる。因みにナターシャのＩＳはかつてキラ達が戦ったシルバリオ・ゴスペル。通称、福音である。本当は凍結されつづけると言うのが正式だが、国家解体戦争が勃発したために特例的に使用を許可されたのだ。

「二人共、来たよ!」

案外近くまで来ていたのかアリーナからちょっと進んだ所で、ナインボールは直ぐに肉眼で確認できた。

『ターゲット確認、排除開始。』

無機質な機械音声で喋った先頭のナインボールがコチラに右手のパルスライフルを連射してきた。

「散開！」

千冬の合図で三人はパッと散る。すると、ナインボール三機も同じ様に散る。

「ユウイチ！アナザー・セラフは？」

「はっ！キラ、上だ！」

キラは思わず上を見る。すると突然、太陽の中からアナザー・セラフが戦闘機状態のままでコチラに突っ込んできた。

「くっ！」

アナザー・セラフはキラの目の前にくると停止して、人型に変形する。

「っ！！」

『ターゲット確認！アブソリュートフリーダムと認定！排除開始。』

するとアナザー・セラフの両手が変形し、大型ブレード発生装置へと変わる。

「このっ！」

キラも大出力ビームサーベルを抜刀し、突っ込んでいく。吹き抜ける青い空の中で白い機体と黒い機体が激突した。

「はぁっ！！」

千冬はというと両手に『雪片参型』をもってナインボールに切り掛かる。ナインボールも左手に内蔵されているビームブレードを放出し、挑み掛かってきた。

「どれほどのものか試させて貰おう。」

そう言って千冬はまず、右脚と頭部に一撃を入れる。因みに頭部を狙ったのはナインボールのＡＩチップの判断力を失わせる為である。しかし、ナインボールはヒラリと交わし、背面の左側に装着されているグレネードランチャーを起動して派手な爆音を上げながら弾を放った。

「なるほど、かなりの威力だな。」

海に着弾し、派手な水飛沫とかなりの水蒸気をもあもあとあげる。かなりの威力なのだろう。するとそれを見たユウイチが叫んだ。

「気を付けろ！超高熱ナパームグレネード弾だ！直撃したら日焼けするだけじゃ済まされねぇぞ。」

ナパームグレネード弾は企業連が開発した新型のグレネード弾で着弾した時の温度は一千万℃以上になると言われている。Ｃ．Ｅで地球軍がＧシリーズにフェイズシフト装甲を搭載してからそう言っ

た実系の攻撃を無効化する装甲が増えた為にその対策として作られたのだ。

「厄介ね！」

そう言いながらナターシャは自分が今相手にしてるナインボールにシルバーベルを射掛ける。だが、ナインボールはとんぼ返りをして避けるとコチラにパルスライフルのパルス弾を連射してきた。しかもそのパルスライフルの連射力が異常である。通常、パルスライフルをどんなに強化しても一発撃ったら次弾の装填のタイムラグが発生してしまう。しかし、彼等が相手をしているナインボールのパルスライフルはそう言ったタイムラグが一切なく。まるでマシンガンの様に撃ってくるのだ。

「でも、負ける訳にはいかないわ。貴方に殺された仲間の為にも！」

彼女は斬りかかって来たナインボールを蹴り飛ばす。今の彼女の瞳には一切の迷いも恐怖も混じってはいなかった。

「へぇ、アンタ等もやるねぇ。」

ユウイチも負けじとナインボールの三機目と激しい撃ち合いをしていた。

「しかし、今となってはこいつにはもう対策があるんだよ！」

するとユウイチはクイックトリガー・・・もとい、クイックブーストを多用してナインボールを翻弄、後ろに回り込むとパルマフィオキーナを背中にお見舞いする。

『ダメージ率が８０％を超えました。格駆動系に異常あり。』

しかし、ナインボールは構わずユウイチに突っ込み至近距離でグレネード弾をお見舞いする。

「うおっ！」

「ユウイチっ！？」

もうもうとした煙の中から左腕に損傷を負ったストレイドが現れる。

「レイブン！大丈夫か？」

「ああ！左腕に損傷を負ったが大丈夫だろう。」

気を取り直して彼は再びエクスカリバーを持ってナインボールに挑む。ナインボールもかなりの損傷を受けているが構わずネクスト粒子を撒き散らして突っ込んできた。

「上等！」

ユウイチは突っ込んで来たナインボールの左脚を掴むと遠心力を使って投げ飛ばす。バランスを崩したナインボールは体制を立て直す為にブースターを吹かすがユウイチはそれを許さない。回転して落ちていくナインボールに一気に接近し、受け止めると先程開けた穴に手を突っ込み、コアを抉り出す。

「終わりだ！」

彼は片手でコアを握り潰すと一夏達が気になってアリーナを見る。すると空が光ったかの様な爆発と空中にいる筈なのに振動が感じられる程の揺れが起きた。

「マズイんじゃねぇか？」

ユウイチは残った二機のナインボールとアナザー・セラフをキラ達に任せてアリーナに向かった。

「ユウイチ？」

キラは戦線から離れていくユウイチを見て、一瞬不思議に思ったがその理由を直ぐに思い付く。

「なるほど！」

キラが納得しているとアナザー・セラフが飛行形態になり、コチラに猛スピードで飛行しながら背面の大きなブースターユニットからミサイルを連射してくる。

「そんな攻撃！」

雹の様に飛んでくるミサイルを射出したハイパードラグーンで作ったシールドで防ぐと爆発の煙の中を突っ切り、アナザー・セラフに接近する。

「あっ！」

しかし、相手も読んでいた様でビームブレードを構えた状態で待

っていた。

「このぉぉぉぉ！！」

キラはビームサーベルを左に横振りで振る。するとアナザー・セラフも同じ様にブレードを振ってきた。

「はぁぁぁっ！！」

激しい火花が散り、空を照らす。すると横からアナザー・セラフに何かがぶち当たり、アナザー・セラフが吹っ飛ばされる。

「なんだ！？」

横を見ると千冬とナターシャがコチラに飛んでくるのが見える。どうやら二人共、ナインボールを倒した様だ。その証拠に下にある港にナインボールが二機とも煙を上げながら踞まっていた。

「ヤマト！後はそいつだけだ！」

「はい！」

キラは大きな返事をした後、体制を立て直したアナザー・セラフに瞬時加速で接近すると凄まじい連撃をいれた。ただでさえ前のストライクフリーダムで、瞬時加速に入ると見えなくなったのにその強化版であるアブソリュートフリーダムが瞬時加速に入ったのだ。アナザー・セラフにはどう映っただろうか。

「うおおおおッッッ！！！！」

キラは叫びながら、右足、左手、右側のブースターユニット、頭部を弾き飛ばしていく。

「これでッ！！」

止めと言わんばかりにボロボロの胸部にサーベルを突き射れた。

『破損率が９０％を超えました。作戦行動不能。帰還行動不能・・・』

アナザー・セラフは最後の力と言わんばかりにアブソリュートフリーダムの肩部に触れて話しかけてきた。しかも今度は女性の機械音声ではなく、男性の機械音声だった。それに喋り方も機械の様ではなく人間の様である。

『キラ・ヤマト。今回もキミの勝ちだ。あの時の様に。』

「あの時の様に？」

『覚えていないか？キミは前に我々と出会っている。もっともＣ．Ｅでというわけではないが。』

「えっ！？」

『また会おう・・・』

その瞬間、アナザー・セラフが爆散した。近くにいたアブソリュートフリーダムは爆発の影響でシールドエネルギーが若干だが下がってしまった。

「前に出会っている・・・」

アナザー・セラフが言っていた事をキラは深く考える。前に出会っていると言ってもキラにその記憶はない。

「まさか・・・」

ふとキラはあることを思い出す。しかし、いきなり千冬に声を掛けられた事で忘れてしまった。

「キラ、マズイぞ！ストレイドのシグナルが消えた！」

「えっ！」

キラは焦りながらブースター全開で崩壊したアリーナを目指す。数十秒くらいでアリーナに辿り着くがキラの目に信じられないもの飛び込んできた。

「うそ・・・」

気絶しているルイスを庇っている一夏と、一夏に銃口を向けているクルーゼ達の間に血塗れで倒れているユウイチ。

「ユウイチぃぃぃ！！！。」

キラは急いでクルーゼ達に銃口を向けるとクルーゼ達は素早く反応し、牽制を掛けながら何処へと撤退していってしまった。

「くそっ！」

キラはユウイチの傍にフリーダムを降ろして、解除すると傍に駆け寄った。

「冗談だよね。」

ユウイチの首に手を当て生きているか確認する。しかし、完全に事切れていた。だが、キラは諦めない。続いて降りてきた千冬に怒鳴る。

「先生、医療班を早くっ！」

視界の隅に一夏が見えたが彼は茫然自失になっている様だった。

「キミがこんな所で・・・」

キラはあまりにも信じられない出来事のショックでこの後の事はあまり覚えていなくて、次に気付いたら恋人達の胸の中だった。

「ご自分をお責めにならないでくださいな。」

「そうだよ。キラは悪くないよ。」

「そうですわ！悪いのはクルーゼ達ですわ。」

「ありがとう・・・」

その後、三人に付き添われ、部屋に辿り着き、シャワーを浴びてベッドに横たわった。

「どうしよう。明日・・・」

「そうですわね。」

今日の出来事は千冬が事故として処理されると先程部屋に来た千冬が言っていた。クラスメイト達にはユウイチの死は明日に報告される様でもある。

「ユウイチ・・・」

しばらくしてドアがノックされる。ラクスがドアを開けるとシャルロットとセシリアがいた。

「どうしましたの？」

「えへへ。」

するとシャルロットがとてとてと部屋に入り、キラのベッドの布団の中に侵入してきた。

「シャル？」

布団の中からキラに抱き着いたシャルロットは僅かに肩を震わした。

「ゴメンね、少しだけこうさせて。」

「うん。」

セシリアも入ってきてキラは焦ったが彼女達が今どんな気持ちか

分かったので何も言わなかった。

「分かった。今日は一緒に寝ようか。」

「いいの！？」

「本当ですの？」

「勿論！」

一瞬で顔を明るくした二人は子猫の様にキラに抱き付く。

「ラクス、良かったらキミも。」

「はいですわ。」

ラクスも入ってきてベッドは少し窮屈だったがラクスのベッドをくっ付ける事でそれは解消した。

「三人共、電気消すよ。」

キラは電気を消して彼女達の間に入る。すると以外にも早く睡魔がやってきた。

「これからどうしよう・・・」

明日からユウイチがいない状況でリボンズ達や企業連と戦わなければいけなくなったのだ。それは圧倒的に不利な状況だ。そんな事を考えている間にキラは深い眠りに着いてしまった。

9との死闘と鴉の死（後書き）

次回は短めに書こうと思っています。

α－System（前書き）

ストレイド、進化の時。

α－System

キラ達四人が眠りに着いた同時刻、束が寝泊まりしているＩＳ学園の地下室で四人の男女が集まっていた。その者達の名は束、千冬、ロックオン、ムウである。

「左目の欠損、全身に裂傷、左手の欠損・・・」

千冬が部屋の中央に置かれている、青く光る水が入った水槽の中で浮いているユウイチの遺体を見ながらそう言った。

「しかし、此処まではユウイチの予想通りだな。」

「ああ。」

そう、ロックオンの言う通り、これまで全ての出来事はユウイチが既に予想していたのだ。

「束、ユウイチが言っていた物は出てきたか？」

「バッチリ出てきたよ。ゆう君が言っていた、ストレイドがかなりのダメージを受けると出現するっていうシステム。」

そう言って束は大型のディスプレイを出現させてあるものを見せた。

「これがα－Ｓｙｓｔｅｍ・・・」

「これか、ストレイドの１００％の力を引き出すっていうシステムは。」

画面には大文字のＡが浮かんでおり、その前にはα－Ｓｙｓｔｅｍ と書かれていた。

「うん、このα－Ｓｙｓｔｅｍは今のストレイドを真の姿へと導き、本当の力を引き出す為の・・・つまり、ストレイドを進化させる為のシステムだね。」

簡単に言うと今のストレイドは言わば幼体であり、このα－Ｓｙｓｔｅｍを使うと成体になると言う訳である。

「二次形態移行みたいなものか？」

「そうだね。でもそれとはまた別の感じもするけど。」

ディスプレイをカタカタと弄りながら首を捻る束。流石に彼女も別の世界のテクノロジーの事は分からない様だ。

「とにかく明日、キッ君に頼んで、このα－Ｓｙｓｔｅｍを作動させて見るよ。」

「大丈夫なのか？そのα－Ｓｙｓｔｅｍ。」

「たぶん・・・でも、前にゆう君が言ってたんだ。」

「ユウイチが？」

「α－Ｓｙｓｔｅｍはこの戦争に勝つ為の鍵だって。」

その時の彼女の顔はいつものおちゃらけた感じでは無く、真剣な顔だった。

「だが、キラ達がやってくれるのか？」

「う～ん、言ってみるしかないんじゃない？」

確かに、ここの事やα－Ｓｙｓｔｅｍの事など一切キラ達には伝えてはいないのだ。だからキラ達に一切の事情を説明せずにただやってくれと言われてやるだろうか。それも、死んだ友人の機体で。

「まぁ、とにかく今日はもう遅い。全ては明日にしよう。」

「了解。」

「ああ。」

そう言って三人は部屋から出ていった。そして残された束は部屋の奥の方に寝かされている三機の大破したナインボールに視線を送った。

「さて、ゆう君を生き返らせるついでに君達もこの束さんが生き返らせてあげよう！」

ニッと笑う束。彼女がこの笑みを浮かべる時は良からぬ事を考えている証拠である。

そして、次の日にユウイチの死はホールにて楯無の口から全生

徒達に告知された。

『今回の悲劇は私達の心に消えない傷跡を残しました。しかし、私達は彼の為にも歩みを止める訳にはいかないのです！』

堂々と生徒達に話し掛けている楯無はいつもの様に凛々しく、自信に満ち溢れていたが、キラにはそれが無理に表面に出している様に見えた。

「楯無さん・・・」

やがて全校集会も終わり、キラが一人廊下を歩いていると前から楯無がやって来た。

「やほ～、キラ君元気～？」

「元気じゃないですよ。」

「だよね・・・」

しばらくの間、二人には沈黙が流れたが楯無がそれを破った。

「キラ君・・・」

「はい？」

返事をしようと顔を上げた瞬間、楯無がキラに抱き着いたのだ。

「なっ！楯無さん！？」

「お願いっ！しばらくこのままにして。」

キラの胸に顔を埋めていたが、キラには分かった。彼女が泣いているという事が。

「分かりました。」

「後、楯無って呼んで。さんをつけないで。」

「え？」

キラはその意図が分からず楯無の顔を覗き込もうとした時、キラの唇は彼女に奪われていた。

「あっ・・・。」

「・・・。」

あまりにも突然の出来事でキラはその場を動く事もできず、楯無を突き放す事もできなかった。やがて、永遠の様に永く、どんなお菓子よりも甘く、別れの時の様な切ないキスが終わり、楯無は唇を離した。

「ゴメンね。こんな時なのに。でも、私はキラ君が好き。」

「えっ？」

「ラクスちゃん達がいるのは分かってるわ。でも、私は貴方が好き。」

好きと言った彼女の瞳は本物だった。冗談や嘘ではなく、本物の恋する乙女の瞳だった。しかし、キラは今は返事をする事ができない。自分の事で精一杯だからである。

「ゴメン、今は何も言えないんだ。後でちゃんと答えは出すから。」

「そうだよね。答え、待ってるわ。」

そう言い残し、彼女は去って行く。キラはその後ろ姿を見続ける事しか出来なかった。

「楯無・・・ありがとう。」

そして時間は過ぎて行き、放課後の事。キラ達は千冬に第一アリーナに呼び出されていた。

「何ですか？」

「実はだな。お前にやってもらいたい事があるんだ。」

千冬の後ろでは束がムウとロックオンに手伝われて何かを準備している。

「別に良いですけど。」

「そうか、頼んだぞ。」

すると千冬は束に目で合図を送る。束はその合図を見るとリモコンを取り出して操作した。すると、何もない場所が光って、そこか

らストレイドが現れた。

「今回はヤマトにストレイドのあるシステムを作動させてもらいたい。」

しかしキラやいつものメンバーは納得いかないという顔で千冬を見た。

「ユウイチがいないのにそんな事をして何か意味があるんですか？」

「私が今まで無意味な事をした事があるか？」

「いえ・・・」

しぶしぶキラはストレイドに乗り込む。すると、一夏が手を挙げて質問をした。

「専用機って他の人が乗っても大丈夫なのか？」

「そこはほれ、天才の束さんだから。」

「ああ～。」

そんな説明で納得してしまう一夏も凄いと思う。

「システムってこれですか？」

「そうだ。発動させて見ろ。」

何も疑わずにα－Ｓｙｓｔｅｍを発動させるキラ。すると、ストレイドに異常が起きた。ハイパーセンサーの画面を埋め尽くすα－Ｓｙｓｔｅｍの文字とアラート音。

「先生！これは一体！？」

「大丈夫だ！そのまま続けろ！」

他のメンバーもハラハラとしながら見続けるがアラート音と文字は消えない。やがて、ストレイドが光出してきた。

「先生！これ以上は！」

「大丈夫だ！」

見てられないという感じで止めに入るラクスを止める千冬。その顔は心配で彩られていた。

「見て！光がっ！」

「あっ！」

数分経った頃、光が胸部に集まりだし、中心に集まった光は大きな大爆発を起こした。

「うわっ！」

「きゃあっ！！」

その衝撃は凄まじく周りにいた一夏達は吹っ飛ばされそうになる

くらいである。

「一体何がっ！？」

「これはっ！」

体についた土を払いながらキラとストレイドを探そうと前を見た瞬間、一同は驚くべきものを見た。

「あれって、ストレイド？」

「でも、姿がっ！。」

光の中から現れたのはα－Ｓｙｓｔｅｍによって進化したストレイドであった。そのあまりにも神々しい姿に誰も声が出せない。α－Ｓｙｓｔｅｍによって進化したストレイドは、容姿は変わっていないものの、全身の装甲にアブソリュートフリーダムと同様に青く光る装甲、ネクストフレームが取り付けられており、後ろの白から青のカラーになった翼にも取り付けられていた。関節の色は銀で、肩にあったブーメランは腰の後ろに取り付けられ、変わりにクイックブースト発生装置が取り付けられている。ブースター横のエクスカリバーも更に長くなっており、折り畳まれて格納されている。印象でいえば更に鋭くなった感じである。

「これがストレイドの進化・・・」

「これが・・・」

アブソリュートフリーダムの時と同様に全員がその美しさに見入っていた。

「これがＮＥＸＴ－０００２、α－ストレイド！！」

その力が彼等に何を与えるのかは今はまだ、誰にも分からない。

α－System（後書き）

時間は進化したストレイドの模擬戦ですかね？

交わる世界と究極のＡＩ（前書き）

レイヴンズ・ネストの話にしました。それと今回は超短めで。

交わる世界と究極のＡＩ

彼は同じ場所でいつも目覚める。彼の視線には幾つもの映像情報と音声情報とネットワーク情報が無限に広がっていた。

『キラ・ヤマト、それにラクス・クライン。』

彼は地球の衛星軌道を飛んでいる一つの衛星に意識を接続する。そして、彼は衛星を操り、カメラでＩＳ学園を捉える。

『発動させたか、α－Ｓｙｓｔｅｍを・・・』

彼は人ではない。人格はあるが人の形をしていない。人類が作ったものに例えるなら超大型のハードディスクといったところか。彼が捉えたＩＳ学園ではキラ達が進化させたＩＳ、ストレイド・・・いや、α－ストレイドの事について話し合っている所だった。

『キラ・ヤマト、キミに早く会いたいよ。』

彼の名はレイヴンズ・ネスト。表向きは傭兵たるレイヴン達をネットワークで支援する傭兵支援組織であるが、その実態は企業、レイヴン、ＩＳ学園、ＩＳ委員会、ＺＡＦＴ、地球連合、アロウズ、地球連邦など様々な組織や政治を裏から操る究極のＡＩである。

『しかし、あのユウイチ・Ｓ・レイブンが死ぬとはな・・・』

彼は世界中に派遣したナインボールを通して世界を見ることがで

きる。今でもナインボールが見ている視界を彼は見ていた。

『私は世界を救わねばならない。』

彼はC．Eが西暦と呼ばれていた時に火星で発見された。いや、生まれたというべきか。彼を創った者がどんな存在だったのか、どんな目的で彼を創ったのか、何を願っていたのか、彼は知らない。そして、共に産み出されたジェネレイド達も知らないだろう。彼等はただ産み出された。明確な目的すら教えられてはいないまま。だが、彼がまず最初に感じたのは哀れみと悲しみと危機感だった。

『人類が宇宙に飛び出すにはまだ・・・』

彼は戦争を止められず、貧困や飢餓、病に苦しむ人類を救う為に企業達を統合させて企業連を作り、世界を一つにまとめた。けれども人類は一世紀近く経っても、未だ戦争を止める事も知らず、飢餓や貧困に苦しんでいる。

『人類には秩序が必要だ。例え、それが偽りであっても。』

しかし、彼はそこまで言って、言葉を続けるのを止めた。その理由は一人のレイヴンを思い出したからだ。

『ユウイチ・・・』

今、多くの人々は幸せになりたいと考え、平和が一番の幸せだと考えている。平和な世界でありたいと、戦争を無くしたいと誰もが思っている。だからこそ、ガンダムやC．Bが作られたりもしたのだ。それは当然でもあり、当たり前と彼は考えていた。あのレイヴンが現れるまでは。

『彼は何故・・・」

彼は今でも覚えている。ユウイチが真っ向からそれを否定した事を。多くの人々の願いを否定した事を。

『まぁいい、彼は死んだのだ。支障は出ない筈だ。』

彼はその記憶を直ぐに振り払った。そして、世界のネットワークを見詰め直す。

『そろそろ、駒を進めるか。』

彼はあるリンクスへの通信回線を開く。すると直ぐにかなりの歳をとった老人の画像が現れる。

「お呼びか？ネスト。」

彼はリンクスＮｏ．７、蛇大老。髪は全部白髪に変わり、顔の大きな皺が瞳を塞いで見えているのかも分からない。絵に書いたかの様な紳士の老人である。しかし、彼は老練のリンクスで蛇の様に執念深く、猛毒の様な一撃必殺の狙撃スタイルで有名である。因みに企業連やリンクス達の中でレイヴンズ・ネストの正体を知っているのは彼だけである。

『企業連に艦隊を出発させろと命じろ！』

「了解だが、目的地は？」

するとレイヴンズ・ネストは世界地図を映し出して、太平洋上の

ある地点をロックオンした。

『場所は太平洋にある島々で、目的はリボンズ・アルマークとそれに従うアロウズ、沙藤美哉とその婚約者、沙藤健人の完全抹殺。』

「了解！」

『国家軍にもこの情報を流しておけ。それと、戦闘が始まったらC．Eにいる世界連合をこの世界に転移させろ。』

「了解。」

そう言って蛇大老は消えた。残った彼は自分の中で笑った。

『スーパーコーディネーターのキラ・ヤマト。イノベイターへと変革した刹那・F・セイエイ。この二人が出会った時、この世界にも変革が訪れる。』

そう言って彼はキラの資料と映像、CBのメンバーである刹那・F・セイエイの資料と映像を出した。

『しかし、強大すぎる力は世界を破壊しかねない。あの、エリアの時の様に。』

しばらく考えたが、彼は再び情報の海の中で眠る事にした。眠ってても彼は世界を動かす事が出来るのだから。

『そうだ。キラ・ヤマト、キミにはコチラから会いに行くとしよう。いつか・・・』

再び眠りに着いた彼が一体どんな夢を見るのか誰も知らない。

指令を受け取った蛇大老は自分の部屋である装置を起動させた。すると部屋が暗くなり、何もない場所から六人の男女が立体映像となって現れる。

「呼んだか？」

「またなんか指令か？」

彼等はリンクスのＮｏ．１からＮｏ．６の上位ランカーである。

「また、好きなだけ殺せるのか？」

物騒な事を言う男は、リンクスＮｏ．１レッドバレル。以前にラクスと対話をした人物である。

「どんな指令なの？蛇大老。」

そう言ったのはＮｏ．５メアリー・シェリー。他にもいるが今は紹介するのは止めておこう。

「今回は企業連軍と共に沙藤美哉及びリボンズ・アルマークなどの抹殺だ。」

「なるほど、案外楽しそうだな。」

物騒な事を言う彼等でも実は企業連の最高司令官、通称『長老』のメンバーである。

「詳しい事は後ほど伝える。相手は少数とは言え、全力を出せよ。この作戦でこの世界の命運が決まるのだから。」

今、世界の歴史が変わろうとしていた。だが、それがどうゆう結果になるかは誰にも分からない。

交わる世界と究極のＡＩ（後書き）

次回は未定です。

α－ストレイド（前書き）

更新です。

一夏達には分からなかった。今、彼等は第一アリーナにいる。その目的は死んだユウイチの愛機ストレイドだ。つい先程にそのストレイドを進化させたのだが、主がいない今にそんな事をして何の意味があるか、彼等には分からなかった。

「キッ君、次はα－ストレイドの実戦データを録るから現れる敵と戦ってね。」

「分かりました。」

テストパイロットをしているキラはしょうがないという感じでいるが、一夏達は納得いかない。そこで、箒がたまりかねて口を開いた。

「織斑先生、ストレイドはこの後どうなるのですか？」

一夏達はこのまま保管しておいていてほしいという考えだが千冬から発せられた答えは真逆だった。

「α－ストレイドはアメリカ軍に渡され、今回のデータはＩＳ委員会に渡る。」

「なっ！？その機体はユウイチのなのに、そんなっ！」

「決定事項だ！仕方あるまい。乗るべき主がいないのだから。」

確かに、乗るべき主のユウイチが死んだ今はα－ストレイドは動く事ができない。それでは宝の持ち腐れだ。ならば、他の世界のオーバーテクノロジーの塊である機体を手元に置いて、これからの世界の為に多いに役立ってもらおうという事なのだろう。

「仕方ないですわ。今は戦争中、ＩＳ委員会も手一杯のはずですから。」

「ううっ・・・」

ラクスの言う事は正しかった。しかし、それでも何かが納得がいかなかった。

「束さん、始めてください。」

「オッケー！」

すると束はディスプレイをカタカタと弄る。すると上空から何かが三つ程、落ちてきた。

ズドォォォォン

派手な砂ぼこりを上げて着地した機体、それはキラ達が倒したナインボールだった。

「なっ！？ナインボール！」

「でも、形が！」

確かによく見るとキラ達が戦ってきたナインボールは全体の形状が違っていた。

「これは一体どういう事ですか！？」

ルイスが質問すると束は自信たっぷりの表情で説明を開始する。

「このナインボールは前にキッ君達が倒したナインボールを束さんが独自改修した機体なんだよ！」

そのおかげか分からないが確かに全体的に新しいイメージがある。右手にはパルスライフルではなく、大型のリニアライフルが握られ、左手に内蔵型ではなく、外に露出した状態でビームブレードが装備されていた。背面の左右には前と同じく、ミサイルポットとグレネードランチャーが装備されている。多分、機動力も上がっているだろう。頭部のメインカメラは前はザクの様に頭部の中に取り付けられていたが今回は表面に複眼という形で取り付けられていた。

「じゃあ、キッ君頑張ってね。」

「はい！」

その瞬間、ナインボールがキラとα－ストレイドに猛襲する。

「くっ！？」

キラは空中戦に持ち込もうと空へと逃げる。すると機体の反応の良さに驚愕した。

「凄い、反応もスピードもアブソリュートフリーダムと同等だ！」

素直に喜んでいるキラにナインボール達は容赦なく背面のミサイルポットからミサイルを放つ、一回の射撃で五発、計１５発がキラに迫った。

「これは！？」

キラはα－ストレイドの両手を前に突き出す。すると、拳に着いているα－ストレイドのパルマフィオキーナ、α－フィオキーナから片方につき、２０発のビーム、両手で計算すると計４０発の青いビームが放たれた。

「この装備は！？」

半分のビームがミサイルを叩き落とし、もう半分のビームはナインボールに雨の様に降り注ぐ。しかしナインボールは機体を複雑な動きをさせる事で全て避けた。

「凄い、あれがストレイドの進化形態。」

驚く鈴に束は更に衝撃を与える。

「違うよ。この天才束さんが調べた結果、ゆう君が乗っていた頃のストレイドは言わばプロトタイプだったんだよ。で、α－Ｓｙｓｔｅｍを作動させた事で・・・」

「完成したって事ですか？」

「キミは確か、アニュー・リターナーだっけ？オチをとらないでよ。」

すいませんと謝るがアニューには何とも言えない不安が募っていた。プロトタイプでさえ、あの性能を誇っていたのだ。それが完成したという事は前より強くなるという事である。現に三機の強化ナインボールでさえ苦戦している状況だ。しかし、本当の不安はストレイドを作った人物だ。その人物はあれだけの機体を作って何をしようとしていたのだろう。

「はぁっ！！」

キラはα－ストレイドの専用対艦刀、α－エクスカリバーを引き抜く。どうやらα－ストレイドの武装名にはその証であるαがつくようだ。

「このっ！！」

それは前より少し長くなったが、その長さから生まれる威力は感動ものであろう。その証拠に斬撃をくらった一体目のナインボールが最初に攻撃を受け止めた左腕から胴体、右腕の順に両断される。

「ああ・・・。」

落ちていくナインボールを見ていると他のナインボールがその残骸を踏み台にしてリニアライフルを連射しながら迫ってくる。

「くっ！！」

キラはα－ビームシールドで受け止めながら新たに追加されたα－カリドゥス複相ビーム砲を放つ。しかし、赤いビームはナインボールに軽々と避けられてしまった。しかし、避けた先にはキラがい

て対処するには遅く、右腕をα－ブレードで切り裂かれてしまった。だが、ナインボールも諦めが悪いらしく残ったビームブレードで切り突けてくる。

「遅いよ！」

α－クイックブーストで後ろに下がり、今度はα－フィオキーナを零距離で直撃させる。胴体を焼かれたナインボールは地面に真っ逆さまに落ちていった。

『危険レベルS、対処開始。』

残ったナインボールは背面のグレネードランチャーを跳ね上げて後退しながら撃ち続けた。

「これなら！」

腰に装着されているα－ドラグーンを粒子で複製して八基を放った。このα－ドラグーンの形はスローネツヴァイのファングとゲイツのアンカーを混ぜ合わせたような形をしている

「当たれぇぇぇぇっ！！」

ビーム刃を放出しながら複雑怪奇な動きをしてナインボールを翻弄、ナインボールも逃げ回るが一基のα－ドラグーンが突き刺さり動きが止まると残りのα－ドラグーンがハチの大群の様に殺到し、ナインボールに次々と刺さる。

「アブソリュートフリーダムと同様に反則じゃない。あんなの！」

「全くだ。」

白、黒、青の基本カラーと青く輝く装甲を携えた機体に一同はある疑問が沸いた。ユウイチがいない今、キラ以外にあの機体を操れる人間が存在しているのかと。

「束、フラガ先生、ストラトス先生、データは？」

「バッチし！」

「俺もだ。」

「俺もＯＫ！」

データを確認した千冬はキラに降りてこいと支持を出すと一夏達にナインボールの撤去作業を命じた。そして、殆どの作業が終わろうとしていた頃、真耶が汗だくになって走ってきた。

「織斑先生～！大変で～すっ！」

「どうした？」

千冬の目の前に来ると一旦深呼吸をした後、空中投影型の小型ディスプレイを映し出す。

「なっ！？」

「これは大変ですよ！」

何事かと全員が集まってそのディスプレイを見る。するとそこに

は何処かの艦隊が映っていた。

「太平洋に企業連が艦隊を派遣だと！。」

「しかもその先にはアロウズ艦隊がいるじゃねぇか！」

その理由が分かったキラはうわごとの様に答えを喋る。

「遂に企業連はアロウズの鎮圧に乗り出したね。」

「アロウズも黙ったままな訳がない。」

「国家軍も艦隊を派遣した様ですね。」

千冬は焦りながらディスプレイを操作し、三軍の対面までの時間を計算した。

「三つの軍のスピードからして対面するのは二日後！」

「大変ですわ！」

たった二日、三つの軍が入り乱れての三つ巴の戦いまでのタイムリミットはあと二日である。

「束さん！今すぐ色々と準備をしてください！」

「そうだね。戦力不足の国家軍は絶体に此処に協力を要請してくる筈だね。」

しかし、例えキラ達が協力に行ったとしてもまだまだ戦力不足であ

る。その現実にキラは焦りを感じていた。

α－ストレイド（後書き）

今回出てきたナインボールはアーマード・コアナインブレイカーのナインボールです。

戦場での再会（前書き）

更新です。

戦場での再会

α－ストレイドの実戦データを取り終えてから二日後、ＩＳ学園の専用機持ち全員はホールに集められていた。理由は現在太平洋上に展開している企業軍艦隊とアロウズ艦隊について。壇上では空中投影型ディスプレイを使って千冬が専用機持ち達に現在状況を説明していた。

「現在、企業軍艦隊とアロウズ艦隊と国家軍艦隊は互いに警戒体制に入って膠着状態だ！」

映像には互いに向き合って動かない三陣営の艦隊が映っている。しかし、この状態がいつまで続くかは誰にも分からない。

「三陣営はイージス巡洋艦２３隻、弩級母艦１５隻を展開している。だが、企業連はレイブンが以前に報告していた巨大兵器ＡＦ『ギガベース』一隻と特殊部隊フライトナーズを展開している。」

映像に映されているギガベースは確かに巨大兵器というだけあって周囲にいる母艦と比べると圧倒的に巨大だ。

「アロウズ艦隊も超高性能な機体を数多く投入している。それに比べて国家軍は明らかに戦力不足。そこで政府は我々ＩＳ学園に協力要請をしてきた。」

その瞬間、専用機持ち達がざわつく。確かに僅か十代で戦場に行くことになるとは夢にも思っていなかった筈である。

「無理強いはしないさ。行きたくないものは行かなくていい。午前１１時まで待つ。我々と共に来てくれる者はグラウンドへと来てくれ。」

千冬が優しく話すと専用機持ち達は互いに顔を見合わせ、話し始めた。

「なるべくなら、誰も来て欲しくはないがな。」

そして１１時現在、結局全員が志願してきた。

「やれやれ、予想はしていたが。」

「キラとラクスが行くって言うなら行くしかねぇよ！」

「そうだな、私達は仲間だ。仲間を二人だけで行かせる訳には行かない。」

一夏達は当然直ぐに志願しにきた。その時の千冬の心配そうな顔ときたら。

「ま、予想はしていたが気を付けろよ。」

結局、参加するのは専用機持ち達全員と教師全員である。これでもまだ全体的には不十分であるが贅沢は言ってられない。

「ちーちゃ～ん！」

しばらくして、グラウンドに束が千冬目掛けて猛ダッシュしてき

た。

「なんだ束！」

「うべっ！！！」

千冬は抱き付かれる前にアイアンクローで束を止める。

「うぐっ！容赦のないアイアンクローだね。できたよ、例のものが！」

「本当か！」

「例のものって何ですか？」

キラが聞くと束は笑って答えた。

「ふっふっふっ！束さんお手製の増設大型ブースターだよ！」

「大型ブースター？」

束は懐からリモコンを取り出して操作する。すると、専用機持ち達と教師全員の前に何やら細長い筒状のブースターを幾つも寄せて作ったようなブースターが現れた。どうやらこれが今回の作品の様だ。

「これが束さんお手製のブースター。ＶＯＢブースターだよ！」

背中に着けて使用するようだが、燃料はどうやらロケット燃料らしい。こんな形で大丈夫なのだろうか。

「今回、企業軍に投入されているギガベースは超長距離大型実弾砲が主砲で、その威力も絶大だ。だから、ゆっくりと接近していたら餌食になりかねん。その為にこのＶＯＢで一気に距離を詰める。」

確かに速度があったほうが時間的にもエネルギー的にも効率がいい。

「いつまで時間が許されるか分からん。全員、直ちに装着しろ！」

千冬が号令を掛けると全員急いでＶＯＢのデータインストールを始めた。因みにキラはミーティアがあるので困っている人を手伝う事にした。

しばらくしてキラが見回っていると三年のダリル・ケイシーと二年のフォルテ・サファイアが話し掛けてきた。

「よぉ！アンタがキラ・ヤマトか？」

「そうですけど。」

「キミが最強ね～。」

二人ともやる気が感じられないがどちらも専用機持ちなだけあってかなりの実力を持っている。特に二人のコンビネーション技『イージス』は名物だ。

「お前、かなりの実力を持ってんだろ？今回の事が終わったら勝負しようぜ！」

「かなり興味あるッスからね～。」

「別に良いですけど。」

「よっしゃっ！じゃあ、またな！」

「ちょっ！待ってくださいッスよ～。先輩～！」

一方的に話し掛けられ、一方的に話しを終わらせられてしまったキラはしばらく呆然としていたのだった。

「よし！全員装着したな。次は擬似カタパルトに移動しろ！」

ＶＯＢを付け終わった一同は束が作った光の擬似カタパルトに移動する。この光の擬似カタパルトの正体はナノマシンで誘導レーザーとは違い、実際に射出してくれる優れものである。

「射出と同時にＶＯＢを点火する。高速機動用補助バイザーを忘れるな！」

現地への誘導の為千冬以外の教師達からの順に射出される事になった。

「まず私達が先に行きます。皆さんは着いてきてください。」

第一発目はなんと真耶であった。真耶はラファール・リヴァイヴをナノマシンで構成されたカタパルトの端に立たせる。すると反体側がシーソーの様に空へと向いた。そして、空中に投影されている信号が青に変わる。

「行きます！」

その瞬間、真耶は凄い勢いで空中に吐き出された。そして、姿勢を制御したままＶＯＢを点火、とてつもない速さで紺碧の空を駆けていった。更に息を吐く暇もなくの教師達が次々と空に吐き出されては空を疾走していった。そして遂に一夏達の番になる。順番は一夏、箒、セシリア、鈴、キラ、ラウラ、ラクス、シャルロット、簪、アニュー、ルイスである。

「ユウイチが居なくたって！白式、織斑一夏。行くぜ！」

「紅椿、篠ノ之箒。参る！」

「ブルー・ティアーズ、セシリア・オルコット。行きますわよ！」

「甲龍、凰鈴音。行くわよ！」

「キラ・ヤマト、フリーダム。行きます！」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ、シュヴァルツェア・レーゲン。発進する！」

「姫桜、ラクス・クライン。行きますわ！」

「シャルロット・デュノア、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？。突貫します！」

「更識簪、打鉄弐式。行きます！」

「アニュー・リターナー、ガッデス。行きます。」

「ルイス・ハレヴィ、レグナント。テイクオフ！」

力強く発進した少年少女達はＶＯＢに点火し、戦場を目指した。その後も楯無を筆頭に二年、三年と空中に踊り出た後、加速して戦場に向かった。そして最後は千冬とロックオン、ムウの順である。

「束・・・」

「なに、ちーちゃん？」

珍しく真剣な眼差しで自分を見詰める千冬に束は真面目に答えた。

「あいつを頼んだぞ。」

「ゆう君の事？彼ならそろそろ起きる筈だよ。」

「そうか・・・」

ほんのちょっと安心した表情を出した千冬は再びいつもの表情に戻り、空を見つめた。

「織斑千冬、暮桜・真極。出る！」

彼女も空中に踊り出た後、初めての戦場に生徒・・・いや、仲間達と共に向かった。次はロックオンの番である。

「ロックオン・ストラトス、ケルディムガンダム。目標を狙い撃つ！」

緑色の機体が吐き出され、次は黄金の機体の番。

「ムウ・ラ・フラガ、アカツキ。行くぜ！」

これで全てのＩＳが太平洋の戦場に向かった事になる。残った束はしばらく、彼等の軌跡を消えるまで見続けていた。そして、全ての軌跡が消えようとした時、後ろからある人物が弱々しく歩いて来た。

「束・・・」

「キミは！！」

それから三時間後、キラ達は太平洋の目標地点にたどり着いた。しかし、戦闘は開始された様で、爆発とビームとミサイルなどが空を彩っていた。

「戦況は！」

キラはハイパーセンサーで戦況を確かめる。その結果、以外にも企業軍がアロウズ、国家軍を圧倒している事が分かった。

「くっ！やっぱりＡＦの！」

キラは落ち着きながら手に入れた情報を仲間全員に送信する。すると、千冬から通信が入ってきた。

『全機！そろそろＶＯＢの使用限界だ。パージする！』

その瞬間、一夏達のＶＯＢがバラバラになってしまった。これは

ＶＯＢに入っている燃料と耐久度の関係でこう言う形式をとっている。言わば、使い捨てだ。

「はぁぁぁぁっ！！」

キラもミーティアをパージし、味方か敵かも判別しにくい混戦の中へと飛び込んでいった。ミーティアをパージした理由はこの規模の混戦になるとミーティアはかえって邪魔になるからである。

「あれは！」

キラがまず最初に出会ったのはアロウズのジンクス？だった。コチラにビームを撃ってくるがアブソリュートフリーダムの性能とキラの操縦の前には当てるのは無理だ。

「やめろ！下がれ！」

あっという間にランスを撃ち落とし、武装解除して海に蹴り落とす。

「あっ！」

直ぐ様、別のジンクスが二機、飛来してくる。キラはデータベースから重機関銃ラゼルを呼び出し、弾幕を張る。

「はぁぁぁっ！！」

大口径の弾丸を食らった一機は煙を上げながら海に墜落していく、残った一機はビームサーベルを抜いて斬りかかってきた。

「分からないのか！もう軍を退け！」

クイックブーストで後ろに下がり、斬撃を回避すると、胸のカリドゥス複相ビーム砲が火を吹いた。直撃を受けたジンクスは重力に引かれ、なすすべなく落ちていく。

「くっ・・・」

キラは首を振りながら前を向く。すると今度はＤ－２がプラズマライフルを連射しながら突っ込んできた。

「この！」

ドラグーンを４基パージし、迎撃する。やはり、ドラグーンの嵐を避けきれず穴だらけにされて爆散してしまった。

それからしばらくの間、来る敵を返り討ちにしているとキラに通信が入ってきた。

『やるな！楽しめそうだ。』

「なっ！」

すると、上から青い機体が太いビームブレードを振って近接戦闘を仕掛けてきた。

「あなたは！」

『おれか？おれは正宗。機体名は小鴉。』

機体に描かれて青い鳥のエンブレムを見てキラは直ぐにその正体が分かった。

「フライトナーズ・・・」

『へぇ～、知ってんのか？嬉しくねぇ。』

小鴉の機体構成はレイレナードの高速型標準機ベースのカスタム機らしい。両腕にＬ．Ｒムーンライトを装備していて、背面の左右には折り畳まれたビームランチャーが装備されている。

『俺は戦う事が大好きなんだよ。お前と戦えて嬉しい！』

「貴方はっ！！」

すると正宗は問答無用で襲いかかってきた。本当に戦う事が大好きなようだ。

「くっ！！」

『そらそら！』

腕もかなりで、両手のムーンライトでキラを圧倒する。しかし、やられっぱなしのキラではない。

「はあっ！」

『うおっ！？』

僅かな隙をついて相手を蹴り飛ばし、更に超スピードで相手の横を切り抜ける。しかし、相手も一筋縄ではいかず、クイックブース

トで巧みに避けてしまった。

『あぶね～！予想以上だぜ。』

「くっ！」

『しゃあね～。勝つためには手段を選ばずってね。おい、ガルム隊！。』

すると何処からともなくＭ－９が八機編成で飛んできて、アブソリュートフリーダムに背面の大型ミサイルポットからワイヤーミサイルを射出する。

「これは！？」

正宗とつばぜり合いになっていたキラは避けられず四肢とドラグーンが格納されている翼四本をがんじがらめにされてしまった。

「くっ！動けない！」

『ひゃは～！企業連特製のワイヤーだ！引きちぎるのは苦労するぜ！』

動けないキラに対して下卑た笑いを上げる正宗は小鴉を一旦下がらせ、右腕のムーンライトを突きの構えを取り、突進体勢に入った。

『これで終わりだな。スーパーコーディネーター。』

「くっ！」

『しっかり押さえてろよ。』

小鴉のブースターに光が集まっていく。どうやらＯＢで突進してくるつもりらしい。

『終りだ！』

「ゴメン、皆！」

ムーンライトの切っ先が目の前に広がっていく。死を覚悟したキラは目を瞑り、その時を待った。しかし、その時はいくら待っても訪れず、変わりに正宗の悲鳴が耳に届いた。

『ギャア！なんだ、お前は！？』

「？？」

キラは訳が分からず目をゆっくり開く。するとそこには赤い機体のブースター部分が見えた。だが、紅椿でも姫桜でもないようだ。しかもキラにはこのブースター部分の見覚えがある。

「まさか！！」

キラは急いで顔を上げる。そして、彼はその機体の正体が一発で分かった。

「ジャスティス！！」

驚いている彼の耳にとても懐かしい声が届く。

「キラ！久しぶりだな。」

キラを救ったのは白式でも姫桜でもブルー・ティアーズでもない。彼を救ったのは∞ジャスティスとキラの無二の親友のアスラン・ザラだった。

戦場での再会（後書き）

レイレナードの標準機は画像検索でアーマードコア４と打てば出てくる筈です。

交わる世界（前書き）

なんとか更新しました。感想お願いします。

彼はいつもこうやって助けてくれた。幼い頃の時も、オーブ解放作戦の時も、そして今も。キラがピンチの時はいつも助けてくれた。

「キラ、大丈夫か？」

「アスラン、どうして？」

その時は頭が混乱してその理由が分からなかったが、ムウとロックオンがこの世界に来れたのだ。なら、アスランが来れない理由はない。

「まさか、ポーターが！」

「ああ、修理し直して俺だけ先に来た。だけど、直ぐに増援がくる。」

久しぶりの友との会話を邪魔するようにキラをがんじがらめにしていたＭ－９達が二人に猛襲する。しかし、二人はビームサーベルを抜いて一瞬にして全機を叩き落とす。

「くそっ！！誰かと思ったらアスラン・ザラじゃねえか！丁度いい。二人共片付けてやる。」

ビームブレードを両手とも放出し、キラとアスランに襲いかかる。が、アスランはビームシールドで受け止めて蹴りを食らわす。そし

て、吹っ飛ばされた先にキラが待ち構えていた。キラは正宗の小鴉を受け止めると胸部を両手の手の指に装備されているクロー『ホワイトクロー』でズタズタにする。

「馬鹿な・・・俺がこんなにもアッサリと！」

エネルギーシールドが０になった為に自爆装置がＯＮになる。そして正宗は小鴉と共に爆散して消えた。

「アスラン、キミと会えて嬉しいよ！」

「俺もだ。それよりお前、そのフリーダム・・・」

二人は半年以上の会話を楽しむ様に話している。だが、この二人は話しながらも襲いかかってくるジンクスやＤ－２を返り討ちにしているのだから凄い。

「とにかく、まずはこいつらを蹴散らしぞっ！」

「うん！」

次の瞬間、赤と白の機体は竜巻へと変化していく。その周囲にいた機体はなすすべもなく撃破されていくのだった。

一方、一夏達は突然乱入してキラを助けた真紅の機体に驚いていた。

「何なの？あの機体は！」

「敵？」

その時、千冬は真紅の機体に少し見入ってしまった。その理由はアスランの剣さばきが千冬以上のものだからである。

「なんだ、あの機体は・・・キラを援護しているという事は味方か？」

すると一夏達と交戦中だったエンド・カラミティとグリフォン・レイダー、それにデス・フォビドゥンが二機に突っ込んでいった。

「くっ！一体、何がなんだか。」

謎の機体の乱入に千冬が珍しく混乱しているとラクスから通信が入る。

「皆さん、あの機体は敵ではありません。どうか、その様に。」

立て続けにあの赤い機体のデータが送られてくる。千冬は直ぐ様、そのデータベースを確認した。

「ＺＧＭＦ－Ｘ１９Ａ　∞ジャスティス。近接兵器が多数搭載された機体で、パイロットはアスラン・ザラ。」

「アスラン・ザラって、キラの親友の！」

前にキラが話していた幼い頃からの親友。その彼が今、キラのピンチに助けに来たというのだから凄い。

「味方なら別にいい、私達は・・・」

その時、彼女は見てしまった。アルケー・ガンダムと戦っている

一夏にガデッサが『ＧＮメガランチャー』を向けているのが。しかも彼は気付いていないという非常事態だ。

「一夏ぁぁぁ！！」

千冬は急いで暮桜・真極のスラスターを吹かして一夏を助けようとする。しかし、ガデッサの『ＧＮメガランチャー』には光が灯り始めていた。

「間に合えっ！」

その思いが通じたのか分からないがガデッサの『ＧＮメガランチャー』が攻撃を受け、爆発した。

「なっ！？」

ガデッサも千冬も一夏も何が起きたのか分からず、上を見る。すると、そこには一機の機体が滞空していた。青と白が基本カラーで、細身のガンダムタイプ。大きな特徴は肩の部分にあるドライブらしき２つの装置だ。

「なっ！？あの機体は？」

ガデッサはその正体が分かっている様で明らかに同様する。更に、その機体の後ろから三機のＩＳが降りてくる。一機目は重装甲の火力タイプのガンダム。二機目は可変式のオレンジ色の機体。三機目はガンダムタイプではないが可変式の赤いカラーリングの機体だった。

「彼等は一体？」

「お～しっ！揃ったな。」

先程にリボーンズガンダムを追い掛けていなくなってしまったロックオンが戻ってくる。彼の様子からして敵ではないようだ。

「待ちわびたぞ！！少年！！」

何処からともなくスサノオが現れ、ドライブが二個着いている機体に襲いかかる。二機はそのまま激しい近接戦に流れていった。そして、ガデッサやジンクス、アヘッド達もロックオン達に群がり始める。

「千冬姉ェ、これは一体？」

「分からん。私にも何がなんだが。」

だが、確実に分かるのは彼等は敵ではなく味方であることと、戦力も増えたという事だ。

キラ達はと言うと先程に突っ込んできたカラミティ、レイダー、フォビドゥンと激しい戦いを続けていた。

「はぁ！」

アスランがフォビドゥンに『ファトゥム－０１』を射出し、見事に命中。よろけた所にキラが『クスィフィアス４レール砲』を直撃させる。

「アスラン・・・」

「下！！」

キラは空かさず下を見る。すると海上からエンド・カラミティが四本の熱戦を放ってきた。

「お前等、いい加減に落ちろ！」

なかなか落ちない二機に焦れたのかエンド・カラミティが飛んでくる。するとアスランがシールドからブーメランを投擲、エンド・カラミティの左腕に装備されていたビームバズーカを切り裂く。

「隙あり！抹殺！」

ほんの一瞬、止まってしまったジャスティスにグリフォン・レイダーが鷹の様に飛来する。しかし、その時のアスランは笑っていた。

「ふっ、俺たちはあの時とは違う！」

「なにっ！！」

クロトは気にせず頭部のビーム砲のトリガーを引こうとする。しかし、上空から何本ものビームがそれを阻む。

「ぐっ！なんだ？」

クロトが上空を見上げると赤い翼の機体とエールストライクに似た機体とプロヴィデンスに似た機体がコチラに銃口を向けていた。

「シン！ルナマリア！それに・・・」

「キラさん！大丈夫ですか？」

「心配しましたよ。」

「また会えるとはな。キラ・ヤマト。」

三機の名はデスティニー、インパルス、レジェンド。かつてキラとアスランと死闘を繰り広げた好敵手だ。更に喜ぶキラの目にあるものが入る。それはC．Eでキラ達を飲み込んだ穴が遥か上で開いていた。

「あの穴は！」

見ているとその穴からアークエンジェル、エターナル、ミネルバ、ナスカ級、クサナギ、それに見たことのない戦艦が続々と現れた。

「アークエンジェル、エターナル！」

驚いているとアークエンジェルから通信が入った回線を繋ぐと、とても懐かしい女性の顔が見えた。

「キラ君、大丈夫！？」

彼女はマリュー・ラミアス。アークエンジェルの艦長で、キラとは戦友でもあり、姉の様な存在でもある。

「マリューさん！お久しぶりです。」

「そうね。また会えて嬉しいわ。色々と聞きたい事があるけど、

それはこれが終わったらにしましょう。」

そう言って通信を切る。その直後、アークエンジェルやナスカ級、クサナギ、見たことのない戦艦からモビルスーツもとい、ＩＳが吐き出されていく。しかも、どれも見たことのないタイプばかりだった。

「キラ、色々とデータを送るから見てくれ。」

そう言ってアスランが送ってきたデータはＺＡＦＴやオーブなどの主力機体のデータだった。どうやらキラとラクスとユウイチがいない間にモビルスーツはザクから違う機体に変更されたようだった。

「ＺＧＭＦ－２５００　ギャン・イータ。グフの発展型か！それに次期主力機体のＺＧＭＦ－３０００　ゲルググ・ブラスター。完全なニューミレニアムシリーズの新型か。」

他にもオーブのＭＶＦ－Ｍ１２Ｃ　ムラサメ二式。ＭＢＦ－Ｇ２Ｇ２アストレイ。ロックオンの世界の地球連邦のジンクス？など多種多様に記載されていた。まぁ、今じゃオーブもＺＡＦＴも地球連邦も全部ひっくるめて世界連合となったが。

「よし！これなら行ける。織斑先生！皆を集めて反撃をっ！」

「分かっている！！」

キラ達が通信をしている間にもゲルググ・ブラスターやジンクス？がアロウズのジンクス、アヘッド、企業軍のＤ－２、Ｍ－９を次々と落としていっている。

「キラ！アスラン！」

するとラクスが焦った表情でキラ達に近づいてきた。一体どうしたのだろう。

「どうしたの？」

「実は束さんから通信がありまして、ユウイチがコチラに向かったと。」

「えっ！？」

キラは思わず耳を疑う。死んだユウイチが何故、コチラに向かっているのだろう。イヤ、そもそも束がなんでそんな見え透いた嘘を言ったのだろう。その疑問にはラクスが答えてくれた。

「実は束さんがユウイチをネクスト粒子の蘇生装置で蘇生させたらしいんですの。それで、目覚めたユウイチはα－ストレイドでコチラに・・・」

「何だって！？」

驚いているキラに今度はリボンズが襲いかかった。しかも、その顔はかなりのご立腹の様だ。

「人間風情がっ！僕に楯突く気かっ！」

ビームサーベルを二本持ってキラを圧倒しようとするリボンズに今度は別の方向からビームが飛来して直撃した。

「なにっ!?」

リボンズは慌ててビームが飛んできた方向を見る。そしてその視線の先にいたのはＶＯＢを使って猛進してくるα－ストレイドだった。そして、懐かしい男から通信が入ってきた。

「キラッ!!戻って来たぞ!あの世からな!!」

「ユウイチ!!」

α－ストレイドを見たリボンズは『ＧＮバスターライフル』を向けて撃つ。するとα－ストレイドはＶＯＢをパージしてビームを避けるとＯＢでリボンズに急接近。そのままの勢いでリボンズを蹴り飛ばした。

「ユウイチ!?大丈夫か?」

「あれ、アスランか?なんでいんの?ていうか、この戦場はとんでもねぇ事になってんな?」

確かに今までの件を知らないユウイチにはとんでもない光景に見えても仕方ない。そしてα－ストレイドを見た一夏達が集まってくる。

「ユウイチか!!お前、生きてたのかよ!」

「良かった。」

「痛いって!」

一夏達に揉みくちゃにされるユウイチを眺めていると空から見覚えのある機体が降りて来た。

「キラ・ヤマト。久しぶりだな。」

「キミは確か、あの夢の時の！」

確か、彼は刹那・Ｆ・セイエイと名乗っていた。そして彼の機体名はＯＯガンダム。

「お前のガンダムも答えてくれた様だな。」

そう言って彼はアブソリュートフリーダムを見詰める。

「うん。ある意味キミのおかげかな。」

確かによく考えて見るとフリーダムが進化したのは彼のおかげでもあるような気がする。

「行くぞ。戦いはまだ終わっていない。」

「そうだね。行こう。アスラン、刹那・Ｆ・セイエイ。」

「刹那でいい。」

短く言った彼にキラは何故か少しだけ嬉しく思った。しかし、そんな事をしている内にリボンズ達や企業軍艦隊が進軍してきくる。こちらも国家軍のＩＳやゲルググ、ジンクス?、ギャン、ムラサメ二式が迎撃の為に突っ込んでいった。キラ達も遅れをとるまいと機体のブースターを吹かす。

「これなら・・・」

キラはこの時、絶対的な確信を持っていた。この戦いに勝てると。

交わる世界（後書き）

キャラが多すぎて書ききれない。？

新たなる敵（前書き）

更新しました。感想お願いします。

新たなる敵

２２人のレイヴンの戦い以降、企業連はある大きな課題に悩まされていた。その課題とはレイヴンやリンクスの稀少さにあった。レイヴンやリンクスは確かに戦場の覇者ではあるが、強さは一人一人違う。つまり企業連にとっては代替不可能な戦力であるレイヴンやリンクスはデメリットの多い戦力なのだ。しかし、近年になって企業連は遂にその打開策を見つける。それが今回の国家解体戦争に投入された巨大兵器アームズフォート（ＡＦ）だったのだ。大多数の凡人によって制御され、代替可能なＡＦはまさに企業連が望んでいた戦力であり、実質、ＡＦの力は平均的なレイヴンやリンクスの力を遥かに上回っていた。やがて国家解体戦争は激化を増していく事をになる。そして、企業連側の主役はリンクスやレイヴンからこのＡＦに以降していくのは間違いないだろう。

「くそっ！なんて火力だ！。」

キラは今、かつての仲間や新たな仲間と共に巨大兵器ギガベースと戦っていた。しかし、企業連の海上艦隊、第８艦隊に守られたギガベースはかなりの強敵で中々近付けなかった。何故ならば近づこうにも第８艦隊の弾幕によって阻まれ、もたもたしているとギガベースの主砲の超長距離大型実弾砲の餌食になってしまうからだ。実際、こちらの戦艦は数隻がその餌食になっていた。

「ゴットフリート、照準！てぇー！」

アークエンジェルやミネルバ、ＣＢの母艦、プトレマイオス？か

ら矢継ぎ早に太い光線が放たれ企業連の戦艦を沈めていく。しかし、その数は一向に減る気配はしなかった。

「くっ！これじゃあ！」

「マズイぞキラ！このままじゃ消耗戦になるだけだ。」

アスランの言う通り、このままではこちらが一方的に消耗するだけの戦いになってしまう。それでは危険すぎる。

「アスラン！俺たちは左翼から攻める。お前達は右翼から！」

「頼んだぜ！」

「イザーク！ディアッカ！」

キラも知っているキレてなだめて名コンビ、イザークとディアッカが率いるジュール隊が左翼に向かって進軍していった。因みにイザークとディアッカが搭乗している今回の機体は前の二人の機体、デュエルとバスターの発展型である。名はバルトバスターとアルトデュエル。

「このまま見ていてもらちがあかん！私達は正面から切開して病原菌を排除する！」

今、正面から突っ込んで行ったのはＺＡＦＴに服隊した、ドクターこと、ミハイル・コーストが率いるコースト隊である。

「キラ！アスランさん！」

「一夏！僕達も右翼から回ろう。ギガベースも3方向からの攻撃に対応しきれない筈だ！」

「了解！」

アスランとキラは集まってきた一夏達、ゲルググ部隊やジンクス？部隊と共に右翼を進軍する事にした。

「キラ、ギガベースの形は箱型の双胴船体だ。つまり、中央の双胴船体を繋ぎ止めている構造物を破壊すれば奴は海に沈む！」

ユウイチから送られてきた情報をチェックする。確かに双胴船体を繋ぎ止めている橋の様な構造物を破壊すればギガベースは沈むだろう。しかし、そこは主砲である超長距離大型実弾砲が取り付けられている場所でもある。

「分かった。皆にもこの情報を！」

「了解！」

すると暮桜・真極が飛んできてフリーダムの横に着けた。どうやらリボンズ達の事についてらしい。

「キラ！リボンズ達は撤退した。後は企業連だけだ！」

「分かりました。ユウイチからギガベースの情報を受け取ってください！」「分かった。！」

すると今度は一機のジンクス？から通信が入る。回線を開くと赤髪の青年が映った。

『よぉ！お前がキラ・ヤマトか！』

「誰です？貴方は？」

『俺が誰だって？俺は不死身のコーラサワーこと、パトリック・コーラサワーだ！覚えっ！』

てを言おうとした瞬間、Ｄ－２の放ったプラズマビームに当たり、爆発を起こしながら後ろに流れていった。

『あぁぁぁぁぁ～～～！！』

「アスラン、あの人？」

「さぁな。生きてる様だし大丈夫だろう。」

気を取り直してギガベースを目指そうとした時、後ろから巨大な光の玉が飛んできた。巡洋艦を巻き込みながらギガベースに到達。すると、主砲の超長距離大型実弾砲が全壊していた。どうやら光の玉を放ったのはＣＢの重装甲のガンダム、セラフィムガンダムだったようだ。その後ろからケルディム、ＯＯ、ガンダムアリオスが飛来してギガベースを目指した。

「キラ！俺達も行こう。」

「そうだね。皆！行くよ。」

「はいですわ！」

「オッケー。」

急いでブースターを吹かし、ギガベースに接敵する。すると、ギガベースは船体の上部に設置されているミサイル発射口や機関銃が火を吹いた。キラ達はそれらを避けながら接近、ギガベースに銃口を向ける。

「ラクス！皆に一斉射撃の準備を！。」

「了解ですわ。」

ラクスは急いで一夏達やアークエンジェルらに通信を行う。そして全ての銃口がギガベースに向けられた。キラも急いでマルチロックオンシステムを起動させる。

「マルチロックよし！皆、今だ！！」

キラの合図と共に全ての銃口から光が迸る。発射されたビームやら実弾やらミサイルやらはギガベースに殺到。とてつもない爆音と光と煙を巻き起こし、ギガベースを蹂躙する。

「よし！これで。」

煙の隙間から海に沈んでいくギガベースが見えた。これでもう第８艦隊に抵抗する意志は無くなっただろう。その証拠に艦隊から降伏を意味する白い信号弾が打ち上げられた、

「キラ、俺たち勝ったのか？」

「そうだよ。一夏、僕達は勝ったんだ。」

それを聞いた瞬間、一夏達の顔から笑顔が溢れる。

「よっしゃぁぁぁぁ！！」

「私達、生きているのだな？」

喜んでいる一夏達を見ていると国家軍艦隊の司令官から通信が入った。

『あなたがキラ・ヤマトですね。貴方達と貴方の世界の人達に感謝します。ありがとう。』

まだ若い艦長が映像の奥で帽子を取り、敬礼をした後、深々と頭を下げた。

「いえ、そんな・・・」

「キラ君、ちょっといい？」

キラが照れていると後ろから楯無が声を掛けてきた。キラは急いで通信を切って楯無の方を見た。

「楯無・・・」

「あの時の答え、出た？」

「それは・・・」

キラ自身としてはもう答えは決まっていたのだが言葉が出なか

った。その理由はいきなりハイパーセンサーにノイズが走ったからである。ＩＳのハイパーセンサーだけではなく機械類全部に影響しているようである。

「なっ、なんだ?」

「これは一体!?」

キラや楯無だけではなく、この場にいる全ての機体と戦艦に影響している様だ。

「ヤマト、これは一体!?」

「織斑先生!分かりません。一応警戒体勢をっ!」

「まさか、第8艦隊がやられるとはな。」

「っ!!!」

なんと、謎の機体が一夏の前に音も気配も無く現れたのだ。その機体はフリーダムとレジェンドを掛け合わせた様な機体だった。

「なっ!なんだこいつ!」

「一体何処から!」

「レーダーには映らなかったぞ!」

その黒い機体の特徴としてはフルスキンタイプでガンダムタイプと言う点とネクスト・フレームを搭載していて、背中に浮いている

板状の非固定浮遊部位が六枚装備されている点と腰部の後ろから伸びている尻尾の様なコードの存在だ。

「お前は一体？」

「ユウイチ・Ｓ・レイブンか？その機体を返してもらおうか。」

「なに！」

どうやらパイロットは中年の男のようだ。しかも、その目的はα－ストレイドの奪取らしい。目的を聞いた一夏が後ろから斬りかかる。

「させるかぁ！！」

「ふん！」

その機体は動かなかったが、変わりに腰部に装着されたコードがまるで生き物のように動き始め、一夏に襲いかかる。

「ぐあっ！！」

「一夏！！！」

吹っ飛ばされた一夏をシャルロット達が受け止めた。幸い、一夏に怪我は無かったが白式のエネルギーシールドがかなり削られた。

「さて、その機体を返してもらうぞ。そのα－ストレイドは元々は企業連の機体なのだからな。」

「なんだと！？」

次の瞬間、α－ストレイド以外の機体が電磁波の様なものに捕まり、動けなくなった。

「な！なんだ？」

「機体が動かない！」

「キラ・ヤマトや刹那・Ｆ・セイエイを相手にするのは面倒だ。お前等はそこで見ているがいい。」

再びα－ストレイドに向き直る。そして、手を挙げたと思ったらその機体が消えたのだ。

「消えた？」

「ユウイチ！後ろ！」

「何！！」

言われてユウイチは急いで後ろを振り返る。するとそこには黒い機体が悠然と存在していた。

（なっ！一体どうやって？単にスピードが速いのか？）

「ふっ！特別に教えてやろう。この機体の特殊能力∨シフトを。」

「∨シフト？」

「そう。ネクスト粒子の特性の一つである空間作用を利用してる

んだ。ネクスト粒子に力を加えながらスピンを掛けると空間に穴ができる。その穴が戻る瞬間の反動を利用して機体を瞬間移動させているという訳だよ。」

「ご丁寧な事で。」

「このα－ブレイドと戦って生き延びた奴はいない。」

「α－ブレイド？」

「そう、α－ストレイドの兄弟機さ。」

そう言って再び∨シフトを作動させて瞬間移動する。今度は離れた場所に移動したようだ。遠距離から手についている砲口が火を放つ。

「ぐあっ！」

よろけた瞬間に∨シフトで距離をつめ、その手に光で構成されている剣を出現させ、ユウイチを斬りつける。

「なんの！！」

しかし、ユウイチはブースターを吹かして機体を回転させて斬撃を避けた。

「ほう、やるな。」

距離を取ろうと逃げるユウイチを見ながら、今度は手から無数の赤いビームを発射した。しかも、それは直線的なものではなくジグ

ザグに飛び、かなりの誘導性能なのか複雑に動いて逃げるストレイドをしつこく追い回した。やがて、一発が足に当たり、スピードが落ちた所を他のビーム達が襲いかかった。

「ぐあああっ！！」

「まだまだ。」

煙の中から飛び出したユウイチを攻撃する為に、４つの白い玉がα－ブレイドの周りに配置され、それが太いビームに変化した。

「くそっ！強い！」

直撃を食らい、体制を立て直している間にもα－ブレイドは∨シフトを使ってユウイチを翻弄していく。そして、ユウイチの目の前にくるとα－ストレイドの頭部を掴み、上へと放り投げる。

「ぐうぅぅ！！」

上がる所まで上がって失速した時、α－ブレイドは既にそこにいた。

「なっ！？」

「ふっ。」

再び頭部を捕まれ、海面へと投げられる。落下速度は凄まじく、海面に叩きつけられたときの衝撃は相当なものであろう。

バシャャャン

派手な水飛沫をあげて着水するユウイチ。やはりダメージは相当なものでシールドエネルギーが0になってしまった。α－ブレイドは急いで沈んでいくα－ストレイドを右手で掴んで引き上げた。

「容易いものだな。第8艦隊は何をしていたのやら。」

「くっ！ユウイチ・・・」

「キラ・ヤマト。α－ストレイド、確かに貰い受けた。」

その時、α－ストレイドを掴んでいる右手を一条のビームが貫いた。

「なにっ！？」

α－ブレイドは急いでビームが飛んできた砲口を見る。そこには青のカラーリングのアストレイと赤と濃い青のカラーリングのジンが滞空していた。

「貴様等、まさかサーペントテールのムラクモ・ガイとイライジャ・キール！」

「オーブの依頼だ。排除させてもらう。」

「あんた、ここまでだな。」

α－ブレイドはやる気が無くなったのかネクスト粒子を撒き散らして撤退してしまった。そして、キラ達を縛っていた電磁波も消えてキラ達は動ける様になった。

「貴方は！？」

「サーペントテールのムラクモ・ガイだ。オーブのキサカに依頼されてここに来た。」

「貴方があの！！」

キラもサーペントテールの噂はユニウス戦役の頃から耳にしていた。ナチュラル、コーディネーター問わず依頼を受ける傭兵部隊だと。

「あの機体は一体？」

「あの機体はα－ブレイド。α－ストレイドの兄弟機だ。パイロットはレオス・ネイルって男で、その正体は企業連所属の特殊部隊フライトナーズの隊長だ。」

「フライトナーズの！！」

驚いたキラは海中から引き揚げられているユウイチを見ながらため息をついた。

「また、とんでもないものが出てきちゃったな。」

そう言いながらキラはコチラに来るアスランを眺めた。彼とはまた会えたのだ。ＩＳ学園に戻ったらゆっくりとたくさん話しをしようと心に決めたのだった。

新たなる敵（後書き）

今回出てきたサーペントテールのガイの漢字は私の携帯では検索に出てこなかったのでカタカナにさせてもらいました。申し訳ありません。？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1523v/

IS 蒼穹の大天使と平和の歌姫

2011年12月13日08時57分発行